

中国縦貫自動車道建設に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告

(3)

1982

広島県教育委員会



序 文

県北西部の美土里、千代田や筒賀、吉和の芸北広城市町村圏に含まれる地域は純農山村地域として、これまで比較的大規模な国土開発事業の波をうけることなく良好な自然環境に恵まれ、地域に根ざした多くの民俗芸能や文化財がむしろひっそりと保存されてきました。

ところが、現在この地域には幹線道路網整備の一環として中国自動車道の建設が槌音高く進み、大きく変貌する新しい農山村の姿が現出しつつあります。この幹線道建設による経済効果や利便性の享受など各地域住民にとってはもちろんのこと、多くの関係者にとっても早期の完成が強くのぞまれているところであります。

一方この大プロジェクト事業により、これまで地下に眠っていた埋蔵文化財、すなわち先人の生活にかかる多くの遺跡も白日のもとにさらされることになりました。県教育委員会はこれら文化財の保護について慎重に検討するとともに道路建設事業との調整をはかるべく関係者とも多くの協議を重ねながら、この数年来発掘調査をすすめてまいりました。

本報告は以上の発掘調査のうち、美土里町から筒賀村にいたる12遺跡の成果を第3分冊としてまとめたものであります。この地域は、特にこれまでほとんど本格的な発掘調査の行われていない地域であるだけに、学術的に空白部分が多く、今回の調査によって多くの貴重な資料を収集することができました。また、この調査をきっかけにして郷土の文化財や歴史に対する意識も高まり新たな学習の取組みが開始された地域もあり、心豊かな地域を考える時代にふさわしい対応や意識の高揚がみられたことにはまことに喜ばしいことであります。

おわりにあたり、発掘調査に対して、絶えず御理解と御協力を惜しまれなかつた日本道路公団広島建設局、各地方工事事務所、地元教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深甚の謝意を表する次第であります。

昭和57年3月

広島県教育委員会教育長

高 橋 令 之

例　　言

1. 本報告は、昭和52年度から昭和55年度にわたって実施した中国縦貫自動車道建設事業に係る埋蔵文化財包蔵地のうち、美土里町域内から筒賀村域内までの発掘調査報告である。
2. 発掘調査は日本道路公団から委託を受けた広島県教育委員会が（財）広島県埋蔵文化財調査センターの協力を得て実施した。
3. 本書の執筆は、伊藤実・植田千佳穂・小都隆・鍛治益生・桑田俊明・桑原隆博・新谷武夫・向田裕始が分担して行い、金井亀喜・小都隆が総括した。
4. 出土遺物の整理、復元、実測、図面の整図等は、向田裕始・桑原隆博を中心となつて行った。
5. 出土遺物の写真は向田裕始が撮影した。
6. 本書に使用した遺構の表示記号は下記のとおりである。

F B : 墓, K F : 古墳, S : 石室, SK : 石棺, I D : 石蓋土塚, D : 土塚,
P : 土器棺, T : 積石塚, M : 溝, K : 郭

7. 本書に示した遺物の断面は次のとおり表現した。
縄文土器・弥生土器・土師器・土師質土器：白、須恵器・陶磁器：黒
8. 本書に使用した50,000分の1の地形図は建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の地形図を複製したものである。（承認番号）昭和56年中複、第321号

目 次

I はじめに.....	1
II 調査の遺跡	
1 向井古墳.....	7
2 宮谷古墳.....	17
3 塩瀬神社裏古墳.....	25
4 金子古墳群.....	45
5 塚迫遺跡群.....	69
6 別所第2号古墳.....	99
7 金ノ口城跡.....	103
8 市場城跡.....	113
9 順正寺裏古墳群.....	119
10 釜鉢谷遺跡.....	127
11 横路小谷古墳群.....	133
12 板迫山古墳群.....	163

図版目次

1 向井古墳

図版 1—1	a 向井古墳近景 (南より)	(東より)
	b 向井古墳全景 (東より)	b 向井古墳石室石組の 状態(南より)
図版 1—2	a 向井古墳々丘墓石の 状態(東より)	図版 1—4 a 向井古墳石室内鉄器 出土状態(西より)
	b 向井古墳石室全景 (東より)	b 向井古墳調査後の整 備状況(南より)
図版 1—3	a 向井古墳石室全景	図版 1—5 向井古墳出土遺物

2 宮谷古墳

図版 2—1	a 宮谷古墳近景 (西より)	b 宮谷古墳石室全景 (南より)
	b 宮谷古墳々丘土層断 面(西より)	図版 2—3 a 宮谷古墳遺物出土状 態(東より)
図版 2—2	a 宮谷古墳全景 (西より)	b 宮谷古墳出土遺物

3 塩瀬神社裏古墳

図版 3—1	a 塩瀬神社裏古墳近景 (南より)	b 塩瀬神社裏古墳全景 (南より)
--------	----------------------	----------------------

図版 3-2	a 塩瀬神社裏古墳々丘 土層断面(西より)	(東より)
	b 塩瀬神社裏古墳石室 全景(東より)	図版 3-6 塩瀬神社裏古墳出土遺物 (1)
図版 3-3	a 塩瀬神社裏古墳石室 全景(南より)	図版 3-7 塩瀬神社裏古墳出土遺物 (2)
	b 同上(西より)	図版 3-8 塩瀬神社裏古墳出土遺物 (3)
図版 3-4	a 塩瀬神社裏古墳石室 棺座(南より)	図版 3-9 塩瀬神社裏古墳出土遺物 (4)
	b 塩瀬神社裏古墳石室 封鎖石の状態 (南より)	図版 3-10 塩瀬神社裏古墳出土遺物 (5)
図版 3-5	a 塩瀬神社裏古墳石室 内遺物出土状態 (南より)	図版 3-11 塩瀬神社裏古墳出土遺物 (6)
	b 塩瀬神社裏古墳周溝 内大甕出土状態	図版 3-12 塩瀬神社裏古墳出土遺物 (7)
		図版 3-13 塩瀬神社裏古墳出土遺物 (8)

4 金子古墳群

図版 4-1	a 金子第1号古墳近景 (南より)	b 同上(西より)
	b 金子第1号古墳々丘 土層断面(東より)	図版 4-4 金子第1号古墳石蓋 土坑内玉類出土状態 (西より)
図版 4-2	a 金子第1号古墳全景 (東より)	b 金子第1号古墳出土 遺物
	b 同上	図版 4-5 金子第2号古墳全景 (西より)
図版 4-3	a 金子第1号古墳石蓋 土坑全景(北より)	b 金子第2号古墳々丘

		土層断面(西より)	図版 4—12	a 金子第 3 号古墳第 1 号土塁(南より)
図版 4—6	a	金子第 2 号古墳石室 全景(北より)		b 金子第 3 号古墳第 2 号土塁(東より)
	b	同上(西より)	図版 4—13	a 金子第 3 号古墳周溝 内遺物出土状態 (西より)
図版 4—7	a	金子第 2 号古墳石室 掘方(南より)		b 金子第 3 号古墳出土 遺物
	b	金子第 2 号古墳石室 内遺物出土状態 (南より)	図版 4—14	a 金子第 4 号古墳全景 (西より)
図版 4—8		金子第 2 号古墳出土遺物 (1)		b 同上
図版 4—9		金子第 2 号古墳出土遺物 (2)	図版 4—15	a 金子第 4 号古墳石棺 (西より)
図版 4—10		金子第 2 号古墳出土遺物 (3)		b 同上
図版 4—11	a	金子第 3 号古墳全景 (西より)	図版 4—16	a 金子古墳群調査区箱 式石棺(南東より)
	b	金子第 3 号古墳々丘 土層断面(西より)		b 金子古墳群調査区石 蓋土塁(西より)

5 塚迫遺跡群

図版 5—1	a	塚迫遺跡群遠景 (北より)	図版 5—3	a 塚迫遺跡第 2 号土塁 (西より)
	b	塚迫遺跡弥生時代墳 墓群全景(南より)		b 塚迫遺跡第 3 号土塁 (東より)
図版 5—2	a	塚迫遺跡第 1 号土塁 (西より)	図版 5—4	a 塚迫遺跡第 4・5 号 土塁(西より)
	b	同上		b 塚迫遺跡第 6 号土塁

	(南より)		号石室(東より)
図版 5—5	a 塚迫遺跡第 7 号土 塙(南より) b 塚迫遺跡第 8 号土塙 (東より)	図版 5—16	a 塚迫第 1 号古墳第 2 号石室(東より) b 塚迫第 1 号古墳第 1 ・ 2 号石室掘方 (南より)
図版 5—6	a 塚迫遺跡第 1 号土器 棺(西より) b 塚迫遺跡第 2 号土器 棺(東より)	図版 5—17	塚迫第 1 号古墳出土遺物
図版 5—7	a 塚迫遺跡第 3 号土器 棺(南より) b 塚迫遺跡第 4 号土器 棺(東より)	図版 5—18	a 塚迫第 2 ・ 3 号古墳 全景(南より) b 塚迫第 2 号古墳全景 (南より)
図版 5—8	a 塚迫遺跡第 5 号土器 棺(西より) b 塚迫遺跡第 6 号土器 棺(西より)	図版 5—19	a 塚迫第 2 号古墳石室 (南より) b 同上(東より)
図版 5—9	塚迫遺跡出土遺物 (1)	図版 5—20	a 塚迫第 2 号古墳石室 掘方(南より) b 塚迫第 2 号古墳出土 遺物
図版 5—10	塚迫遺跡出土遺物 (2)	図版 5—21	a 塚迫第 3 号古墳全景 (南より) b 塚迫第 3 号古墳々丘 土層断面(南より)
図版 5—11	塚迫遺跡出土遺物 (3)	図版 5—22	a 塚迫積石塚全景 (南より) b 同上
図版 5—12	塚迫遺跡出土遺物 (4)	図版 5—23	a 塚迫積石塚(東より) b 塚迫積石塚出土古錢
図版 5—13	塚迫遺跡出土遺物 (5)	図版 5—24	a 塚迫古墓(北より) b 同上(西より)
図版 5—14	a 塚迫第 1 号古墳近景 (西より) b 塚迫第 1 号古墳々丘 土層断面(西より)		
図版 5—15	a 塚迫第 1 号古墳全景 (東より) b 塚迫第 1 号古墳第 1		

6 別所第2号古墳

- 図版6—1 a 別所第2号古墳近景
(東より) | b 別所第2号古墳々丘
土層断面(西より)

7 金ノ口城跡

- 図版7—1 a 金ノ口城跡調査区近景(北より)
b 金ノ口城跡3T土層断面(東より) | 図版7—3 a 金ノ口城跡第1堀切近景(南より)
b 同上
- 図版7—2 a 金ノ口城跡第1堀切近景(東より)

8 市場城跡

- 図版8—1 a 市場城跡遠景
(北より) | b 市場城跡第3郭
(南より)
- 図版8—2 a 市場城跡第1～3郭
(南より) | 図版8—4 a 市場城跡第4～6郭
(東より)
b 同上
- 図版8—3 a 市場城跡第1・2郭
(北より) | 図版8—5 a 市場城跡第1堀切
(東より)
b 同上

9 順正寺裏古墳群

図版9—1	a 順正寺裏古墳群遠景 (南東より)	調査前(東より)
	b 順正寺裏古墳群近景 (南より)	同上調査後 (北東より)
図版9—2	a 順正寺裏第2号古墳	
	図版9—3 順正寺裏古墳群出土遺物	

10 篠錦谷遺跡

図版10—1	a 篠錦谷遺跡遠景 (北より)	除去後(南東より)
	b 篠錦谷遺跡近景 (南より)	同上調査後 (南より)
図版10—2	a 篠錦谷遺跡石棺検出 状態(南東より)	
	b 篠錦谷遺跡石棺蓋石	
	図版10—3 篠錦谷遺跡調査後 状態(北より)	
	図版10—4 篠錦谷遺跡出土遺物	

11 横路小谷古墳群

図版11—1	a 横路小谷第1号古墳 調査前(南より)	古墳調査前全景 (北より)
	b 横路小谷第1号古墳 調査後(南より)	同上調査後全景 (北より)
図版11—2	a 横路小谷第1号古墳 主体部完掘状態 (東より)	
	b 横路小谷第1号古墳 第2主体部遺物出土 状態(南より)	
図版11—3	a 横路小谷第2～6号	
	図版11—4 横路小谷第2・3号 古墳(北より)	
	b 横路小谷第3～5号 古墳(北より)	
	図版11—5 横路小谷第2号古墳 (北東より)	

	b 横路小谷第2号古墳 主体部(西より)	図版11—9	a 横路小谷第4号古墳 主体部(北より)
図版11—6	a 横路小谷第2号古墳 背面溝(西より)		b 横路小谷第5号古墳 (北東より)
	b 横路小谷第3号古墳 (北東より)	図版11—10	横路小谷第1号古墳出土 遺物(1)
図版11—7	a 横路小谷第3号古墳 主体部完掘状態 (東より)	図版11—11	横路小谷第1号古墳出土 遺物(2)
	b 横路小谷第3号古墳 背面溝(西より)	図版11—12	横路小谷第1・2号古墳 出土遺物
図版11—8	a 横路小谷第4号古墳 (北東より)	図版11—13	横路小谷第3号古墳出土 遺物
	b 横路小谷第4号古墳 背面溝(西より)	図版11—14	横路小谷第3・4号古墳 出土遺物

12 板迫山古墳群

図版12—1	a 板迫山古墳群調査前 全景(西より)		斧出土状態
	b 板迫山古墳群調査後 全景(西より)	図版12—4	a 板迫山第2・3号古 墳調査前(南より)
図版12—2	a 板迫山第1号古墳調 査前(南より)		b 板迫山第2・3号古 墳調査後(南より)
	b 板迫山第1号古墳調 査後(南より)	図版12—5	a 板迫山第2号古墳背 面溝(西より)
図版12—3	a 板迫山第1号古墳 主体部(南より)		b 板迫山第3号古墳背 面溝(東より)
	b 板迫山第1号古墳鉄	図版12—6	板迫山古墳群出土遺物

掲　図　目　次

1 向　井　古　墳

第1—1図 美土里町周辺遺跡分布図 (1:50,000)	7
第1—2図 向井古墳周辺地形図 (1:2,000)	9
第1—3図 向井古墳々丘実測図 (1:200)	10
第1—4図 向井古墳々丘土層断面図 (1:100)	11
第1—5図 向井古墳石室実測図 (1:30)	12
第1—6図 向井古墳出土土器実測図 (1:3)	14
第1—7図 向井古墳出土鉄器実測図 (1:2)	15

2 宮　谷　古　墳

第2—1図 宮谷古墳周辺地形図 (1:2,000)	17
第2—2図 宮谷古墳々丘実測図 (1:200)	18
第2—3図 宮谷古墳々丘土層断面図 (1:100)	19
第2—4図 宮谷古墳石室実測図 (1:30)	20
第2—5図 宮谷古墳出土土器実測図 (1:3)	21
第2—6図 宮谷古墳出土古錢拓影 (2:3)	22

3 塩瀬神社裏古墳

第3—1図 塩瀬神社裏古墳周辺地形図 (1:2,000)	25
第3—2図 塩瀬神社裏古墳々丘実測図 (1:200)	26
第3—3図 塩瀬神社裏古墳々丘土層断面図 (1:100)	27
第3—4図 塩瀬神社裏古墳石室内造物出土状態及び封鎖石実測図 (1:30) ...	28

第3—5図	塩瀬神社裏古墳石室実測図 (1:60)	29
第3—6図	塩瀬神社裏古墳周溝内土器出土状態実測図 (1:10)	30
第3—7図	塩瀬神社裏古墳出土土器実測図 (1) (1:3)	32
第3—8図	塩瀬神社裏古墳出土土器実測図 (2) (1:3)	33
第3—9図	塩瀬神社裏古墳出土土器実測図 (3) (1:3)	34
第3—10図	塩瀬神社裏古墳出土土器実測図 (4) (1:3)	35
第3—11図	塩瀬神社裏古墳出土土器実測図 (5) (1:3)	36
第3—12図	塩瀬神社裏古墳出土鉄器実測図 (1:2)	42
第3—13図	塩瀬神社裏古墳出土古銭拓影 (2:3)	43

4 金子古墳群

第4—1図	千代田町周辺遺跡分布図 (1:50,000)	47
第4—2図	金子古墳群周辺地形図 (1:2,000)	48
第4—3図	金子古墳群地形図 (1:500)	49
第4—4図	金子第1号古墳々丘実測図 (1:200)	50
第4—5図	金子第1号古墳々丘土層断面図 (1:100)	51
第4—6図	金子第1号古墳石蓋土塚実測図 (1:30)	折込
第4—7図	金子第1号古墳出土土器実測図 (1:3)	52
第4—8図	金子第1号古墳石蓋土塚出土玉類実測図 (1:2)	52
第4—9図	金子第1号古墳出土古銭拓影 (2:3)	52
第4—10図	金子第2号古墳々丘実測図 (1:200)	53
第4—11図	金子第2号古墳々丘土層断面図 (1:100)	54
第4—12図	金子第2号古墳石室実測図 (1:30)	55
第4—13図	金子第2号古墳出土土器実測図 (1:3)	56
第4—14図	金子第2号古墳石室出土鉄器実測図 (1) (1:2)	58
第4—15図	金子第2号古墳石室出土鉄器・石器実測図 (2) (1:2)	59
第4—16図	金子第3号古墳々丘実測図 (1:200)	60
第4—17図	金子第3号古墳々丘土層断面図 (1:100)	61

第4—18図	金子第3号古墳主体部実測図(1:30)	62
第4—19図	金子第3号古墳出土土器実測図(1:3)	63
第4—20図	金子第4号古墳々丘実測図(1:200)	63
第4—21図	金子第4号古墳々丘土層断面図(1:100)	64
第4—22図	金子第4号古墳石棺実測図(1:30)	64
第4—23図	金子古墳群調査区箱式石棺実測図(1:30)	65
第4—24図	金子古墳群調査区石蓋土塗墓実測図(1:30)	66

5 塚迫遺跡群

第5—1図	塚迫遺跡群周辺地形図(1:2,000)	69
第5—2図	塚迫遺跡群地形図(1:400)	70
第5—3図	塚迫遺跡弥生時代墳墓群遺構配置図(1:200)	71
第5—4図	塚迫遺跡土塗実測図(1)(1:30)	73
第5—5図	塚迫遺跡土塗実測図(2)(1:30)	74
第5—6図	塚迫遺跡土器棺墓実測図(1:10)	76
第5—7図	塚迫遺跡出土土器実測図(1)(1:6)	79
第5—8図	塚迫遺跡出土土器実測図(2)(1:6)	81
第5—9図	塚迫遺跡出土土器実測図(3)(1:3)	82
第5—10図	塚迫第1号古墳々丘実測図(1:200)	83
第5—11図	塚迫第1号古墳々丘土層断面図(1:100)	84
第5—12図	塚迫第1号古墳第1・2号石室実測図(1:30)	85
第5—13図	塚迫第1号古墳出土土器実測図(1:3)	86
第5—14図	塚迫第2・3号古墳々丘実測図(1:200)	89
第5—15図	塚迫第2号古墳々丘土層断面図(1:100)	89
第5—16図	塚迫第2号古墳石室実測図(1:30)	90
第5—17図	塚迫第2号古墳出土土器実測図(1:3)	91
第5—18図	塚迫第3号古墳々丘土層断面図(1:100)	92
第5—19図	塚迫第3号古墳出土土器実測図(1:3)	92

第5—20図	塚追積石塚実測図(1:30)	94
第5—21図	塚追積石塚出土古銭拓影(2:3)	95

6 別所第2号古墳

第6—1図	別所第2号古墳周辺地形図(1:2,000)	99
第6—2図	別所第2号古墳々丘実測図(1:200)	100
第6—3図	別所第2号古墳々丘土層断面図(1:100)	100
第6—4図	別所第2号古墳礫群実測図(1:30)	101

7 金ノ口城跡

第7—1図	安佐町周辺遺跡分布図(1:50,000)	104
第7—2図	金ノ口城跡周辺地形図(1:2,000)	106
第7—3図	金ノ口城跡地形図及び遺構配置図(1:400)	107
第7—4図	金ノ口城跡3・5T土層断面図(1:100)	108
第7—5図	金ノ口城跡3～6T遺構図(1:100)	109
第7—6図	金ノ口城跡第1号土塙実測図(1:30)	111

8 市場城跡

第8—1図	市場城跡周辺地形図(1:2,000)	113
第8—2図	市場城跡遺構配置図(1:600)	115

9 順正寺裏古墳群

第9—1図	戸河内町・筒賀村周辺遺跡分布図(1:50,000)	119
第9—2図	順正寺裏古墳群周辺地形図(1:2,000)	121
第9—3図	順正寺裏古墳群地形図及び遺構配置図(1:200)	122

第9—4図 順正寺裏古墳群出土土器実測図 (1:3) 123

10 釜鉢谷遺跡

第10—1図 釜鉢谷遺跡周辺地形図 (1:2,000)	127
第10—2図 釜鉢谷遺跡造構配置図 (1:200)	128
第10—3図 釜鉢谷遺跡石棺実測図 (1:30)	129
第10—4図 釜鉢谷遺跡土塗実測図 (1:30)	129
第10—5図 釜鉢谷遺跡出土土器実測図 (1:3)	130
第10—6図 釜鉢谷遺跡出土鏡片実測図 (2:3)	131
第10—7図 釜鉢谷遺跡出土鉄製品実測図 (1:2)	131

11 横路小谷古墳群

第11—1図 横路小谷古墳群周辺地形図 (1:2,000)	133
第11—2図 横路小谷古墳群地形図及び造構配置図 (1:400)	134
第11—3図 横路小谷第1号古墳々丘実測図 (1:200)	135
第11—4図 横路小谷第1号古墳々丘土層断面図 (1:100)	136
第11—5図 横路小谷第1号古墳第1主体部実測図 (1:30)	138
第11—6図 横路小谷第1号古墳第2主体部実測図 (1:30)	139
第11—7図 横路小谷第1号古墳第3主体部実測図 (1:30)	141
第11—8図 横路小谷第1号古墳出土土器実測図 (1:3)	142
第11—9図 横路小谷第1号古墳第2主体部出土銅鏡・石劍実 測図 (2:3)	143
第11—10図 横路小谷第1号古墳第2主体部出土玉類実測図 (1:1)	144
第11—11図 横路小谷第1号古墳出土鐵器実測図 (1:2)	145
第11—12図 横路小谷第2・3号古墳々丘実測図 (1:200)	146
第11—13図 横路小谷第2・3号古墳々丘土層断面図 (1:100)	147
第11—14図 横路小谷第2号古墳第1・2主体部実測図 (1:30)	149

第11—15図	横路小谷第2号古墳出土土器実測図(1:3)	150
第11—16図	横路小谷第2号古墳第1主体部出土玉類実測図(1:1)	150
第11—17図	横路小谷第3号古墳主体部実測図(1:30)	151
第11—18図	横路小谷第3号古墳出土土器実測図(1:3)	153
第11—19図	横路小谷第3号古墳出土鉄器実測図(1:2)	154
第11—20図	横路小谷第4・5号古墳々丘実測図(1:200)	154
第11—21図	横路小谷第4・5号古墳々丘土層断面図(1:100)	155
第11—22図	横路小谷第4号古墳主体部実測図(1:30)	157
第11—23図	横路小谷第4号古墳出土土器実測図(1:3)	157
第11—24図	横路小谷第4号古墳出土鉄器実測図(1:2)	158

12 板迫山古墳群

第12—1図	板迫山古墳群周辺地形図(1:2,000)	163
第12—2図	板迫山古墳群地形図及び造構配置図(1:400)	164
第12—3図	板迫山第1号古墳々丘実測図(1:200)	165
第12—4図	板迫山第1号古墳々丘土層断面図(1:100)	165
第12—5図	板迫山第1号古墳主体部実測図(1:30)	166
第12—6図	板迫山第1号古墳出土玉類実測図(1:1)	166
第12—7図	板迫山第1号古墳出土鉄斧実測図(1:2)	167
第12—8図	板迫山第2・3号古墳々丘実測図(1:200)	168
第12—9図	板迫山第2・3号古墳々丘土層断面図(1:100)	169
第12—10図	板迫山第3号古墳背面溝出土土器実測図(1:3)	169

図表目次

1 向井古墳

第1—1表 向井古墳出土土器観察表 14

2 宮谷古墳

第2—1表 宮谷古墳出土土器観察表 22

3 塩瀬神社裏古墳

第3—1表 塩瀬神社裏古墳出土土器観察表 31

4 金子古墳群

第4—1表 金子第1号古墳出土土器観察表 52

第4—2表 金子第2号古墳出土土器観察表 57

第4—3表 金子第3号古墳出土土器観察表 62

5 塚迫遺跡群

第5—1表 塚迫第1号古墳出土土器観察表 87

第5—2表 塚迫第2号古墳出土土器観察表 91

第5—3表 塚迫第3号古墳出土土器観察表 93

9 順正寺裏古墳群

第9—1表 順正寺裏古墳群出土土器観察表 122

I はじめに

1. 調査の経過

中国縦貫自動車道建設に係る埋蔵文化財包蔵地の発掘調査は昭和48年度から年次的に継続して実施し、昭和55年度をもって広島県分に係る48遺跡すべての調査を終了した。その内、第1次報告分は、昭和48・49年度の調査に係る庄原市域及び三次インターチェンジ（以下I.C.）以東の三次市域の15遺跡について昭和53年3月に刊行した。第2次報告分は、昭和49・50年度の調査に係る東城町域、昭和51・52年度の調査に係る三次I.C.以西の三次市域、及び高宮町域の16遺跡について昭和54年3月に刊行した。今回の第3次報告は、昭和52年度から昭和55年度にかけて調査を行った遺跡のうち、美土里町域から筒賀村域に係る12遺跡についての調査結果を収録したものである。

本報告分の遺跡の中では、昭和54年10月の千代田I.C.までの部分開通に伴って、昭和52年度に美土里町内の3遺跡と千代田I.C.以東の千代田町内の2遺跡について発掘調査を行った。当初千代田町内に於ては塚迫遺跡群の調査のみであったが、本工事に係る路線外の土砂採取予定地内で昭和52年2月に金子古墳群を確認したため追加して行った。千代田I.C.以西については全面開通まで期間があること、また路線変更などで決定が遅れたため昭和53年度以降東から順次行った。昭和53年度は千代田I.C.以西の調査を開始し、千代田町内の1遺跡と広島市安佐北区安佐町内の1遺跡について調査を行った。また金ノ口城跡調査中に新たに市場城跡を確認したが、日程上その年度内に調査を終了することが困難であったため、これについては昭和55年度に調査を行うこととした。昭和53年5月に吉和村まで路線、用地買収が確定したため、安佐町以西の分布調査を行い8月に試掘調査を行った。その結果、筒賀村内で古墳群1、吉和村内で遺跡3を確認した。昭和54年度は吉和村内の遺跡と筒賀村横路小谷第1号古墳の調査を行った。路線内の伐採、工事が並行して進む中で新たに吉和村内で遺跡2、筒賀村内で遺跡1を確認した。昭和55年度は吉和村冠遺跡と筒賀村内の遺跡の調査を並行して行った。しかし、筒賀村内では当初2遺跡で調査を始めたが、新たに順正寺裏古墳群と板迫山古墳群を確認し引き続き調査を行った。同年11月には広島県内関係の發

掘調査はすべて終了したため、引き続いて報告書作成のための整理作業を継続中である。

2. 調査の遺跡と時期

番号	遺跡名	所在地	遺跡の内容	調査時期
1	向井古墳	高田郡美土里町横田	古墳1(竪穴式石室)	昭和52年11月1日 ～11月22日
2	宮谷古墳	高田郡美土里町本郷	古墳1(竪穴式石室)	昭和52年7月28日 ～9月1日
3	塩瀬神社裏古墳	高田郡美土里町本郷	古墳1(横穴式石室)	昭和52年7月29日 ～10月17日
4	金子古墳群	山県郡千代田町丁保余原	古墳4(石蓋土塚、竪穴式石室、割竹形木棺、箱式石棺) 箱式石棺1、石蓋土塚墓1	昭和52年7月25日 ～9月22日
5	塚迫遺跡群	山県郡千代田町丁保余原	土塚墓8、土器棺墓6(弥生時代前期) 古墳3(竪穴式石室3) 積石塚、石棺(中世)	昭和52年5月30日 ～7月28日
6	別所第2号古墳	山県郡千代田町本地	古墳	昭和53年8月21日 ～9月9日
7	金ノ口城跡	広島市安佐北区安佐町鈴張	中世山城	昭和53年9月11日 ～9月30日
8	市場城跡	広島市安佐北区安佐町飯室	中世山城	昭和55年4月14日 ～6月14日
9	順正寺裏古墳群	山県郡筒賀村中筒賀	古墳2(横穴式石室)	昭和55年6月16日 ～7月5日
10	釜鉢谷遺跡	山県郡筒賀村中筒賀	箱式石棺1、土塚1、溝状遺構1	昭和55年4月14日 ～7月19日
11	横路小谷古墳群	山県郡筒賀村中筒賀	古墳5(割竹形木棺3+1?,組合式木棺1、土塚2)	昭和54年10月29日 ～12月22日 昭和55年4月14日 ～7月19日
12	板迫山古墳群	山県郡筒賀村上筒賀	古墳3(土塚1)	昭和55年7月10日 ～8月12日

3. 遺跡の調査に参加した人達

松崎寿和	広島県文化財保護審議会委員 広島大学名誉教授 (財)広島県埋蔵文化財調査センター常務理事
潮見浩	広島県文化財保護審議会委員 広島大学教授
川越哲志	広島大学助教授
河瀬正利	広島大学講師
菊山肇	高宮町文化財保護委員長
佐々木順三	美土里町文化財保護委員長
谷下左近	千代田町教育委員会社会教育係長
池野博文	筒賀村教育委員会社会教育主事
西本省三	広島県教育委員会事務局文化課長 (現広島県立大竹高等学校長)
齊藤清三	広島県教育委員会事務局文化課長
遠藤泰允	広島県教育委員会事務局文化課主幹 (現広島県教育委員会事務局総務課企画広報室長)
(故)荒川敏彦	広島県教育委員会事務局文化課主幹
藤井昭	広島県教育委員会事務局文化課主幹
金井亀喜	広島県教育委員会事務局文化課専門員兼埋蔵文化財係長
是光吉基	広島県教育委員会事務局文化課指導主事 (現県立博物館設立準備室専門員)
松村昌彦	♦ (現東広島市教育委員会社会教育課文化財係長)
山県元	♦ (現広島県草戸千軒町遺跡調査研究所指導主事)
小部隆	広島県教育委員会事務局文化課文化財保護主事
中田昭	広島県教育委員会事務局文化課指導主事 (現広島県立高陽高等学校教諭)
桧垣栄次	♦ (現広島市教育委員会社会教育課主事)

佐 伯 邦 芳 広島県教育委員会事務局文化課指導主事

古 瀬 裕 子 タ

向 田 裕 始 タ

(現広島県立三次高等学校教諭)

新 谷 武 夫 タ

加 藤 光 臣 タ

(現広島県立安西高等学校教諭)

三 好 晴 弘 タ

(現福山市立中央中学校教諭)

桑 原 隆 博 タ

桑 田 俊 明 タ

鳴 田 滋 タ

福 島 政 文 タ

伊 藤 実 タ

榎 井 勝 タ

銀 治 益 生 タ

青 山 透 (財)広島県埋蔵文化財調査センター調査研究員

植 田 千佳穂 タ

深 井 潤 一 タ (退職)

三 枝 健 二 タ

高 倉 浩 一 タ (退職)

梅 本 健 治 タ

森 重 彰 文 タ

(現尾道市教育委員会社会教育課主事)

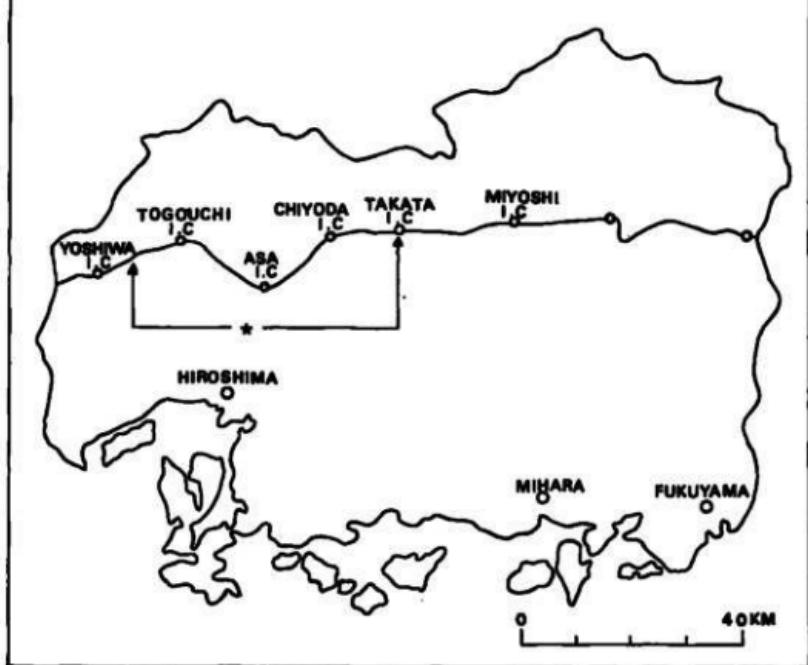
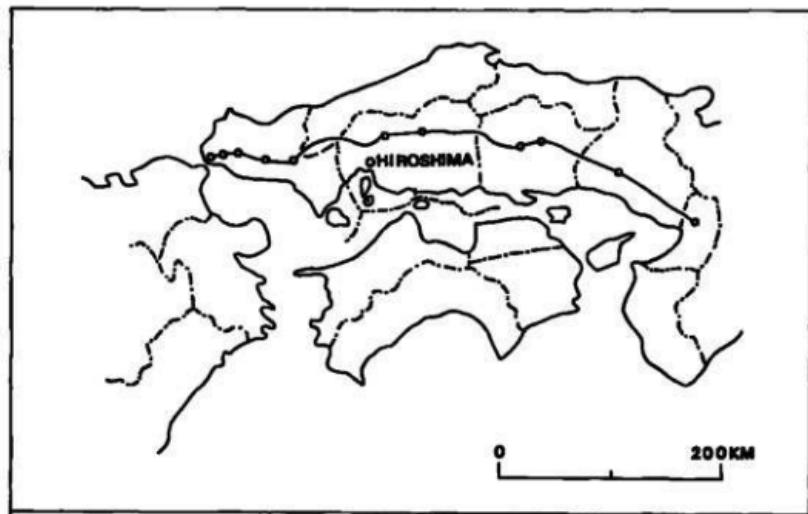
馬 渕 和 雄 タ

(現鎌倉考古学研究所)

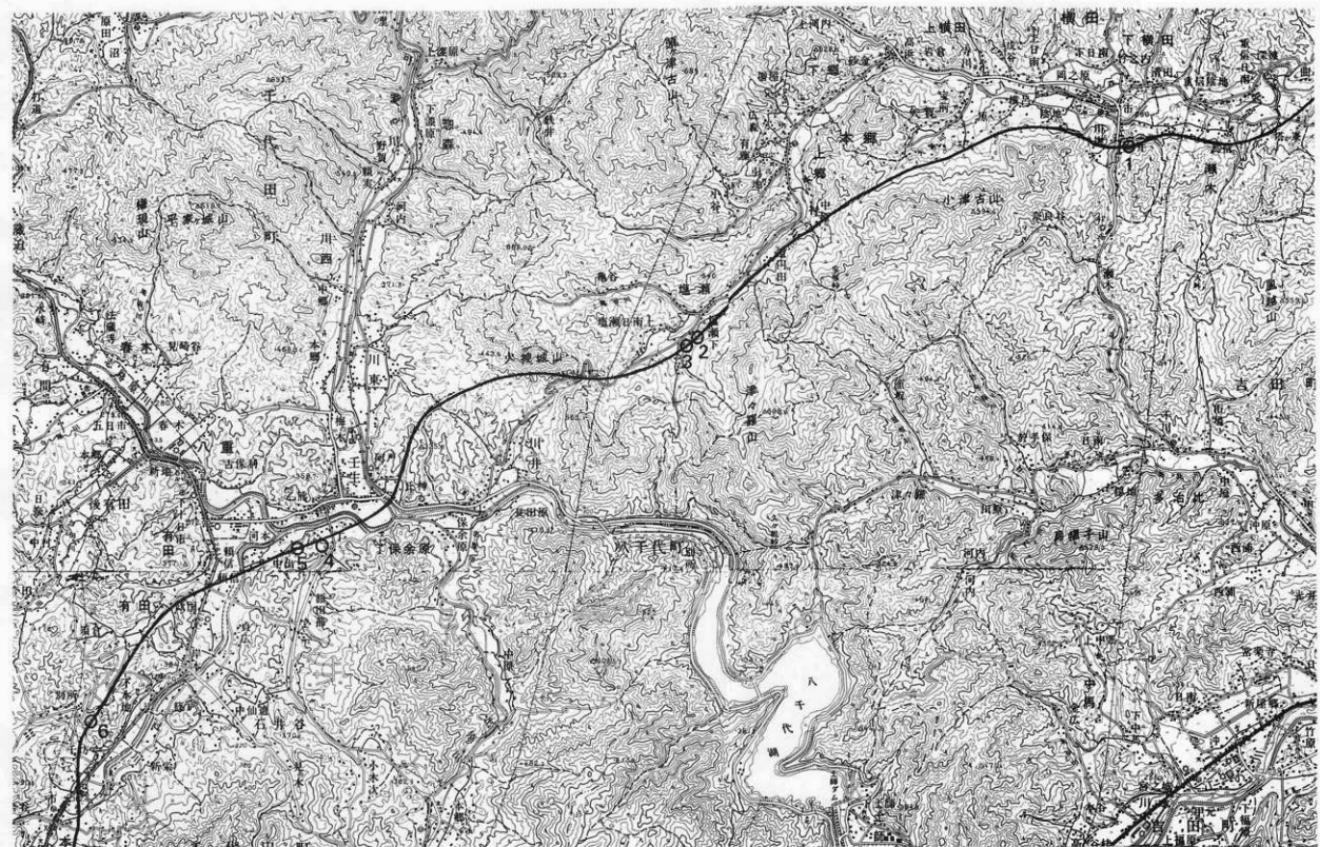
竹 尾 進 タ

(現東京都埋蔵文化財調査センター)

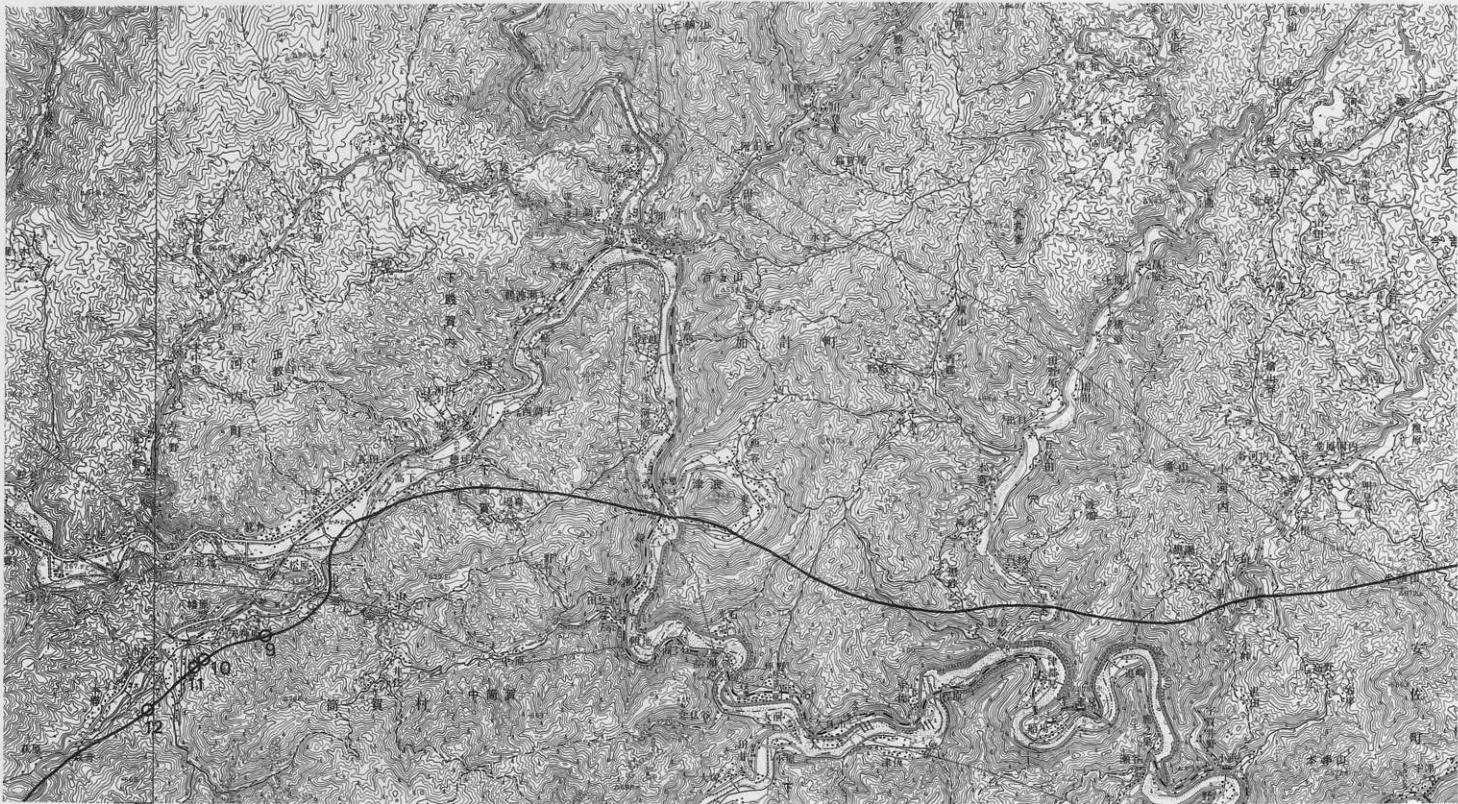
松井和幸 (財)広島県埋蔵文化財調査センター調査研究員)
佐々木直彦 タ
沢元保夫 タ



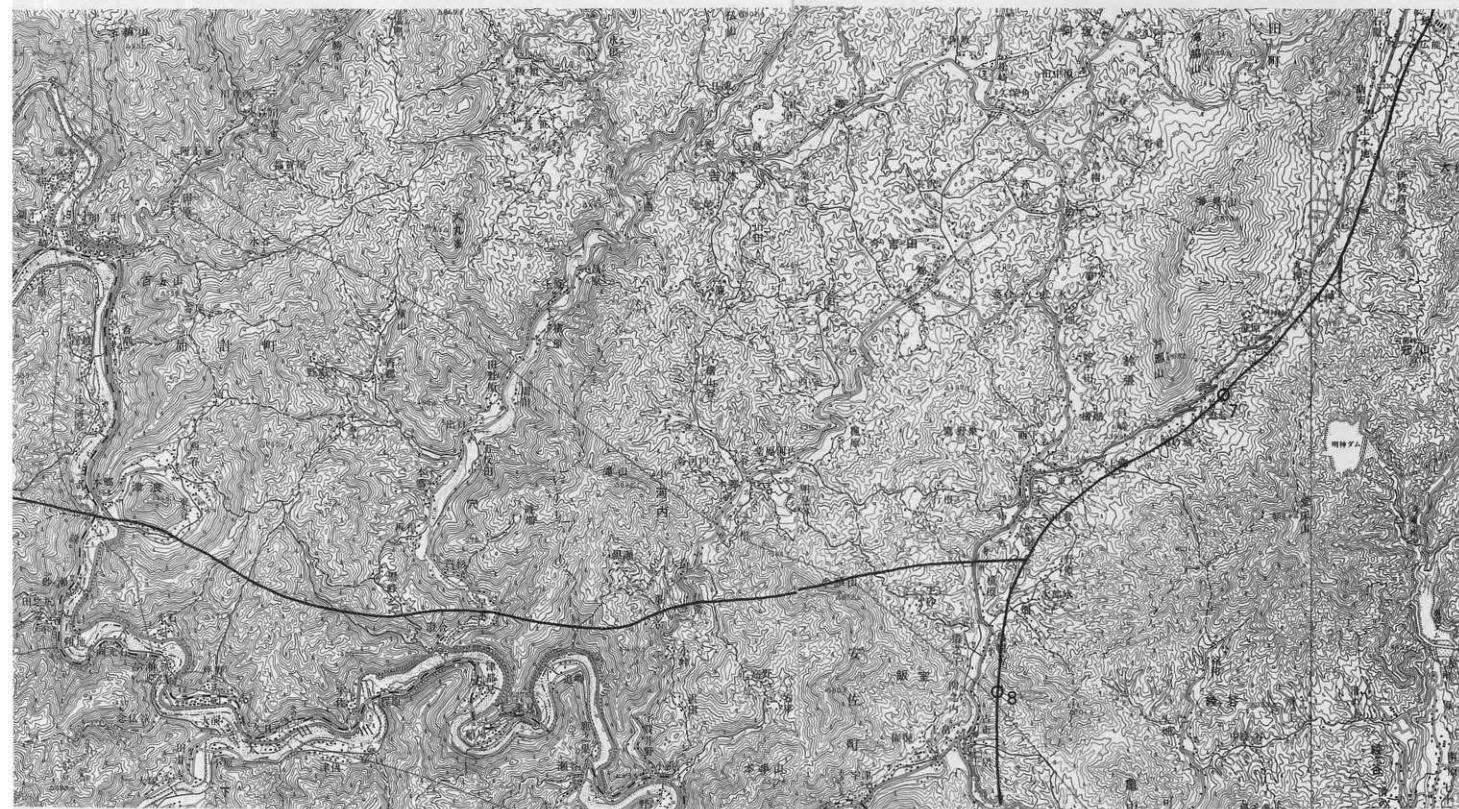
中国縦貫自動車道路線図 (★印は本年度報告分)



発掘調査位置図(美土里町、千代田町)



発掘調査位置図(広島市安佐町～筒賀村)



発振調査位置図(広島市安佐町～簡賀村)

II 調査の遺跡

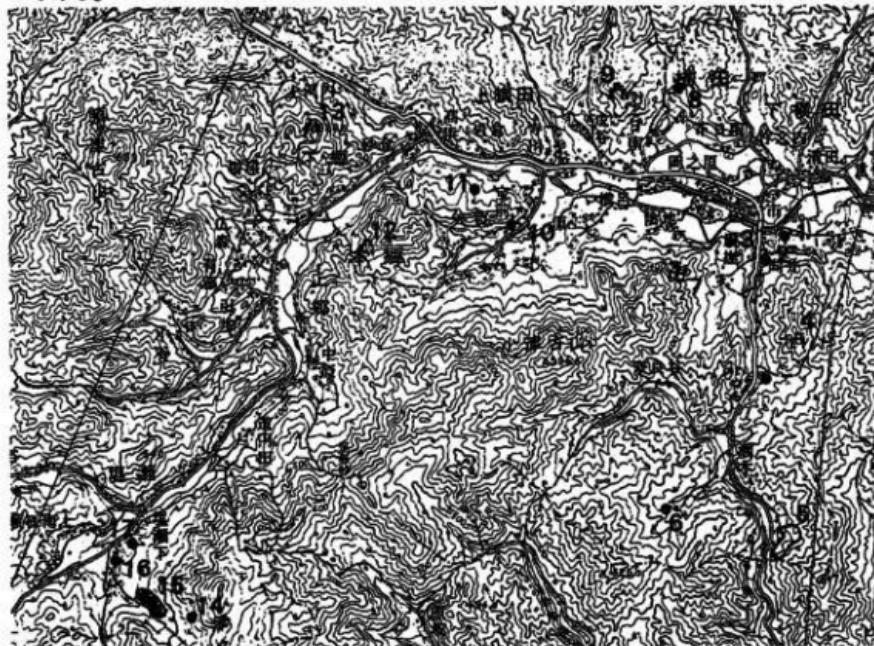
1 向 井 古 墳

(1) 美土里町の位置と環境 (第1-1図)

高田郡美土里町は、中国山地の南斜面に位置し、標高は300～400mを測る。河川は、北部の生田・北地区を生田川が東流し、南部の本郷・横田地区を本村川が東流している。いずれも江の川水系の一支流で、合流して日本海に注いでいる。美土里町の大半は山林で、耕地は生田川・本村川の両岸に開けた沖積世の盆地を中心に広がっているにすぎない。

以下時代ごとに町内の遺跡を概観してみよう。

縄文時代 現在のところ上里遺跡で楕円押型文土器の破片が1点出土しているのみである。



第1-1図 美土里町周辺遺跡分布図 (1:50,000)

- | | | | | | |
|---------|---------|-----------|----------|----------|------------|
| 1 上里遺跡 | 4 横城跡 | 7 東光坊跡 | 10 矢賀古墳 | 13 日之原城跡 | 16 塩瀬神社裏古墳 |
| 2 向井古墳 | 5 背木古墳群 | 8 久保土居池窯跡 | 11 若倉古墳 | 14 引神古墳 | 17 富谷古墳 |
| 3 白ヶ原古墳 | 6 濑戸古墳群 | 9 松尾城跡 | 12 円蔵山城跡 | 15 塚原古墳群 | |

弥生時代 生田の川角山山麓から磨製石斧が1点出土しているのみで、当該期の遺構・遺物共に確認されていない。

古墳時代 現在古墳は60基以上が確認されている。地区別にみると、横田22基、本郷16基、北7基、生田8基である。前方後円墳、方墳などは未確認で、全て円墳である。墳丘の規模は、ほとんど直径10m前後の小形墳である。内部主体が横穴式石室以外と考えられるのは5基で、残りの48基は横穴式石室である。

横穴式石室採用以前の古墳の分布をみると、現在確認済のものは、本村川流域の向井古墳、滑石古墳群（2基）、白ヶ原古墳、宮谷古墳の5基のみである。生田川流域では未確認である。いずれも箱式石棺ないしは石棺系の小形竪穴式石室である。遺物は貧弱で、土器、鉄器等がわずかではあるが出土している。年代は5世紀から6世紀中葉のものと考えられている。これら前半期の古墳は、集落から近い丘陵上に築造されており、古墳からの眺望は開けている。

横穴式石室採用以後の古墳の分布は、群在ししかも各地において確認されている。生田川流域では、下青古墳、楨が奥古墳群（2基）、是光古墳群（5基）、栃木古墳、時鳥古墳群（2基）、貝原古墳群（2基）、陣が丸古墳群（2基）などがある。本村川流域では、横道古墳群（3基）、焼山古墳群（2基）、塚原古墳群（3基）、引神古墳、塩瀬神社裏古墳、中原古墳、音時丸古墳群（5基）、岩倉古墳、矢賀古墳、石仏古墳群（2基）などがある。また、南流する奈良谷川流域には瀬木奥古墳群（6基）、青木古墳群（12基）がある。石室は全長5～8mのものが多いが、瀬木奥第6号古墳のように10mを越えるものもある。石室平面形は両袖、片袖式もみられるが、無袖式で胴張形のものが多い。生田のは光第1号古墳は、逆L字形の特異な平面形をもつものである。遺物の量は、比較的豊富である。年代は6世紀後半から7世紀代までである。また、古墳時代の住居跡は、横田の上里遺跡で2軒確認されている。平面は円形で、遺物は土師器があり、4世紀頃のものとされている。

古代 横田の久保土居、広石に窯跡がある。これらは、西条砂礫層の水成粘土を材料としたもので、須恵器（杯・甕類）を焼いたものである。未発掘の為詳細は不明であるが、構造は地下式の無階無段式窯と考えられる。年代は7世紀代である。なお、美土里町は、古代の地方制度のもとでは高宮郡に含まれ、本村川・奈良谷川流域が丹比郷、生田川流域が訓寛郷であったと考えられている。

中世 生田川流域に4ヶ所、本村川流域で4ヶ所の計8ヶ所で山城が確認されている。主な城跡として、生田地区に高橋城、北地区に桜尾城、山田城、本郷地区に火神城、横田地区に松尾城などがある。

(参考文献)

美土里町史編修委員会「美土里の歴史と伝説」(美土里町役場) 1971年

高田郡史編纂委員会「高田郡史」上巻(高田郡町村会) 1972年

(2) 位置と現状

本古墳は、高田郡美土里町大字横田字向井に所在する。横田地区は、北と南を標高400~500m、水田面からの比高100~200mの山ではさまれた盆地である。この盆地は、東西約4km、南北約1kmで、その中央部を西から東へ本村川が流れている。向井は、吉田町から美土里町横田への入口にあたる場所で、人家も比較的集中している。古墳は、本村川の右岸の丘陵上に位置し、下横田地区を一望のもとに見渡すことが可能である。また谷をはさんで西約400mの丘陵頂部には白ヶ原古墳がある。

本古墳は既に蓋石のほとんどを抜きとるほどの盗掘を受けていた。



第1・2図 向井古墳周辺地形図(1:2,000)

(3) 調査の概要

a. 墳丘 (第1—3・4図)

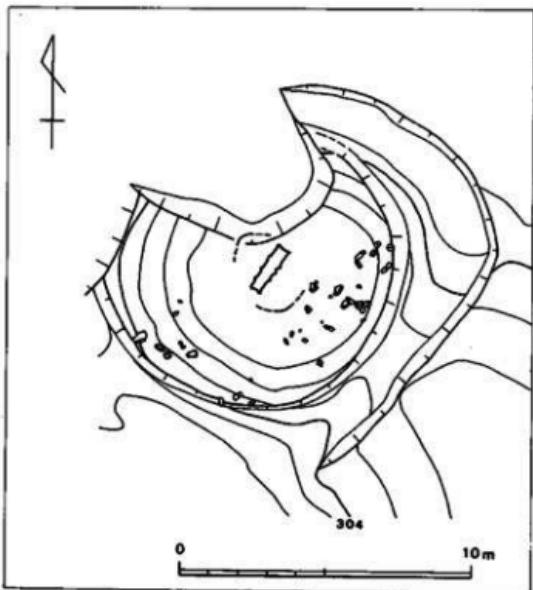
本古墳は、北西にのびる丘陵の舌状に突出した尾根頂部に立地する。標高は、約305mで、水田面からの比高差は約20mである。古墳のすぐ西には黄幡神社が鎮座している。

墳丘は、高さ1m、直徑9.7~9.9mの円墳で、ほぼ正円形を呈している。墳丘外表では、墳丘頂部から南半部にかけて葺石が散見される。30~50cmの角礫が用いられており、約40個の葺石を確認した。

この葺石は、墳丘全体を覆うものではなく、また規則的な配列もない。

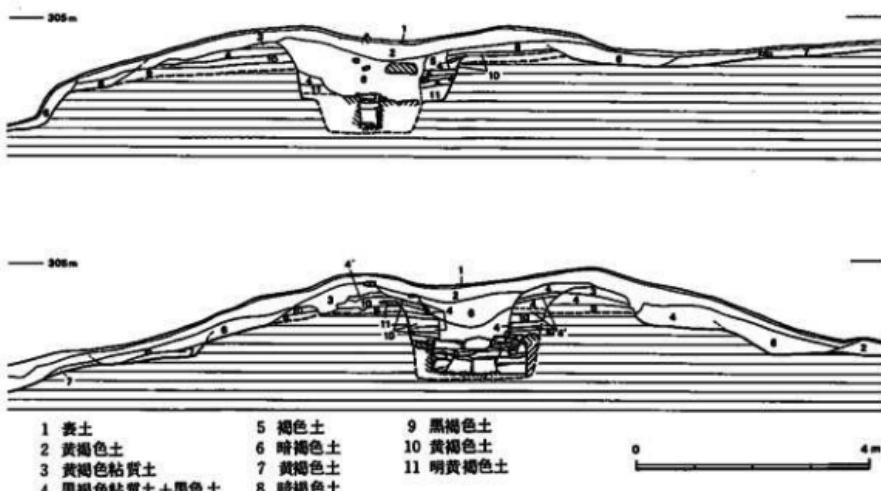
周溝は、墳丘西側を除く約4分の3をめぐっている。全長は約22m、幅は上端で2~3.5m、深さ0.2~0.3mを測る。この溝は尾根を切断すると同時に、その残余土をもって墳丘を築成するためのものでもあった。

墳丘の盛土は、11層に分けることができる。土層は、黄褐色、黒褐色、暗褐色の3種の色調が認められ、粘質のものとそうでないものとがある。それらの層位からみて、この墳丘の築成過程には5つの段階が認められた。1. 墳丘の周囲に円形に溝をめぐらし形を整えると同時にその残余土を約50cmの厚さに盛土して平坦面をつくる。その盛土は3~4層認められる。2. 前記の平坦面を切りこんで1段目の墓拡(長さ364cm、幅328cm、深さ78cm)を梢円形に掘り、さらにその床面を掘りこんで石室構築のための2段目の墓拡(長さ364cm、幅180cm、深さ58cm)を掘る。3. 穹穴式石室を構築する。



第1~3図 向井古墳々丘実測図 (1:200)

4. 穴式石室上面の墓塗を埋める。この埋土は約80cmの厚さで7層が認められ、各層の厚さは約10cmである。その埋土は、粘質土と普通土が交互にみられ版築状になっている。5. 墳丘表面に葺石を置き、周辺の土を掘削して約30cmの厚さで墳丘全体を盛り上げて、その全体を整える。



第1-4図 向井古墳々丘土層断面図 (1:100)

b. 内部主体 (第1—5図)

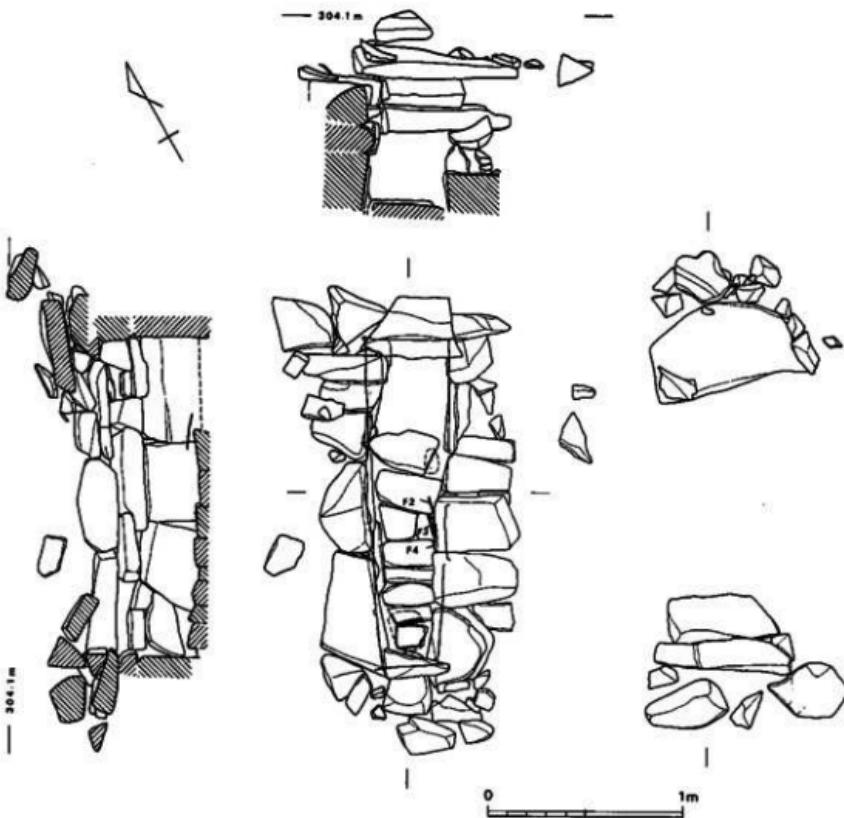
本古墳の内部主体は、小形穴式石室である。墳丘中央に1基構築されている。規模は、内法で全長164cm、幅28~43cm、高さ52~64cmを測る。石室の主軸は、N30°Eで、頭位は石室の幅からみて北東であったとみられる。

石室構築のための土塗は2段に掘られている。1段目の墓塗の長さに等しく2段目の墓塗は掘られている。2段目の墓塗は、石室を埋設するためのもので、石室蓋石のレベルと1段目墓塗床面のレベルはほぼ等値である。また、1段目の墓塗は、364×328cmの規模で掘られており、石室主軸方向の床面には両側に余地がある。石室上面の盛土の厚さは約80cmで、7層が均等の厚さでみられる。

床面には平坦な石が8枚敷かれていた。頭部に2枚分を敷く余地があり、もとは10枚の石が敷かれていたと考えられる。35×20cm~20×10cmの板状の石を石室幅にあわせ、主軸方向に対し横長に敷きつめている。床面のレベルは、各床石相互に4~5cm

の凹凸がみられ不揃いである。また、肩部と足部の床石のレベルは足部の方が約5cm高くなっている。床面で朱とみられるものが2か所で確認された。右側腰部と足先部の2か所で、範囲は前者が13×7cm、後者が17×20cmである。

側壁は3～4段に積まれているが、基本的には3段である。長さは上端が155cm、下端が165cmで約6°内傾している。高さは52～64cmで、頭部の方が8cm高くなっている。石材は30×60cm～20×30cmのものまで大小のものが使われているが、厚さは10～20cmの板石が用いられている。1段目は面積で、2・3段目は小口積である。1段目は、左右両壁とも4枚の板石を横長に用いている。高さは23～28cmである。2・3段目は、小口積であるが、長側辺を出すものと短側辺を出すものとがある。高さは15～



第1・5図 向井古墳石室実測図（アミ目・朱）(1:30)

20cmである。

小口壁は、頭部3段、足部4段に積まれている。幅は上端32cm、下端43cmで約7～10°内傾している。頭部の高さは65cm、1段目35cm、2段目14cm、3段目16cmを測る。石の積み方は、側壁と同様で、1段目が面積、2・3段目は小口積である。

小口壁と側壁の側合面の関係は、側壁の両端部を小口壁ではきみこむものである。壁の構築順序は、今ひとつ明確でないが、まず頭部小口壁をつくり、次に両側壁、最後に足部小口壁をつくったものと考えられる。そのことは、墓塼の余裕が、頭部より足部の方がかなり広いことからも首肯される。

蓋石は、現在3枚残存しているが、あと3枚分程度の余裕があり、6枚であったと考えられる。蓋石の周囲には、目止や控え積の石が両端部を中心にみられる。蓋石は45×75cm～75×70cmで、頭部に大きな板石が用いられている。板石は、石室主軸方向に対し横長に架構されている。

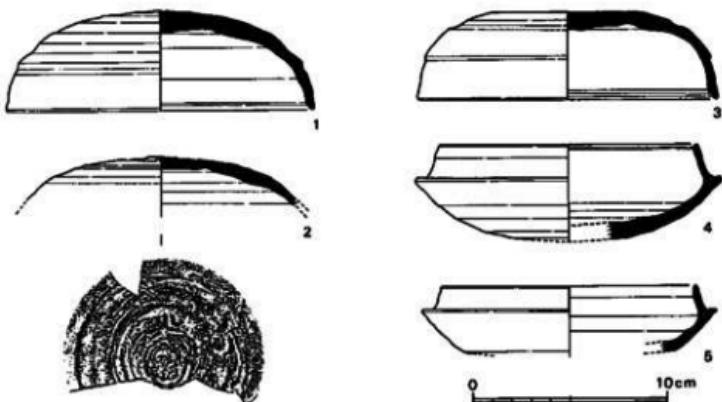
石室床面の平面形は、頭部が広く、足部が狭い逆台形を呈する。側壁部は直線状であるが、若干胴張形になっており、張りは3～5cmでかなりゆるやかな弧を描いている。

c. 出土遺物

出土状態 石室内と石室外のものとがある。石室内からは鉄器（刀子1、鐵5）が2か所（右手付近と左足腿部の側壁に接する床面）に分れて出土した。石室外のものは、石室直上盗掘坑内や周溝中から土器が出土している。盗掘坑内のものと、周溝内のものに接合するものがあることからみると、もとは墳丘内石室埋土面上に置かれていたものと考えられる。

土器（第1—6図）

須恵器が5点（坏蓋3、坏身2）ある。坏蓋は口径15.2～15.5cmで、やや大ぶりである。天井部と口縁部の境界は若干不明確なもの（1）とやや明確なもの（2）がある。口縁端部内面に退化した浅い沈線がある。坏身は、底部が丸く、口縁が直線的に内傾するもの（4）と、底部に平坦面を残し、口縁が外反しつつ内傾するもの（5）がある。また、特徴的なこととして、天井部内面中央に同心円叩き具による圧痕を残すもの（2）がある。



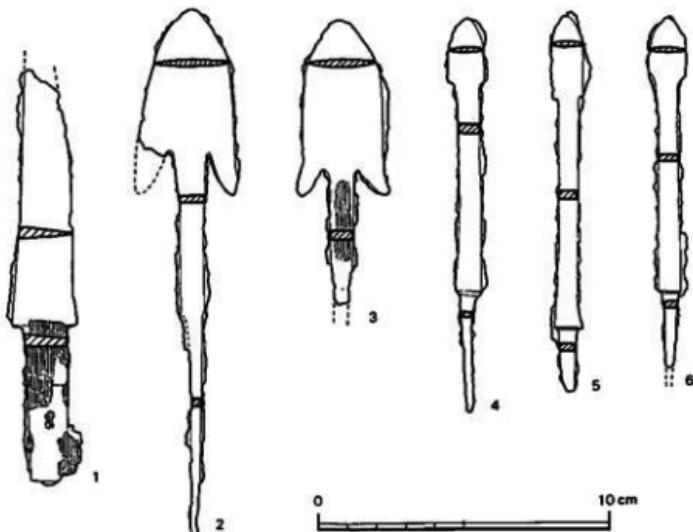
第1-6図 向井古墳出土土器実測図 (1:3)

第1-1表 向井古墳出土土器観察表

番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	成形技法の特徴	備考
第1-6図 1	須恵器 环 置	口径15.6 器高 5.2	天井部はゆるやかな弧を描き、口縁部との境は不明確。口縁部はゆるく内溝し、端部は丸くおさめ、内面に浅い沈線あり。	マキアゲ、水ヒキ成形。天井部1/2を回転ヘラ削り。内面中央に片方向の仕上げナデあり。ロクロ 左回し	胎土 長石粒多 焼成 良好 色調 灰色
2	+	不明	天井部はゆるい弧を描く。	マキアゲ、水ヒキ成形。内面中央に同心円状の打圧痕あり。ロクロ 右回し	胎土 微砂粒多 焼成 良好 色調 明灰色
3	+	口径15.2 器高 4.5	天井部に平坦面あり。口縁部との境界に段あり。口縁部はゆるく内溝し、端部は丸くおさめ、内面に沈線あり。	マキアゲ、水ヒキ成形。天井部の1/2は回転ヘラ削り。ロクロ 右回し	胎土 微砂粒多 焼成 良好 色調 灰色
4	环 身	口径13.2 器高 5.0	底部はゆるやかな弧を描く。受部は外上方にのび丸くおさめる。口縁部は外上方に直線状にのび、端部は丸くおさめる。端部内面には部分的に沈線あり。	マキアゲ、水ヒキ成形。底部3/4を回転ヘラ削り。ロクロ 右回し	胎土 微砂粒多 焼成 良好 色調 灰色
5	+	口径13.2 器高約 4.0	底部には平坦面がある。受部はほぼ水平に短くのびる。口縁部はゆるく外反してのびる。	マキアゲ、水ヒキ成形。底部約3/4回転ヘラ削り。ロクロ 右回し	胎土 極精良 焼成 良好 色調 灰色

鉄器 (第1-7図)

刀子(1)は、現存長14cmで、推定全長15cm前後とみられる。刃部はゆるやかな弧を描き、関部で幅広になる。関は両関式で、茎部には木片が残存する。鐵は、いずれも範被ぎを有する有茎式で、脇抉柳葉形のもの(2・3)と鑿箭形(4~6)の二種がある。造りはいずれも広鋒の両丸造である。鑿箭形のうちには、刃部及び範被部が比較的長いもの(5)と短いもの(4・6)の二通りがある。全長は、(2)が18cm、(4)が13.6cmである。*(鐵の分類は後藤守一氏の基準に準拠した)



第1-7図 向井古墳出土鉄器実測図 (1:2)

(4) まとめ

向井古墳は、小形竪穴式石室を内部主体とする円墳である。本村川流域における古墳調査例は少なかったが年代推定を可能にする須恵器の出土などから、当該期の墓制を知るための資料の一つとなった。以下要点を摘出してまとめにかえたい。

立地 舌状に突出した丘陵頂部に位置し、平野部を一望のもとに收めることが可能である。水田面からの比高差は約20mできほどの高さではない。谷を隔てた丘陵頂部に立地する白ヶ原古墳と立地がよく似ており、関連は今後追求すべきであろう。

墳丘 周囲を円形に削って墳形を整え、その残余土で墳丘を築成している。石室は一旦墳丘を盛った段階で墓拵を穿ち構築したもので、地山面からの切り込みではない。石室を埋めた後、さらに盛土して墳丘を整えている。また、墳丘内にはまばらではあるが、葺石がみられる。この葺石は、外表装飾の意味は持たないものと考えられる。

内部主体 主軸を北東～南西に持ち、頭位が北東の小形竪穴式石室である。側壁の石の積み方に特徴がある。1段目は箱式石棺風に石の広い面を出し（面積）、2段目以上は小口積にしてさらに2～3段積み上げたものである。この種の石室は、箱式石棺と竪穴式石室の折衷様式で、竪穴系箱式石棺ともよばれていたものである。本古墳

の場合、床面に板石が敷かれており、丁寧なつくりである。

遺物出土状態 石室内のものと石室外のものとがある。石室内には、武器・工具が副葬されていた。このことは、被葬者の性格の一端を暗示している。また、土器が周溝や盗掘塹から出土したが、もとは石室埋土上面にあったものと考えられる。このことは、石室を埋めた時点では、この土器を使用した葬送儀礼が行われたことを示すものと考えてよいであろう。

出土遺物 量的には比較的少なかった。しかし年代推定の為に有効な土器が出土した。この須恵器は、直径15cmを越えるもので割に大ぶりである。口縁は内傾かつ短い。^① 又縁も鈍いもので、田辺昭三氏による陶邑編年のTK10に該当するものである。鉄器は、刀子と鎌がセットで出土した。鎌は、平根と細根が併存して出土した。いずれも籠被ぎを有するもので、残存状態は良好であった。

年代 出土した須恵器は、天井部と口縁部を界する縁が退化し、口縁端部内面の沈線も退化しているが、口径は大きい。そのことからすると実年代は、6世紀前半でも後葉頃と考えられる。

(新谷武夫)

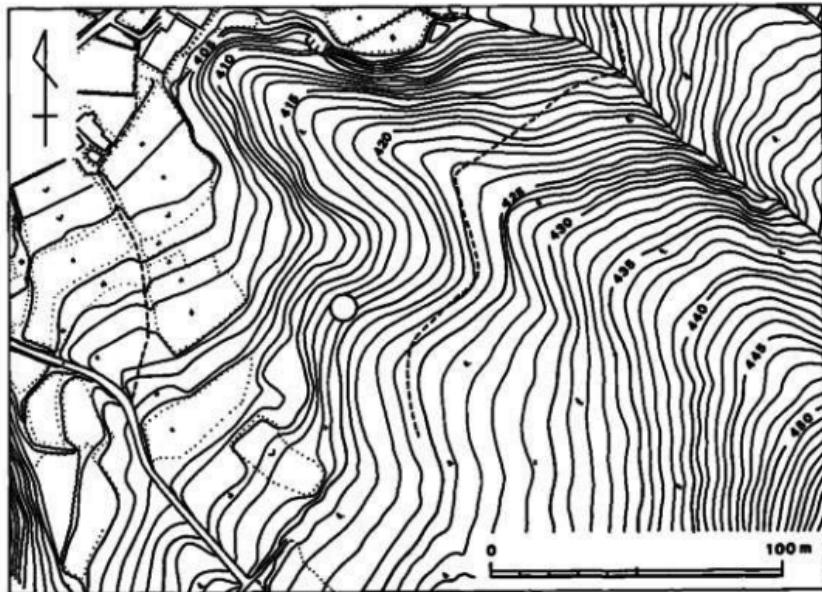
(注) ① 平安学園『陶邑古窯址群』I (研究論集第10号) 1966年

2 宮谷古墳

(1) 位置と現状（第2-1図）

本古墳は、高田郡美土里町大字本郷字塩瀬に所在する。塩瀬地区は、本村川の最上流域にあたり、美土里町の南西隅に位置する。火神峠を経て山県郡千代田町に通じている。本地区は、山に囲まれ、川の両側の狭い平野（幅約200～300m）を生産基盤としている。周辺にみられる古墳は、現在確認済のものは横穴式石室を内部主体とする後半期のもので、前半期のものはみられない。横穴式石室は、谷奥部の斜面に位置し、3基程度群在するもの（横道・塚原）と単独のもの（焼山、塩瀬神社裏、引神）とがみられる。

本古墳は、盗掘を全く受けていなかった。墳丘はあまり高くなく、しかも斜面にあり、現状が山林で立木伐採前は識別が困難であった。



第2-1図 宮谷古墳周辺地形図 (1:2,000)

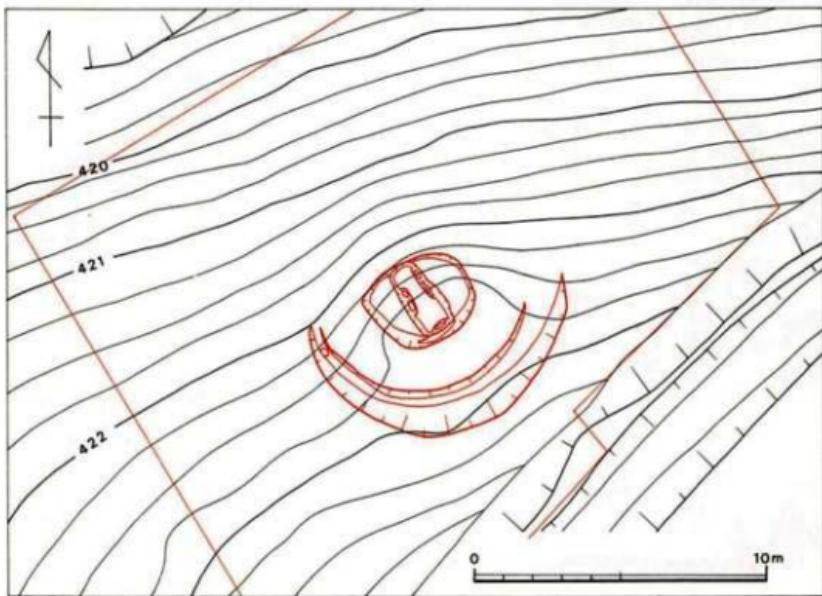
(2) 調査の概要

a . 墳丘 (第2—2・3図)

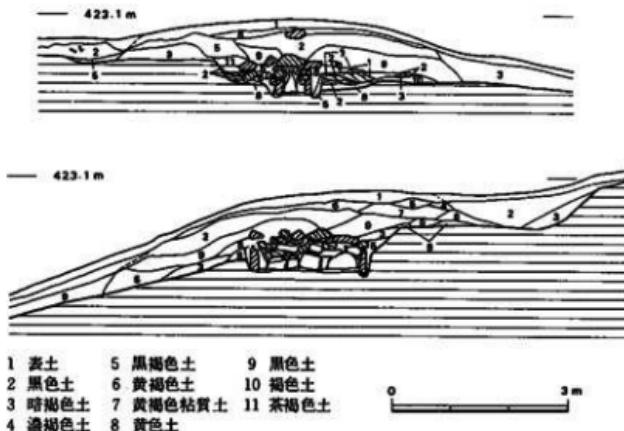
立地 丘陵北東斜面の裾部付近に立地する。尾根筋を若干それているが谷部ではない。標高423mで、水田面からの比高差は約20mである。水田からの距離は近い（約40m）が、平野部への眺望は比較的限定される場所である。西方約200mの丘陵頂部に塩瀬神社裏古墳がある。本古墳の西には、かなりなだらかな丘陵（傾斜8°）が広がっている。

外形 東西径6.0m、南北径6.8m、高さ0.9~1.6mを測る円墳である。周溝は幅2.8m、深さ0.8mで、南半部（レベルの高い部分）のみにある。周溝内には黒フク土がつまる。葺石や埴輪等の外表施設はない。墳丘の築成過程は、次の4段階が認められる。

1. 斜面を半円形に掘削して、溝を掘ると同時に残余土を低位面に押し出して円形の平坦面（墓塙面）を作る。2. 墓塙面（一部地山、一部盛土）を楕円形(2.4×2.7m)に深さ13~50cm程度掘り下げて1段目の墓塙を作る。3. 1段目墓塙の床面を長方形（長216cm、幅80~100cm）に深さ32~38cm程度掘り下げて、2段目の墓塙を作る。3.



第2-2図 宮谷古墳々丘実測図(アミ目:土器) (1:200)



第2-3図 宮谷古墳々丘土層断面図 (1:100)

2段目墓圹内に石室を構築する。石のレベルを調整する為に、部分的に掘下げる。

4. 石室に蓋をかぶせた時点で須恵器を使用して葬送儀礼を行い、後に石室全体を埋めると同時にさらに盛土（厚80cm）して墳形を整える。盛土の途中（石室蓋石から30cm上）で、石室直上に大きな板石（50×50cm）を1枚置く。

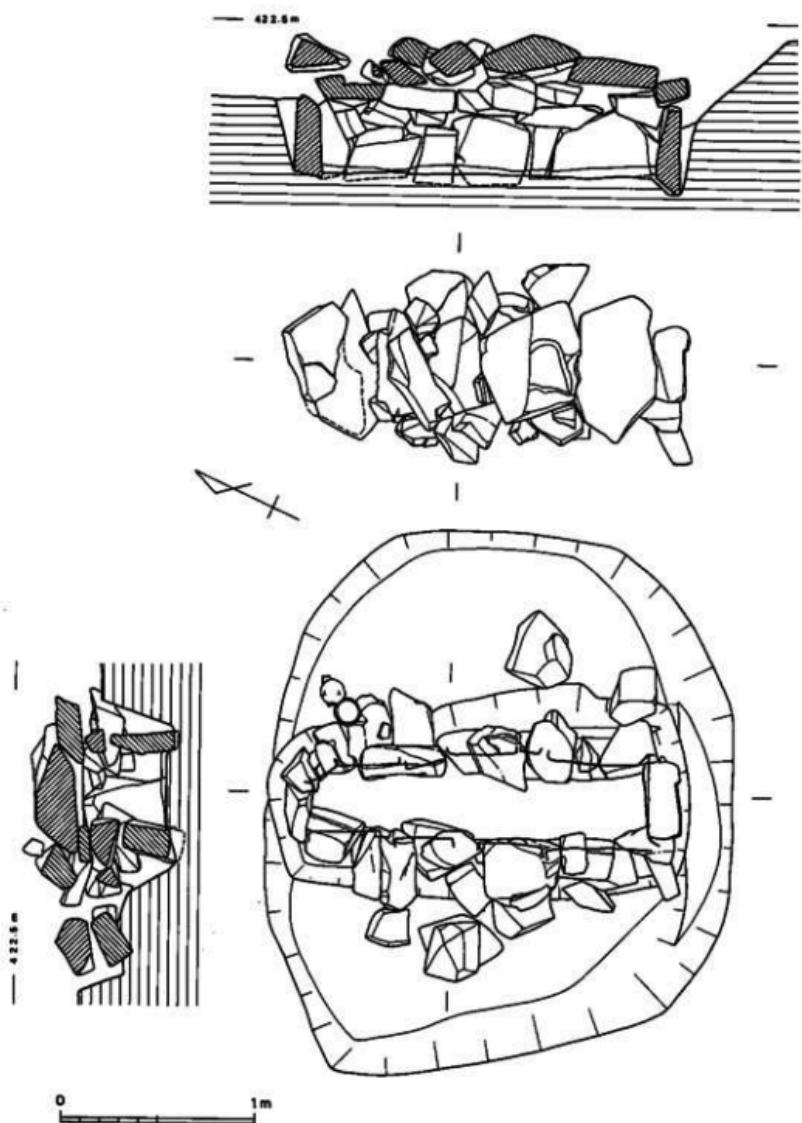
b. 内部主体（第2—4図）

本古墳の内部主体は、小形竪穴式石室である。墳丘のほぼ中央に、主軸を等高線に直交させて1基構築している。規模は内法で、全長170cm、幅42(南)–46(中央)–33cm(北)、高さ38(北)–48cm(南)である。やや胴張りの平面形で、主軸はN156°Eで頭位は南である。

石室床面は、板石や砂利等の特別な施設はなく、すぐ地山でほぼ水平である。

側壁は東壁が6枚、西壁が4枚である。1段目は面積で、2・3段目は小口積である。1段目の高さは20~33cmで、上端面は不揃いである。石は横長積と縦長積とが交互になされている。2・3段目は、小口積であるが、用石の規模がまちまちで上端面は凹凸が著しい。側壁の高さは37~44cmで、南側の方が高い。幅は上端約30cm、下端約40cmで、約7°内傾する。

小口壁は、南2段、北1段である。いずれも1段目は面積、2段目は小口積である。



第2・4図 宮谷古墳石室実測図 (1:30)

南小口は側壁にはさまれるが、北小口は側壁にはさまれない。北東隅は、隅切形のプランとなっている。これは東側壁の長さが、用石の配置過程で予定より若干短くなつたことに起因するものと考えられる。

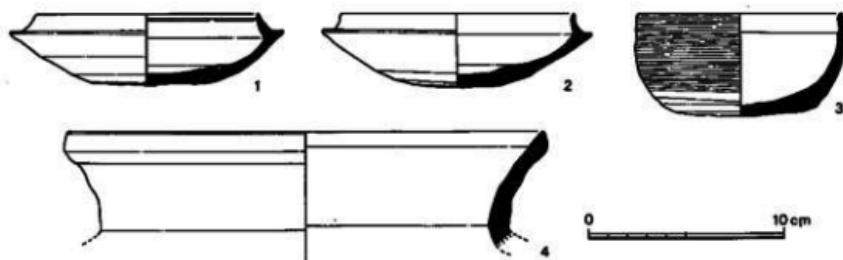
蓋石は主要なものは7枚である。 $40 \times 80\text{cm} \sim 30 \times 50\text{cm}$ で厚さ12~15cmの比較的大きなものを使用している。用石の配置は、大型のものを南側に置き、横長に架構している。また、蓋石の隙間を封鎖するために小角礫を使用しているが、粘土による目張りは施されていない。蓋石の架構順序は、南側（頭部）から北側（足部）へ順次行われていることが、蓋石断面からわかる。

側壁の床面のプランは、左右対称でない。東側壁はほぼ直線的であるが、西側壁は胴張形となっている。張りは中央部付近で最も著しく約10cmを測る。また、北東隅は用石の都合上から隅切形の変則的なものとなっている。また、小口壁と側壁の関係は南小口壁が両側壁ではさみこまれるのに対し、北小口壁は、側壁に接したり、側壁をはさみこむ形となっている。

壁面の構築順序は、小口壁と側壁の関係から推察すると、まず南小口壁をつくり、続いて西側壁を作る。後、被葬者の体形を考慮して、胴張り形に東側壁を築き、最後に北小口壁を封鎖したものと考えられる。

c. 出土遺物（第2—5図）

出土状態 墳丘西側周溝内から須恵器甕（4）が破碎後集積状態で出土した。また石室北東隅の蓋石とほぼ同レベルの位置から須恵器壺（1），塹（3）が出土した。須恵器壺・塹はほぼ完形でおかれていたが、甕はバラバラに割られ細片（ $5 \times 5\text{cm}$ 程度の大きさ）となっていた。



第2-5図 宮谷古墳出土土器実測図（1:3）

概要 出土遺物は、人齒17本、須恵器4点、古銭1枚のみである。出土遺物の量、質とも比較的貧弱で、石室内からは人齒が確認されたのみである。

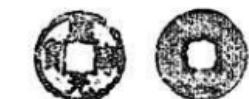
第2-1表 宮谷古墳出土土器調査表

番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	成形技法の特徴	備考
第2 -5 図 1	須恵器 环身	口径11.4 器高 3.6	底部はゆるやかな弧を描き、平坦面をもつ。底部と受部の境界は不明瞭。受部は外上方にのび端部は丸い。口縁部はゆるく外反し、内上方にのびる。端部内面に部分的に沈線あり。	マキアゲ・水ヒキ成形。底部の2/3は回転ヘラ削り。立上りは折込手法。ロクロ右まわし。	胎土 精良 焼成 良好 色調 灰色
2	+	口径12.0 器高 3.7	底部はゆるやかに弧を描く。受部と底盤の境界は不明瞭。受部はほぼ水平にのび、端部は丸い。口縁部はゆるく外反しつつのび、端部はシャープ。	マキアゲ・水ヒキ成形。底部の1/2は回転ヘラ削り。内面中央に同心円打压痕と片方向の仕上げナデあり。ロクロ 右まわし。	胎土 精良 焼成 良好 色調 灰色～淡緑色(自然釉あり)
3	+	口径10.4 器高 5.3	底部はゆるやかに弧を描き、体部との境は段がつく。体部は若干内湾し、口縁端部は丸くおさめ、内面には浅い段がつく。内面には、底部と体部の境界なし。	マキアゲ・水ヒキ成形。底部全体を回転ヘラ削り。体部の9割にカキ目あり。ロクロ 右まわし。	胎土 精良、密 焼成 良好 色調 淡灰色～黃 灰色
4	+	口径24.4	口縁はゆるく外反しつつ外上方にのびる。端部は折曲げて肥厚させる。	マキアゲ・水ヒキ成形。外表はスグレ状タタキ。内表は同心円タタキ痕有。	胎土 精良 焼成 良好 色調 灰色

古銭（第2-6図）

墳丘出土。熙寧元宝（初鑄、北宋 1068年）で、字は真

書体である。直径24mmを測る。



第2-6図 宮谷古墳出土古銭拓影
(2:3)

(3) まとめ

宮谷古墳は、小形竪穴式石室を内部主体とする円墳である。盗掘を受けておらず、遺物出土状態、内部主体の構造をよく知ることができた。以下その要点を集約して、まとめにかえたい。

立地 丘陵裾部斜面に立地する。水田面からの比高差は約20mで、周囲への眺望も限定されたものとなっている。立地条件からみると横穴式石室を内部主体とする後半期古墳のあり方に該当するものである。

墳丘 径6.8m、高さ1.9mの小規模な円墳である。地山を削平し、その残余土を押し出して円形の平坦面をつくり、その面を墓塙面としている。墓塙面は、地山面と盛土面が半々となっている。

内部主体 全長170cmの小形竪穴式石室である。主軸は等高線に直交し、頭位は南(山側)である。石室の構造は、向井古墳(本書所収)に類似するもので、壁の構築方法(面積と小口積の併用)に特徴がある。本古墳の場合、床面に敷石はみられず、また壁面の構築状態も向井古墳に比べ簡素なものとなっている。

遺物出土状態 石室直近の蓋石同一レベル面から須恵器壺及び塊、周溝底部付近から甕が出土した。壺・塊はほぼ完形品で、甕は破碎後集積された状態であった。このことから、石室に蓋石を架構した直後に葬送祭祀が行われたことがわかる。また、須恵器が石室外から出土したことは、死者の為の副葬品としてではなく、葬送に際しての祭祀品であったことを窺わせる。また、甕を破碎し集積したのは、何らかの禁忌が存在したことを示唆している。

出土遺物 石室内の副葬品は皆無で、石室外の祭祀品のみである。量、質とも貧弱であるが、年代推定にとって好資料となるものである。須恵器壺は、立ち上りが退化すると同時に口径も小型化の傾向を見せている。甕は、口縁端部の折り返しが丸味を持ち鋭利な稜は消失している。田辺昭三氏による陶邑編年T K43頃と考えられ年代は出土須恵器の形式からみて6世紀中葉頃をあてることができる。(新谷武夫)

3 塩瀬神社裏古墳

(1) 位置と現状（第3—1図）

本古墳は高田郡美土里町大字本郷字塩瀬に所在し、美土里町の西端にあたり、本村川に沿って細長く開けた谷平地の南側独立低丘陵頂部に位置する。南から北に派生した丘陵尾根は一度鞍部をなして高まり、先端部で独立丘陵状になっている。この丘陵頂部の西側に西に開口した横穴式石室を有する円墳が築造されている。調査前既に一部破壊されており、石室部は大きく穴があき、奥壁は一部露出し、天井石はなくなっていた。墳頂部の標高は435.5m、周辺の水田との比高は約35mである。丘陵の東側、谷一つ隔てて竪穴式石室を内部主体とする宮谷古墳が存在する。

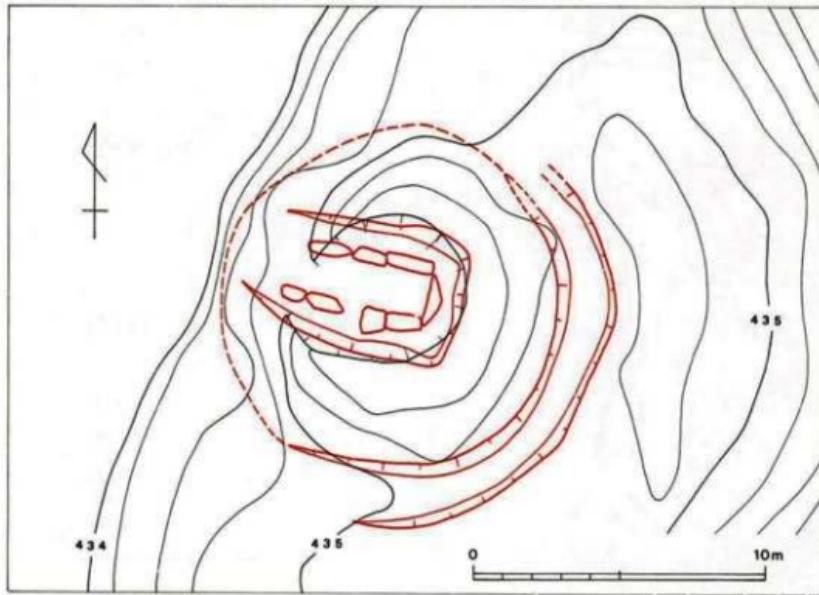


第3-1図 塩瀬神社裏古墳周辺地形図 (1:2,000)

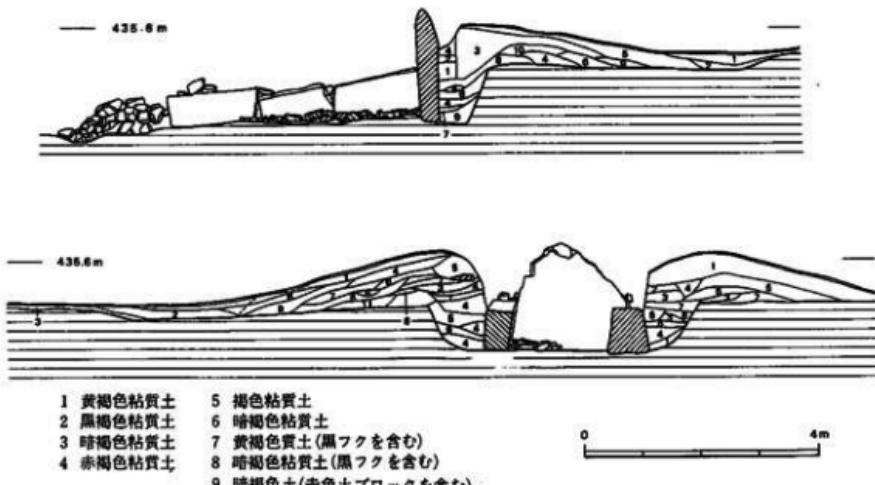
(2) 調査の概要

a. 墳丘 (第3-2・3図)

本古墳は緩斜面に築造されている。そのため墳丘は高所側に半円形状に地山を削平して古墳築造のための地業を行っている。この削平された平坦面の中央に横穴式石室を構築するための土塙を穿っている。土塙は前面が開くコ字状を呈し、幅462cm、深さは奥壁部で95cmである。墳丘盛土は横穴式石室の構築と関係している。土塙内に壁から80~100cm間をおいて奥壁・側壁1段目の石を配し、ほぼその石・土塙掘方の上面まで褐色土を水平、互層に埋め石室基底部をきめ、次に現存していないが2段目以上の石を積み、古墳築造のための地山削平面の掘方より東側で1.3m、南側で2.3mの付近まで石室に向って褐色土を互層に数層版築し盛土が行われている。そして最後に全体に一層の土が盛られたものと推定される。墳丘の規模は径12m、高さ(現存)1.2mの円形を呈している。周溝は高所側に半円形に廻っており、幅1.3~2.3m、深さ20cm余の浅いものである。また、石室入口南側の周溝内より須恵器大型甕が破碎された状態で出土している。葬送儀礼に伴うものであろうか。



第3-2図 塩瀬神社裏古墳々丘実測図 (1:200)

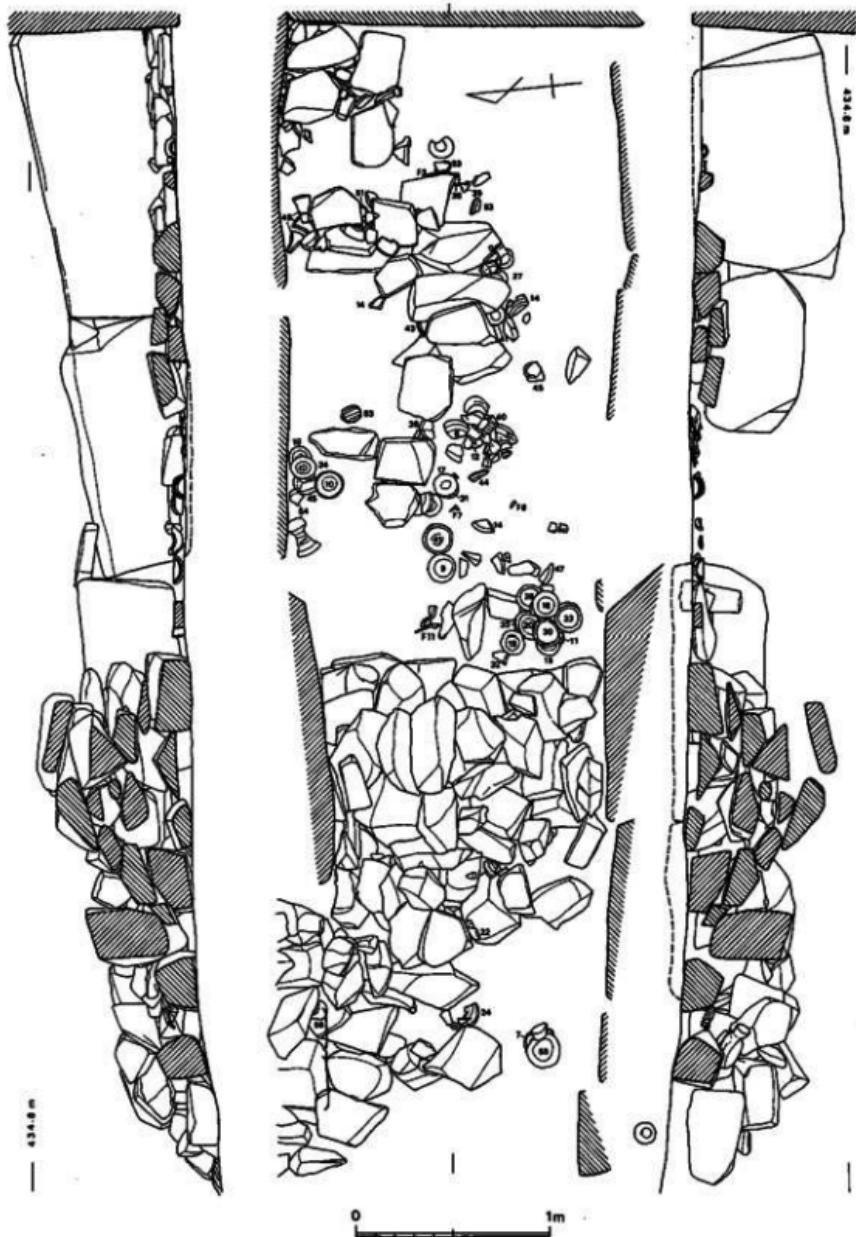


第3-3図 遠瀬神社裏古墳々丘土壙断面図 (1:100)

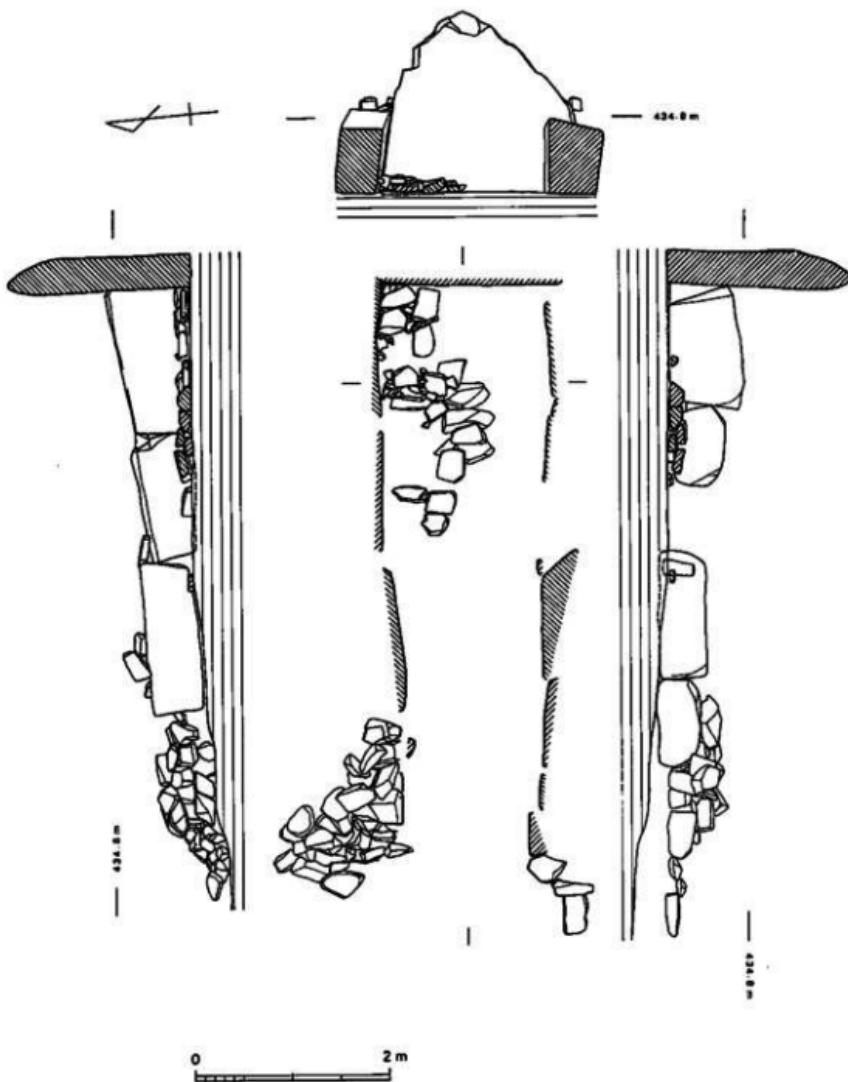
b 内部主体 (第3—4・5図)

内部主体は横穴式石室であり、地山削平面中央に穿たれた西に開くコ字状の土塙内に構築されている。既に大部分は破壊されており、奥壁と側壁1段目の石及び封鎖石のみ残存していた。土塙掘方面と側壁1段目の石の上面がほぼ同じ高さである。石室は西に開口している。奥壁は平たい石を1枚立て、側壁は長方体の石を横長に使用し、北側で3、南側で4（奥から3番目は抜きとられており本来は5と考えられる）、さらに入口に向って小さめの石3を配している。北側壁の奥から3番目の石は入口に向って斜方向におかれ、また南側壁の奥から3番目の石も他の奥の石の面に比べて内側に置かれている。そしてこれより入口までの側壁間はやや狭く、この付近より前面は羨道を意識したものと考えられる。このことは封鎖石の位置からもいえる。石室の規模は全長が6.0m、玄室長3.2m、幅は玄室部で1.65～1.75m、羨道部で1.4m、高さは1.8m以上と考えられる。玄室の中央から北側壁には平石が敷かれており、本来玄室全体に石が敷かれていたものと推定される。羨道部には封鎖石として割石が約1.5mにわたって積まれているが、石室前面まで及んでいない。外護列石はみられなかった。

出土遺物は玄室内より須恵器・鉄器片が多く出土している。須恵器は出土状態から3群に分けられる。1.は敷石下から出土したもの（第3—8・9図—27・41・43・

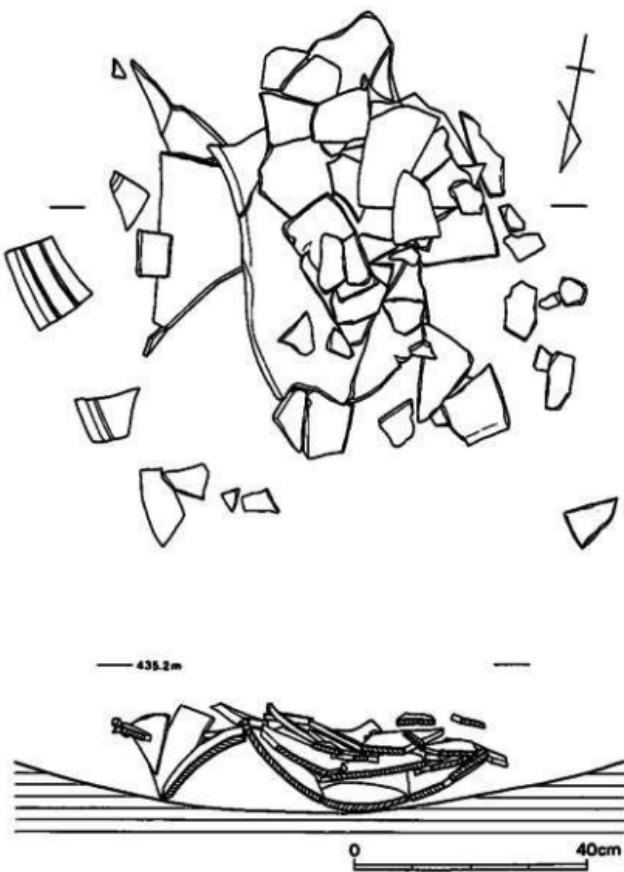


第3-4図 塩瀬神社裏古墳石室内部出土状況及び封鎖石実測図(F:鉄器)(1:30)



第3~5図 塩瀬神社裏古墳石室実測図 (1:60)

52), 2は玄室内でまとまって出土したもの、北壁のそばのもの(第3—7~9図—10・19・34・45・54)と南壁そばのもの(第3—7・8図—11・15・16・18・20・23・26・29・35)の2か所あり、他は床面に散在的に存在した。3.は封鎖石外のもの(第3—7~9図—7・22・34・55・58)であり、これは石室の石を抜き取る時に動いた可能性がある。



第3-6図 塩瀬神社裏古墳周溝内土器出土状態実測図 (1:10)

c 出土遺物

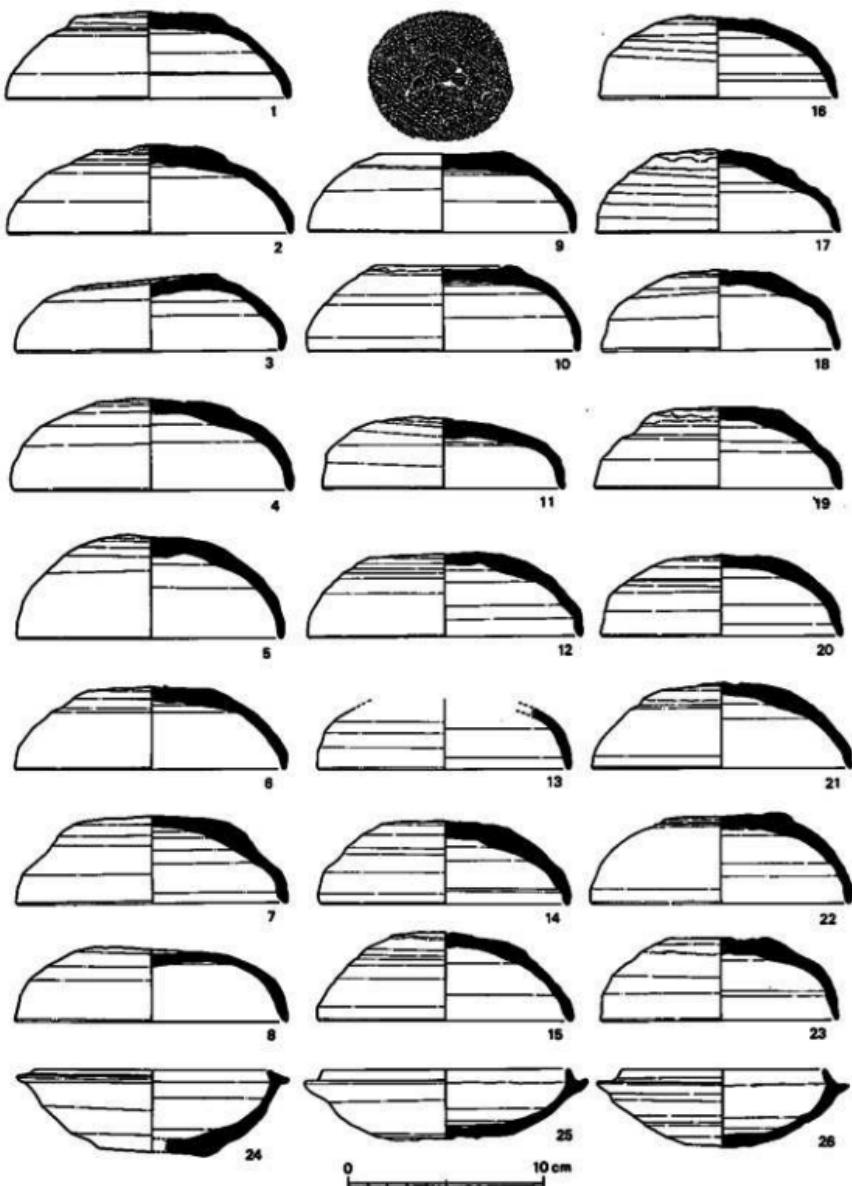
石室内より多くの須恵器が出土した。器種には壺蓋23、壺身21、高壺1、高壺4、壺3、甌2、提瓶4があり、その他に直刀、鎌、刀子などの鉄器が出土している。また時期的には異なるが土師質土器、常滑焼、龜山焼なども出土している。

須恵器（第3—7～10図）

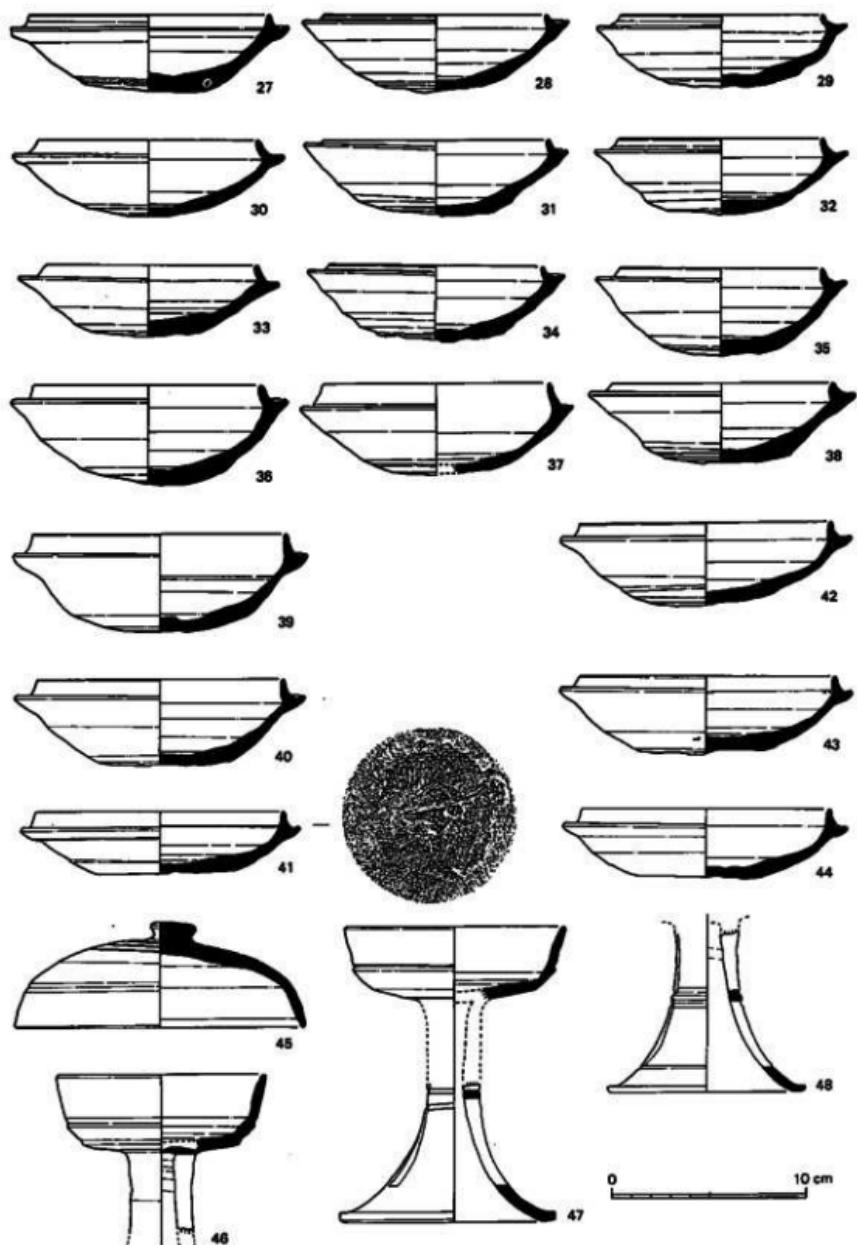
壺蓋（1～23）は全体に丸みをもち、稜線をもたない。天井部は平坦面を呈するものと丸いものとがあり、口縁部はわずかに折れ短いものとやや長く垂れ下るものがある。壺身（24～44）は器高がやや深いものと浅いものとがある。立ち上り部が長いものと短いものとがあるが、後者がほとんどである。この他に高壺（45～49）、壺（50～52）、甌（53・54）、提瓶（55～58）、甕（59）がある。

第3—1表 塙瀬神社裏古墳出土土器観察表

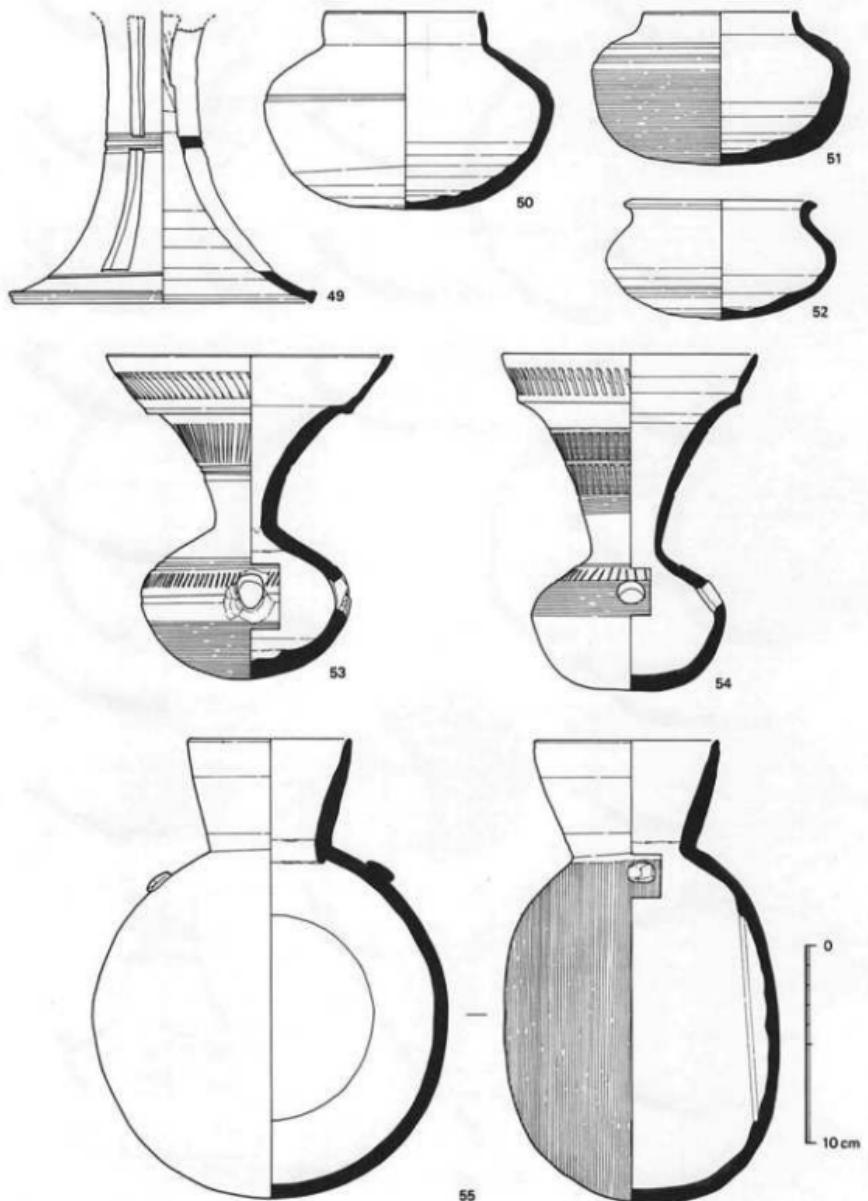
番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	整形技法の特徴	備考
第3—7 図 1	須恵器 壺蓋	口径 14.5 器高 4.4	天井部は平坦面を呈し、体部から口縁部へゆるやかに丸みを有し、端部は丸くおわる。内面に細く浅い沈線がめぐる。	天井部は回転ヘラ削り後上面をナデつけている。 マキアゲ、ミズヒキ成形。 ロクロ回転方向は右回り。	色調 灰色 胎土 精選された砂粒は少ないので、焼成 堅緻
2	+	口径 14.7 器高 4.6	天井部は平坦面を呈し、段をして体部となり、口縁部へゆるやかに丸みをもち端部は丸くおわる。	天井部はヘラ削り、中央部はナデつけ。 マキアゲ、ミズヒキ成形。	色調 灰色 胎土 細砂を含む 焼成 堅緻
3	+	口径 14.0 器高 3.6	天井部は平坦面を呈し、体部から口縁部へゆるやかに丸みを有し、端部は内におれ、丸くおわる。	天井部は回転ヘラ削り後、ナデつけ、ミズヒキ成形。 内面中央に仕上げナデ、ロクロ回転方向は右回り。	色調 内面黒灰色 外表面灰色～黒色 胎土 細砂を多含 焼成 堅緻
4	+	口径 14.5 器高 4.6	天井部から全体にゆるやかに丸みをもって口縁部となる。端部は丸くおわる。天井部に「一」字状のヘラ記号あり。	天井部は回転ヘラ削り、ミズヒキ成形。 ロクロ回転方向は右回り。	色調 内面灰色 外表面灰色 胎土 砂粒を多含 焼成 堅緻
5	+	口径 13.7 器高 5.2	天井部から全体にゆるやかに丸みをもって口縁部となる。やや高い。端部は丸くおわる。	天井部は回転ヘラ削り、ミズヒキ成形。 ロクロ回転方向は右回り。	色調 内面灰色 外表面灰～灰白色 胎土 細砂を多含 焼成 やや軟
6	+	口径 14.0 器高 4.2	天井部は平坦面を呈し、体部から口縁部へゆるやかに丸みを有し、端部は丸くおわる。	天井部は回転ヘラ削り。 ミズヒキ成形。	色調 灰色 胎土 砂粒を含む 焼成 堅緻



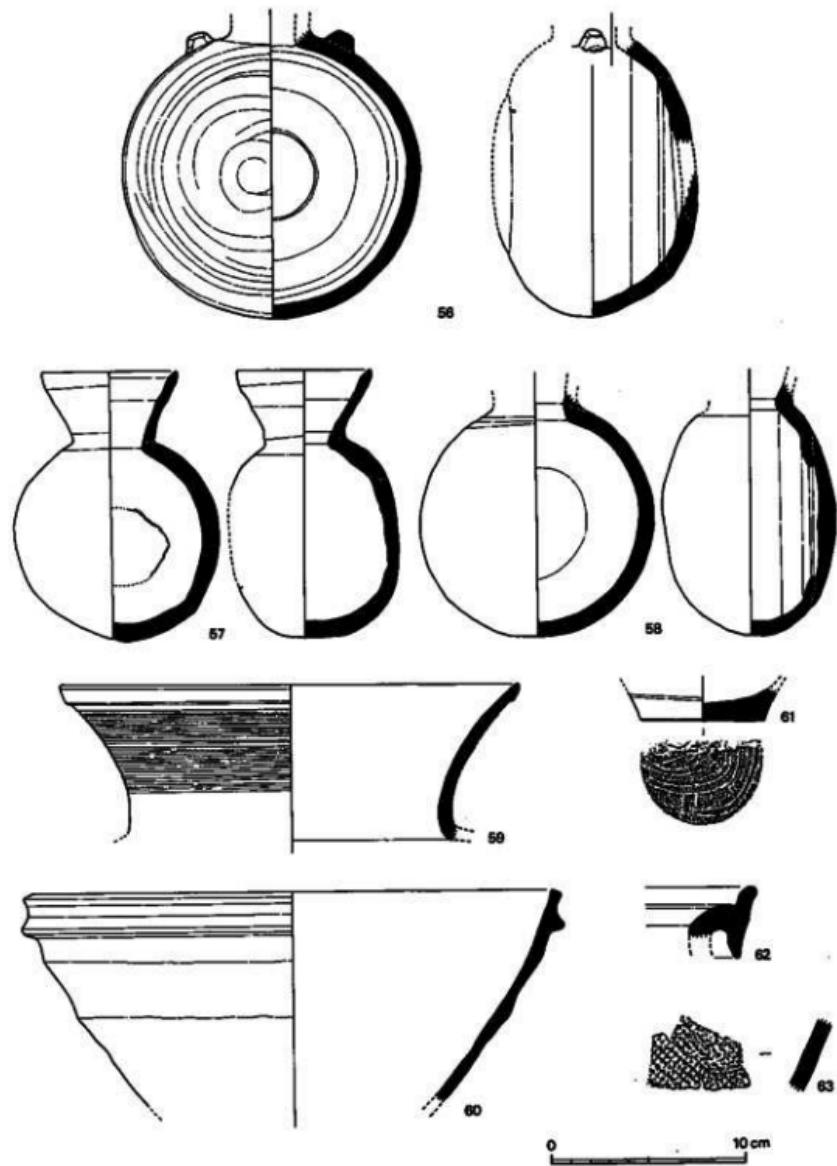
第3 - 7図 塩瀬神社裏古墳出土土器実測図(1) (1 : 3)



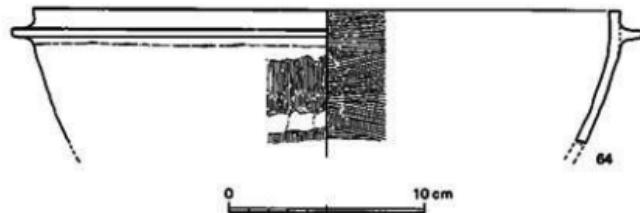
第3-8図 塩瀬神社裏古墳出土土器実測図(2) (1:3)



第3-9図 塩瀬神社裏古墳出土土器実測図(3) (1:3)



第3-10図 塩瀬神社古墳出土土器実測図(4) (1:3)



第3-11図 塩瀬神社裏古墳出土土器実測図(5)(1:3)

番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	整形技法の特徴	備考
7	須恵器 环 蓋	口径 14.0 器高 4.4	天井部は平坦面を呈し、体部へ内湾し、口縁部へやや強く折れ、端部は丸くおわる。 口縁部内面は部分的にシャープな接線をなす。	天井部は回転ヘラ削り、ミズヒキ成形。 内面中央に仕上げナデ、ロクロ回転方向は右回り。	色調 灰褐色 胎土 細砂を含む 焼成 やや軟
8	+	口径 14.0 器高 3.7	天井部は中凹みに平坦面を呈し、体部から口縁部へゆるやかに丸みをもち、端部は開き丸くおわる。	天井部は回転ヘラ削り、ミズヒキ成形。 内面中央に仕上げナデ。	色調 内面灰褐色 外面黒灰色 胎土 砂粒を多含 堅緻
9	+	口径 13.9 器高 4.1	天井部は平坦面を呈し、体部から口縁部へ丸みをもち端部は丸くおわる。	天井部は回転ヘラ削り後、ナデつけ、ミズヒキ成形。 ロクロ回転方向は右回り。	色調 灰褐色 胎土 微砂粒を多含 堅緻
10	+	口径 14.1 器高 4.3	天井部は中凹みで平坦面を呈す。体部から口縁部へ丸みをもち、端部は丸くおわる。	天井部は回転ヘラ削り後、ナデつけ周囲に余り粘土付着。ミズヒキ成形、ロクロ回転方向は右回り。	色調 灰褐色 胎土 微砂粒を多含 堅緻
11	+	口径 12.4 器高 3.7	天井部はわずかに丸みを有し、口縁部へ折れ曲る。端部は丸くおわる。	天井部は回転ヘラ削り、ミズヒキ成形。 内面中央に仕上げナデ、ロクロ回転方向は右回り。	色調 灰褐色 胎土 砂粒を多含 堅緻
12	+	口径 14.1 器高 4.2	天井部は平坦面を呈し、体部は丸みをもち、口縁部は垂直気味に、端部は丸くおわる。	天井部は回転ヘラ削り、ミズヒキ成形。 内面中央に仕上げナデ、ロクロ回転方向は左回り。	色調 灰褐色 胎土 微砂粒を多含 堅緻
13	+	口径 13.0	体部は丸みをもち口縁部となり、端部は丸くおわる。	天井部は回転ヘラ削り、ミズヒキ成形。 ロクロ回転方向は右回り。	色調 濃灰色 胎土 微砂粒を多含 堅緻
14	+	口径 13.0 器高 4.2	天井部は平坦面を呈し、体部から口縁部へ丸みを有し端部は丸くおわる。 口縁部内面に幅広い沈線を有する。	天井部は回転ヘラ削り、ミズヒキ成形。 ロクロ回転方向は右回り。	色調 灰褐色 胎土 微砂粒を多含 堅緻

番号	器種	法量 (cm)	形態の特徴	整形技法の特徴	備考
15	須恵器 坏 蓋	口径 13.2 器高 4.5	天井部からわずかに丸みをもつ が、直線状に口縁部となり端部 は丸くおわる。	天井部は回転ヘラ削り。マ キアゲ、ミズヒキ成形。 クロ回転方向は右回り。	色調 混灰色 胎土 微砂粒を多含 焼成 堅緻
16	+	口径 12.3 器高 4.2	天井部は平坦面を呈し、体部か ら口縁部へ丸みを有し、端部は 丸くおわる。	天井部は回転ヘラ削り、ミ ズヒキ成形。 内面中央に仕上げナデ。ロ クロ回転方向は右回り。	色調 内面灰色 外面灰色～混灰 色 胎土 微砂粒を多含 焼成 堅緻
17	+	口径 12.6 器高 4.7	天井部から口縁部へ丸みを有し、 端部は丸くおわる。体部の機械 は明瞭である。天井部から体部 にかけてヘラ削りにより生じた 粘土が被っている。	天井部は回転ヘラ削り、後 ナデつけ。 ミズヒキ成形。 内面中央に仕上げナデ。	色調 混灰色 胎土 砂粒を含む 焼成 堅緻 天井部を下にして焼成
18	+	口径 12.7 器高 4.1	天井部はやや平坦面を呈し体部 は丸く、口縁部はやや折れて垂 下する。端部は、丸くおわる。	天井部は回転ヘラ削り、ミ ズヒキ成形。 内面中央に仕上げナデ、ロ クロ回転方向は右回り。	色調 灰色～混灰色 胎土 砂粒を多含 焼成 堅緻
19	+	口径 12.8 器高 4.1	天井部は平坦面を呈し、体部か ら口縁部へわずかに丸みを有し、 端部は丸くおわる。 天井部から体部にかけて部分的 に粘土が被っている。	天井部は回転ヘラ削り、後 ナデつけ。 ミズヒキ成形。 内面中央に仕上げナデ、ロ クロ回転方向は右回り。	色調 混灰色 胎土 砂粒を多含 焼成 堅緻
20	+	口径 12.5 器高 4.1	天井部はやや平坦面を呈し体部 は丸みを有し、口縁部へ折れ垂 下する。端部は丸くおわる。	天井部は回転ヘラ削り、ミ ズヒキ成形。 内面中央に仕上げナデ、ロ クロ回転方向は右回り。	色調 灰色 胎土 微砂粒を多含 焼成 堅緻
21	+	口径 13.4 器高 4.3	天井部から口縁部へ丸みを有し、 端部でやや折れ丸くおわる。	天井部は回転ヘラ削り、ミ ズヒキ成形。 内面中央に仕上げナデ。	色調 灰色 胎土 砂粒を多含 焼成 堅緻
22	+	口径 13.4 器高 4.5	天井部は平坦面を呈し、体部か ら口縁部へ丸みを有し端部は丸 くおわる。 天井部から体部にかけて部分的 に粘土が被っている。	天井部はヘラ起し。 ミズヒキ成形。	色調 灰色 胎土 微砂粒を多含 焼成 堅緻
23	+	口径 12.3 器高 4.2	天井部は平坦面を呈し、体部は 丸みを有し、口縁部は折れ垂下 する。端部は丸くおわる。 天井部中央に余り粘土付着。	天井部はヘラ削り、後ナデ ミズヒキ成形。 内面中央に仕上げナデ、ロ クロ回転方向は右回り。	色調 内面灰色 外面混灰色 胎土 微砂粒を多含 焼成 堅緻
24	坏 身	口径 12.0 受部径 13.9 器高 4.2	底部は平坦面を呈し、丸みをも って受部となる。受部は外方に のび、端部は丸くおわる。立ち 上り部は内傾し、短い。	ミズヒキ成形。 面はナデつけ。 内面中央に仕上げナデ、ロ クロ回転方向は右回り。	色調 灰色 胎土 砂粒を含む 焼成 堅緻

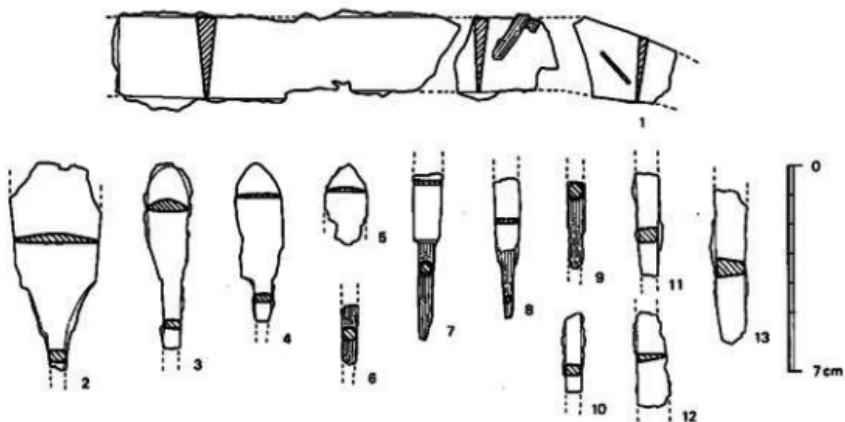
番号	器種	法量 (cm)	形態の特徴	整形技法の特徴	備考
25	須恵器 环身	口径 12.7 受部径 14.6 器高 3.5	底部はやや平坦面を呈し、丸みをもつて受部となり、外上方にのび端部は丸くおわる。立ち上り部はわずかに内傾し立ち上り、短い。	立ち上り部はオリコミ手法 ミズヒキ成形。 底面はヘラ削り後、ナデつけ、平行条線状の打圧痕残有。 ロクロ回転方向は右回り。	色調 灰色 胎土 微砂粒を多含 焼成 堅緻
26	+	口径 10.4 受部径 13.0 器高 4.0	底部から丸みを有して受部となり、外方にのび、端部は丸くおわる。立ち上り部は内傾し短い。	立ち上り部はオリコミ手法 ミズヒキ成形。 底面は回転ヘラ削り。 内面中央に仕上げナデ、ロクロ回転方向は右回り。	色調 灰色、白斑あり 自然釉あり 胎土 砂粒を多含 焼成 堅緻
第3 - 8図 27	+	口径 12.4 受部径 14.4 器高 3.9	底部は平坦面をなし、直線状に受部となり、外上方にのび、端部は丸くおわる。立ち上り部は、垂直にのび短い。	立ち上り部はオリコミ手法 マキアゲ、ミズヒキ成形。 底面はヘラ削り、後ナデつけ。 内面中央に仕上げナデ、ロクロ回転方向は右回り。	色調 灰色 胎土 砂粒を多含 焼成 堅緻
28	+	口径 11.5 受部径 13.7 器高 3.9	底部はやや平坦面をなし、わずかに丸みをもち受部となり、外上方にのび、端部は丸くおわる。立ち上り部は、内傾し、短い。	立ち上り部は一本ビキか? ミズヒキ成形。 底面は回転ヘラ削り、後ナデつけ。 ロクロ回転方向は右回り。	色調 灰色 胎土 細砂粒を多含 焼成 堅緻
29	+	口径 10.5 受部径 12.9 器高 3.2	底部から受部へ丸みをもち外方にのび端部は丸くおわる。	立ち上り部はオリコミ手法 ミズヒキ成形。 底面は回転ヘラ削り。 内面中央に仕上げナデ、ロクロ回転方向は右回り。	色調 内面灰色 外面黄灰色 胎土 微砂粒を含む 焼成 堅緻
30	+	口径 11.4 受部径 14.0 器高 3.9	底部から丸みをもち受部となりほぼ外方にのび端部は丸くおわる。立ち上り部は内傾する。	ミズヒキ成形。 底面は回転ヘラ削り。 内面中央に仕上げナデ、ロクロ回転方向は右回り。	色調 黒灰色 胎土 粗密 焼成 堅緻
31	+	口径 11.7 受部径 13.6 器高 3.8	底部はやや平底をなし、直線状に受部となり段をもたず外上方にのび端部は丸くおわる。立ち上り部は内傾し短い。	ミズヒキ成形。 底面は回転ヘラ削り、後ナデつけ。 ロクロ回転方向は右回り。	色調 灰色 胎土 細砂粒を多含 焼成 堅緻
32	+	口径 10.6 受部径 13.1 器高 3.9	底部から丸みをなし、受部となり、外上方にのび、端部は丸くおわる。立ち上り部は内傾する。	ミズヒキ成形。 底面は回転ヘラ削り。 内面中央に仕上げナデ、ロクロ回転方向は右回り。	色調 灰色 胎土 微砂粒を含む 焼成 堅緻 自然釉付岩

番号	器種	法量 (ml)	形態の特徴	整形枝法の特徴	備考
33	須恵器 环身	口径 10.9 受部径 13.5 器高 3.7	底部は平坦面を呈し、受部へ直結状にのび、端部は丸くおわる。立ち上り部は内傾する。	立ち上り部はオリコミ手法 ミズヒキ成形。 底面は回転ヘラ削り。 内面中央に仕上げナデ。	色調 灰色 胎土 細砂粒を多含 焼成 脊継
34	・ ・	口径 11.0 受部径 13.2 器高 3.8	底部はやや平坦面を呈し、直結状に受部をなす。わずかに外上方にのび、端部は丸くおわる。立ち上り部は内傾し短い。	ミズヒキ成形。 底面は回転ヘラ削り。 内面中央に仕上げナデ。 ロクロ回転方向は右回り。	色調 灰色 胎土 砂粒を多含 焼成 脊継 自然釉がかかる。
35	・ ・	口径 10.5 受部径 13.0 器高 4.5	底部より丸みをもって受部となり、外上方にのび、端部は丸くおわる。立ち上り部は内傾する。	ミズヒキ成形。 底面は回転ヘラ削り。 内面中央に仕上げナデ。 ロクロ回転方向は右回り。	色調 灰色 胎土 細砂粒を多含 焼成 脊継 緑色の自然釉がかかる。
36	・ ・	口径 11.8 受部径 14.3 器高 5.0	底部より丸みをもって受部となり、外上方にのび、端部は丸くおわる。立ち上り部は内傾する。	ミズヒキ成形。 底面は回転ヘラ削り。 内面中央に仕上げナデ。 ロクロ回転方向は右回り。	色調 灰色 胎土 細砂粒を多含 焼成 脊継
37	・ ・	口径 11.7 受部径 14.1 器高 4.6	底部より丸みをもって受部となり、外上方にのび、端部は丸くおわる。立ち上り部は内傾する。	ミズヒキ成形。 底面は回転ヘラ削り。 内面中央に仕上げナデ。	色調 灰色 胎土 砂粒を多含 焼成 脊継
38	・ ・	口径 11.4 受部径 13.8 器高 4.0	底部は平坦面をなし、直結状に受部となる。端部は丸くおわる。立ち上り部は内傾し、短い。	ミズヒキ成形。 底面はヘラ削り、後ナデつけ。 内面中央に仕上げナデ、ロクロ回転方向は右回り。	色調 灰色、部分的に黒灰色 胎土 砂粒を多含 焼成 脊継
39	・ ・	口径 13.2 受部径 15.2 器高 5.0	底部より丸みをもって受部となり、わずかに外上方にのび、端部は丸くおわる。立ち上り部は垂直にのびる。	ミズヒキ成形。 底面は回転ヘラ削り。 ロクロ回転方向は右回り。	色調 灰色 胎土 細砂粒を多含 焼成 脊継
40	・ ・	口径 12.8 受部径 15.0 器高 4.3	底部は平底を呈し、丸みをもって受部となり、外上方にのび、端部は丸くおわる。立ち上り部はほぼ垂直にのびる。	ミズヒキ成形。 底面はヘラ削り、後ナデつけ。 内面中央に仕上げナデ。	色調 青灰色～白灰色 胎土 細砂粒を含む 焼成 脊継
41	・ ・	口径 12.8 受部径 14.4 器高 3.2	底部は平坦面を呈し、全体はやや丸みをもち受部となり外上方にのび、端部は丸くおわる。立ち上り部はほぼ垂直にのびる。	立ち上り部はオリコミ手法 ミズヒキ成形。 底面は回転ヘラ削り、後ナデつけ、その上に平行細線の押圧痕。	色調 灰色 胎土 細砂粒を多含 焼成 脊継

番号	器種	注量 (cm)	形態の特徴	整形技法の特徴	備考
42	須恵器 坏 身	口径 13.0 受部径 15.0 器高 4.2	底部から丸みをもって受部となり、外上方にのび、端部は丸くおわる。立ち上り部は、ほぼ垂直にのびる。	マキアゲ、ミズヒキ成形。 底面はヘラ削り、後ナデつけ。 内面中央に仕上げナデ、ロクロ回転方向は右回り。	色調 灰色 胎土 砂粒を多含 焼成 堅緻
43	* 坏 盖	口径 13.2 受部径 15.1 器高 4.0	底部は平坦面をなし、体部は丸みをもって受部となり外上方にのび、端部は丸くおわる。立ち上り部はわずかに内傾するがほぼ垂直にのびる。	立ち上り部は、オリコミ手法。 ミズヒキ成形。 底面は回転ヘラ削り、後ナデつけ。 ロクロ回転方向は右回り。	色調 灰色 胎土 微砂粒を多含 焼成 堅緻
44	* *	口径 12.9 受部径 14.7 器高 3.5	底部は平坦面をなし、体部は丸みをもち受部となり、わずかに外上方にのび、端部は丸くおわる。立ち上り部は垂直にのびる。	ミズヒキ成形。 底面はヘラ起し、ナデつけ 内面中央に仕上げナデ。	色調 灰色 胎土 細砂粒を多含 焼成 堅緻
45	* 高坏蓋	口径 15.0 器高 5.3	つまみの付くもので、天井部から丸みをもち、やや折れて口縁部となり、端部は丸くおわる。口縁内面に沈線状に凹む。	つまみは天井部ヘラ削り後付加。天井部はヘラ削り。 ミズヒキ成形。 内面中央に仕上げナデ、ロクロ回転方向は右回り。	色調 灰色 胎土 細密 焼成 堅緻
46	* 高 坏	坏部 口径 10.8 器高 4.0	坏部は底部が平坦に近く、体部は丸みをもって口縁部へほぼ垂直にのびる。脚部に透しが2方向にみられる。	ミズヒキ成形。	色調 灰色~青灰色 胎土 精緻 焼成 堅緻
47	* *	坏部 口径 11.4 器高 3.6 脚部 底径 11.0 器高 (15.0)	坏部は底部から体部へ丸みをもち、沈線をもって口縁部となりほぼ垂直にのびる脚部はラッパ状に開き、端部で折れ易い。透しは二段二方向にもち、その間に沈線を2条めぐらす。	ミズヒキ成形。 ロクロ回転方向は右回り。	色調 坏部灰色~黒灰色 脚部灰色~青灰色 胎土 微砂粒を多含 焼成 堅緻
48	* *	脚部 底径 10.2	脚部はラッパ状に開き、端部で折れる。透しは二段二方向にみられ、沈線を2条めぐらす。	ミズヒキ成形。 内面上部にシボリ目痕を残す。透しは刀子状工具で上方から下方に切りこんでいる。	色調 濃灰色 胎土 精緻 焼成 堅緻
第3 - 9回 49	* *	脚部 底径 15.1	脚部はラッパ状に開き、端部は肥厚し、沈線を1条有する。透しは、二段三方向に配され、透し間に2条、下段透し下に沈線を1条めぐらす。	ミズヒキ成形。 内面上部にシボリ目痕を残す。 ロクロ回転方向は右回り、透しは刀子状工具で上方から下方に切り込んでいる。	色調 内面灰色 外面濃灰色~黒灰色 胎土 微砂粒を多含 焼成 堅緻

番号	器種	法量 (cm)	形態の特徴	整形技法の特徴	備考
50	須恵器 壺	口径 8.0 肩部 最大径 14.8 器高 10.1	底部から丸みをもち肩がやや張り、口縁部はやや内傾し、立ち上る。 肩最大部に沈線をめぐらす。	ミズヒキ成形。 底面は回転ヘラ削り。 内面中央は棒状工具先端で押え込みをしている。 クロ回転方向は左回り。	色調 灰色 胎土 細砂粒を多含 焼成 堅緻
51	◆ ◆	口径 7.9 肩部 最大径 13.2 器高 7.8	底部と肩部、肩と折れる。丸みを有し、ゆるやかに口縁部となり、内傾する。	ミズヒキ成形。 肩最大径以下はカキ目調整	色調 灰色 胎土 微砂粒を多含 焼成 堅緻
52	◆ ◆	口径 9.9 肩部 最大径 11.8 器高 6.1	底部は丸底を呈し、肩は張り、外反して口縁部となり肩部は面をもつ。	ミズヒキ成形。 底面は回転ヘラ削り。 クロ回転方向は右回り。	色調 淡灰色 胎土 微砂粒を多含 焼成 堅緻
53	◆ 魁	口径 14.8 肩部 最大径 10.7 器高 16.4	肩部は球形を呈し、頭部はラッパ状に大きく開き、二重口縁となる。肩部は、平坦面を呈し、沈線を有する口縁部には、板状工具小口面で押引きによる斜突状文、頭部上半と肩部上半にはへラ先による直線文を配している。	ミズヒキ成形。 底面は手持ちのヘラ削り後カキ目調整。 内面中央は棒状工具先端で押え込みをしている。 クロ回転方向は右回り。	色調 灰色～黒灰色 胎土 精緻 焼成 堅緻
54	◆ ◆	口径 13.1 肩部 最大径 9.9 器高 17.1	底部は平坦面を呈するが、ほぼ球形の肩を呈し頭部はラッパ状に開き、二重口縁となる。肩部は丸くおわる。口縁部、頭部上半に二段、肩上半に棒状木片による押圧文が配されている。	マキアゲ、ミズヒキ成形。 肩部上半はカキ目調整。 底面は手持ちによるヘラ削り、後ナデつけ。	色調 灰色～青灰色 胎土 精緻 焼成 堅緻
55	◆ 瓶	口径 8.4 肩部 最大径 18.3 器高 23.3	肩部は円形を呈し、側面は一方は丸みを有し、片面は平坦面をなす。口縁部はやや開く。肩部には一对の円板粘土の貼りつけによる把手を有する。	ミズヒキ成形。 肩部片面はカキ目調整。 クロ回転方向は右回り。 三段成形。	色調 灰色 胎土 砂粒を多含 焼成 堅緻
第3 - 10回 56	◆ ◆	肩部 最大径 15.1	肩部は円形を呈し、側面は一方は丸みを有し、円形粘土貼り付け部は凸状を呈し、丸みを有する。肩部には、やや大形の粘土貼りつけによる把手を有する。	肩部片面はヘラ削り、片面はナデによる。	色調 淡青灰色 胎土 砂粒を多含 焼成 堅緻
57	◆ ◆	口径 6.9 肩部 最大径 10.5 器高 13.6	肩部は円形を呈し、側面は圓面共、中央部がやや平坦であるが、丸みを有する口縁部は、く字状に折れ外傾する。	口縁部はナデ。 肩部は、外面、荒いカキ目内面ナデと指頭押捺である。	色調 淡青灰色 胎土 砂粒を多含 焼成 堅緻
58	◆ ◆	肩部 最大径 11.9	肩部は円形を呈し、側面は丸みを有する。	肩上部と口縁部はヨコナデ。 肩部外面はカキ目、その上を一部ナデ。 クロ回転方向は右回り。	色調 外面灰色～ 暗赤褐色 内面暗赤紫色 胎土 砂粒を若干含む 焼成 堅緻

番号	器種	法量 (cm)	形態の特徴	整形技法の特徴	備考
59	須恵器 甕	口径 47.2	口縁部のみで胴部から外反し、端部で折り返し肥厚する。	頸部にカキ目調整を3段、各々の上に沈線を2本づめぐらす。 ミズヒキ成形。	色調 灰色 胎土 微砂粒を多含 焼成 堅緻
60	土師質 土器鍋	口径 27.6	針状に直線状に開き、口縁端部は平坦面を呈し、やや下に突帯(つば)をめぐらす。	口縁部はヨコナデ。体部は押え込み成形による。	色調 黄褐色～褐色 胎土 微砂粒を多含 焼成 堅緻 外面にスス付着
61	々 皿	底径 6.4	底部は厚く、口縁は外上方にのびる。	ロクロナデ。 底部は糸切り。 ロクロ回転方向は右回り。	色調 棕褐色 胎土 微砂粒を含む 焼成 やや軟
62	常滑焼		口縁部は上下にのびる。	ミズヒキ成形。	色調 暗セビア 胎土 細砂粒を多含 焼成 堅緻
63	龜山焼			格子目状の叩き具による打圧。	色調 外面黄橙色 胎土 繊密 焼成 堅緻
第3 - 11図 64	瓦質土 器 鍋	口径 30.1	胴部は丸みをもって口縁部となり、端部は平坦面を呈し、やや下につばを有する。	マキアゲ、ヨコナデ成形。 体部外面は押えこみのちタチ刷毛。内面ヨコ刷毛。	色調 灰色～黒灰色 胎土 微砂粒を多含 焼成 堅緻



第3 - 12図 塩瀬神社裏古墳出土鉄器実測図 (1 : 2)

鉄器（第3—12図）

直刀（1） 3片に分かれており全体は明らかでないが、
背厚0.65cm、刃幅2.8cmである。



鐵（2～11） 大形の平根形と柳葉形長茎鐵とがある。
前者は破片で全容は不明である。後者も全体は明らかでないが、身の長さ3.7～4.1cm、幅1.4～1.5cmである。



刀子（12・13） 刃部と茎部の破片が各1点である。刃部は背厚0.3cm、刃幅1.0cmである。



古銭（第3—13図） 寛永通宝が3枚出土している。

第3—13図
塩瀬神社裏古墳出土古銭拓影
(2:3)

(3) まとめ

本古墳は既に天井石はなく大部分破壊されていたが、調査の結果、石室最下段の基底部の石は残っており、封鎖石の残存状態もよく、また遺物も多く出土状況の良いものであった。以下簡単に調査結果を述べまとめとしたい。

- 1) 本古墳は径12m、高さ1.2m以上の円墳である。
- 2) 主体部は西に開く横穴式石室である。規模は全長6.0mであり、側石・封鎖石の状態から羨道と玄室とを区別しており、玄室の長さ3.2m、幅1.65～1.75mである。
- 3) 外部施設として斜面高所側（東側）に周溝を廻らすのみで葺石・外護列石はみられない。
- 4) 石室内から多くの須恵器が出土しており、2ヵ所にまとまりがみられる。須恵器も大きく2タイプに分けられ、若干の時期差がみられる。2回以上の埋葬が行われたものと考えられる。
- 5) 石室入口南側で須恵器の大甕が出土しており、葬送祭祀が行われたものと考えられる。
- 6) 本古墳の時期は出土遺物から6世紀後半と考えられる。

（桑原隆博）

4 金子古墳群

(1) 千代田町の位置と環境 (第4—1図)

広島県の北西部、中国山地にある千代田町は、可愛川（江川）とその支流志路原川・冠川によって開けた町で、芸北の山地群の中では比較的開けた広い平地をもっている。中心となる八重・壬生の集落は標高270～280mの高所にあり、周囲は400～700mの山々がとりまいている。このため比較的独立性は強いが、河川に沿う交通路は早くから開け、古くから山陽、山陰を結ぶ交通の要所の位置を占めていた。

以下これまで町内で確認された約250件の遺跡を中心にその歴史をたどってみよう。

縄文時代では、町の北端大朝町との境に河原山遺跡が確認されているほか明らかでない。しかし町内で採集された磨製石斧のなかには縄文時代にさかのぼると考えられるものもあり、今後の調査によってはさらに数が増えることが予想される。

弥生時代に入ると、可愛川沿いの低平地、川井遺跡や後述の塚迫遺跡で前期土器が発見されている。それぞれ前者は集落、後者は墳墓としてとらえられているが、千代田町のうちでも特に可愛川沿いは農耕適地として早くから開けたものである。続く中、後期は、中期前半にやや空白はあるものの中期後半から後期にかけては土器片が採集されており、周辺の大朝町・八千代町・吉田町でも当該期の遺跡が多くみられはじめるところから、この時期頃から本格的に遺跡が分布しはじめたことが考えられる。

古墳時代に入ると、確認された約170基の古墳で明らかなどおり、遺跡数は急激に増加する。このうち発掘調査されたものは少ないが、それらは大まかに箱式石棺・竪穴式石室を内部主体とするものと、横穴式石室を内部主体とするものに分けることができる。箱式石棺を内部主体とするものには、後述の金子第4号古墳のほか、城ヶ谷第1号古墳、国藤古墳などがある。この他古保利古墳群や寺原古墳群など丘陵尾根上にある小円墳のなかにはこの種のものが多いようであり、出土遺物に須恵器を含まないものもあり前半期の古墳と考えられるものもある。竪穴式石室を内部主体とするものは、昭和50年広島大学によって調査された古保利第44号古墳、塚迫第1・2号古墳、金子第2号古墳が確認されている。古保利第44号古墳は町の中央、八重盆地にのびる丘陵上にある古保利古墳群（54基）の南西端にある径約10mの円墳で、石室内からは

挂甲・鉄鎌・馬具が、石室外からは多数の須恵器が発見されている。この須恵器は広島県内では比較的古式のものであり、横穴式石室出現以前の年代を推定する上で貴重な資料である。

横穴式石室を内部主体とするものは、藏迫古墳群・石塚古墳群・森政谷古墳群など50基以上が知られている。これらは丘陵斜面や谷水田に面した奥部に少数が群をなしている場合が多く大半が開口している。^④ 藏迫第2号古墳は、志路原川の上流にある円墳で長さ6.8m、幅1.7~2.1mの胴張りの横穴式石室から多数の須恵器と鉄鎌、鉄刀装具片が出土しており、6世紀後半の新しい時期に比定されている。石塚第2号古墳は町の南側、大字南方にある古墳で、長さ4.5m、幅0.85~1.3mの入口に向い幅の広がる形の横穴式石室をもっており、内部から多数の須恵器と鉄刀2本が出土している。このうち封鎖石の部分から出土した鳥形須恵器は県内では他に類例のない特異なものであり、時期的には6世紀終末から7世紀初頭のものとされている。このように横穴式石室を内部主体とするものは数例が調査されているが、その年代的推移は県内の他地域の動向とほぼ同様であり、一応6世紀後半から7世紀前半にかけての時期が考えられる。^⑤

なお古墳時代の住居跡としては町の中央にある城ヶ谷遺跡のものがある。これは中央に炉をもつ4.9×4.5~4.7mの平面方形をなす竪穴住居跡で、古墳時代中葉のものとされている。

このように千代田町においては、現状では未だ発掘調査された遺跡は少ない。しかしその分布からみると、遺跡の増加は弥生時代後半期からのように、古墳時代に入ると古墳を中心に著しく遺跡が増え、山間部の標準的農村の一つとして、さらに平安時代には古保利薬師の仏像群、あるいはその前面にある福光寺廃寺跡など、とぎれとぎれながら遺跡があり、農耕村落の適地に立地して以後も栄えたようである。(小都隆)

(注)

- ① 龍岩・古保利埋蔵文化財発掘調査団「龍岩・古保利・上春木」 1976年
- ② 広島県教育委員会「城ヶ谷遺跡群発掘調査報告」 1973年
- ③ 前掲注①
- ④ 本村豪章ほか「広島県千代田町藏迫第二号墳発掘調査報告」「広島女子短期大学研究紀要」第11号 1961年
- ⑤ 広島県教育委員会「石塚古墳発掘調査概報」 1974年
- ⑥ 前掲注②



第4-1図 千代田町周辺遺跡分布図 (1:50,000)

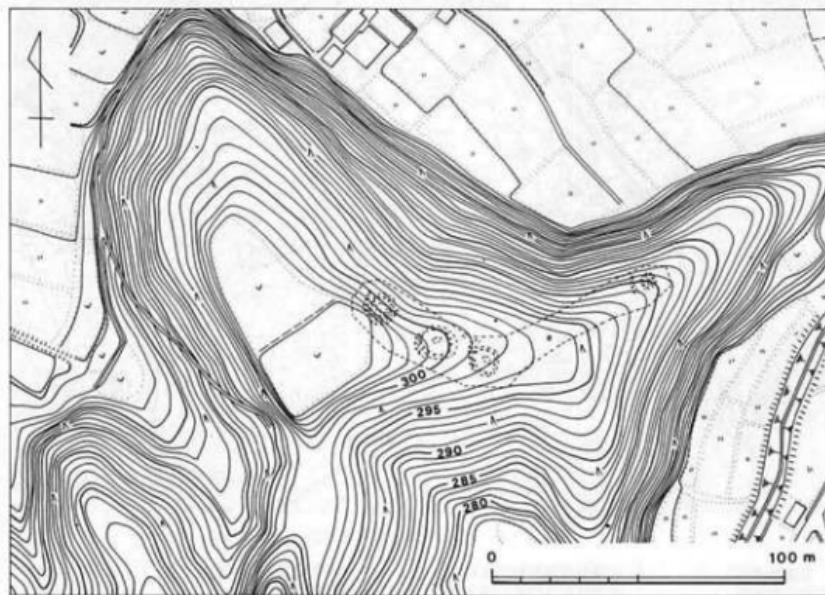
- | | | | |
|--------------|-----------------|-----------------|----------|
| 1 国藤古墳群 | 6 古保利古墳群野野支群 | 11 古保利古墳群薬師堂裏支群 | 16 有岡谷遺跡 |
| 2 金子古墳群 | 7 古保利古墳群堂の後支群 | 12 福光寺跡 | 17 寺原古墳 |
| 3 塚追遺跡群 | 8 古保利古墳群桧木支群 | 13 城ヶ谷古墳群 | 18 別所古墳群 |
| 4 石塚古墳群 | 9 古保利古墳群鐵治屋ヶ市支群 | 14 城ヶ谷遺跡 | |
| 5 川西石斧群单独出土地 | 10 古保利古墳群岡田支群 | 15 有岡谷古墳群 | |

(2) 位置と現状（第4-2・3図）

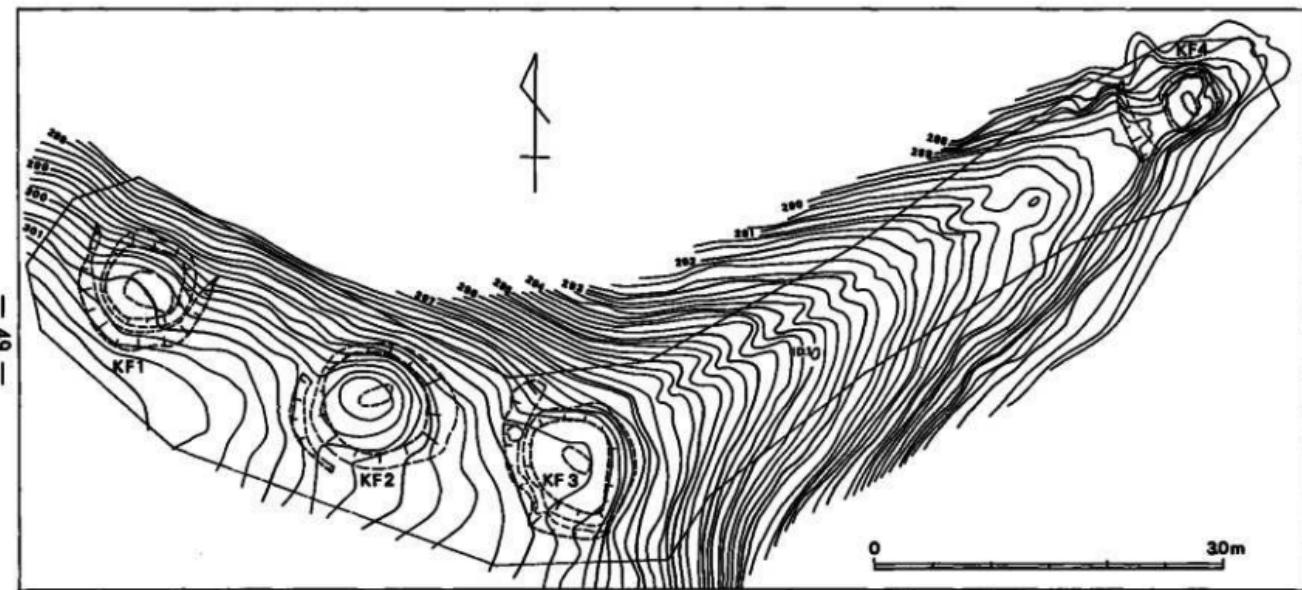
本古墳群は山県郡千代田町大字丁保余原字丁に所在する。千代田町の中心部の八重・有田・壬生地区は志路原川・冠川が合流し、それがさらに可愛川と合流するが、それらの河川により開析された平地が広がっている。盆地の周りには低丘陵が延びて広がっているが、本古墳群は壬生の街並の南側、南から北に向って派生した二本の丘陵尾根のうち東側丘陵尾根先端部に立地している。本丘陵尾根は鞍部をなして高まり、比較的広い平坦面を有しさうに分岐するが、古墳群は東側の北斜面いわゆる壬生地区に面して築造されている。

(3) 調査の概要

本古墳群の調査は分布調査により明らかになっていた古墳を中心に丘陵上約1600m²について行った。その結果、円墳4基、無墳丘の箱式石棺1基、石蓋土塚墓1基を検出した。古墳は十字状に珪を残す四分法により調査を行った。



第4-2図 金子古墳群周辺地形図 (1:2,000)



第4-3図 金子古墳群地形図 (1:500)

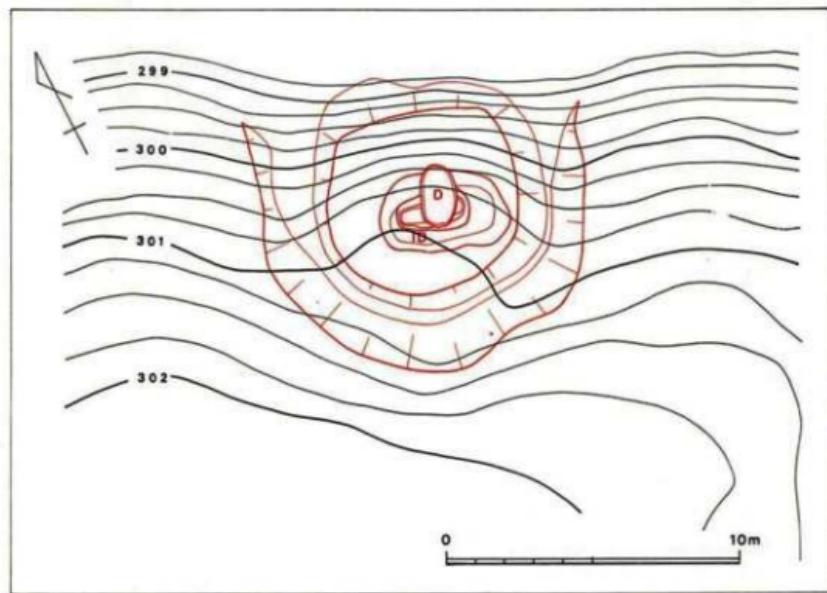
第1号古墳

a. 墳丘（第4—4・5図）

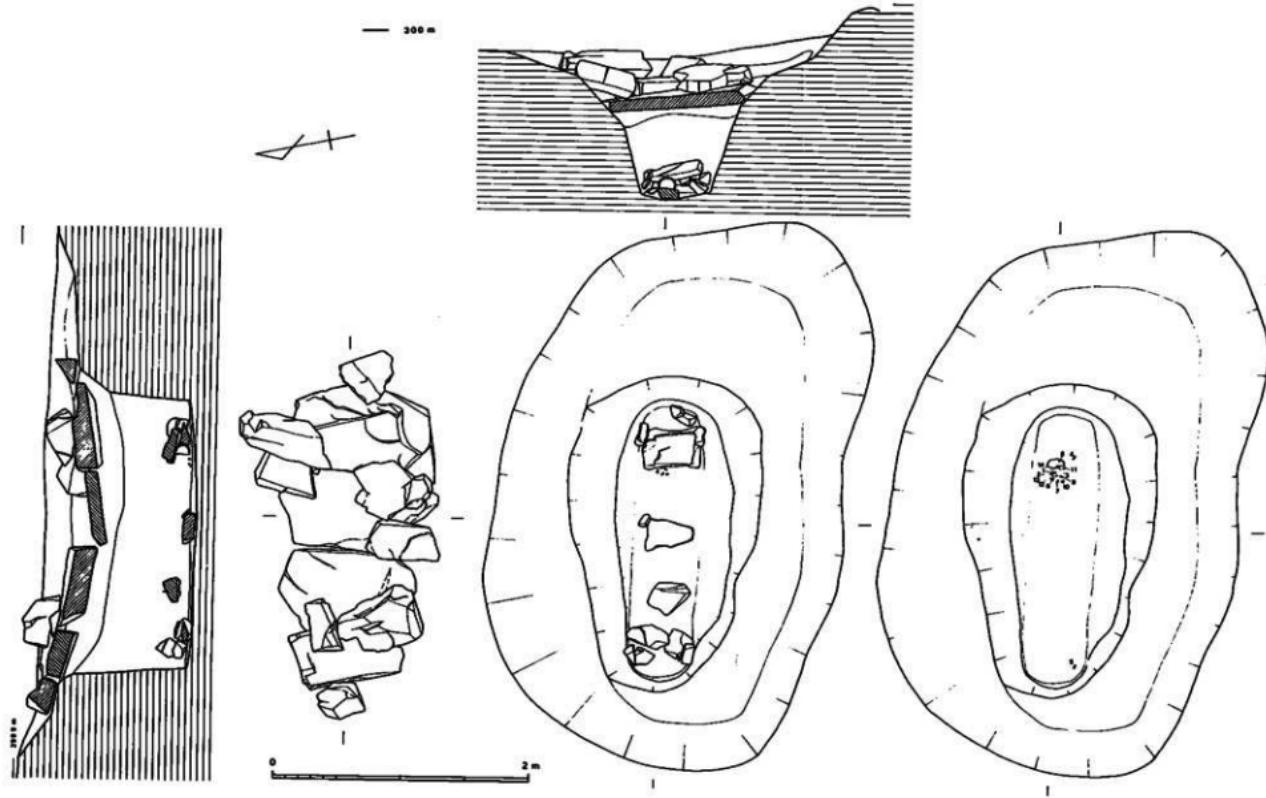
本古墳は丘陵尾根平坦面の北東端に位置し、さらに東方尾根には第2～4号古墳が立地している。墳頂部の標高は301.2m、周辺水田との比高は約30mである。

古墳は丘陵平坦面から北側斜面への変換点に築造されており、高所側をC字状に幅2.0mで掘りあげ、その土を盛上げている。墳丘は地山を削平して平坦な基底部、周溝をつくり、黄色土を中心にして黒色土を水平又はやや中央へ傾斜して版築し盛上げている。北側の斜面側は周溝底より低い部分まで盛土が行われている。墳丘は円形を呈し、径は8.0～8.2m、高さは南側周溝底より45cm、南側裾より2.5mである。墳丘上より須恵器が出土している。

なお、本古墳は中世にも利用されており、墳丘上面で主軸を南北方向にとる土塹を検出した。土塹は長方形円形プランを呈し、210×120cm、深さ14cmである。出土の古銭は本土紹に伴うものと考えられる。



第4-4図 金子第1号古墳ケ丘実測図 (1:200)



第4 - 6図 金子1号古墳石蓋土塚実測図（アミ目：人骨）(1:40)

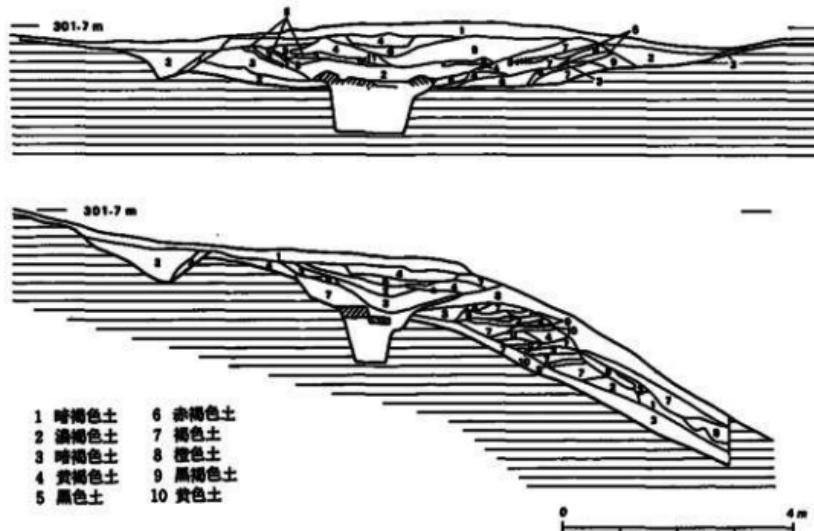


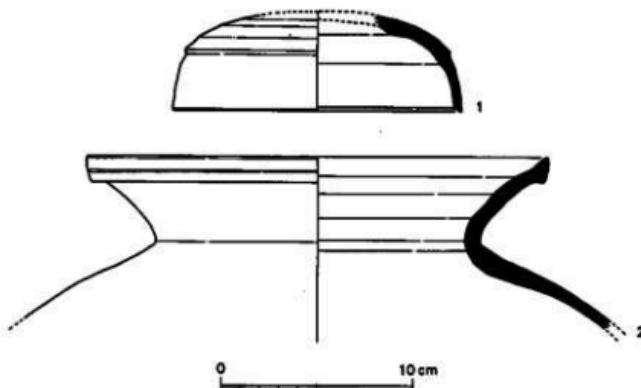
図4-5 金子第1号古墳々丘土層断面図 (1:100)

b. 内部主体 (第4—6図)

墳丘中央部で主軸を東西方向にとる組合式木棺を納めた石蓋土塚を検出した。土塚は盛土後に掘られ、地山深くまで掘られている。土塚掘方は長楕円形プランを呈し、北側を除き2段掘方である。土塚規模は掘方上面で425×275cm、掘方2段目で250×148cm、塹底で222×90cm、深さは2段目まで30~50cm、2段目から塹底まで88~104cmである。蓋石は4枚の平石を2段目にかけ、その間を小さな平石で目張している。塹底には棺台と考えられる平石が両端と中央に3枚置かれていた。塹底両端壁際には木棺の周囲に詰めたと考えられる割石が立った状態で、また木蓋上に置かれていたと考えられる平石2枚を検出した。石を蓋上に置くことによりその重みで、また側壁に石を詰めることにより木棺を組んでいたものと考えられる。東端より頭骨が出土し、その周りより管玉・小玉が、また西端の足部より管玉が1点出土している。

c. 出土遺物

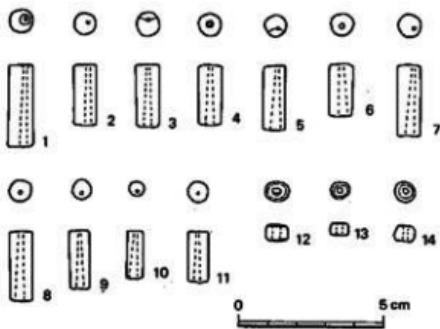
須恵器 (第4—7図) 坏蓋(1)は天井部が丸味をもち、稜をなして画し口縁部となり、ややふくらみをもって開き、内傾の面をもつ。蓋(2)は胴部からく字状に外反して口縁部にいたり、端部は上下に肥厚する。



第4-7図 金子第1号古墳出土土器実測図 (1:3)

第4-1表 金子第1号古墳出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	形態の特徴	整形技法の特徴	備考
第4-1図 1	須恵器 壺蓋	口径15.2 器高 5.1	天井部は丸みをもち、あま い縁をもって開いて口縁部 となる。端部は平坦面を有 する。	ミズヒキ成形	色調 灰色～黒灰色 胎土 微砂粒を多含 焼成 堅緻
2	戈 妻	口径24.0	体部からく字状に外反して 口縁部となり、端部で肥厚 する。	口縁部内面へラ削り、外面 濃緑色の自然釉 胴部内面同心円状の叩き、 外面平行条線状の叩き	色調 灰色 胎土 砂粒を含む 焼成 堅緻



第4-8図 金子第1号古墳石蓋土坡出土玉類実測図 (1:2)

第4-9図 金子第1号古墳出土古錢拓影
(2:3)

玉類（第4—8図）碧玉製の管玉が11個、ガラス製の小玉が3個出土している。管玉は径8mm前後、長さ最長28mm、最短16mmであり、片側からの穿孔である。小玉は径16~18cm、長さ14~18mmである。

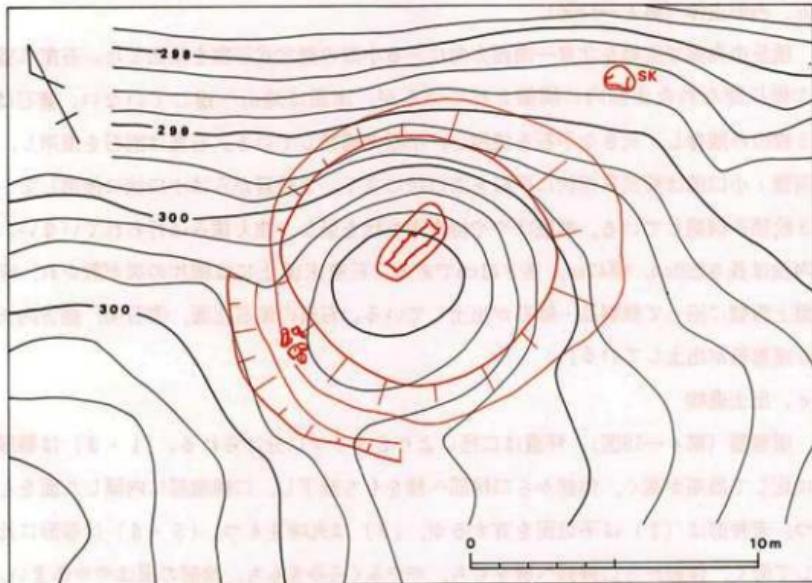
古銭（第4—9図）熙寧元宝である。

第2号古墳

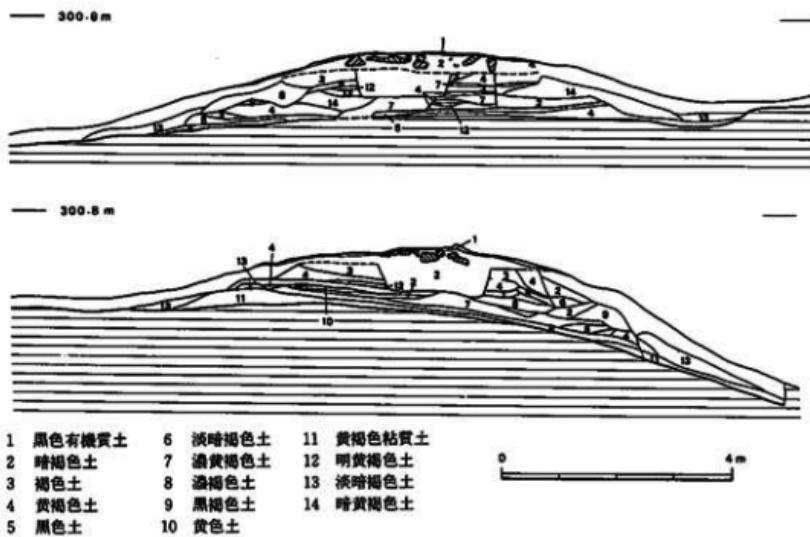
a. 墳丘（第4—10・11図）

本古墳は第1号古墳の南東方向約10mの、丘陵尾根筋上に位置している。墳頂部の標高は301.3m、周辺水田との比高は約31mである。

古墳は細くなりながら東に延びる丘陵尾根上に築造され、脊梁側を削平し、その土を盛上げている。墳丘は地山を削平し平坦な基底部・周溝をつくり、黄色土を中心にして黒色土を水平に版築し盛上げている。古墳は墳丘裾のレベル差の少ない、比較的平坦部に築造されている。墳丘は円形を呈し、径は7.6~8.2m、高さは1.2~1.9mである。墳丘上・周溝内より須恵器、墳丘盛土内地山面近くより鉄斧が出土している。



第4-10図 金子第2号古墳々丘実測図 (1:200)



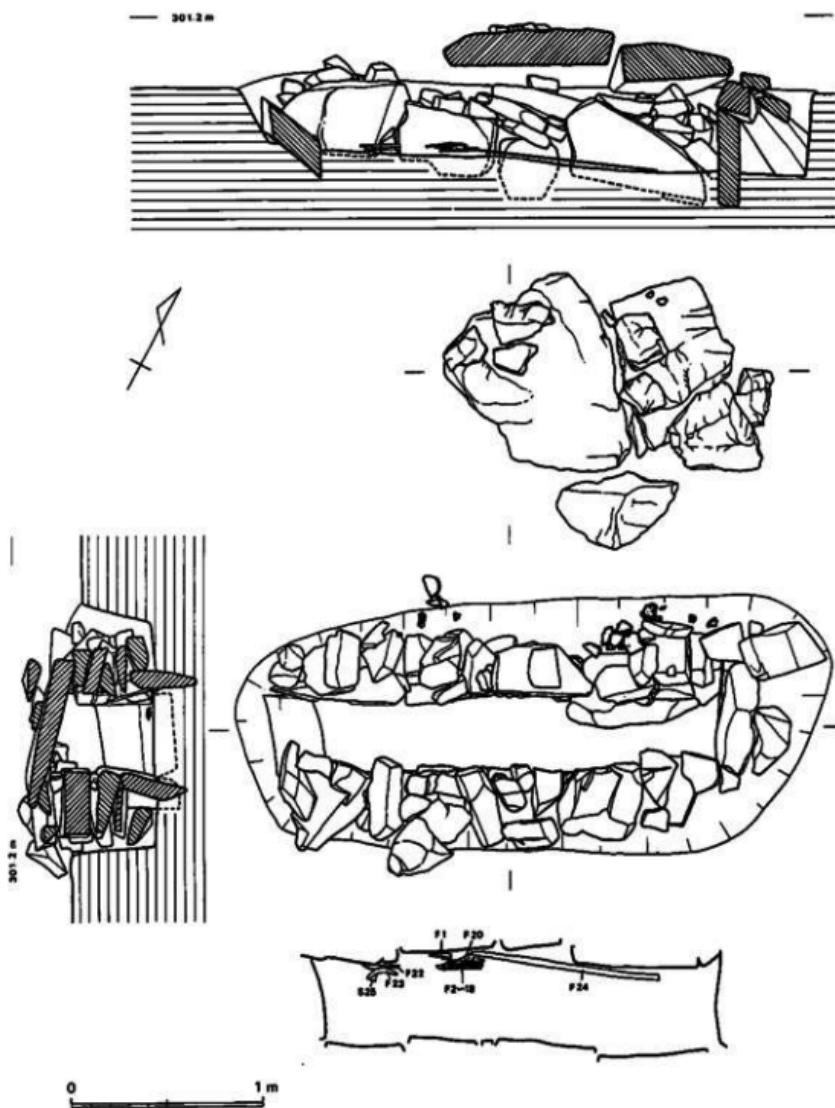
第4-11図 金子第2号古墳々丘土層断面図 (1:100)

b. 内部主体 (第4-12図)

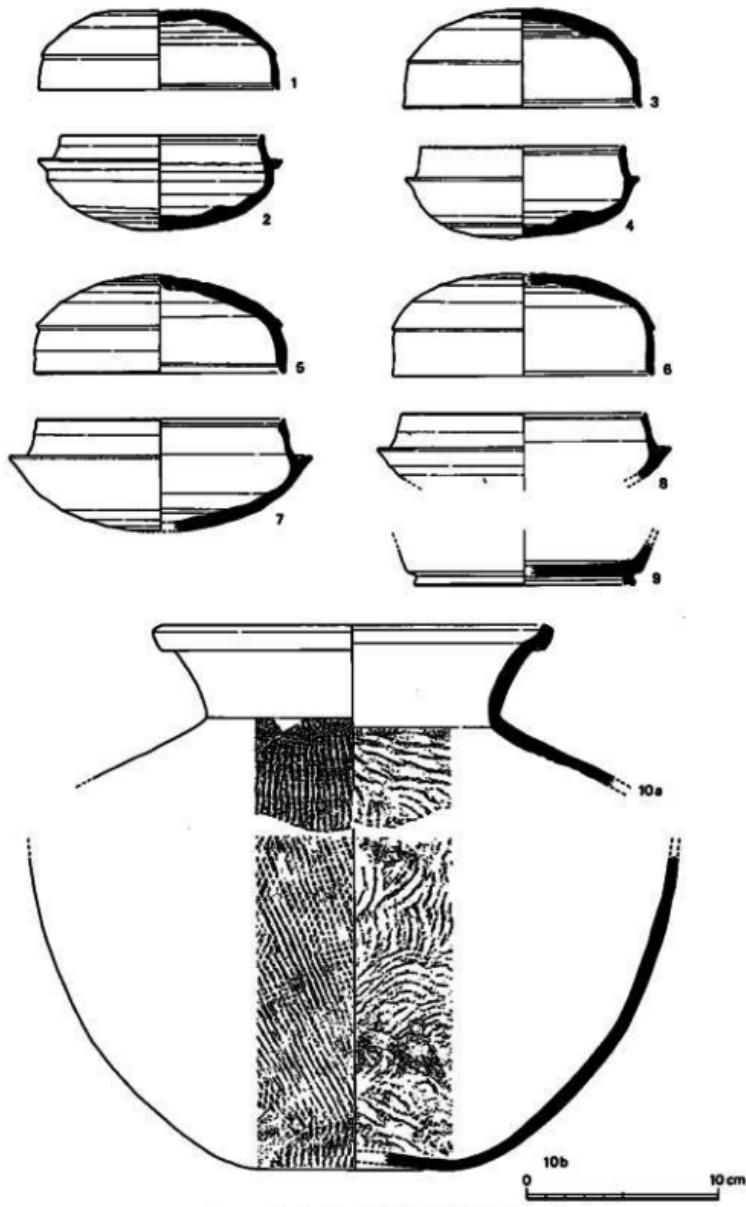
墳丘中央部で主軸を北東—南西方向にとる小形の竪穴式石室を検出した。石室は盛土後に穿たれた土塙内に構築されているが、床面は地山へ達していない。蓋石は2枚のみ残存し、大きな平石を使用し、小石で補強している。石室は割石を使用し、側壁・小口部は箱式石棺状に平石を広口状に立て、2段目からは小口状に使用し2～3段積み構築している。側壁はやや持ち送り状を呈し、控え積みは行われていない。内法は長さ250cm、幅47cm、高さ41cmである。石室床面上には細片の炭が敷かれ、床面上西壁に沿って鉄製品・砥石が出土している。石室の側石上面、側石間、掘方内より須恵器が出土している。

c. 出土遺物

須恵器 (第4-13図) 壺蓋は口径により2タイプに分けられる。(1・3)は器形に比して器高が高く、体部から口縁部へ稜をもち垂下し、口縁端部に内傾した面をもつ。天井部は(1)は平坦面を有するが、(3)は丸味をもつ。(5・6)は器形に比して低く、体部から口縁部へ稜をもち、ややふくらみをもち、端部の面はややあまい。壺身は3タイプに分けられる。(2・4)は器形に比して器高が高く、体部は深く、



第4-12図 金子第2号古墳石室実測図 (F: 鉄器, S: 石器, アミ目: 頸椎器) (1:30)

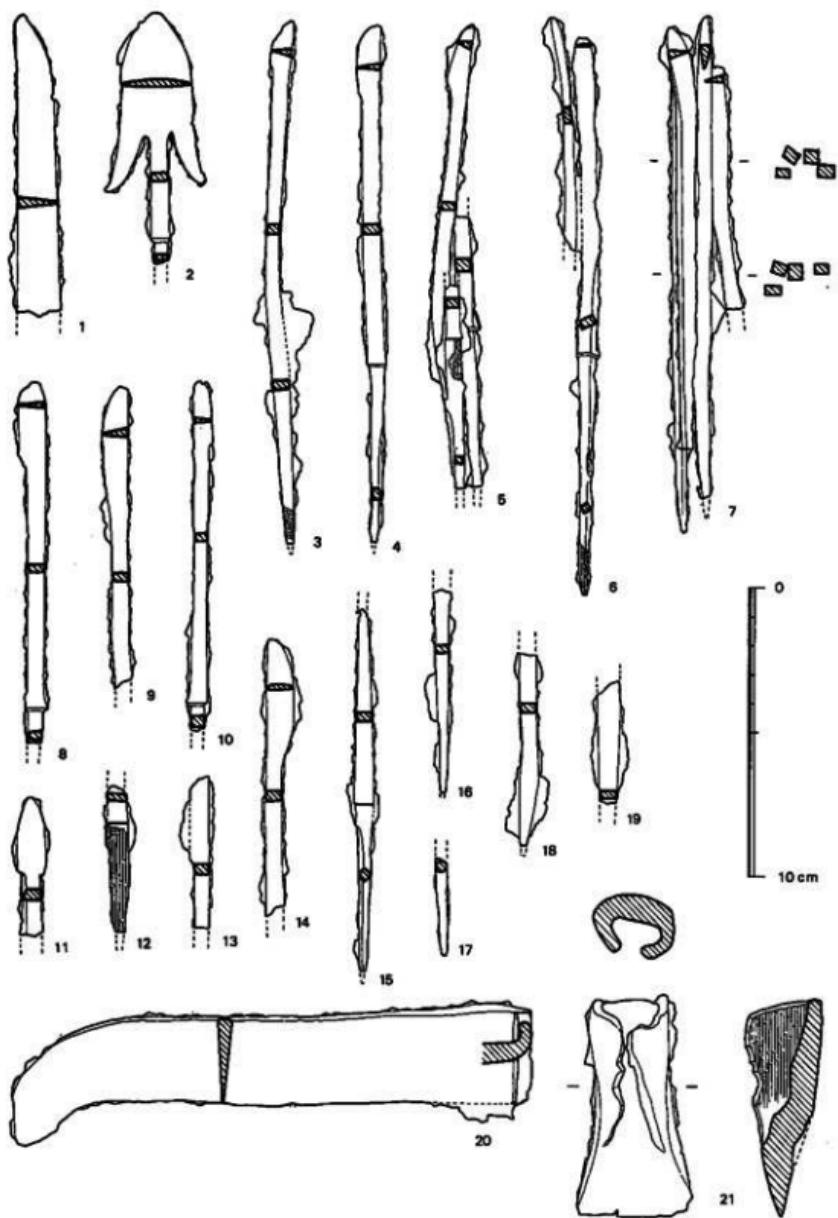


第4-13圖 金子第2号古墳出土土器実測図 (1:3)

受部はやや内傾するが高い。端部は丸くおわる。7・8は5・6に比して大形で体部は浅い。受部は内傾して立ち上り、端部に内傾する面を有する。9は断面方形の高台の付くもので、やや外に開く。甕(10)は胴部からく字状に外反し、口縁部が肥厚する。底部はやや上げ底状を呈する。大型品である。

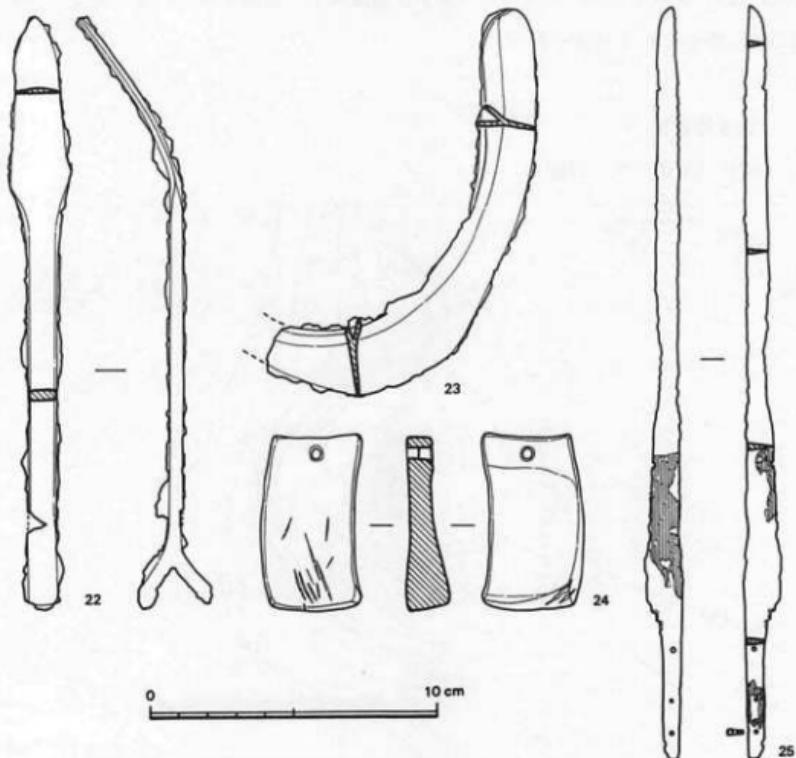
第4-2表 金子第2号古墳出土土器觀察表

番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	整形技法の特徴	備考
第4-13図 1	須恵器 环 蓋	口径12.6 器高 4.1	天井部は平坦面を呈し、に ぶい稜線をもち口縁部に垂 下する。端部は平坦面を有 する。	天井部回転ヘラ削り、 ミズヒキ成形 ロクロ回転方向は左回り	色調 灰色 胎土 砂粒を多含 焼成 堅緻
2	环 身	口径10.5 受部径 12.8 器高 4.9	底部から体部へ丸みをもつ。 受部は外上方にのびる。 立ち上りはやや内傾する。	立ち上りはオリコミ手法 ミズヒキ成形 底面は回転ヘラ削り ロクロ回転方向は左回り	色調 内面濃灰色、外 面灰色~黒色、 断面セビア 胎土 細砂粒を含む 焼成 堅緻
3	环 蓋	口径12.5 器高 5.1	天井部は丸みをもち、わざ かに稜線を有し垂下し口縁 部となる。端部は沈線化さ れているがあまい。	天井部回転ヘラ削り マキアゲ、ミズヒキ成形 ロクロ回転方向は左回り	色調 灰色~黒灰色 胎土 砂粒を多含 焼成 堅緻
4	环 身	口径10.7 受部径 12.2 器高 4.8	底部から体部へ丸みをもつ 受部は外方にのびる。 立ち上りはやや内傾する。	立ち上りはオリコミ手法 ミズヒキ成形 底面は回転ヘラ削り ロクロ回転方向は左回り	色調 内面灰色、外 面灰色~セビア 胎土 砂粒を多含 焼成 堅緻
5	环 蓋	口径13.2 器高 5.0	天井部は丸みをもち、やや にぶい稜線を有し、体部は ややふくらみ口縁部となる。 端部は面があまい。	天井部回転ヘラ削り ミズヒキ成形 内面中央に仕上げナデ ロクロ回転方向は左回り	色調 灰色 胎土 細砂粒を多含 焼成 堅緻
6	环 身	口径13.7 器高 5.2	天井部はやや平坦面を呈し、 にぶい稜線を有し、垂下し 口縁部となる。端部は平坦 面を有する。	天井部回転ヘラ削り ミズヒキ成形 内面中央に同心円状叩き具 の打圧痕、仕上げナデ ロクロ回転方向は左回り	色調 灰色~白灰色 胎土 砂粒を含む 焼成 堅緻



第4~14圖 金子第2号古墳石室出土鐵器実測図(1:2)

番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	整形技法の特徴	備考
第4-13図 7	須恵器 环身	口径13.0 受部径 15.8 器高 5.8	底部から体部へ丸みを有し。 受部はやや外上方にのびる。 立ち上りは内傾し、端部は平坦面を有する。	マキアゲ。ミズヒキ成形 底面回転ヘラ削り 内面中央に同心円状打圧痕、 仕上げナデ ロクロ回転方向は左回り	色調 胎土 焼成 濃灰色～黒灰色 細砂粒を多含 堅緻
8	◆ ◆	口径12.9 受部径 15.4	受部はやや外上方にのびる。 立ち上りは内傾し、端部は平坦面を有する。	ミズヒキ成形 底面回転ヘラ削り	色調 胎土 焼成 灰色 細砂粒を多含 堅緻
9	◆ ◆	高台径 11.6	平底を呈し、外上方に体部はのびる。 底部やや内側に外開きの高台がつく。	ミズヒキ成形 底面ヘラ切り、後ナデ	色調 胎土 焼成 灰色 微砂粒を多含 堅緻
10	◆ 甕	口径20.8	体部は橢円形を呈し、底部は凹む。 口縁部はく字状に外反し、 端部は肥厚する。	ミズヒキ成形 胴部内面同心円状の叩き、 外面平行条線状の叩き	色調 胎土 焼成 灰色～濃灰色 細砂粒を多含 堅緻



第4-15図 金子第2号古墳出土鉄器・石器実測図(2) (1:2)

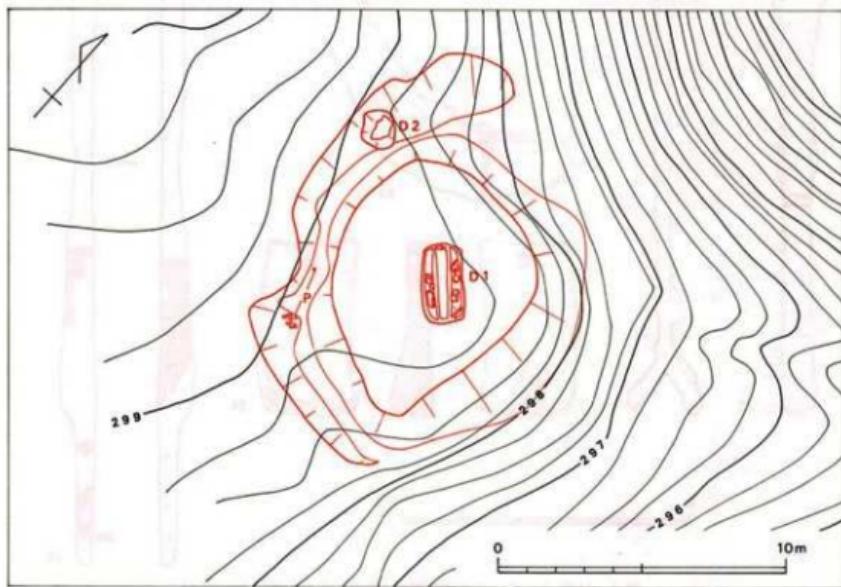
(25のみ縮尺1:4)

鉄製品（第4—14・15図） 刀子（1）は刃部のみで平棟を呈し、残存長10.5cm、厚さ0.4cmである。鉄鎌（2～19）は最も多く出土しており、全て尖根式である。3タイプみられ逆刺が付くもの（2）、片刃のもの（3～10・14）、有茎三角形のもの（11）がある。鎌（20）は刃部が先端部で内湾し、基部の折り返しは刃に直交する。長さ17.9cm、背の厚さ0.5cmである。鉄斧（21）は刃を付けた鉄板の上方を折りまげ、中空の袋部をつくったもので、長さ7.5cm、刃幅4.0cmである。釘（22）は全長20.5cm、刃部長5.9cmである。U字形鋤先（23）は、内側にV字形の溝をもつ。直刀（25）は全長52cm、刃部長41.8cm、平棟で厚さ0.3～0.5cmであり、関部は背関が直で、刃関が段になっており、目釘穴は3孔存在する。刃部には鞘の木目が一部みられる。

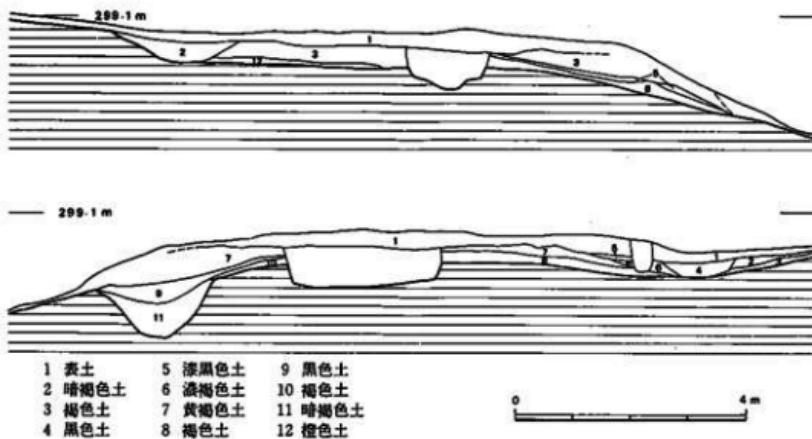
砥石（24）は吊り下げの孔がついており、表裏共よく使用されている。長さ6.2cm、幅3.3cm、厚さ0.9～1.5cmである。

第3号古墳

a. 墳丘（第4—16・17図）



第4-16図 金子第3号古墳々丘実測図（P：土器）（1:200）



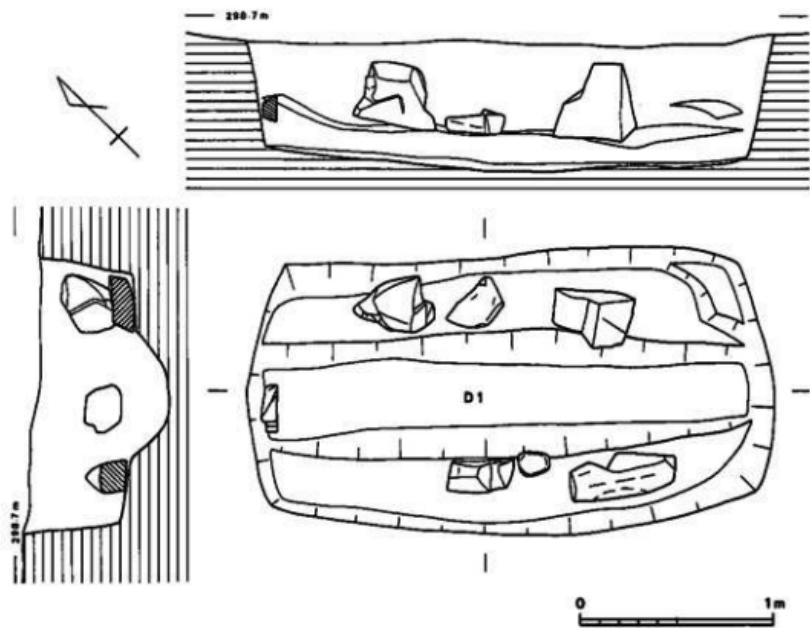
第4-17図 金子第3号古墳々丘土層断面図 (1:100)

本古墳は第2号古墳の南東方向に隣接する。この付近より丘陵尾根が北東方向に延び狭くなり、傾斜がやや急になる。墳頂部の標高は298.9m、周辺水田との比高は約29mである。

古墳は丘陵尾根筋上に築造されており、高所側を削平し平坦面をつくり、幅2.2mの周溝を残す形で墳丘を盛上げている。地山削平の掘方はやや変形している。墳丘は褐色土を中心に黒色土をも用いて2～3層水平に盛上げている。墳丘は円形を呈し、径は9.6～10.3m、高さは南西側周溝底より0.4m、北東側掘より1.2mである。東側周溝底で隅丸方形の浅い土塙を検出した。規模は132×111cm、深さ3～22cmであり、炭・焼土を含んでいた。南西側周溝底より土師器が出土している。また南東部、墳丘下より風倒木によると考えられる円形の土塙を検出した。

b. 内部主体 (第4-18図)

墳丘中央部で主軸を北西—南東方向にとる割竹形木棺を納めた土塙を検出した。土塙は地山面下まで掘込まれている。土塙は側壁部が2段の掘方を呈しており、塙底は断面U字状をなしている。土塙2段目には割石が各々3個存在し、木棺安定のためと考えられる。北西小口部では平石を立った状態で検出し、木棺小口部を封ずるものと考えられる。土塙の規模は、掘方上面で長さ273cm、幅143cm、2段目が幅65cm、深さは2段目までが50cm、塙底までが65cmである。



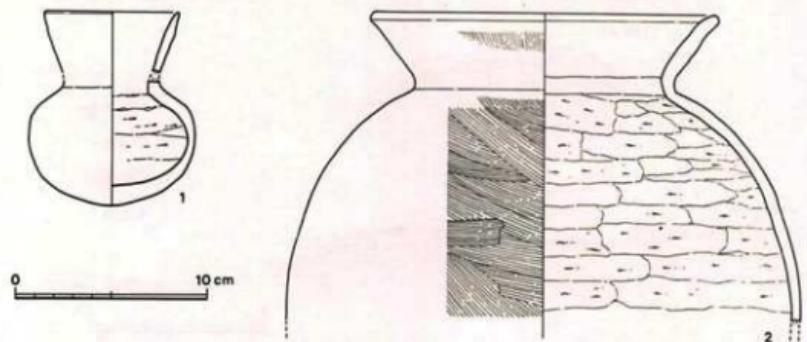
第4-18図 金子第3号古墳主体部実測図 (1:30)

c. 出土遺物

土師器（第4-19図） 小型丸底壺（1）は口径が胴径に比して小さく、大きく開かず梢円に近い胴部が付く。器壁は厚い。壺（2）は胴部がやや長調をなし、「く」の字状に外反する厚い口縁部が付き、端部は丸くおわる。胴部は外面斜方向の刷毛目、内面ヨコ方向のヘラ削りである。

第4-3表 金子第3号古墳出土土器観察表

番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	整形技法の特徴	備考
第4-19図 1	土師器 壺	口径 7.0 胴最大径 8.6 高さ 10.2	胴部はほぼ球形を呈し、口縁部は外上方にのびる。	外面磨滅が著しい 胴部内面ヨコ方向のヘラ削り 器壁厚い	色調 淡黄褐色 胎土 細砂粒を多含 焼成 良好
2	甕	口径 18.1 胴最大径 26.7	胴部はやや長く、口縁部、「く」の字状に外反する。	口縁部ヨコナデ 胴部内面ヨコ方向のヘラ削り、外面斜め、ヨコ方向の刷毛目	色調 黄褐色～淡黄色 胎土 砂粒を多含 焼成 良好

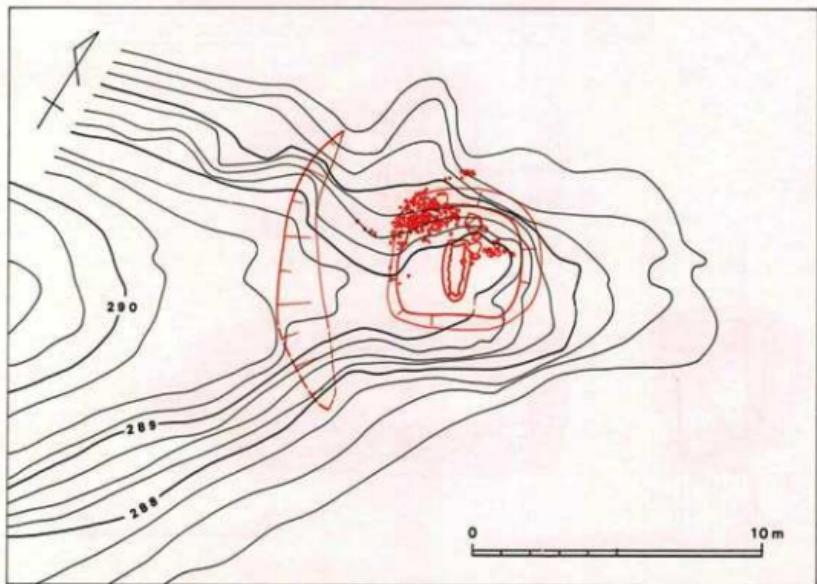


第4-19図 金子第3号古墳出土土器実測図 (1:3)

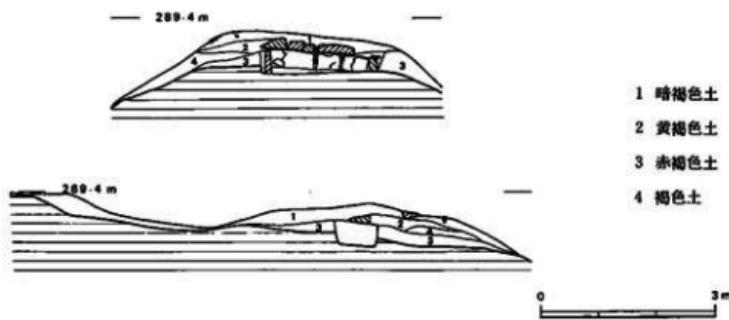
第4号古墳

a. 墳丘 (第4-20・21図)

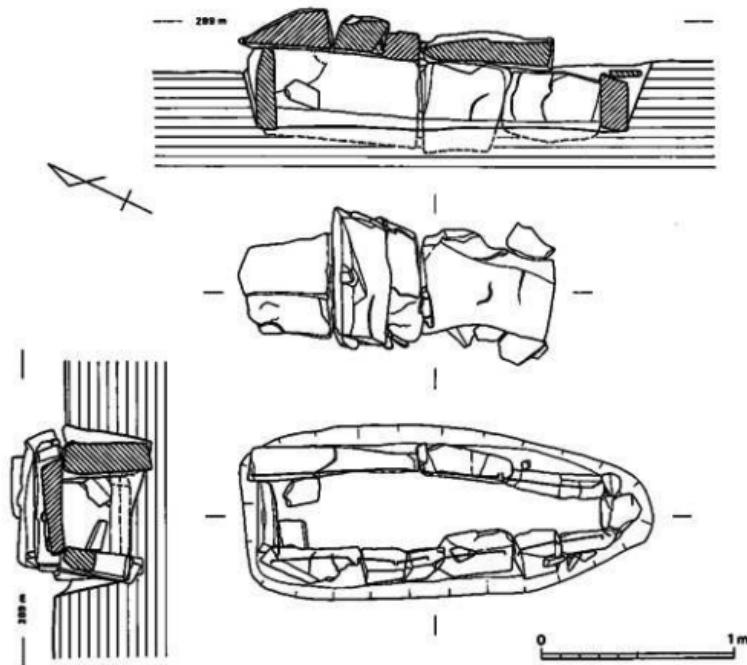
本古墳は第3号古墳から北東方向に伸びた尾根筋上に立地し、第3号古墳との間は約50mである。墳頂部の標高は289.2m、周辺水田との比高は約19mである。



第4-20図 金子第4号古墳々丘実測図 (1:200)



第4-21図 金子第4号古墳ノ丘土層断面図 (1:100)



第4-22図 金子第4号古墳石棺実測図 (1:30)

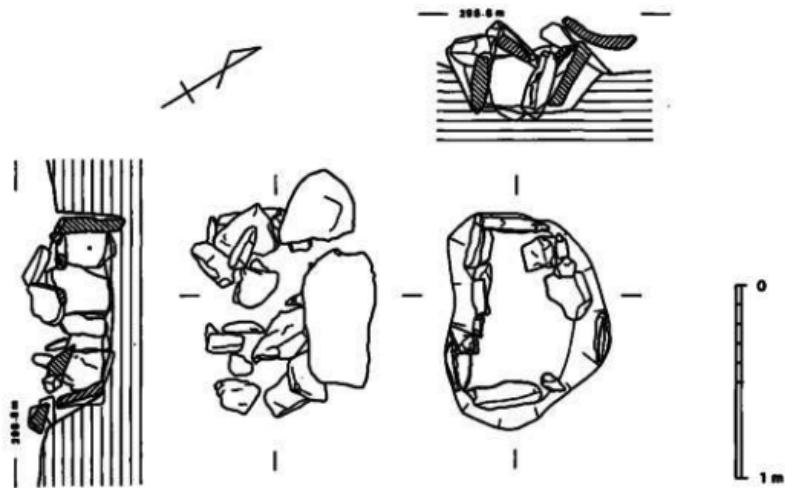
古墳は丘陵尾根筋に築造されており、尾根高所側に直交する幅広い溝を掘り、平坦面をつくり、墳丘は褐色土を2～3層水平に盛土して形造っている。墳形は山道により一部搅乱を受けて不明な点もあるが、隅丸方形に近いプランを呈し、4.9×5.1m、高さは南西側周溝底より50cm、北東側墳丘裾より90cmである。墳丘上で河原石群を検出したが、中世の積石塚の残存物と考えられる。

b. 内部主体（第4—22図）

墳丘中央部で主軸をほぼ北西—南東方向にとり、尾根に直交する箱式石棺を検出した。石棺は盛土後に地山に達する土括を穿ち構築されている。蓋石は4枚残存していたが、元来は5枚又はそれ以上と考えられ、隙間を小石で補強している。側石は平石を横長状に使用し、小口石を挟む型式のものである。北西端に断面V字状に平石が2枚置かれており、枕と考えられる。石棺は内法で長さ168cm、幅は北西端45cm、南東端27cm、高さ30cmである。

第1号箱式石棺（第4—23図）

第2号古墳裾より北東約22mの丘陵傾斜変換線近くにつくられている。石棺の周囲からは盛土・溝・地山削平などの外部施設を検出することができず、自然地形上につ

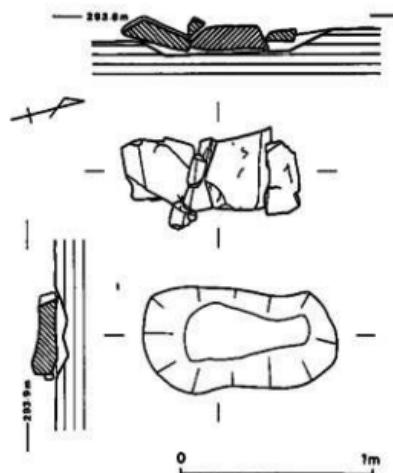


第4-23図 金子古墳群調査区箱式石棺実測図 (1:30)

くられた無墳丘墓と考えられる。石棺は小形のもので、蓋石・北側石は大部分動いており原位置をとどめていない。しかし、周囲に残されているものから推定すると2枚の大きな平石により蓋をし、小石で隙間を封じていたと考えられる。側壁は平石を縦長状に使用し、側石が小口石を挟む型式と考えられる。石棺の内法は長さ77cm、幅25cm前後、高さ25cm位であり、主軸を北西—南東方向にとる。

第1号石蓋土塚墓（第4-24図）

第3号古墳と第4号古墳の間に位置し、第3号古墳裾より北東約17.5mの丘陵尾根筋上に等高線にほぼ平行してつくられてい る。第1号箱式石棺と同様に外部施設を検出することができず、自然地形上につくられた無墳丘墓と考えられる。土塚を地山面に穿ち、平石3枚で蓋をしている。土塚はやや変形した長方形プランを呈し、長さ1.0m、幅55~47cm、深さ7~11cmであり、小形で浅いものである。主軸を北東—南西方向にとっている。



第4-24図 金子古墳群調査区石蓋土塚墓実測図 (1:30)

(3) まとめ

本古墳群は円墳4基と無墳丘の墳墓2基から構成されている小規模な古墳群である。これまでの分布調査では、千代田町は山県郡内に於いては古墳の多い地域であるが、古保利を中心にして志路原川より北側に多く分布し、南側にあたるこの付近は分布が粗な地域であることが明らかになっていた。以上のことから本古墳群の存在意義は大である。

墳丘について 本古墳群の各々の規模は第3号古墳が径10m余で最大で、第1・2号古墳が径8m前後であるが、第4号古墳は径5mと前三者に比して小さい。第1～

3号古墳はほぼ同規模であるが、第4号古墳は規模が小さい。この差は立地・盛土にもいえる。第1～3号古墳は高所の丘陵尾根先端部の平坦面に立地しているが第4号古墳はそれから派生した狭い尾根筋上に立地しており、前者に比べて立地の点で劣っている。第3号古墳は尾根筋上のため地山整形と盛土で高さを有しているが第1・2号古墳は斜面となるため版築により高く盛り上げられている。第4号古墳は地山整形とわずかの盛土で墳丘を築いている。

主体部について 一墳一墓であるが、主体部は全て異っており、第1号古墳は組合式木棺を納めた石蓋土塗、第2号古墳は小形の竪穴式石室、第3号古墳は割竹形木棺の直葬、第4号古墳は箱式石棺である。第1号古墳の主体部は非常に深く、木棺を納めた石蓋土塗ということで特色ある形態を呈する。石蓋土塗墓は現在のところ弥生時代中期に現われ、県内に於いても弥生時代中期後半と考えられる高宮町新迫南遺跡が最も古く、以後數を増すが墳墓群においてそれのみで構成したり中心となったりする例は稀である。^① 古墳の主体部としては東城町中央山第1号古墳、同犬塚第3号古墳の例があるのみであるが、後者は古墳群中従属性的な小古墳と考えられている。以上のように石蓋土塗を主体部とする古墳は数えるほどしかなく、また本例は組合式木棺を安置しており特異な例と言える。第2号古墳の主体部は小形の竪穴式石室といえるものであるが、全県的に分布しており、時期的には5世紀後半～6世紀後半である。^② 構築法は石室基底部では石材を広口横長状(面積)に使用して箱式石棺状に組み、上部では割石を小口積状に2～3段組むのを一般的とする。竪穴式石室の影響の中で生まれたものと考えられるが明らかにされていない。本町内では古保利第44号古墳、塚迫^③第1・2号古墳が同例である。

出土遺物・出土状態について 第4号古墳を除き土器が出土しているが、いずれも棺外からの出土である。第1・2号古墳は須恵器、第3号古墳は土師器のみである。第2号古墳と第1号古墳とでは前者の方が口縁端部がやや甘くなってしまい新しいと考えられる。また、第1号古墳は玉類を中心とするのに対して第2号古墳は鉄器が多く出土しており副葬品に於ける一古墳群中の画期をみることができる。

以上が簡単な本古墳群の特色と考えられ、築造順序は第3号古墳→第1号古墳→第2号古墳→第4号古墳と立地・出土遺物等から推察できる。また谷一つ隔てた塚迫古墳群は出土遺物からみて第2号古墳より新しい時期である。地理的に両古墳群の関係

は十分考えられ、本古墳群から塚迫古墳群へという変遷を考えたい。(桑原隆博)

(注)

- ① 山口県教育委員会『朝田古墳群』Ⅲ 1978年
- 北九州市埋蔵文化財調査会『馬場山遺跡』 1975年
- ② 広島県教育委員会「新迫南遺跡群」「中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(2) 1979年
- ③ 広島県教育委員会「白鳥遺跡」「中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(2) 1979年 石蓋土塚墓8基、箱式石棺2基で構成されている。
- ④ 広島大学文学部考古学研究室「中央山古墳群の発掘調査」 1978年
- ⑤ 犬塚古墳群発掘調査団『犬塚古墳群発掘調査報告書』 1980年
- ⑥ 広島県教育委員会「才谷古墳群」「県営駅家住宅団地造成地内埋蔵文化財発掘調査報告」1976年 中の才谷第4号古墳
広島県教育委員会「月貞寺古墳群」「上四拾貫古墳群」「中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(1) 1978年 中の月貞寺第30号古墳、上四拾貫第10号古墳 等々
- ⑦ 龍岩・古保利埋蔵文化財発掘調査団『龍岩・古保利・上春木』 1976年
- ⑧ 本書掲載

5 塚迫遺跡群

(1) 位置と現状（第5—1図）

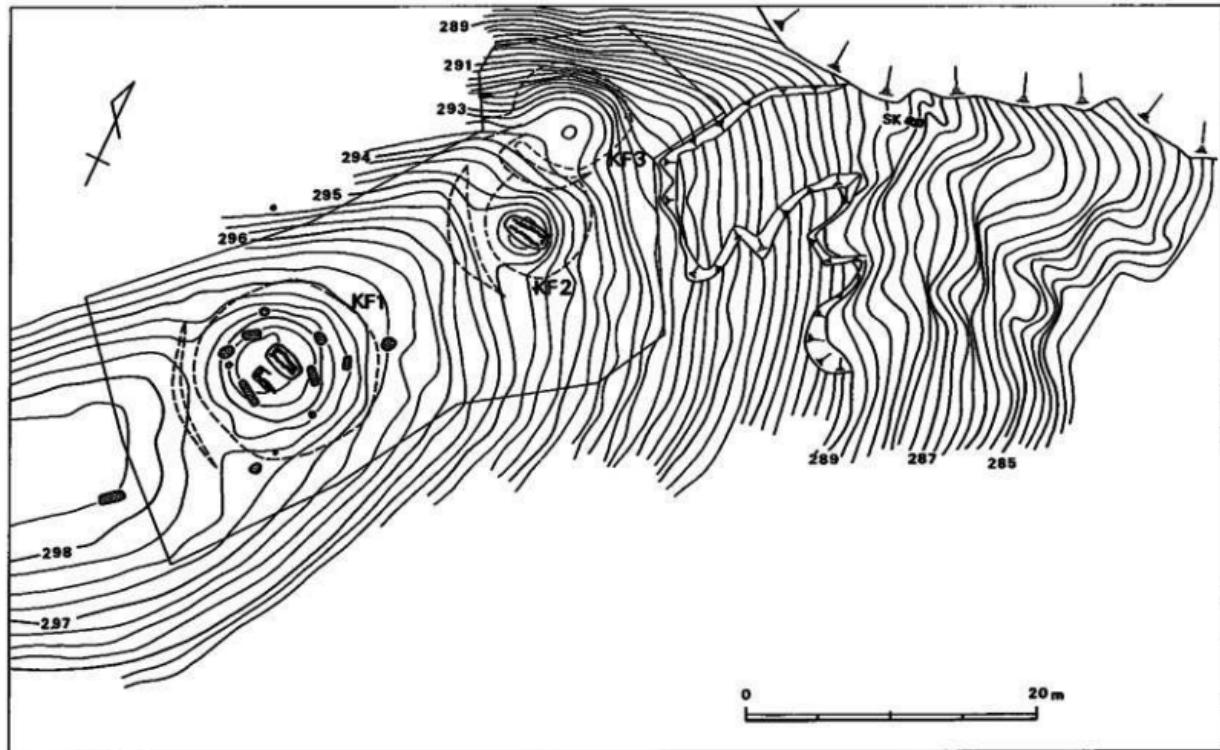
本遺跡群は山県郡千代田町大字丁保余原に所在し、千代田町の中心部、八重・有田・壬生に広がる平地の南側に広がる標高300m～400mの低丘陵の北に向って派生した丘陵尾根先端部に位置する。遺跡は標高287～298m、水田からの比高差20～31mの間に立地する。遺跡の北側には北西から流れてきた志路原川と南から流れてきた冠川とが合流し、流路を東にとり、さらに壬生の街の東側で北から流れてきた可愛川と合流し、これらの河川によって開かれた平地がよこたわっている。

(2) 調査の概要（第5—2図）

当初は古墳3基のみが確認でき、古墳群と考えていた。しかし、調査の結果は第1号古墳々丘下から弥生時代前期の土塙墓8基と土器棺墓6基で構成された集団墓、豊



第5-1図 塚迫遺跡群周辺地形図 (1:2,000)



第5・2図 塚迫遺跡群地形図（K F：古墳、SK：石棺、アミ目：弥生時代墳墓）(1:400)

六式石室2基を内部主体とする第1号古墳、竪穴式石室を内部主体とする第2号古墳、内部主体が明らかでなかった第3号古墳の3基の古墳から成る古墳群、さらに第1号古墳々頂部を利用した中世墳墓（積石塚）、ほぼ同時期と考えられる石棺墓を各々検出し、複合遺跡であることが明らかになった。

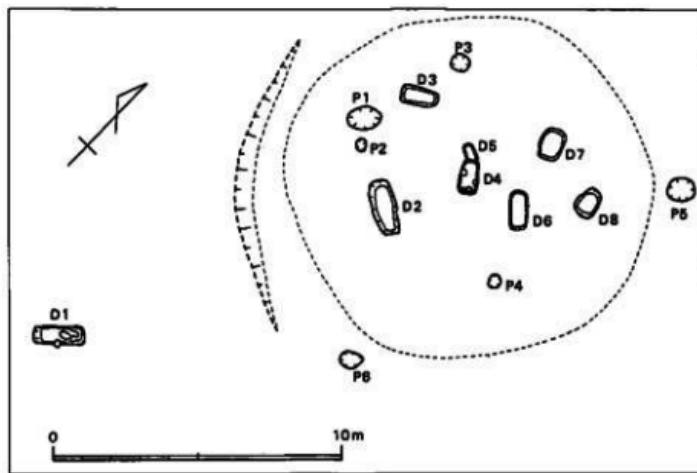
弥生時代前期の墳墓群（第5—3図）

第1号古墳々丘下で検出した土塙墓8基と土器棺墓6基から成る墳墓群であるが、第1号土塙と第6号土器棺墓は第1号古墳々丘外に位置している。第1号古墳周溝及びその周辺では検出できず、よって第1号古墳築造のための地山削平整形のため消滅したものもある可能性が考えられる。

土塙墓

第1号土塙墓（第5—4図）

第1号古墳の周溝の南西方向約6mの所に位置し、尾根主軸に平行してつくられている。土塙は長方形を呈し、長さ182cm、幅60cm、深さ32cmの規模であり、主軸をN49°30' Eにとる。塙底はほぼ平坦面をなすが、南小口の立ち上りはゆるやかである。土塙の北側で塙底よりやや浮いた状態で平石が2枚、北側壁にかかった状態でやや小形



第5—3図 墳追跡弥生時代墳墓群造構配図 (1:200)

の平石が1枚見られた。この3枚の平石は蓋石、又は墓標としての意識を有するものであろうか。また、平石の下から小型の壺が1点出土している。

第2号土塗墓（第5—4図）

第2～8号土塗の7基は第1号古墳々丘下につくられており、各々2m以内離れて位置している。本土塗は中でも最も北側に位置し、尾根主軸に直交してつくられている。第1号土塗との間隔は10.7mである。土塗は西隅で幅広くなるが、長方形を呈し、長さ195cm、幅64～84cm、深さ30～43cmを測る。塗底は西側が深くなり主軸をN62°Wにとる。土塗内には落ち込んだ状態で、長軸中央に平石3枚が並んだ状態で、また北側壁に沿って3個の石が、南側壁に沿って2個の石が見られた。これらは、蓋石、墓標、また木棺を支えるための詰石と考えられる。

第3号土塗墓（第5—4図）

本土塗は尾根主軸に平行につくられており、第2～8号土塗中最も西側に位置する。長方形を呈し、長さ127cm、幅55～63cm、深さ30cmを測り、西側がやや幅広く、塗底は平坦面を呈する。主軸をN60°30' Eにとる。

第4号土塗墓（第5—4図）

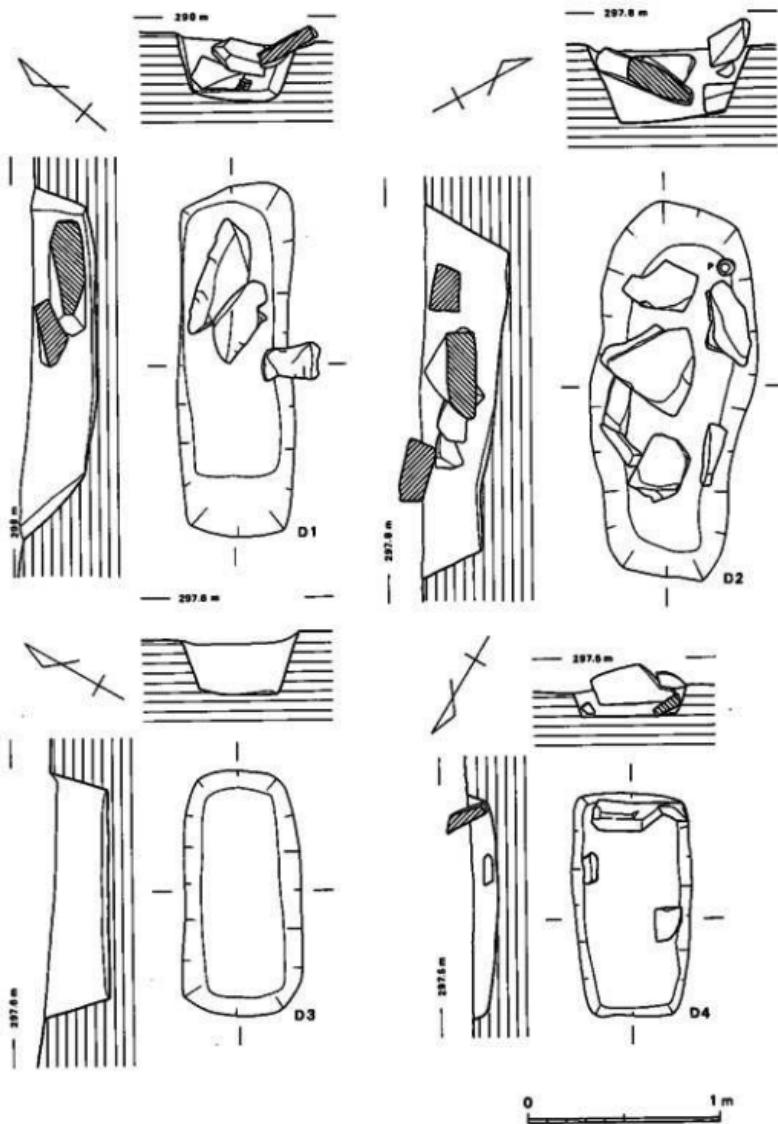
本土塗は墳墓群のほぼ中央に位置し、第5号土塗を切ってつくられており、第6号土塗と近接し並行するようにつくられている。尾根主軸に直交している。土塗は長方形を呈し、長さ115cm、幅60～48cm、深さ10～15cmを測り、塗底はやや丸みをもつ。土塗内では南小口で平石を立て小形の割石1個、両側壁に沿って割石が各々1個見られた。これは木棺の小口及びそれを支える詰石と考えられる。

第5号土塗墓（第5—5図）

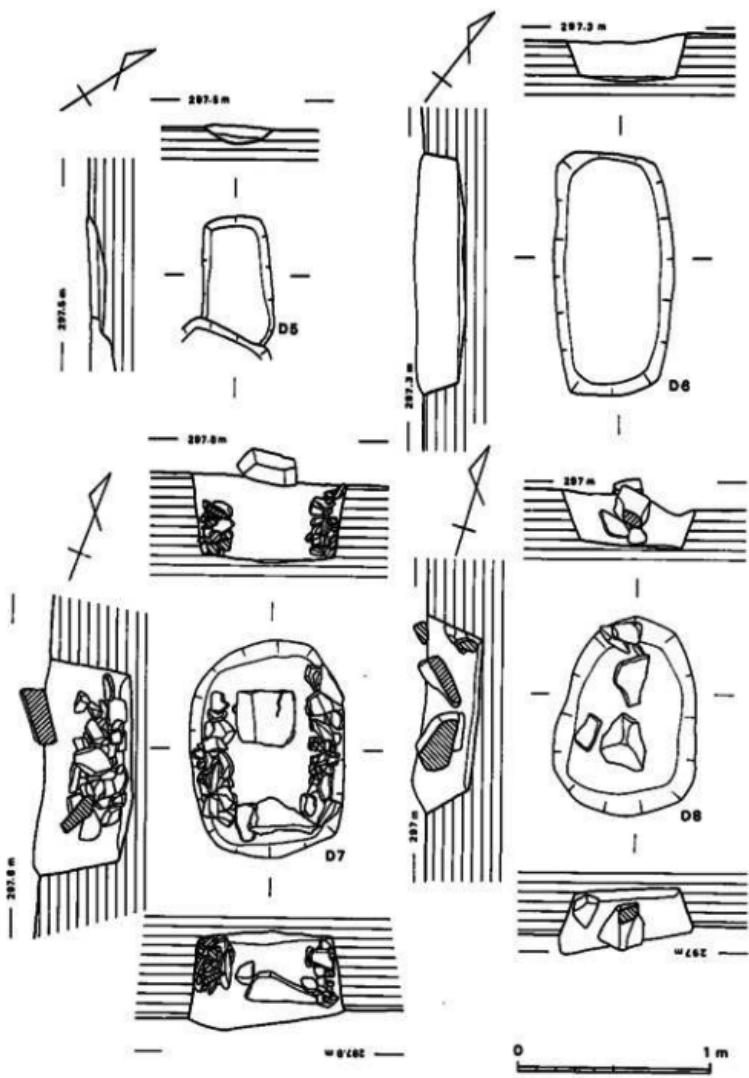
第4号土塗に切られている小形の土塗である。尾根主軸に直交している。長方形を呈し、長さ62cm以上、幅32～38cm、深さ9cmを測り、塗底は中央に凹んでいる。主軸をN57°Wにとる。

第6号土塗墓（第5—5図）

第4号土塗と第8号土塗の中間に位置し、第4号土塗とほぼ平行に並んでいる。尾根主軸に直交し、長方形を呈し、長さ125cm、最大幅62cm、深さ23cmを測り、塗底は中央がやや凹み、平面プランでは中央部が張る形態を呈している。主軸を、N37°30' Wにとる。



第5~4圖 塚道跡土松共測圖(1) (1:30)



第5-5圖 煤渣堆路土底突測圖(2) (1:30)

第7号土塙墓（第5—5図）

第6号土塙の北、第8号土塙の西に位置し、尾根主軸に直交している。隅丸方形を呈し、長さ112cm、幅81cm、深さ42cmを測り、塙底はほぼ平坦面を呈する。主軸はN21°Wにとる。土塙直上に平石1、北小口よりの中央で平石2が塙底より浮いた状態でみられた。土塙両側壁には小形の割石が幅15cm、塙底より高さ30cmで積まれている。前者は墓標及び蓋の重し、後者は木棺との間の詰石と考えられる。

第8号土塙墓（第5—5図）

第2～8号土塙中最も東側に位置しており、尾根主軸に直交してつくられている。楕円形に近い隅丸方形を呈し、長さ103cm、幅42～73cm、深さ22～30cmを測り、南側が幅広く、塙底も南の方が高い。主軸をN16°30'Wにとる。土塙主軸線上には5個の石が、また西側壁に沿って石1個がみられた。墓標及び木棺の蓋・小口・側壁を支えるための詰石と考えられる。

土器棺墓

壺を使用した土器棺墓を計6基検出した。これらは、第2～8号土塙の周囲を囲むような形で認められた。

第1号土器棺墓（第5—6図）

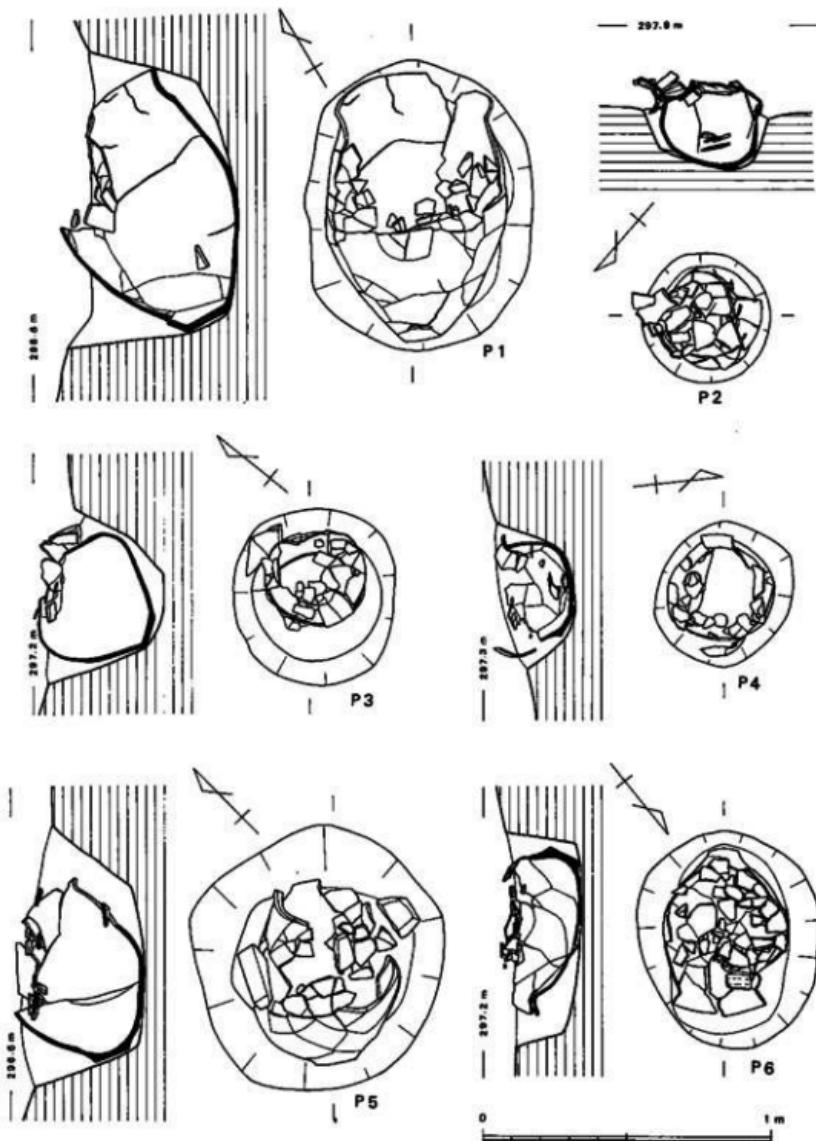
第3号土塙の南側に位置している。大型の壺1個からなる単棺である。長径100cm、短径79cm、深さ39～56cmの楕円形の土塙を穿ち、その中に高さ81.6cm、口径47.6cm、胴最大径67.4cmの壺の口を北に向か、斜位の状態で安置している。主軸をN30°Eにとる。

第2号土器棺墓（第5—6図）

第1号土器棺と第2号土塙との間に位置している。壺を身とし、その蓋として鉢を底部からソケット状に差し込み棺としている。径44cm、深さ20cmの円形の土塙を穿ち、その中に高さ40.4cm、口径16.8cm、胴最大径35.3cmの壺をやや斜めにして入れ、その口に高さ15.4cm、口径22.2cmの鉢を底部から差し込み蓋としている。主軸をN49°Eにとる。

第3号土器棺墓（第5—6図）

第3号土塙の北側に位置している。口縁部を打ち欠いた壺を2個、その口を合わせて棺としている。60×56cm、深さ38cmのやや楕円形の土塙を穿ち、口縁～頸部を欠い



第5~6圖 塚追遺跡土器棺墓実測図 (1:10)

た大型の壺をやや斜めに入れ、それに一部胴部まで欠いた壺をかぶせて蓋としている。蓋となる壺は胴最大径31.2cm、現高20.1cm、身となる壺は胴最大径45.6cm、現高40.2cmである。主軸をN51°Eにとる。

第4号土器棺墓（第5—6図）

第2号土塙の東、第6・8号土塙の南に位置している。壺1個からなる単棺である。径50cm、深さ22cmの円形の土塙を穿ち、その中に高さ39.4cm、口径19.4cm、胴最大径35.4cmの壺を斜めの状態で安置したものである。主軸をN84°Wにとる。

第5号土器棺墓（第5—6図）

墳墓群の最東端に位置し、第1号古墳々丘外につくられている。大型の壺1個からなる単棺である。径86cm、深さ36cmの土塙を穿ち、その中に高さ48.4cm、口径32.8cm、胴最大径50.2cmの壺を斜めの状態で安置したものである。主軸をN45°Eにとる。

第6号土器棺墓（第5—6図）

他の墳墓の南のややはずれ、第1号古墳々丘外に位置し、尾根斜面にあたる。大型の壺1個からなる単棺である。長径75cm、短径62cm、深さ18—23cmの楕円形の土塙を穿ち、その中に高さ53.1cm、口径32.2cm、胴部最大径42.3cmの大型の壺をほぼ横に近い状態で安置したものである。主軸を主軸をN39°Eにとる。

出土遺物（第5—7・8・9図）

すべて、弥生前期の土器であるが、それ自体土器棺として用いられた中型・大型の壺と供獻用の小型土器及び、棺蓋に用いられた小型の鉢がある。

土器棺（第5—7・8図）

(1) 緩やかに外反する口縁をもつ均整のとれた鉢である。口縁部付近の内外面及び底部外面は横方向のヘラ磨きを施し、体部外面には10×9cm程度の黒斑が残る。口径22.2cm、底径6.6cm、器高15.4cmを測る。

(2) 短く開く口縁部に球形の胴部をもつ壺である。頸部は短く直立して、胴部との境近くに削り出し突帯を有する。この削り出し突帯は、2条の沈線文帯の上下をヘラ磨きによって沈線の深さ程度低めて、沈線間を突帯風に浮き上がらせたもので、削り出し突帯としては、退化したものである。胴部上半には、2条の沈線がめぐり、その下方に3条を一単位とする逆「ノ」の字状の文様が施されている。胴部下半には、黒斑が

残り、丹塗りの痕跡と思われる赤色顔料が点々と残存している。調整は内外面とも丁寧なヘラ磨きを行い、特に外面は細かく丁寧である。丹はヘラ磨きの後で塗布されている。淡黄褐色を呈し、焼成良好。口径16.8cm、胴部最大径35.3cm、底径20cm、器高40.4cmを測る。

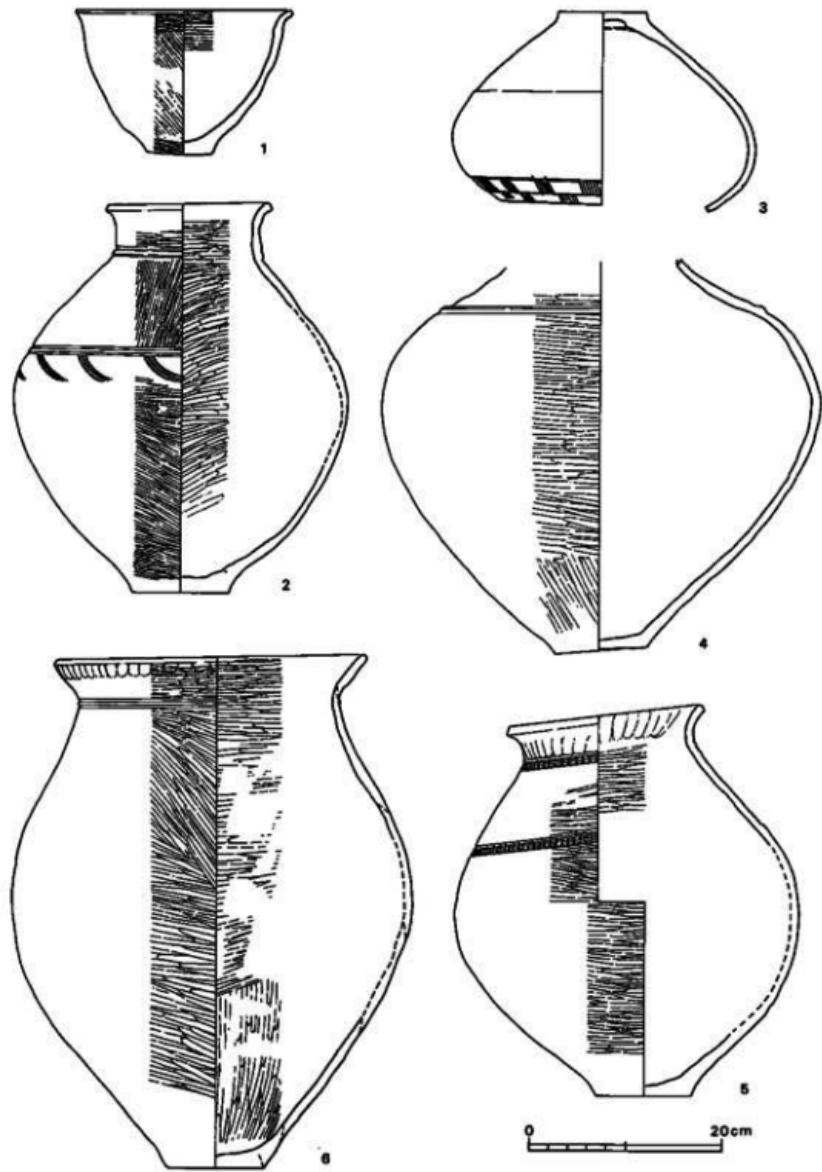
(3) 脇部がやや扁平に張るタイプの壺である。口頸部は、合せ口（覆口）の土器棺に転用されたために欠損している。脇部上半に、現状で3条の沈線文をめぐらしそれぞれの沈線間に5～6条を単位とする斜線文を交互に施す。脇部下半に黒斑を残し、底部付近には指頭圧痕を残す。調整は内外面とも不明瞭ではあるが、外面は縦方向のヘラ磨きのようである。黄褐色を呈し、焼成良好。胴部最大径31.2cm、底径9.2cmを測る。

(4) 脇部最大径が上位に位置するやや肩の張った器形の壺である。3と同様に頸部上半より上方を打ち欠き、3と合せ口の土器棺となる。肩部に断面台形の低い貼り付け突帯が1条めぐり、脇部と頸部の境を明瞭にしている。脇部上半及び下半に、それぞれ相対する黒斑があり、調整はヘラ磨きを主体としている。黄褐色～赤褐色を呈し、焼成は良好。脇部最大径45.6cm、底径9.4cmを測る。

(5) ほぼ球形の脇部に短く開く口縁部がつく壺形土器である。頸部と脇部上半中位に、それぞれ3条の沈線文をめぐらせて、沈線間をヘラ状工具或いは板状工具の先端で刺突して刻目を施している。口頸部内外面に指頭圧痕を残す。調整は内外面とも横方向のヘラ磨きを主体としている。脇部下半底部付近に径10cm程度の黒斑が残り、丹塗りの痕跡が観察される。淡黄褐色～淡赤褐色を呈し、焼成良好。口径19.4cm、脇部最大径35.4cm、底径9.6cm、器高39.4cmを測る。

(6) 脇部が長脇形を呈し短く開く口縁部がつく壺である。頸部に2条の沈線文がめぐる。口縁端部に指頭圧痕を残す。粘土接合部は、すべて内傾の疑口縁を観察できる。調整は全面ヘラ磨きである。淡黄褐色を呈し、焼成良好、口径32.2cm、脇部最大径42.3cm、底径10cm、器高53.1cmを測る。

(7) 脇部が長脇形を呈し短く開く口縁部がつく大型の壺である。口縁端面に1条の沈線文をめぐらせ、口縁部外面には太い指頭圧痕が残る。調整はヘラ磨きを基本とする。脇部上半には、不定形の黒斑が散在する。器形は、成形時に粘土の荷重で傾いている。淡黄褐色を呈し、焼成はやや軟弱である。口径32.8cm、脇部最大径50.2



第5・7圖 塚迫遺跡出土土器実測図 (1) (1:6) (1・2:P2, 3・4:P3, 5:P4, 6:P6)

cm, 底径13.0cm, 器高48.4cmを測る。

(8) 胴部が均整のとれた長胴形を呈し, 緩やかに短く開く口縁部がつく大型の壺である。胴部上半下位に1条の沈線文がめぐり, この部分で若干段を生ずる部分がある。調整はヘラ磨きを主体とするようであるが, 器面が剥落しており詳細は不明である。内外面ともに成形時の指による凹凸が残存している。黄褐色を呈し, 焼成は比較的良好である。口径47.6cm, 胴部最大径67.4cm, 底径19cm, 器高81.6cmを測る。

供献土器（第5—9図）

(9) すんなりした胴部に, 短く開く口縁部がつく小型壺である。頸部に3条, 胴部中央に2条の沈線文帯をめぐらす。胴部下半には, やや不鮮明ではあるが籠描きの弧文が施されている。調整は, 外面はヘラ磨きを主体とし, 内面は指によるナデを主体としている。黄褐色を呈し焼成は良好である。口径7.3cm, 胴部最大径8.9cm, 底径3.6cm, 器高10.5cmを測る。

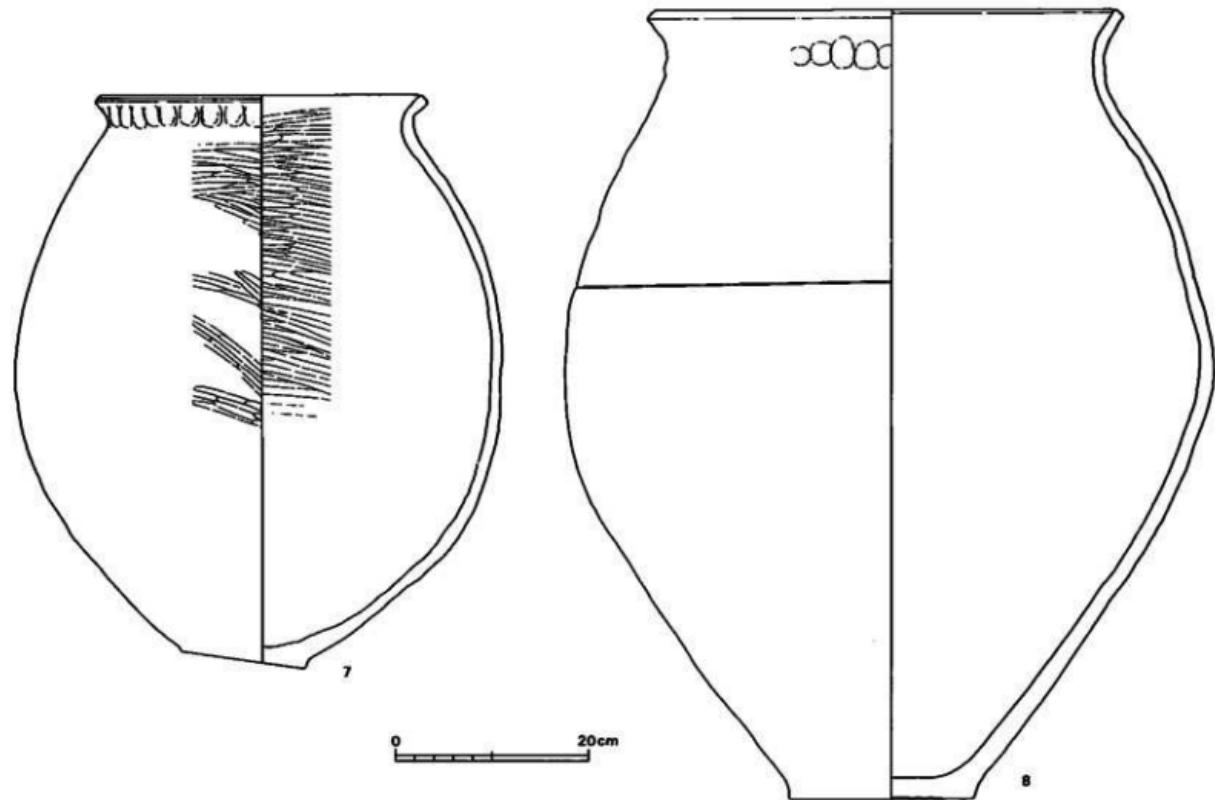
(10) 細くすぼまる頸部に球形に張った胴部をもつ小型壺で, 頸部に4条, 胴部上半に3条の沈線文帯をめぐらす。調整は, 外面をヘラ磨き, 内面を指によるナデを施している。内面胴部上半に, 粘土帶接合時の指おさえの痕跡をのこす。黄褐色を呈し焼成良好。胴部最大径(復元)9.8cmを測る。

(11) 短く開く口縁部に, やや長胴形を呈する胴部がつくと考えられる小型壺である。胴部上半に4条の沈線文帯がめぐる。調整はヘラ磨きを主体とするが, 内面頸部以下は指頭圧痕をのこす。暗茶褐色を呈し焼成良好。口径8.2cm, 胴部最大径(復元)11.2cmを測る。

(12) (11)と同様の器形を呈すると思われる小型壺で, 胴部上半に3条の沈線文帯をめぐらせた後, 沈線間に雑な斜格子文を施している。木葉文の変形とも考えられる。調整は, 外面はヘラ磨き, 内面は指ナデを主体とする。淡黄褐色を呈し焼成良好。

(13) 小型壺の口縁部破片で, 頸部から上方がやや強く外反する。破面は内傾の疑口縁を呈し, この部分に刷毛目調整の痕跡をのこす。黄褐色を呈し焼成良好。口径(復元)7.6cmを測る。

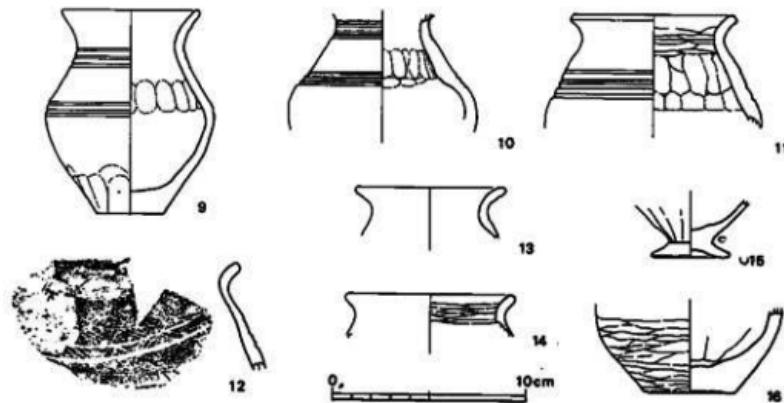
(14) (13)と同様の口縁部破片であるが, 13に比べて頸部より上方の外反度がやや緩やかである。やはり破面は, 内傾の疑口縁を呈する。淡黄褐色を呈し焼成良好。口径(復元)を測る。



第5・8図 塚迫遺跡出土土器実測図 (2) (1:6) (7:P5, 8:P1)

(15) 小型の壺或いは鉢の底部破片と考えられるもので、強く外方にふんばる上げ底である。前期土器としてはやや奇異な形状を呈するものである。黄褐色を呈し、胎土焼成とも他の前期土器と同様である。

(16) 小型壺の底部と考えられるもので、やや上げ底風の平底である。調整は外面は丁寧なヘラ磨きを施す。黄褐色を呈し焼成良好。



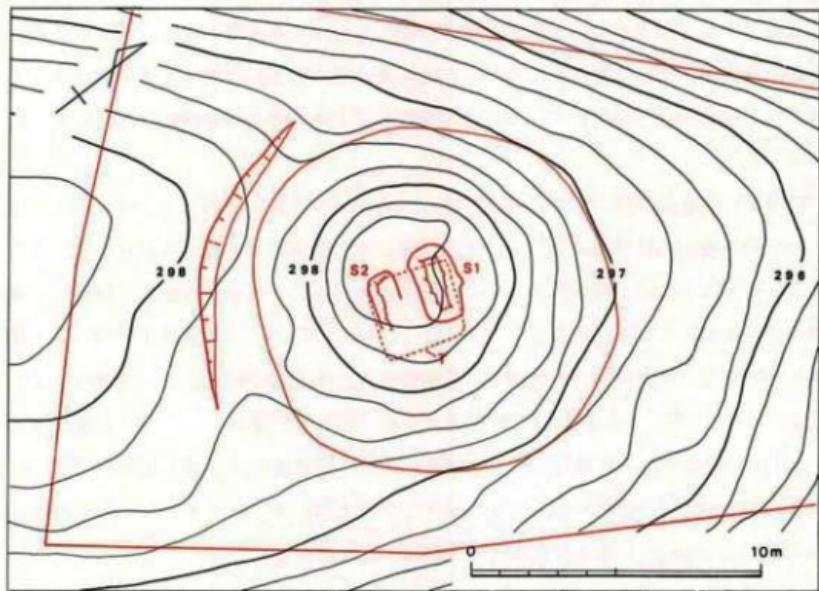
第5-9図 塚追遺跡出土土器実測図 (3) (1:3)

古墳

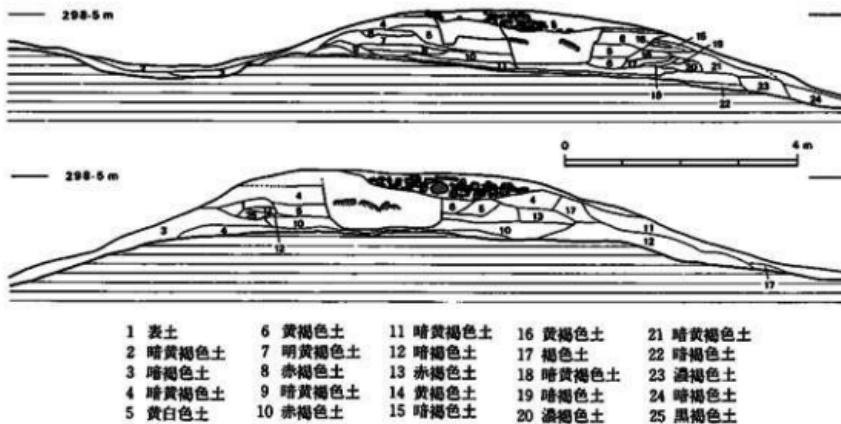
第1号古墳

a. 墳丘 (第5-10・11図)

本古墳は古墳群中最高所に位置し、旧地形自体も丘陵の平坦面をなしていたものと考えられる。墳頂部の標高は298.7mである。墳丘は丘陵尾根の高所側に直交する溝を掘り、地山を削平整形して円形の基底部を造り出し盛土を行っている。盛土は中央部に向ってやや傾斜をもたせて褐色土を4層前後に水平に版築している。主体部を構築するための土塗は盛土後に穿たれており、最下層の盛土1層を残すのみで地山面まで達していない。墳丘は円形を呈し、規模は径11.5~12.5m、高さが北側周溝底面より1.2m、南側墳丘裾より1.6mである。周溝は幅3.0m、深さ30cmである。墳頂部には中世の積石塚がつくられており、そのため墳丘・主体部の一部が破壊されている。



第5-10図 塚追第1号古墳々丘実測図 (S : 石室, T : 積石塚) (1 : 200)



第5-11図 塚追第1号古墳々丘土層断面図 (1:100)

b. 内部主体 (第5-12図)

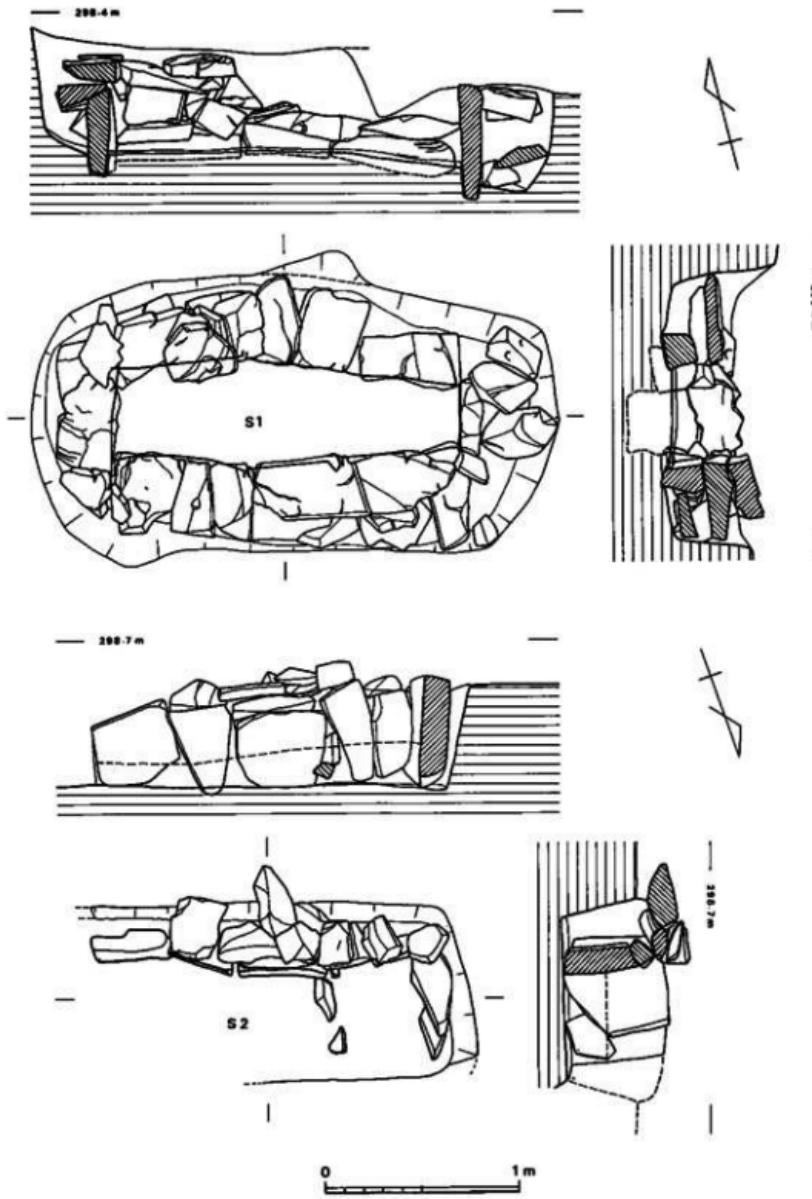
主体部は箱式石棺状の竪穴式石室が2基あり、北西—南東に主軸をとり、平行につくられている。北側のものを第1主体、南側のものを第2主体とよぶ。第2主体の方が第1主体より先に構築されており、石室構築のための土塙は第1主体の方が第2主体よりも約40cm深く穿たれている。そのため第1主体の方が残存状態は良好であった。

第1主体

墳頂部に隅丸長方形を呈する長さ272cm、幅145cm、深さ50cmの土塙を穿ち箱式石棺状の小形の竪穴式石室を構築している。塙底には石を安定させるための穴が穿たれている。石室は小口部が板状の石を立て、西側はその上に平石を小口積みに2枚重ね、東側は中世墳墓により上面が露出していたため明らかでない。側壁は1段目は直方体の比較的安定した大形の石を使用し、北壁は3枚、南壁は4枚である。側壁は両側とも3~4段、平石を小口積みにして石の大きさに合わせて使用している。石室の規模は内法で長さ180cm、幅は東端32cm、中央55cm、西端47cm、高さ45cm以上と考えられる。わずかに洞が張るもので、西に頭をおいたものと考えられる。天井石は1枚も残存していなかった。

第2主体

墳頂部に土塙を穿ち箱式石棺状の竪穴式石室を構築したものであるが、中世墳墓により半分以上が破壊されており全容は不明である。土塙は長方形を呈し、長さ200cm

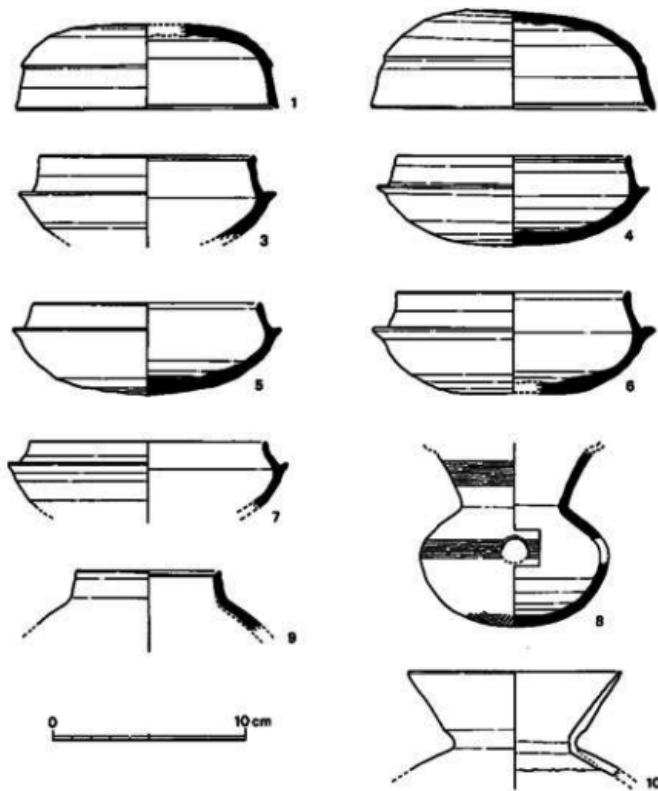


第5-12圖 離追第1號古墳第1·2號石室測量圖 (1:30)

以上、幅90cm以上、深さ35cm以上と考えられる。石室は小口・側壁とも一面ずつしか残存していなかった。小口部は平石を1枚立てそれを小さな石で補強し、側壁は1段目の石として平石を縦長状に使用し、小さな平石をその上に1~3段小口積みにしている。また床面上に石が2個みられた。石室の規模は内法で長さ167cm以上、幅40cm以上、高さ35cm以上と考えられる。

c. 出土遺物（第5—13図）

須恵器・土師器が主体部周辺・周溝内等から出土しているが、共に主体部に供獻されていたものと考えられる。



第5-13図 塚原第1号古墳出土土器実測図 (1:3)

須恵器

坏蓋, 坏身, 足, 盖がある

坏蓋 2タイプみられ、天井部は平坦面を呈し、体部と口縁部との接線が明瞭で口縁部がほぼ垂下し、端部に平坦面を有するもの(1)と全体に丸みをもち体部と口縁部との接線があまくない、口縁端部が丸くおわるもの(2)とがある。

坏身 底部から体部にかけて丸みを有し、ヘラ削りがいねいに行われているが、立ち上り部によって分けると、やや内傾するがほぼ垂直に立ち上り端部が平坦面をもつておわるもの(3)、端部が丸くおわるもの(4~7)とがある。後者はさらに立ち上り部が長いもの(4・6)とやや短く内傾のつよいもの(5・7)とに分かれる。

土師器

蓋(10) 刷部から短い頸部を有し二重口縁状に開く口縁をもつものである。

第5-1表 毎造第1号古墳出土土器調査表

番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	整形技法の特徴	備考
第5-13回 1	須恵器 坏蓋	口径 13.6 器高 4.3	天井部は平坦面を呈し、ややに接線を有し、垂下し口縁部となる。端部は平坦面を呈する。	天井部回転ヘラ削り ミズヒキ成形 ロクロ回転方向は左回り	色調 錆灰色 胎土 粗砂粒を多含 焼成 堅緻
2	* *	口径 13.6 器高 5.0	天井部は丸みを有し、わずかに接線を有し開いて口縁部となる。端部は丸く、内面にわずかに段をもつ。	天井部回転ヘラ削り ミズヒキ成形 内面中央に同心円状の打圧痕 ロクロ回転方向は右回り	色調 内面灰色、外側 錆灰色 胎土 粗砂粒を多含 焼成 堅緻
3	坏身	口径 11.2 受部径 13.4	体部は丸みを有し、受部は外方にのびる。 立ち上りはやや内傾し、端部は平坦面を呈する。	天井部回転ヘラ削り 底面ヘラ削り ロクロ回転方向は左回り	色調 灰色 胎土 砂粒を含む 焼成 堅緻
4	* *	口径 12.2 受部径 14.1 器高 4.6	底部から体部へ丸みを呈し、受部は外方にのびる。 立ち上りはやや内傾する。	ミズヒキ成形 底面回転ヘラ削り 内面中央に仕上げナデ	色調 灰色 胎土 砂粒を含む 焼成 堅緻 外面に自然釉付着
5	* *	口径 11.9 受部径 14.0 器高 4.7	底部から体部へ丸みを呈し、受部は外方にのびる。 立ち上りは内傾する。	ミズヒキ成形 底面回転ヘラ削り 内面中央に仕上げナデ ロクロ回転方向は左回り	色調 黒灰色~灰色 胎土 砂粒を多含 焼成 堅緻

番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	整形技法の特徴	備考
6	須恵器 坪身	口径 12.1 受部径 14.6 器高 5.2	底部は平底を呈し、体部は丸みを有し、受部は外方にのびる。 立ち上りは内傾する。	ミズヒキ成形 底面回転ヘラ削り ロクロ回転方向は左回り	色調 灰色 胎土 精緻 焼成 堅緻
7	◆ ◆	口径 12.2 受部径 14.4	体部は丸みをもち、受部は外上方にのびる。 立ち上りは内傾する。	ミズヒキ成形 底面回転ヘラ削り ロクロ回転方向は右回り	色調 内面濃灰色、外 面灰～濃灰色 胎土 微砂粒を多含 焼成 堅緻
8	◆ 魁	胴部最大径 9.7	胴部はやや肩が張り格円形 を呈し、く字状に外反して 開き口縁部となる	腹部～胴部中位カキ目、胴部 のカキ目は底面からのナデ で一部消去 底面平行条線状の叩き	色調 黒灰色～濃灰色 胎土 精緻 焼成 堅緻
9	◆ 壺	口径 7.4	腹部から口縁部へと上にの びる短い頸部を有する。 端部は内傾する平坦面を呈 する。	ミズヒキ成形	色調 灰色 胎土 微砂粒を多含 焼成 堅緻
10	土師器 壺	口径 11.1	腹部から短い頸部を有し、段 をなして口縁部となり大き く聞く。端部は内厚する。	ヨコナデ	色調 黄褐色 胎土 細密 焼成 良好

第2号古墳

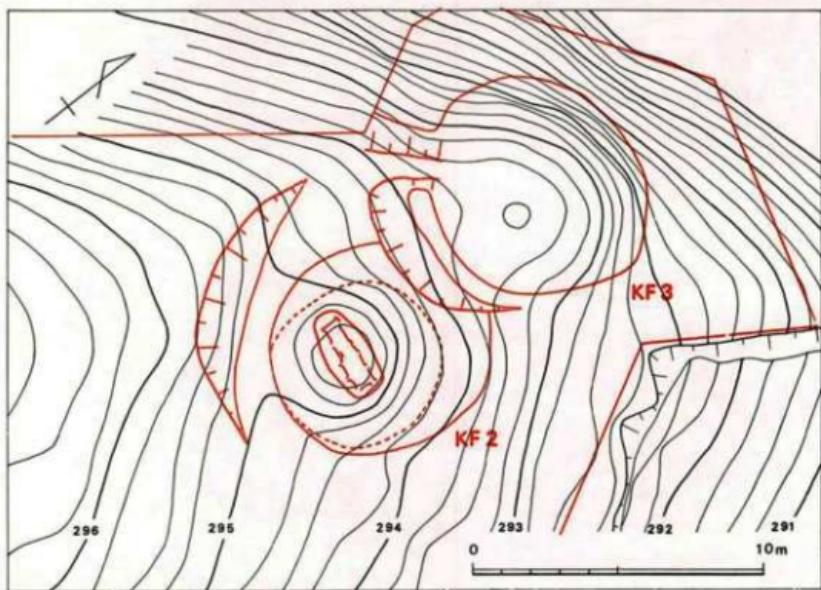
a. 墳丘（第5—14・15図）

第1号古墳の北東約10mの位置にある。本古墳々頂部の標高は約295.7mである。古墳は丘陵尾根筋上に高所側を深く地山を削平整形して平坦面をつくり、盛土を行い墳丘を築造している。盛土は4層に水平に版築し墳丘中央部を造り、その上に全体をおおって墳丘としている。古墳は円形を呈し、径7.0m、高さは背面周溝底より0.9m、北東墳裾より2.1mである。古墳背面には古墳築造のための地山削平により幅1.6mで浅い周溝がみられる。主体部の竪穴式石室構築のための土塙は盛土内に掘られている。

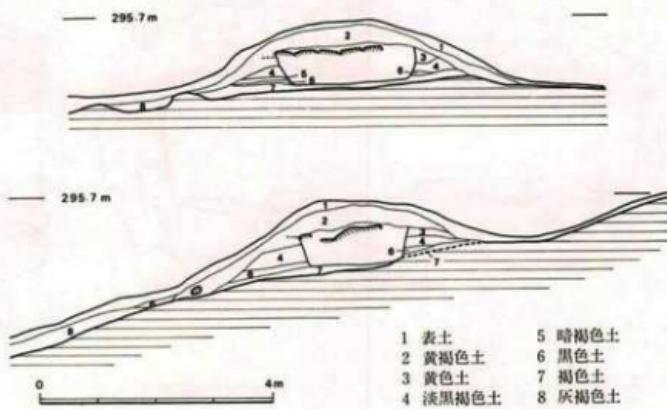
b. 内部主体（第5—16図）

主体部は箱式石棺状を呈する竪穴式石室である。小口部は板石を立て、その上に板石を小口面を内側にして積んでいる。東小口部は1枚、西小口部は2枚並べている。側壁は長方体の石を横長広口状、板石を立てたりして第1段目の石は出来るだけ広い面を用い高さをとるようにしている。その上に2段を基本として板石小口積み状としている。石室の控え積みは部分的に割石を使用して行っている。蓋石は大形平石7枚を中心として小形の石でその間を補強している。石室の規模は内法で長さ244cm、幅が東

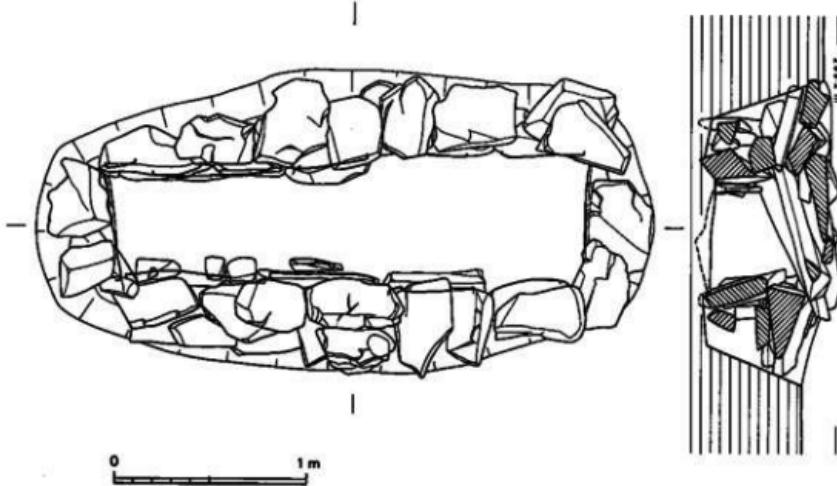
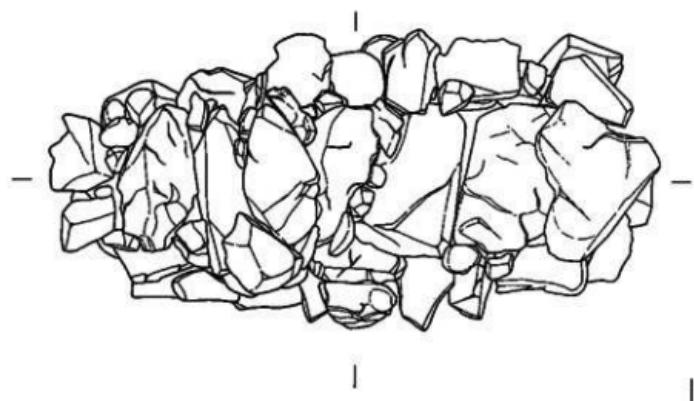
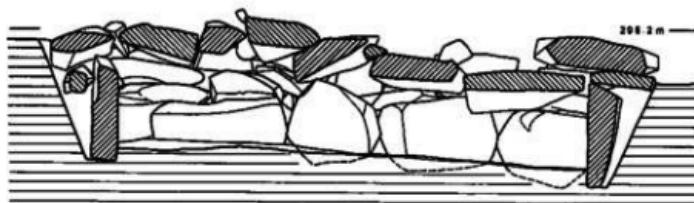
端で64cm、西端で49cm、高さ40cm余である。石室構築のための土塗は長さ320cm、幅156cm、深さ50cm前後であり、石を立て安定させるための小穴が掘られている。



第5-14図 塚迫第2・3号古墳々丘実測図(1:200)



第5-15図 塚迫第2号古墳々丘土層断面図(1:100)



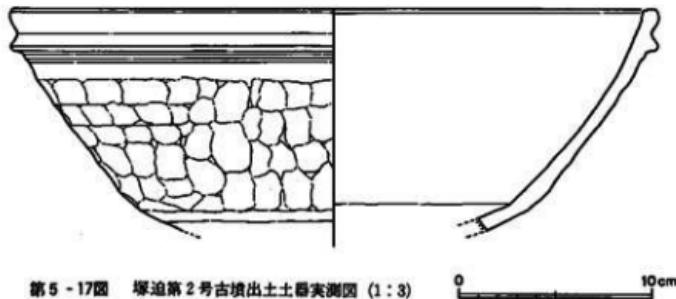
第5~16圖 爆追第2号古墳石室実測図 (1:30)

c. 出土遺物

本古墳とは直接的に関係ないが、土師質土器、古銭が出土している。

土師質土器（第5—17図） 口縁部につばを有する鍋である。

古銭 寛永通宝である。



第5-17図 塚迫第2号古墳出土土器実測図 (1:3)

0

10cm

第5-2表 塚迫第2号古墳出土土器観察表

番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	整形技法の特徴	備考
第5-17図	土師質 土器 鍋	口径 33.4	やや内溝するが大きく開き、口縁部下につばを有する。端部は平坦面を呈する。	口縁部ヨコナデ 腹部内面刷毛状工具で横にナデつけ、外面押えこみと横のナデつけ。	色調 黄褐色～灰色 胎土 微砂粒を多含 焼成 良好 外面にスス付着

第3号古墳

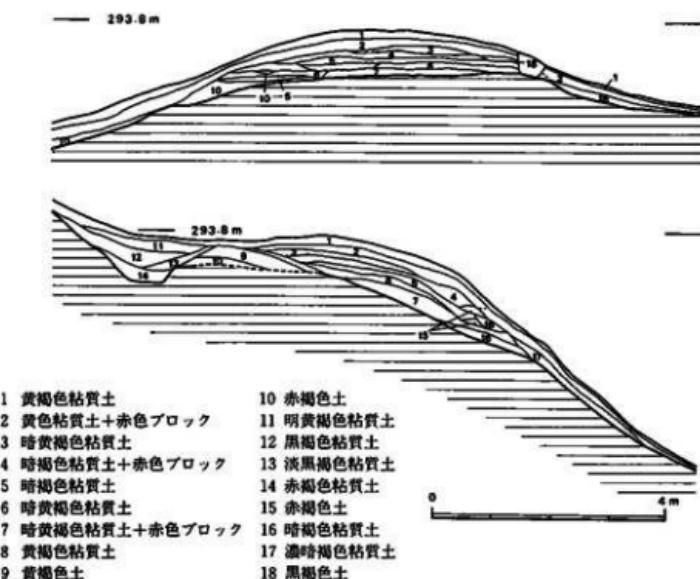
a. 墳丘（第5—14・18図）

本古墳は古墳群中最低位置に築造されており、丘陵先端部の傾斜変換点にあたり、墳頂部の標高291.8mである。古墳は第2号古墳の北側に位置し、一部周溝により第2号古墳々丘裾を切っている。墳丘は丘陵の地山を削平整形して若干の台状を呈する平坦面を造り出し、その上に褐色土を水平に7層盛土している。斜面側は低い方から盛土を行い平坦面をまず造り、それから盛上げている。墳丘は一部第2号古墳の盛土をそのまま利用している。第2号古墳との間には周溝を有し、幅1.2mで断面箱

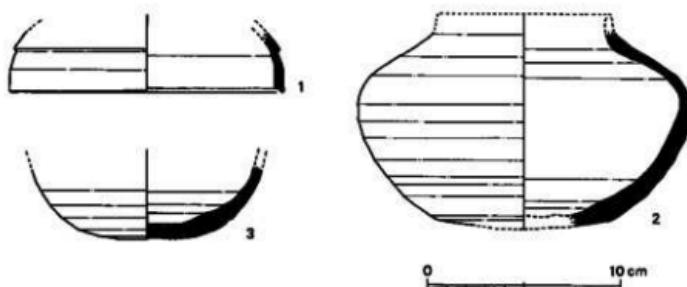
掘状を呈し比較的深い。また墳丘南西側には幅90cmの陸橋部を有している。古墳は円形を呈し、径7.0~8.0m、高さは周溝底より1.0m、北側墳丘裾より2.6mである。主体部は明らかにできなかった。

c. 出土遺物

須恵器（第5—19図） 坯蓋・壺が出土した。



第5-18図 塚追第3号古墳々丘土層断面図 (1:100)



第5-19図 塚追第3号古墳出土土器実測図 (1:3)

第5-3表 塚追第3号古墳出土土器観察表

番号	器種	法寸(cm)	形態の特徴	整形技法の特徴	備考
第5-19図 1	須恵器 环 蓋	口径 14.1	縁部はややあまいが、垂下しややふくれる体部を有し口縁部となる。端部は平坦面を呈する。	ミズヒキ成形	色調 灰色 胎土 微砂粒を含む 焼成 堅緻
2	* 蓋	周最大径 17.1	底部はやや平底を呈し、側部は肩が張り扁球形を呈す。	ミズヒキ成形 底面回転ヘラ削り ロクロ回転方向は右回り	色調 灰色 胎土 微砂粒を多含 焼成 堅緻
3	* 蓋?		丸底を呈する。	底面回転ヘラ削り ミズヒキ成形 ロクロ回転方向は右回り	色調 淡灰色 胎土 微砂粒を多含 焼成 堅緻

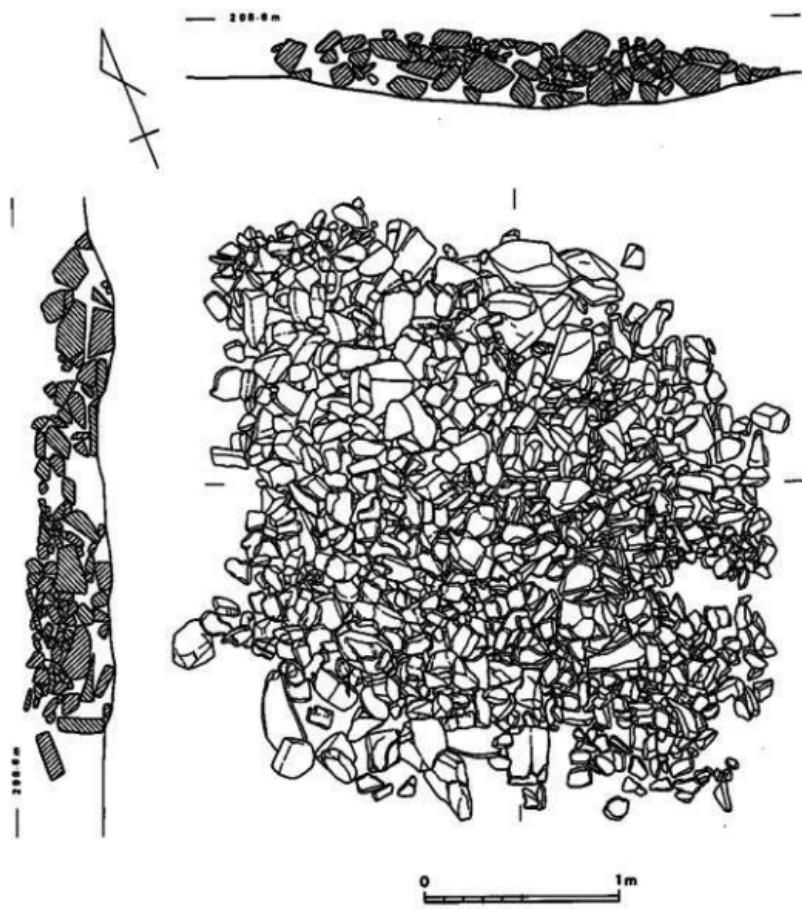
中世墳墓

積石塚（第5-20図）

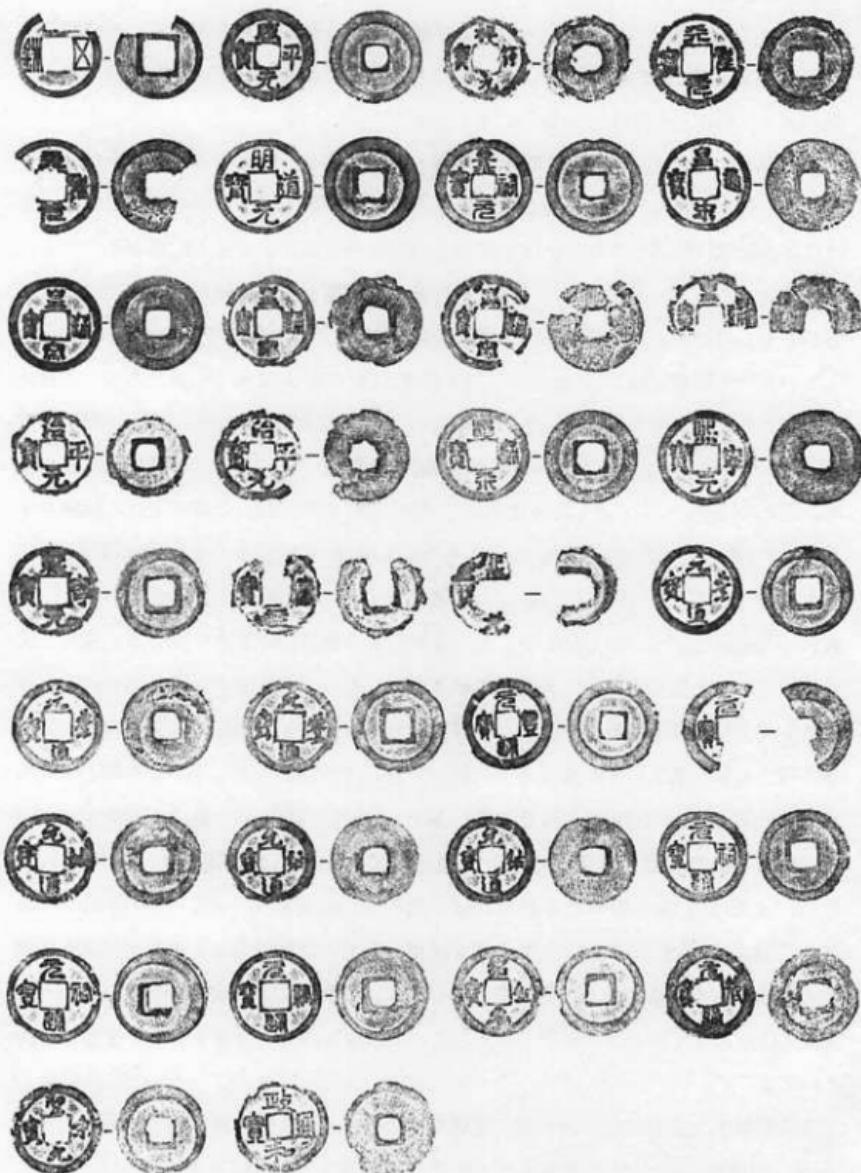
第1号古墳々頂部を利用してつくられている。墳頂部を削平して平坦面をつくり、方形に石を積んでいる。石の積み方に規則性はみられないが比較的大形の石を縁辺に並べてその内側に大小の石を積みあげている。方形を呈し、南北3.0m、東西2.9m、高さ30~40cmである。主体部としての下部構造は検出できなかった。また積石塚間から古銭34枚（第5-21図）が出土している。

石棺

古墳群の位置する丘陵尾根平坦面がやや傾斜を増し下降する傾斜面の標高 287.5m の地点、第1号古墳の北東方向約47mの所に位置する。石棺は外部施設をもたず、地山に土塗を穿ち構築されていたものと推定されるが、急斜面のためかなり石が露出し、一部壊れていた。主軸はほぼ東西にとる。蓋石は3枚であるが、中央の石は丸石で厚く、墓標としての意識があったのかもしれない。東側小口部は厚い長方体の石を横にし、西側小口部は平石を立て、石をのせて2段としている。側壁は北側は横長状に2段石を積み、南側は大形の石を使用し1段である。出土遺物はなく時期は明らかでないが、古墳時代以降の新しい時期の石棺墓と考えられる。



第5-20圖 塚迫横石塀実測図 (1:30)



第5-21圖 塚迫橫石塚出土古錢拓影 (2:3)

(3) まとめ

本遺跡は弥生時代・古墳時代・中世の3期にわたる墓地であるが、各々の時期の中でも単期間にのみ使用されている。中でも弥生時代前期の墳墓は県内に於て稀なものである。以下これを中心に述べてまとめとしたい。

広島県内に於て弥生時代前期の土塚墓・土器棺墓から成る集団墓が明らかになつたのは初めてである。土塚墓は8基検出したが、第1号土塚墓がやや離れている以外はほぼ等間隔に位置している。尾根主軸との関係では第1・3号土塚墓が平行する以外は直交している。平面プランでは第7・8号土塚墓がやや橢円形を呈する以外は長方形を呈している。規模では第1・2号土塚墓が長さ190cm前後でやや大形、第3・4・6～8号土塚墓が長さ120cm前後、第5号土塚墓が長さ62cmで小形である。土塚内の施設としては、全く何もないもの(第3・5・6号土塚墓)、土塚の直上・壁に石を有するもの(第1・2・4・7・8号土塚墓)の2形態がみられる。後者は割石が数個のみのもの(第1・2・4・8号土塚墓)、壁に小石をていねいに積み上げた状態を呈するもの(第7号土塚墓)とがある。これらの石は墓標、木棺蓋のおさえ、木棺側板、小口板を支える裏込石と考えられる。出土遺物としては、第1号土塚墓の石下より完形の小型壺が出土しているほか、土塚墓周辺より土器片が出土している。完形、又は破壊された土器が各々の土塚墓に供獻されていたものと考えられる。以上のことから第1号土塚墓は本墳墓群中特別な位置にあった者、第4号土塚墓と第6号土塚墓、第7号土塚墓と第8号土塚墓は各々対置して何等かの関係を有していたものと考えられる。土器棺墓は壺棺墓6基であり、第2・3号土器棺墓が蓋に土器を用いている以外は单棺で木蓋と考えられる。配置としては土塚墓群を囲むように周囲にみられ、また大型壺を用いた3基はほぼ三角形状に位置している。この時期の土器としては北九州地方以外で大型の壺を使用したものは稀である。また土塚墓と土器棺の構成からなる墳墓群も特異なものといえる。本例は芸北地域に於て早い段階から農耕文化が入っていたことを示すとともに、この段階の集団を考える上で重要な資料といえる。

本墳墓群出土土器には日常容器が埋葬用に転用されたために種々の形態のものがあるが、時期的には大型の壺形土器が出現していること、器形が長胴形を呈し、すんなりした形状のものが主体をなし、施文技法も、沈線文技法を主体としていること等

から考えて、前期でも後半期に位置づけることができる。可愛川上流域には、本遺跡の他に前期土器を出土する遺跡として、千代田町川井遺跡^①、大朝町宮迫遺跡、洞泉寺遺跡、天盤門別神社遺跡・横路遺跡等の存在が知られているが、横路遺跡を除いて、確実に前期前半に比定できるものではなく、前期後半の時期に、可愛川及びその支流を望む低丘陵上に遺跡が拡散したこと示している。このことは遺跡が可愛川上流域に農耕集落が拡散していく時期の墓制の在り方や、集落の規模を知る上で格好の資料を提供したと言えよう。

古墳は丘陵先端部につくられた小形円墳である。中でも第1号古墳が良好な地を占め最大のものである。主体部は第1号古墳が2基、第2号古墳が1基で共に箱式石棺状をした竪穴式石室である。出土遺物としては須恵器がある。内部主体・須恵器出土状態ともに時期・地域の一般的在り方を示している。3基の古墳の築造順位は第1号古墳→第2号古墳→第3号古墳である。本古墳群は谷一つ隔てた金子古墳群よりやや遅れて築造されており、金子古墳群→塚迫古墳群へという関係としてとらえたい。この地域の小首長墓と考えられる。

(桑原隆博、伊藤 実)

(注)

① 龍岩・古保利埋蔵文化財発掘調査団「龍岩・古保利・上春木」1976年

② 小田正明「大朝町の原始・古代」「大朝町史」上巻 1978年

③ 1981年8月～9月 横路遺跡発掘調査団により発掘調査

6 別所第2号古墳

(1) 位置と現状

本古墳は山県郡千代田町大字本地に所在する。千代田町内の南西部にあたり、可愛川支流の冠川西側の、北に向って延びた丘陵尾根先端部のやや西斜面に立地している。調査前に於ける墳頂部の標高は345.8mであり、周辺水田からの比高は26mである。

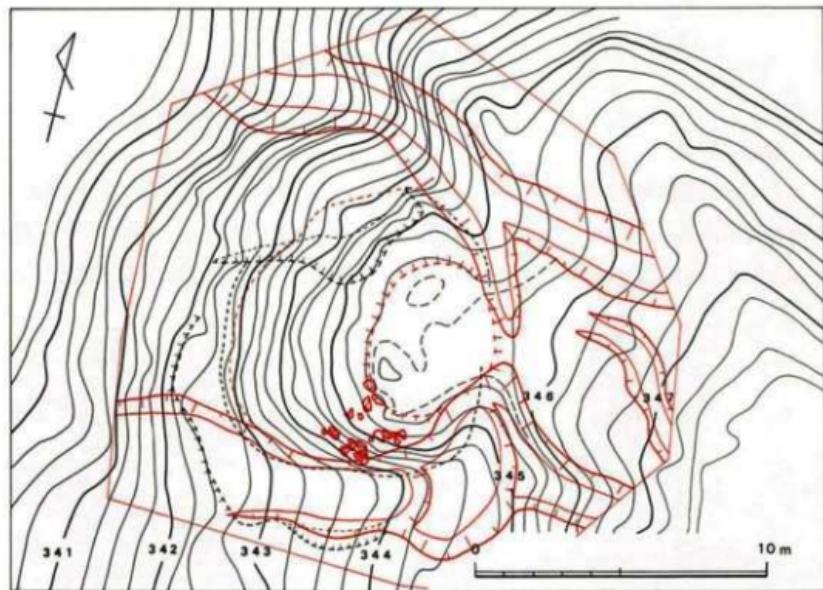


第6-1図 別所第2号古墳周辺地形図 (1:2,000)

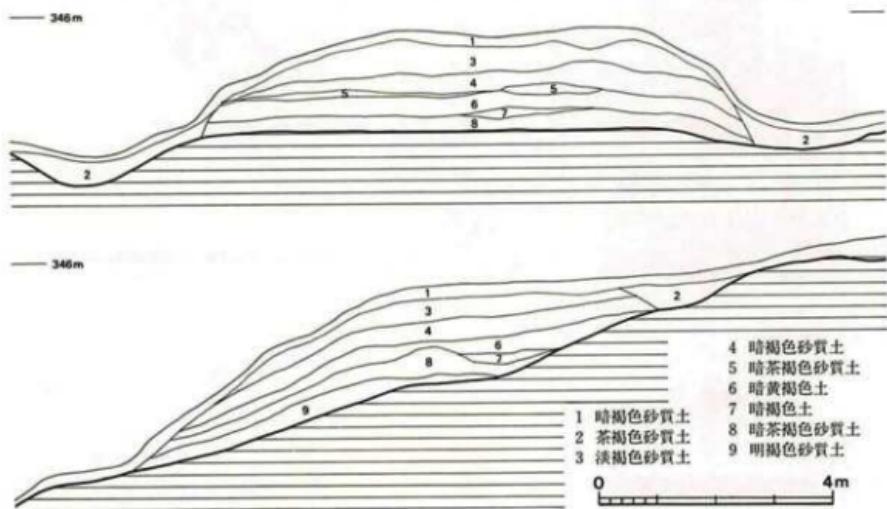
(2) 調査の概要

a. 墳丘

自然地形の突出部を利用して墳丘をつくりっている。墳丘の周りには北、南に内溝する溝状造構を有するが、通常みられる古墳高所側の周溝は明確でなく、途切れる形で両側から延びてはいる。しかし、古墳外にも溝が延びており、当初からこの溝が掘削

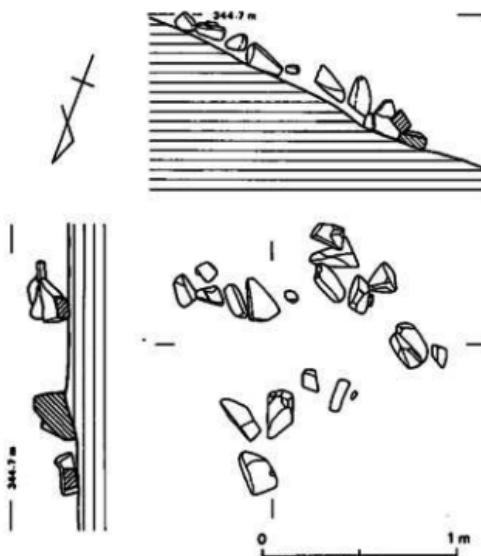


第6-2図 別所第2号古墳々丘実測図 (1:200)



第6-3図 別所第2号古墳々丘土層断面図 (1:100)

されていたものかどうか明らかでない。墳丘は橢円形を呈し、長径10m、短径8m、高さ2mである。また、墳丘南斜面には、角礫群がみられ葺石状をなしている。地山に接して礫群があるが、列石あるいは貼石状はなしていない。主体部は検出できなかった。



第6-4図 別所第2号古墳礫群実測図(1:30)

(3)まとめ

本古墳は、自然地形を利用し、削切加工して墳丘を構築している。しかし、周溝の在り方は他の古墳と異なっている。すなわち、丘陵尾根上に築成される古墳は尾根高所側に直交する溝を掘削するのが通例であるが、本古墳は高所側に尾根に直交する溝は見られず、周囲を「こ」の字状に囲んでおり、ひとつの特徴となっている。しかし、主体部も検出できず、出土遺物もなく本古墳の時期は明らかでないが、千代田町のこの付近は古墳が他地域に比べて少ない中で、本古墳の存在意義は大である。

7 金ノ口城跡

(1) 安佐町の位置と環境（第7—1図）

広島県西部に位置する広島市安佐北区安佐町は500～800m級の山々や太田川と支流の鈴張川などによって形成された狭小な平地群からなっている。広島県において東北～西南方向の構造谷群が顕著であり、鈴張川も海見山より西南方向に流れ、飯室の宇津で本流の太田川に合流している。

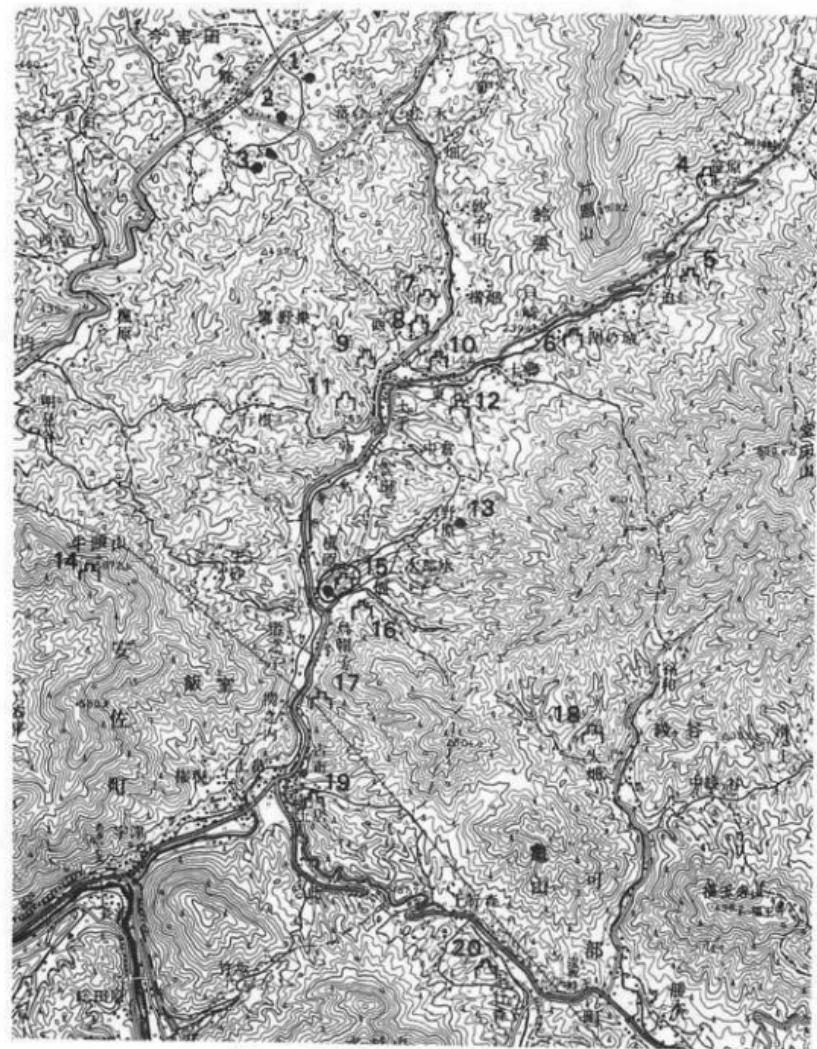
旧石器・縄文時代の遺跡は本地域においてまだ確認されていないが、縄文時代と思われる磨製石斧が安佐町鈴張の東殿城跡付近と安佐町小河内の明見谷付近で採集されており、今後確認される可能性があるものと思われる。

弥生時代の遺跡として恵下遺跡・追崎遺跡・野原遺跡があげられる。恵下遺跡は鈴張川中流左岸の丘陵上に位置し、恵下城跡の6郭より前方にあたる。尾根の平坦面や斜面に土塙59・箱式石棺4等が検出され、弥生時代後期～古墳時代前期に形成された墳墓群と考えられる。追崎遺跡は大きく蛇行した太田川右岸の沖積地に位置し、中期～後期の土器(甕・壺・鉢)・石器(大型蛤刃石斧・延石・刀器・石鏹)が多数出土している。野原遺跡からは土器が少量出土している。このように遺構として捉えられたのは恵下遺跡のみであり、特に生活跡の発掘が行なわれていないので、生活の具体的な姿を明らかにしえないが、この狭小な平野に人々が住み、稻作などを行なって生活していたものと思われる。

古墳時代の遺跡としては先述の恵下遺跡があげられる。墳墓群の中でもやや独立性を持つもので、箱式石棺は溝を伴なうものもあり、古墳的様相を強く示している。また豊平町今吉田には扇手古墳がある。^① 丘陵斜面に位置し、箱式石棺より人骨が出土している。これも恵下遺跡の箱式石棺に近い性格を持つものと思われる。現在までのところ安佐町内では古墳が確認されていないが、箱式石棺の発掘や周辺地域に古墳が存在することから、今後発見される可能性は高い。

奈良時代のものとして恵下城跡の発掘時に、須恵器の坏蓋が出土している。

中世になると多數の山城が鈴張川に沿って作られており、現在13か所が確認されている。関城跡(関山城跡)は丘陵端部に築造された階段式山城で、3つの郭群からな



第7-1図 安佐町周辺遺跡分布図 (1:50,000加計)

- | | | | |
|---------|-----------|---------|---------|
| 1 山遺跡 | 7 曲山城跡 | 13 野原遺跡 | 18 尾崎城跡 |
| 2 前沢遺跡 | 8 上西山城跡 | 14 牛頭城跡 | 19 土居城跡 |
| 3 扇手古墳 | 9 下西山城跡 | 15 恵下城跡 | 20 久保城跡 |
| 4 蔡城跡 | 10 国田中山城跡 | 恵下道路 | |
| 5 金ノ口城跡 | 11 市山城跡 | 16 烟城跡 | |
| 6 間城跡 | 12 東殿城跡 | 17 市場城跡 | |

り、堀切・土塁を伴っており、横山真高が居城したといわれている。東殿城跡（東殿山城跡）は主郭を中心に多数の郭を周囲に配置し、横山民部が居城したといわれている。恵下城跡は1977年に調査が行なわれ、郭6、堀切2、豊堀5を確認し、主郭を中心^⑤に周囲に郭がめぐる山城であることが判明し、主郭より建物跡なども検出された。南北朝から戦国期まで使用された城で、前半は武田氏に仕えた遠藤氏が、後半は熊谷氏と密接な関係をもつ三須隆常が居城し、2回以上の修復があることも確認された。市場城跡は小型の階段式山城で、熊谷氏の家人である本木与市が居城していたといわれている。土居城跡は平野に突出した低丘陵上（比高差10m）に位置し、2つの郭群からなり、その間の堀切は深く、両者の独立性を保つ構造である。山城というよりは屋敷跡に近いものと考えられるもので、三須刑部が居城していたといわれている。牛頭城跡（牛地城跡）は鈴張川右岸の牛頭山山頂（標高672m）にあり、飯室側からの比高差は550mである。15郭からなる大型の階段式山城で、武田氏の家臣である小河内弥太郎が城主と考えられる。その他の城跡は城主などが不明なものが多い。

以上、山城の特徴として、平地に突出した丘陵端部や眺望のきく山頂に築造されたものが多く、ほとんど比高差50m前後で、牛頭城跡のように550mのものまであり、守るに堅固な城のあるべき姿をあらわしている。構造としては階段式山城や主郭を中心^⑥に他の郭がめぐる山城や屋敷跡に近いものやその他がある。このような数多くの山城跡は、南北朝から戦国期にかけて安芸国守護であった武田氏の勢力拡大やその配下でこの地域に勢力をもった在地領主の熊谷氏の活動とともに順次築造されたもので、中世においてもこの地が主要な交通路であり、軍事的な意味が大きかったものと思われる。（植田千佳穂）

（注）

- ① 広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター「恵下遺跡発掘調査概報」1980年
- ② 福谷昭二「安佐町のあけぼの」「安佐町史」(広島市) 1977年
- ③ 広島県遺跡台帳による。
- ④ 広島県教育委員会「恵下城跡発掘調査概報」1978年
- ⑤ 以下、山城の記述は広島市中世城郭調査カードによる。

(2) 位置と現状（第7—2図）

本城跡は広島市安佐北区安佐町大字鈴張字竹迫に所在する。

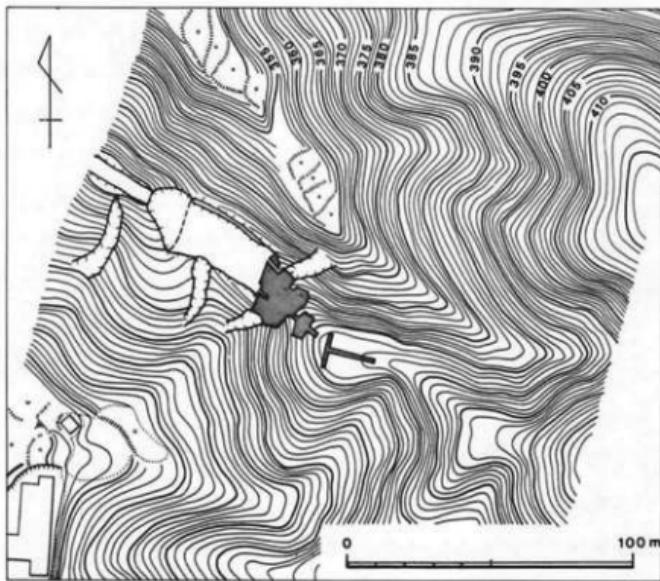
この付近は隣接する千代田町との境になる明神峠の西麓にあたり、城跡からは太田川にそそぐ鈴張川に沿って開けた狭い沖積地の一部を望むことができる。

本城跡は堂床山より北西に派生した支丘陵尾根の先端部に位置し、標高373～382m、水田からの比高約40mを測る。城の北側および東側は鈴張川と狭小な谷により比較的急峻な地勢をなしている。それに対し南側は傾斜がやや緩かである。

(3) 調査の概要（第7—3図）

今回の調査は、城跡東側の搦手部分に限られたが、特に南北の豊堀を中心に行い状況に応じて区を拡張した（3～6T）。また城跡背後の様相をみるために上方の丘陵尾根上に2つのトレンチ（1・2T）を設定した。

その結果、1・2Tでは土塹1基以外は遺構を検出できず、3～5Tが城の南端にあたることが判明した。また、3～5Tでは数本の堀割とともに石垣状遺構や土塹



第7-2図 金ノ口城跡周辺地形図 (1:2,000)

およびピット群を確認した。しかし、遺物は一切出土しておらず、築城の時期等については手がかりが得られなかった。

豊堀1（第7—4・5図）

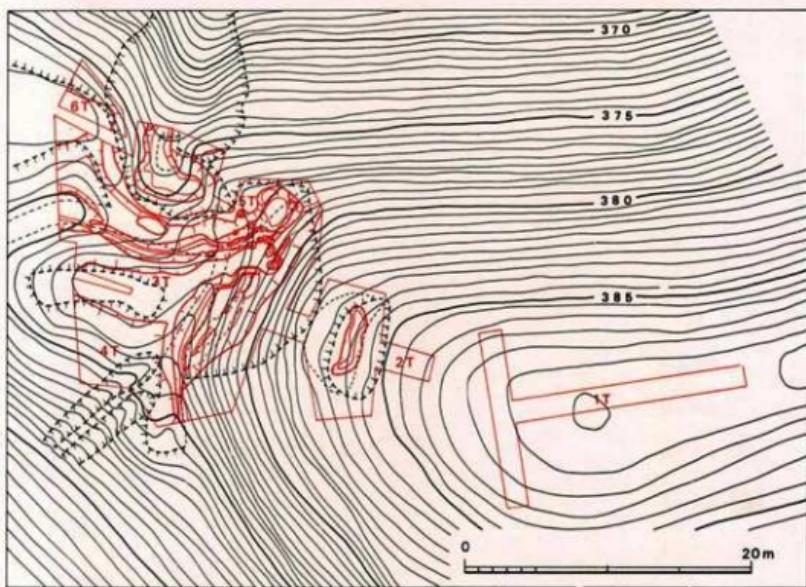
豊堀1は、搦手部分で尾根の北側に設けられ、地表観察では幅約2m、長さは5m以上を測る。今回調査したのは南側の一部のみであるが、深さは4~6.5mに達し、断面はいわゆる箱築研状を呈す。堀の上端部は尾根上部に深く入り込んで掘削され、堀底および上端は平坦で調査区外より大きく急下降するものと推定される。

豊堀2（第7—5図）

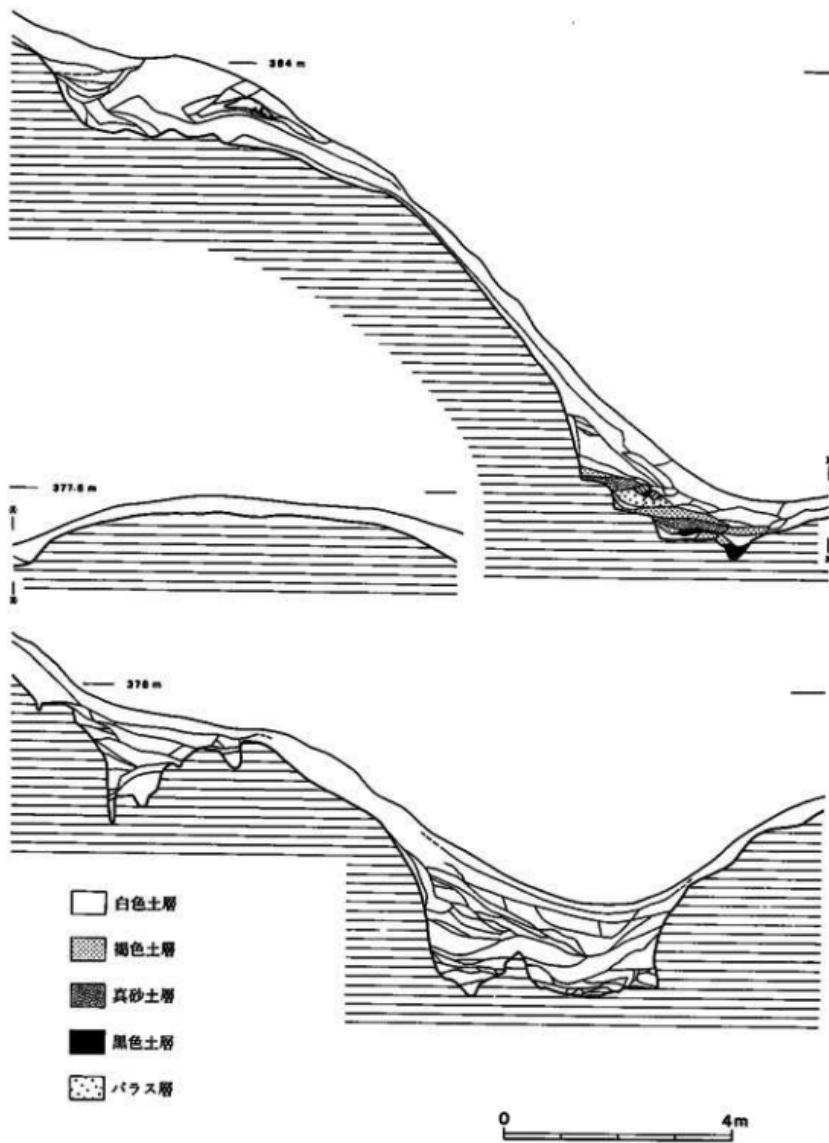
豊堀2は、尾根の南西に位置し、当初の地表観察では明瞭に確認されたが、調査の結果、かなり幅広く漸移的に下降していることがわかった。堀断面の形状は豊堀1とはかなり異っている。そして、豊堀1との間に陸橋部をつくっている。

溝1（第7—5図）

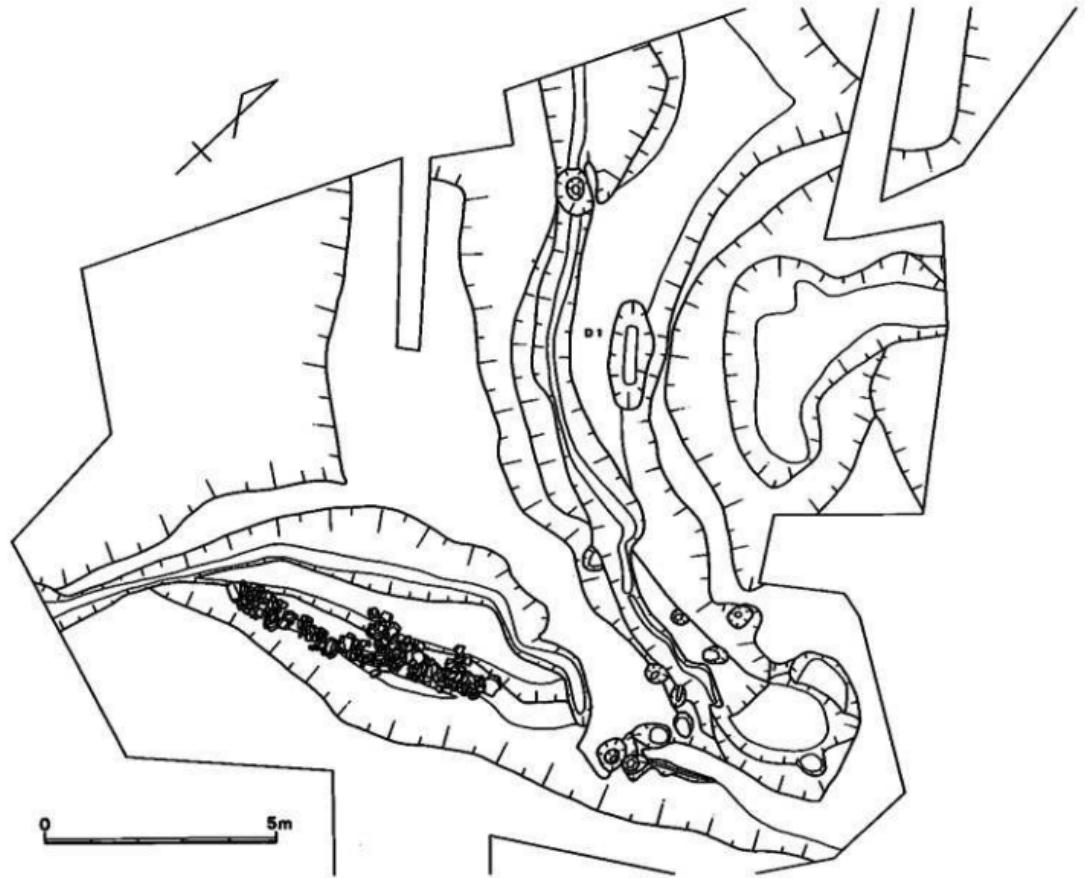
豊堀1・2の間に設けられたもので、尾根にそってほぼ縦断する形で掘削され、や



第7-3図 金ノ口跡地形図及び遺構配図 (1:400)



第7-4図 金ノ口城跡3・5T 土層断面図 (1:100)



第7-5図 金ノ口城跡 3~6T 造築図 (1:100)

や蛇行しながら西方に続いている。溝の幅は東側では約1.5mを測るが西端では約3.5m前後となり西に向うに従って幅広くなっている。同様に深さも次第に浅くなっており、西半は溝というより堀に近い。断面の形状は、堀底は小さな平坦面をつくるが全体にV字形に近いわゆる薺研堀である。

この溝の東端付近から直径20~30cm程度のピットを多數検出した。そのうちの多くは堀の上端部分付近に集中しており、またこの部分にのみ偏ってそれらが存在する点が注目される。おそらくこの溝に関連した柵列状の造構になるものと推定される。そして、溝1自身は竪堀1と2により形成された陸橋部一通路をさらに南北に二分し、防御の機能を高めたものと考えられる。

石垣状造構（第7—4・5図）

3・4Tの南東、城跡の後背部削平面の最下端に石垣状の造構を検出した。これは、人頭大の角石を2~5段にわたってやや粗雑に積み上げたもので、長さ2.6m、幅20~60cmある。東側背部急斜面との間には幅20~50cmの平坦面をつくり、前面は緩かに下降して浅い溝状をなしている。

この造構の下層にはさらにいくつかの堀込みがみられ、堆積層の状況より4度にわたって堀の修築が行われたことがわかる（第7—4図）。そして、この石垣状造構が構築されるのはその最後の時期である。

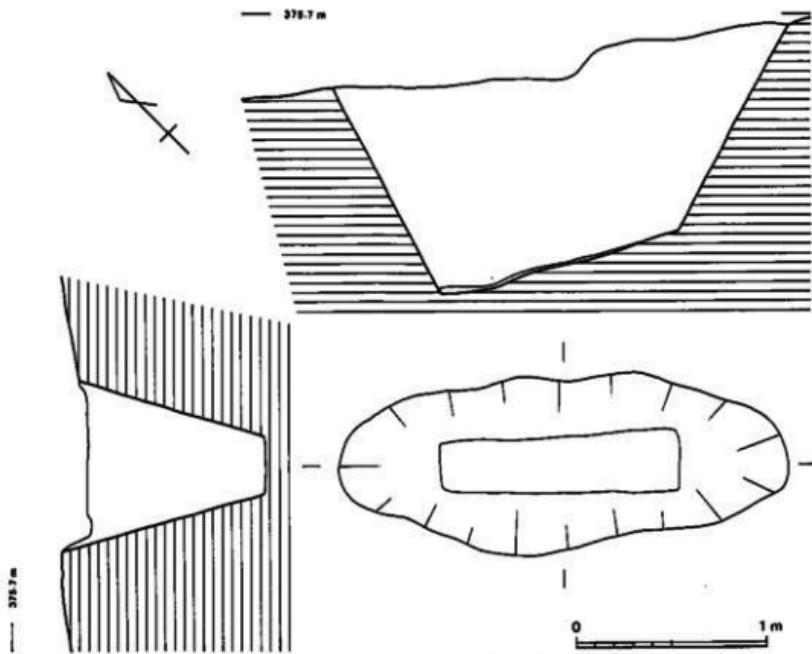
同造構の機能については、後背面の大部分がもろい花崗岩のバイラン土であることから、石垣というより簡単な土止め的なものであったと思われる。

土塹1（第7—5・6図）

この土塹は、竪堀1と溝1との間にできた陸橋部に掘込まれていた。上端はいびつな楕円形をなすが、下端は比較的整った長方形を呈す。規模は上端で長径2m、短径0.9m、下端では長辺1.25m、短辺25~30cmを測る。深さは1~1.1mで、壁の傾斜はかなり急である。この土塹は陸橋通路のほぼ中央につくられていることやかなりの深さをもつことなどから、有事の際の落し穴もしくは障害拡的なものであったと推測される。

土塹2（第7—3・4図）

掘手の後背部急斜面の中腹に小さな平坦面がみられ、ここからいびつな土塹を1基検出した。この土塹は、長軸約10m、短軸約3m、深さ約30cmで長軸は尾根に直交す



第7-6図 金ノ口城跡第1号土塁実測図(1:30)

る。平面形は両端が若干突出して弓状を呈している。

土塁より80cm程先端には焼土層が認められ、幅40cm、厚さ約15cmで、炭が多量に混入していた。土塁2との時期的な前後関係は不明である。また、これらの造構の性格についても本城跡と関連するものか否か判然としない。

その他の調査区（第7-3図）

城跡後背部の丘陵尾根上にT字状のトレンチを設けた。現地表より20~40cmで地山の花崗岩バイラン土に達するが、造構は何ら確認できなかった。標高は約388mで握手からの比高差は10m前後である。本城跡全体を見おろす位置にあり、城の防御機能の点では著しく不利な地形といえる。

(4) まとめ

本城跡の縄張りについては、不明確な部分が多いが、表面観察によりある程度知ることができる。郭の配置は、基本的に尾根上に5郭を階段状に配したものとみられ、

背後を堀切によって囲んでいる。今回調査した搦手部分の西方約20mは本城の最頂部にあたり、ここに幅3～5m、長さ約20mの細長い郭が設けられている。そしてこの郭を頂点にして東西の尾根上に4つの郭が階段状に築かれている。東側では搦手の堀切との間に東西約20m、南北約20mの郭があり、その東端には幅1m、高さ1.5～2mの土塁が約20mにわたってみられる。他方、西側は郭の状態が明確でなく、むしろ自然地形のままに近い。各々の郭の南側斜面には大小の豎堀が5～7本配されているが、北側斜面では地形が急峻なため豎堀は非常に少ない。南側に堀が多いのは緩斜面という地形上の不利を補うためと思われる。

このように、本城跡は天然の地形を利用しながら防御に不利な部分には豎堀を設けるなどして前面および側面からの攻撃に対処している。一方、搦手部分については、今回の調査で明らかとなおり、石垣状遺構を伴う堀切、南北の豎堀とそれらにより形成された陸橋部、そして土塁などその防御施設にはかなり気を配っている。

しかし、郭の規模は総じて貧弱で必ずしも大規模な城郭とはいえない。城の占地条件などを加味すると、おそらくこの城跡は見張台的な機能をもった山城であろうと思われる。

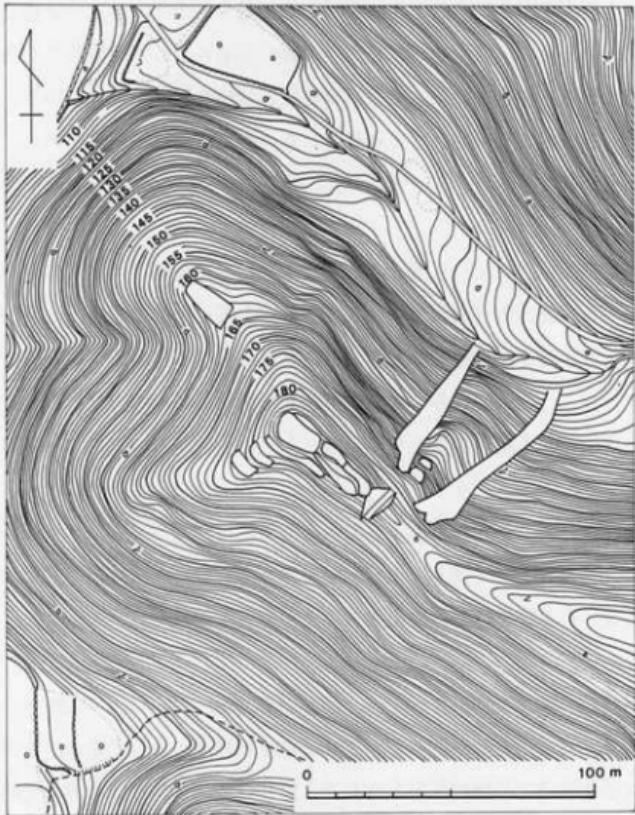
城の築城時期や城主については文献上の記載がなく、また遺物も出土していないので不明である。ただ、城の構築法からみると、郭を階段状に配し多くの豎堀を設けるなど、非常に堅固なつくりで実践的であり、戦国期の特徴を示している。(桑田俊明)
(注)

- ① 広島県教育委員会『恵下城発掘調査概報』1978年では、城跡の立地及び郭の配置の特徴より鈴張川流域の山城跡を3分類しているが、金ノ口城も基本的には階段式山城のうちにはいるものと思われる。
- ② ①参照

8 市 場 城 跡

(1) 位置と現状（第8—1図）

市場城跡は広島市安佐北区安佐町大字飯室に所在し、標高504mの最高峰から西北西に派生した丘陵端部に位置している。この丘陵は細尾根で、城跡付近でYの字に分かれ、平野に突出している。周囲には北方に恵下城跡、西方に鈴張川を隔てて牛頭山城跡、南方に土居城跡を望むなど比較的眺望がきき、南西と北東の両側には深い谷が入って



第8-1図 市場城跡周辺地形図 (1:2,000)

斜面は40°と急峻である。

本城跡は北西～南東120m、北東～南西50mの規模でYの字の丘陵を利用し、階段状に郭を配列し、両側の谷を天然の堀切としている。郭の配置は最高所（標高186m、水田面よりの比高90m）を1郭とし、その西側と南側の郭を2・3郭とする。その西南尾根側に小規模な4～6郭、西北尾根側に離れて7郭を設け、1郭の東側には堀切があり、その外側の北東斜面にも8～10郭を設け、これをはさむように堅堀がある。

(2) 調査の概要 (第8—2図)

発掘調査は道路建設予定地内に限られた為、城の中心部である1～6・8郭および堀切について全面排土を行った。2～5cmの表土層を排土するとすぐ岩盤であり、土の堆積はほとんどない。郭や堀切は花崗岩の岩盤を削り出して構築しており、節理で割れた石を露出させることによって石垣や石敷と同様な働きをさせている。このように自然地形を最大限に利用し、盛土が見られないため、郭は不明瞭であり、城に関連する遺物は出土しなかった。

1郭

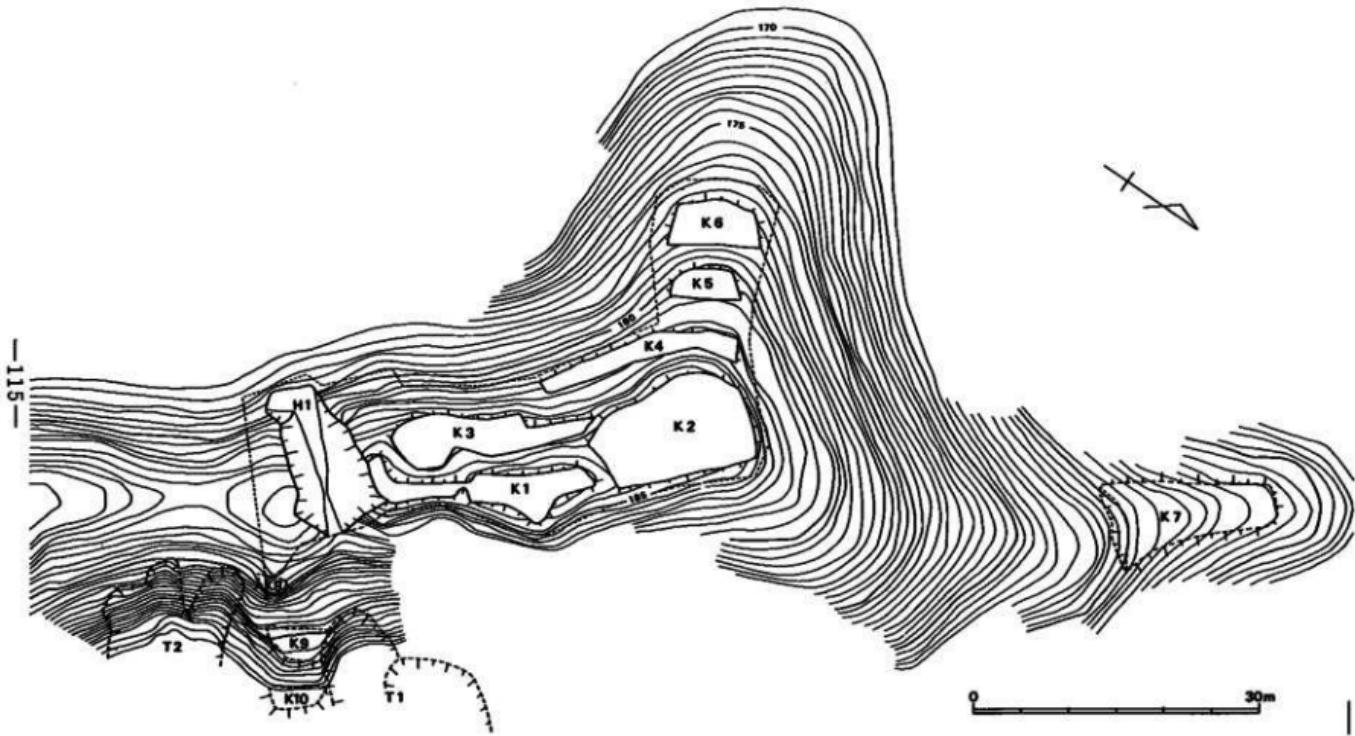
本城跡の最高所に位置し、平面L字状をなす。角を東に向け、北東の谷と南東の堀切に向っている。北西側と南西側には2・3郭がある。規模は北西～南東24m、北東～南西2～4mを測る。北西部は方形に1段高く、岩盤が露出している。2・3郭とは比高差も少なく、位置的にみて城の中核部を形成していたものと思われる。また、堀切側は機能的に、土壘の働きをしている。

2郭

1郭の北西側にあり、比高差は1mである。北西に向かって広がり気味の台形を呈し、北西～南西9～11mを測り、よく水平を保っている。本城跡内でも最大規模で、位置的にも要にあるが建物跡は検出することができなかった。

3郭

1郭の屈曲の内側にあり、2m低い。細長い郭で20×2～4mを測る。南斜面には当初石垣と思われた石群があるが、これは岩盤が節理によって割れたもので、それが石垣と見間違うほどの様相を呈したものと思われる。2郭とは北西部で連結し、段差も少ない。



第8-2図 市場城跡造構配図 (1:600)

4郭

2郭の南西の西尾根より3郭の南西まで存在する細長い腰郭である。2郭との比高差は2mで、80°前後の傾斜で下がっている。22×2mの規模で、南東端部には3郭へ登る道と思われるものがある。

5郭

西尾根で4郭より西に位置する。小形半円形の郭で9×3mを測る。4郭との比高差は2mである。

6郭

5郭の西に位置し5郭との比高差は2mである。半円形を呈し、10×4.5mである。

7郭

北尾根で2郭より北西へ40m下った所に位置し、2郭との比高差は22mある。本城跡ではもっとも西にあり、大手にあたるものと思われる。この郭は発掘調査を実施していないが、細長い台形を呈し、16×5mほどの規模で南東端と北西端では3.5mの差があるので数段に分かれている可能性もある。

8郭

堀切外の北東斜面に位置し、1郭との比高差は7mである。2×3mと小さい郭で岩盤が露出している。

9郭

8郭より北東4m下った斜面に位置し、第1・2竪堀に挟まれている。8郭との比高差は5mで、台形を呈し、規模は6×3.5mである。直下にある10郭とともに急斜面の中腹に位置し、北東の監視の為、築成し、戦時には捨郭にされたものと思われる。

10郭

9郭の下4mにあり、台形を呈し、規模は5.5×2.5mである。

堀切1

1郭の南東側を分断しており、尾根より城を区画するもので、第1竪堀と関連している。丘陵尾根の鞍部よりやや北西を直角に切断しており、薬研堀である。幅7m、長さ17m、深さ2mであり、城を区画するものとしては非常に貧弱である。

竪堀1・2

城跡の北東斜面で、9・10郭を挟んで存在し、谷底まで続いている。第1竪堀は上

端では二股になっており、幅8m、長さ50m、深さ1m前後のU字溝である。第2堅堀は上端では三叉になっており、谷底にいくほど幅が狭くなり、幅(上方)10m、(下方)7m、長さ65m、深さ1m前後のU字溝である。9・10郭を守るとともに城の北東側を守る意味があったのであろう。

(3) まとめ

今回の発掘調査によって城跡の主要部分について明らかにすることができた。

位置的には陰陽を結ぶ中世の主要路がこの城の麓を通過し、地名も“闇の内”ということから交通路の要所に立地しており、丘陵尾根の自然地形を最大限に利用し、戦国時代に一般的に見られた階段式山城である。

郭は4つのまとまりがみられ、最高所の郭群(1~3郭)、南西尾根の郭群(4~6郭)、北西尾根の7郭、北東斜面の郭群(8~10郭)である。1~3郭は城でもっとも重要な主郭部分で、有機的に関連し、中枢部を担っており、面積的にももっとも広く、建物跡が存在した可能性が高い。4~6郭は1~3郭の南西に連結し、“古市”的平野に向き、面積的にも狭く、通路的な意味を持つものであろう。7郭は北西方に離れており、“猪の子”的平野に向かっており、大手筋にあたるものと思われる。8~10郭は急斜面に築造された小形の郭群で、あまり整形加工が見られない。これらの郭群のうち、戦時には1~6郭は守備側であるが、7~10郭は捨郭にされたものと思われる。城の搦手は尾根が連続的に伸びていることから、堀切が1郭・堅堀と関連して構築されているが、非常に浅く、その機能を充分に果たしていたとは思われず、背後からの攻めに非常に弱かったのではないか。このように天然の要害に立地しているが、細尾根の為、郭は充分な広さを確保することができないし、なおかつ、最小限の削平加工をし、盛土などを行わなかった為、小型で、守る城というよりは監視の城(見張所)といった性格が強く、“猪の子”“古市”的平野に注意を払い、特に前者に対し、重点を置いていたと考えられる。

①

『郡中国郡志』によれば「市場ノ城 城主本木与市久吉殿ト申候」また「組頭源四郎先祖ハ当村市場ノ城主本木与市ト申者数代相続仕熊谷氏当國下向ノ御領地没収ニ付只今ノ屋敷ニ没落仕百姓ニ相成」とある。『芸藩通志』にも同様な内容のことが書かれており、「土居城 市場 並に飯室村にあり、土居は、三須刑部、所居、市場は、本木與一、共に熊谷家人なり」また「飯室村本木氏 先祖、飯室市場の城主、本木與

(參)
一久吉と稱す、熊谷氏、此に來たりて、其所領を奪ひければ、遂に農民となる、源四郎、傳吉等、その後裔なりといふ」とある。これらを総合すると、市場城の城主は熊谷氏の輩下である本木与市久吉で、その後数代市場城を守ったが、熊谷氏の防長移封後は飯室村に留って帰農したということである。

(參)
飯室周辺について中世の歴史をふりかえってみると、平安時代後半～鎌倉時代にかけて国衙領と考えられるこの地は、守護の武田氏が次第にその勢力を広げていったものといえよう。特に、鎌倉時代後期以降、武田氏が在国するようになり、銀山城を中心として国内の武士を家臣化していき、遠藤氏や小河内氏も従っていたものと思われる。ところが室町時代になると安芸国をめぐって細川・大内・尼子らが進出し、これら諸氏に呼応した安芸国内の在地領主の複雑な動向がくりひろげられるなか、武田氏は永正14年（1517）元繁の死後、急速に力を弱め、天文10年（1541）ついに滅びてしまう。その後大内氏が銀山城に城番を置き、町域もその手中に入るが、天文20年（1551）陶隆房（晴賢）が大内義隆に謀叛をおこし、これに呼応して毛利・熊谷氏も勢力拡大をはかり、熊谷氏が飯室に進出し、実際には熊谷氏の一族である三須氏が知行したものと思われる。三須氏の城としては恵下城跡・土居城跡があげられ、これらは猪の子と古市の両平野の中央に突出した丘陵上に位置し、この飯室の小地域を領有するにふさわしい城と言える。本木氏も熊谷氏の家人とされていることから、市場城跡も恵下城跡・土居城跡と同時期に存在した可能性もあるが、立地や構造がはなはだ異なる階段式山城であることから、築造がやや新しいことも考えられる。城に関連する遺物がなかったので断言できないが、戦国期のものといえよう。（植田千佳穂）

(注)

- ① 高宮郡の郷中國郡志で、安佐北区高陽町持留家の黒川鼎氏所有。

9 順正寺裏古墳群

(1) 簡賀村周辺の位置と環境（第9—1図）

広島県の西北部、いわゆる芸北地域に位置する簡賀村には中国山地を形成する標高600～700mの山々が連なっているが、その中を流れる太田川やその支流に沿ってわずかな平地が開けている。

この周辺で遺跡が最も密集しているのは太田川と簡賀川とが合流してやや広い平地のみられる上殿、簡賀川と三谷川とが合流する三谷・市の地域である。共に河川の合



第9—1図 戸河内町・簡賀村周辺遺跡分布図 (1:50,000)

- | | | | | |
|----------|------------|------------|------------|----------|
| 1 下堀古墳 | 7 堂ノ本遺跡 | 13 才中得遺跡 | 19 八幡原古墳 | 25 三谷古墳 |
| 2 小坂城跡 | 8 門田遺跡 | 14 発坂城跡 | 20 笠鎗谷遺跡 | 26 三谷積石塚 |
| 3 西長田五輪塔 | 9 山根遺跡 | 15 土居1号遺跡 | 21 横路小谷古墳群 | 27 板迫山古墳 |
| 4 上殿積石塚 | 10 上殿小学校遺跡 | 16 土居2号遺跡 | 22 三谷1号遺跡 | 28 本郷遺跡 |
| 5 京ノ本五輪塔 | 11 箕角1号遺跡 | 17 土居3号遺跡 | 23 三谷2号遺跡 | |
| 6 京ノ本遺跡 | 12 箕角2号遺跡 | 18 順正寺裏古墳群 | 24 三谷3号遺跡 | |

流点付近であり、河岸段丘状を呈する山裾及び周辺の丘陵上に位置している。

現在までに確認されている最も古い遺跡は、縄文時代早期の押型文・撫糸文土器や打製石器・石鎌・スクレーパー等が出土している上殿小学校遺跡と箕角小学校遺跡である。両遺跡とも近接しており、限られた地域での確認である。

弥生時代に入ると遺跡数も増加し、京ノ本遺跡、堂ノ本遺跡、箕角第2号遺跡、三谷第1～3号遺跡、本郷遺跡等から土器が採集されており、これらは上殿・三谷を中心として分布しているが内容は明らかではない。しかし前期の土器は未発見である。また土塙・箱式石棺及び鏡片が出土した釜鉢谷遺跡は後期以降の墳墓群であったと推定される。

古墳時代に入ると、前半期のものとしては横路小谷古墳群、板迫山古墳群があり、後半期のものには順正寺裏古墳群がある。確認されている他の古墳は時期が不明であるが、これらは三谷の地域に多く分布している。また、横路小谷第1号古墳からは石劍・内行花文鏡・玉類などの多くの遺物が出土し、5世紀代におけるこの地域の首長の在り方を示す好資料を提示している。一方では須恵器が採集されている門田遺跡、壺棺と推定される大型の土師器の壺が出土している本郷遺跡など平地の遺跡も確認されている。

古代に於ては明らかな遺跡・遺物は見つかっていない。

中世になると加計町から芦北一帯の大田奥山荘を支配した栗栖氏の居城と考えられる発坂城、その一族（のちに小坂氏と称す）の城と考えられる小坂城などの山城跡や、西長田五輪塔・上殿積石塚・京ノ本五輪塔・三谷積石塚などの古墓も確認されている。

自然及び地理的環境は決して良いとはいえないが、早い段階から人が住み始めており、古墳も築造されている。しかし平地が狭いことから遺跡の分布が限られており、またその規模は小さなものと推定される。

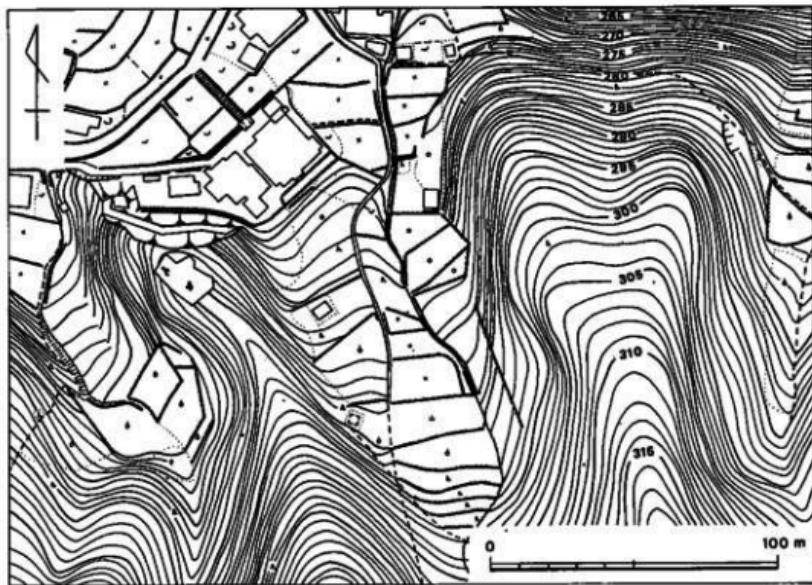
（桑原隆博）

(2) 位置と現状（第9—2図）

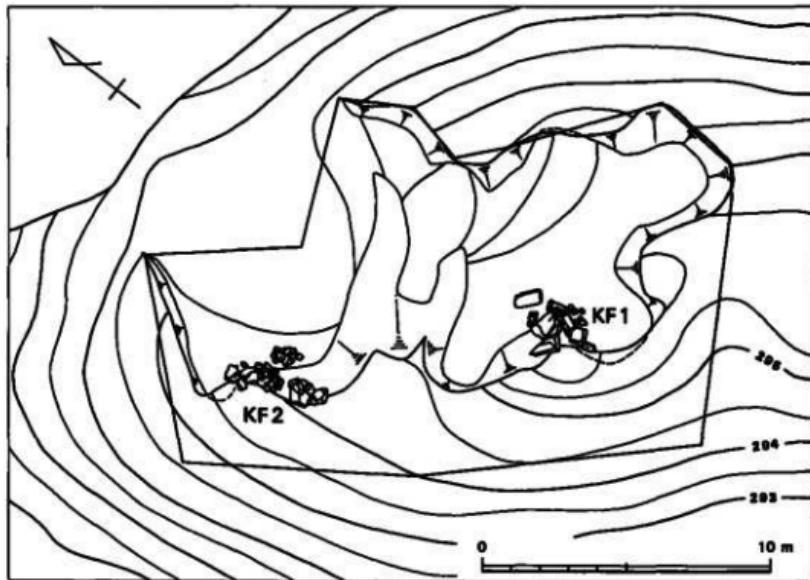
本古墳群は山県郡筒賀村大字中筒賀字天神原に所在する。本古墳群の位置する付近で中筒賀の集落を東流する筒賀川は大きく迂回し、東方約1kmほどで太田川と合流する。本古墳群は標高972mを測る天上山塊より派生した尾根幅の狭い舌状丘陵の先端部に立地する。古墳群前面に広がる可耕地は南北より山塊が迫るために本集落内でも最も少ないが、現在でも戸河内に通じる道と中筒賀に通じる道との分岐点となっており、昔から交通の要衝であったことが窺える。古墳群は戦前の土取り作業により大部分壊されていた。墳丘東側及び石室は完全に崩壊していた。

(3) 調査の概要

石室が破壊されていたため、石室底面の残存状況を確かめる調査を行ったが、北側の第1号古墳、南側の第2号古墳ともに石室底面は検出できなかった。現状の観察から第1・2号古墳共に石室は地山を掘込んで作られ、南北方向に主軸をとり北側に向開口していたものと推測される。



第9-2図 順正寺裏古墳群周辺地形図 (1:2,000)



第9-3図 順正寺裏古墳群地形図及び遺構配図 (1:200)

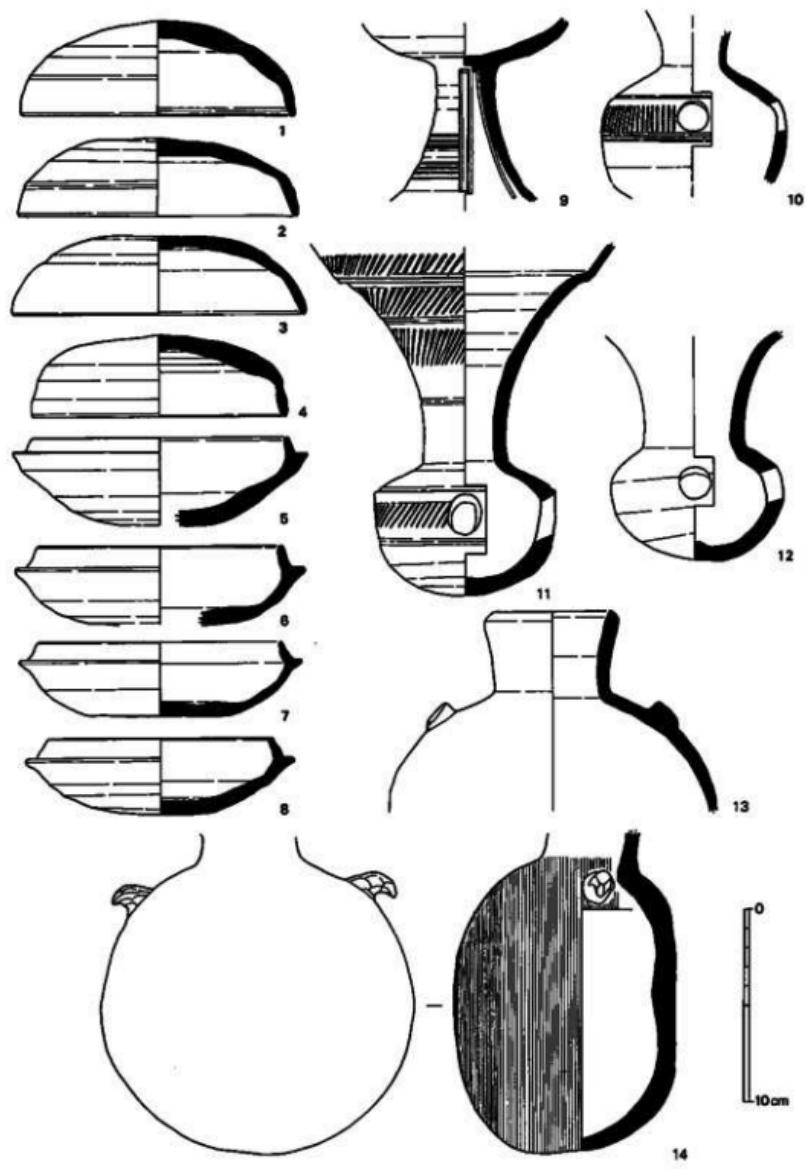
出土遺物

遺物は第1号古墳々頂部から須恵器大甕片が、また戦前の土取り作業の際、以下にのべる須恵器（第9-4図）が出土したと伝えられている。

壺類は口径に比し器高はそれほどなく扁平化しており、應は体部全体が丸みをもち口頭部にかけて強く外反して長くのびる傾向を示す。また提瓶は大型で体部がややふくらみ背面平坦で把手が鉤手状のものとボタン状のものとある。

第9-1表 順正寺裏古墳群出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	形態の特徴	成形技法の特徴	備考
1	須恵器 壺	口径 14.4 器高 5.0	天井部は丸みをもち口縁部との境には1条の凹線をめぐらす。口縁部内面には凸線状の筋と浅い凹線をめぐらす。	マキアゲ、ミズヒキ成形。 頂部は左回りのヘラ削りで範圍は狭い。	色調 灰色 胎土 砂粒を含む 焼成 良好
2	+	口径 14.7 器高 4.1	頂部はやや平坦で体部にかけ縦やかにカーブする。体部と口縁部との境には浅い凹線をめぐらす。	マキアゲ、ミズヒキ成形。 頂部は左回りのヘラ削りで範圍は広い。	色調 灰色 胎土 砂粒を含む 焼成 良好



第9~4圖 順正寺萬古墳群出土土器實測圖 (1:3)

番号	器種	法量 (cm)	形態の特徴	成形技法の特徴	備考
3	◆ ◆	口径 15.4 器高 4.2	頂部はやや平坦で体部より口 縁部にかけ丸みをもつ。口唇 部は丸くおさめる。	マキアゲ、ミズヒキ成形。 頂部は左回りのヘラ削りで範 囲は狭い。	色調 灰白色 胎土 砂粒を含む 焼成 良好
4	◆ ◆	口径 13.4 器高 4.2	頂部はやや丸みをもち体部は 強く屈曲し外面やや内湾する。 口唇部は丸くおさめる。	マキアゲ、ミズヒキ成形。 頂部は左回りのヘラ削りで範 囲は広い。	焼成 良好 胎土 砂粒を含む 色調 灰白色
5	◆ 环身	口径 13.5 受部径 15.5 器高 4.5 (推定)	口縁部は内傾して立上り端部 内面はわずかに緩をもつ。受 部は上外方に短くのび端部は 丸くおさめる。底部より体部 にかけては全体に丸みをもつ。	口縁部の接合部分はいわゆる 一本引き。底部は全体をヘラ 削り。内面は仕上げナデ。	色調 灰白色 胎土 砂粒を含む 焼成 良好
6	◆ ◆	口径 12.8 受部径 15.3 器高 4.0 (推定)	口縁部は直立気味に立上り口 唇部は丸くおさめる。受部は 外上方に短くのび端部は丸み をもつ。底部はやや平坦で体 部にかけわずかに屈曲して立 ち上る。	口縁部接合部分は一本引きに よる。底部は全体を左回りの ヘラ削り。内面は仕上げナデ。	色調 灰白色 胎土 細砂粒を含む 焼成 良好
7	◆ ◆	口径 12.8 受部径 14.9 器高 3.9	口縁部は内傾して立上り端部 はやや尖る。受部は横方向に 短くのびる。受部接合部内面 に明瞭な線をもつ。底部は平 坦で体部にかけ緩やかにカーブ して立ち上る。	口縁部接合部分は一本引きに よる。底部全体は左回りのヘ ラ削り。内面は仕上げナデ。	色調 黄灰色 胎土 細砂粒を多含 焼成 良好
8	◆ ◆	口径 11.8 受部径 14.1 器高 3.9	口縁部は直線的に内傾して立 ち上り端部はわずかに緩をも つ。受部は外上方に短くのび 端部はやや緩緩をもつ。底部 より体部にかけては全体に丸 みをもつ。	口縁部接合部分は一本引きに よるものと思われる。底部及 び体部にかけヘラ削り後のナ デ。内側は仕上げナデ。	色調 黄灰色 胎土 細砂粒を含む 焼成 良好
9	◆ 高环		环底部より体部にかけて緩や かにカーブして立ち上る。脚部 基部の径は 3.4 cm を測る。脚 中位より下方に 8 本の回線を 入れ、長方形の透しを 3ヶ所 に入れる。脚部はラッパ状に 広がる。	环底部はヘラ削りの後に脚部 と接合。内面は仕上げナデ。 脚部の透しをヘラにより入れ る。	色調 灰白色 胎土 砂粒を含む 焼成 堅緻
10	◆ 脚		体部は全体的に丸みをもつが やや肩が張る。肩及び体部最 大径付近に回線をめぐらしそ の間にヘラ状工具による割突 を縦方向に入れる。円孔を最 大径度上に穿つ。口頭部基部 の径は 3.5 cm。	外面は口頭部より体部中位に かけ回転ナデ。体部下半より 底部にかけヘラ削り。内面は 肩部より下方はヘラ削りし頭 部より上方は回転ナデ。	色調 灰褐色 胎土 砂粒を含む 焼成 堅緻 頭部及び体部中位より 下半に自然輪付容

番号	器種	法量 (cm)	形態の特徴	成形技法の特徴	備考
11	◆ ◆	器高 18.5 (推定) 体部高 7.0 体部最大径 9.5	口縁部基部の径 4.5 cm と細く外反して立ち上る。口縁部の立ち上りに段を有し四線を入れる。口縁部より口縁部にかけ3本の回線を入れ、その間に斜方向の割突をめぐらす。体部は肩が張り底部にかけ丸みをもつ。肩及び体部中位に回線を入れその間に斜方向の割突を入れる。円孔は体部中位に穿つ。	外面は口縁部より体部中位にかけ回転ナデし、底部にかけては左回りのヘラ削り。内面は回転ナデ。	色調 灰褐色 胎土 砂粒を多含 焼成 良好
12	◆ ◆	体部高 *5.8 体部最大径 8.9	口縁部基部は径 5.5 cm と太く、緩やかに外反して開く。体部は全体的に丸く円孔は最大径付近に穿つ。	外面は口縁部より体部最大径付近まで回転ナデし、底部にかけては左回りのヘラ削り。内面は回転ナデ。	胎土 砂粒を多含 色調 灰褐色 焼成 堅緻 灰釉が付着
13	◆ 提瓶	口径 6.0	口縁部はほぼ直立気味に立る。肩にはボタン状の粘土塊を貼付ける。	体部は全体をカキ目調整。口縁部にかけては横ナデ。体部内面は指頭によるナデつけ。	色調 灰白色 胎土 砂粒を多含 焼成 堅緻
14	◆ ◆	体部高 15.3 体部最大径 16.5	体部は前面がふくれ、背面は平らである。肩部に牛角状の把手がつき先端はとがる。	体部前面中央部を円板でふきぎ、全体にカキ目調整する。	色調 灰白色 胎土 砂粒を多含 焼成 堅緻

(4) まとめ

本古墳群は戦前の土取り作業のためほとんど崩壊しており、その概要は不明である。出土遺物も第1号古墳々丘斜面より須恵器整体部の破片が出土したのみで、ほかには戦前の土取りの際出土した須恵器類が残存しているにすぎない。これらから、本古墳群は6世紀後半に築造されたことが考えられる。(鍛治益生)

10 箕 鋸 谷 遺 跡

(1) 位置と現状（第10-1図）

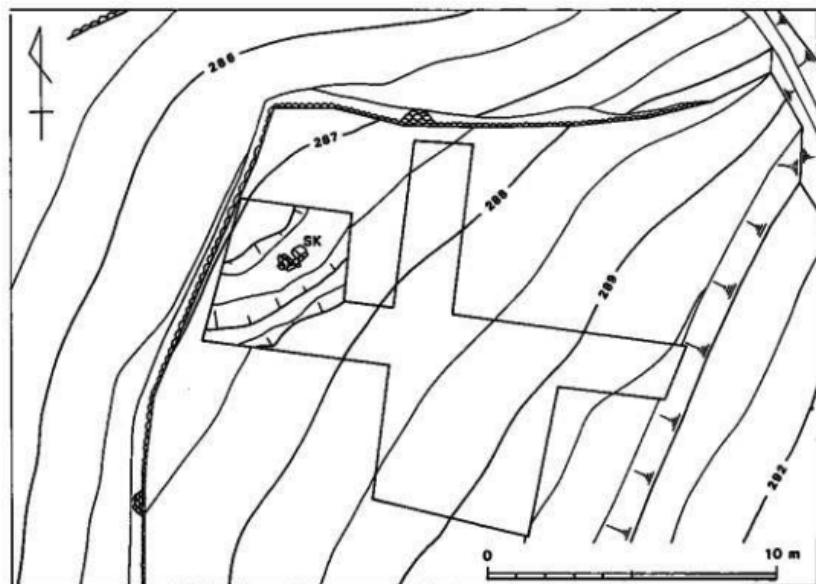
本遺跡は山県郡筒賀村大字中筒賀字三谷に所在しており、北西に向って延びてきた丘陵尾根先端部の緩斜面に位置している。遺跡の北側には南西から北東の方向へ流れる太田川の支流の筒賀川が存在し、それに沿って平地が開けている。この平地も筒賀川と南から北へ向って流れて来た三谷川との合流付近が最も広くなり、本遺跡付近より再び狭くなっている。つまり盆地の出入口部付近に位置しているといえる。周囲の水田との比高差は15~20mである。また西側の谷一つ隔てた丘陵尾根上には横路小谷古墳群が位置している。



第10-1図 箕鋸谷遺跡周辺地形図 (1:2,000)

(2) 調査の概要

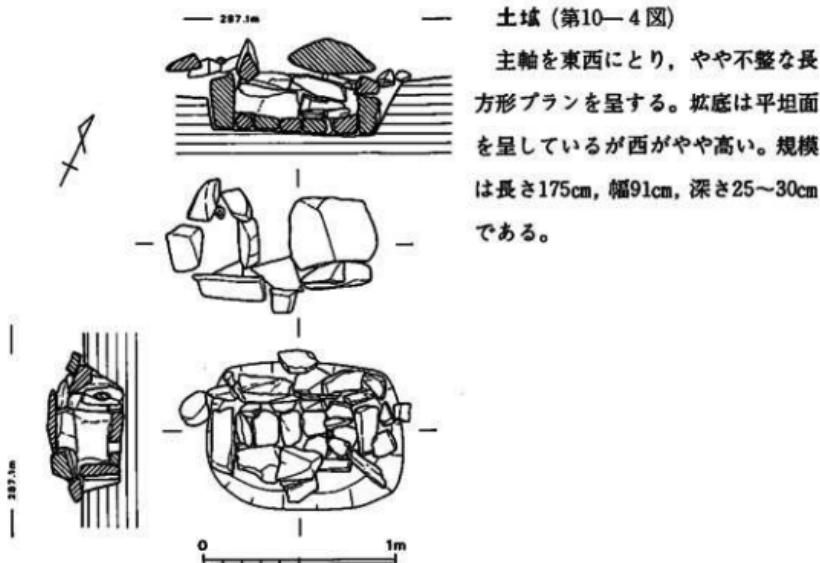
遺跡は山林の他、畑として開墾された部分を除き自然地形を残し遺構の存在が推定される地点について調査を行った。調査は2ヶ所に調査区を設け、I区は約166m²、II区は約439m²の調査を行った。その結果I区では溝状遺構と箱式石棺、II区では土塙を検出した。



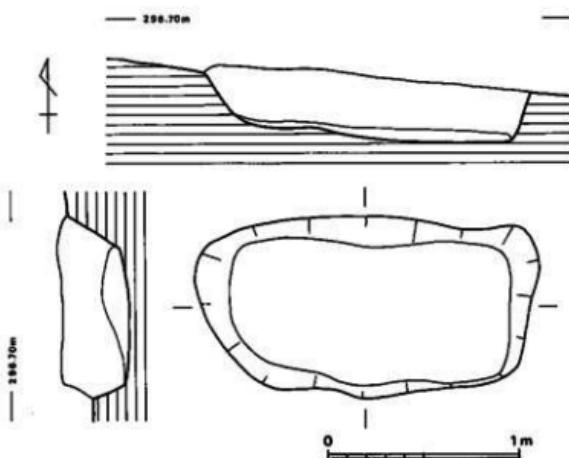
第10-2図 釜崎谷遺跡遺構配置図(1:200)

箱式石棺(第10-3図)

溝状遺構の底面中央で検出し、主軸をほぼ東西にとる。蓋石は1枚しか残存しておらず、蓋石間を補強するための石が若干残存していたのみである。側石は両側とも2枚ずつ、横長状に石を2段積み、小口部は東側が2段、西側が1枚で構築されている。床には平石を敷き、部分的には3列となっている。東側小口部にはハ字状に石を2個置き枕としている。土塙底面には石を安定させるための小穴は掘られておらずほぼ平坦面を呈している。石棺の規模は内法で長さ63cm、幅約30cm、高さ24cmであり、小形のものである。



第10-3図 犬飼谷遺跡石棺実測図 (1:30)



第10-4図 犬飼谷遺跡土塀実測図 (1:30)

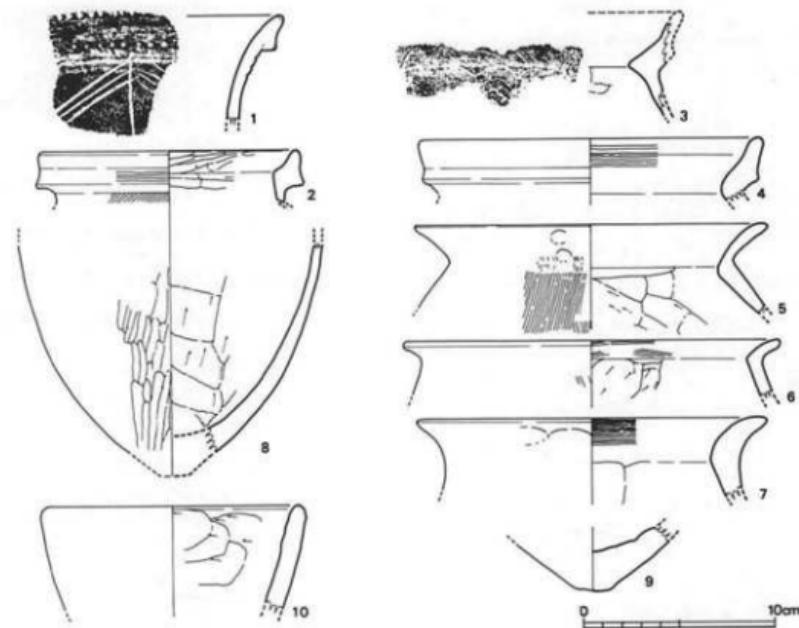
出土遺物

明らかに遺構に伴う遺物は出土していないが、調査区内より土器・鉄鎌 1 本が出土し、また試掘調査で鏡片が 1 点出土している。

土器 (第10—5図)

縄文土器 (1) 鉢状を呈すると考えられ、口縁部は肥厚させ上下端に刻み目を入れ、胸部には沈線で山形状に 3 本、中央にタテに 1 本入れている。晩期と考えられる。

土師器 (2~9) 口縁部が二重口縁を呈するもの (2~4) と「く」の字状に外反するもの (5~7) との 2 形態の甕がある。二重口縁を呈するものは口縁内面のカーブがあまく、器壁が厚い。頸部にクシ歯状工具による波状文を有するもの (3) もある。「く」の字状に外反する口縁を呈するものは、口縁部が長く器壁がうすいもの (5), 短く強く折れ曲るもの (6), ゆるやかにカーブをなし器壁が厚いもの (7) がある。(10) は小型の浅い鉢と考えられる。(8・9) の底部はわずかに平底を有するもので



第10-5図 美鈴谷遺跡出土土器実測図 (1:3)

ある。

鏡片（第10—6図）

斜格雷文帶をもつ内行花文鏡と考えられ、復元面径18.7cmである。破れ口は研磨されている。



第10-6図 釜鉢谷遺跡出土鏡片実測図 (2:3)

鉄鎌（第10—7図）

方頭広根斧箭式である。長さ8.8cm、身部長5.9cm、先端部幅3.1cmである。身部と茎部の境では茎部が細くなり両関節をつくる。



第10-7図 釜鉢谷遺跡出土鐵製品
実測図 (1:2)

(3) まとめ

本遺跡は当初の予想に反して遺構が少なかった。これは低丘陵のため開墾により消滅したものと考えられる。検出した遺構は箱式石棺と土塙のみである。箱式石棺は小形のものであるが石を敷き、側壁・小口ともにていねいな石の使用、組み方をしており、これまでの例から弥生時代の石棺に似ている。県内に於ける箱式石棺は、^(注)弥生時代中期後半に位置づけられている新迫南遺跡のSK1が最も古いものであり、以後県内では広くみられる。本例は形態及び付近からの出土遺物より弥生時代後期～古墳時代初頭と考えられる。また土塙もこの期の墳墓と考えられ、本遺跡は墳墓群であった可能性を考えたい。

(桑原隆博)

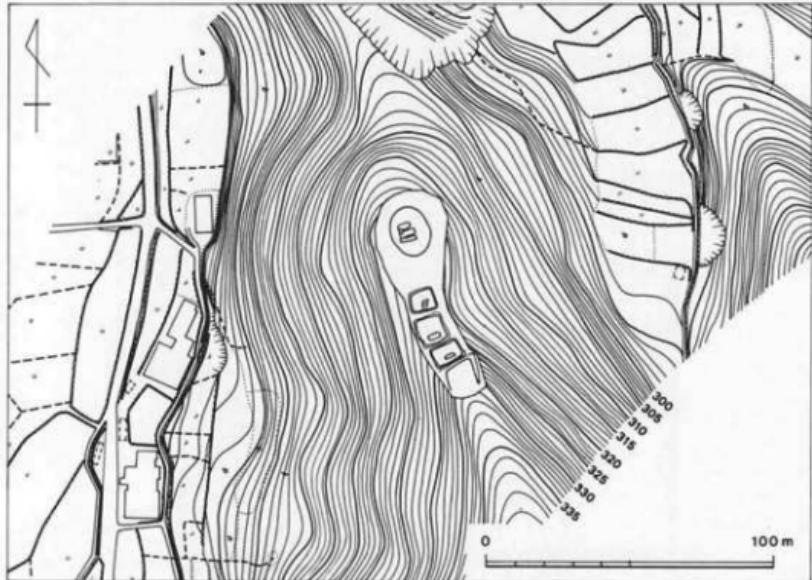
(注) 広島県教育委員会「新迫南遺跡群」「中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」

(2) 1979年

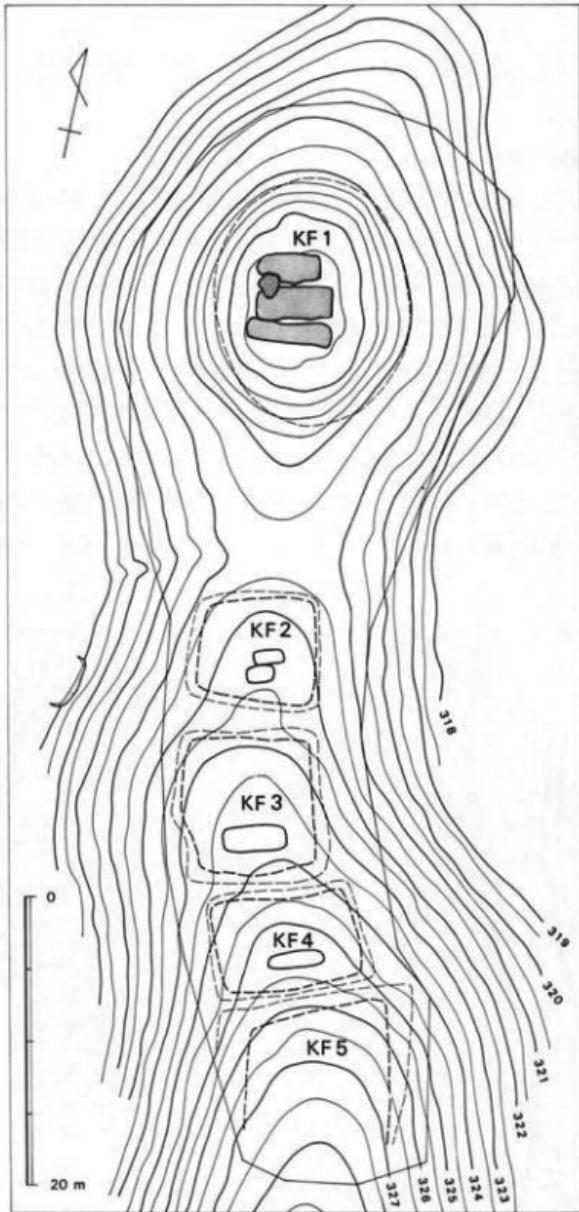
11 横路小谷古墳群

(1) 位置と現状 (第11-1・2図)

横路小谷古墳群は、山県郡筒賀村大字中筒賀字三谷に所在する。中筒賀の平野部はほぼ東西に狭長に広がり、この平野部中央を吉和村に源を発する筒賀川が東流し、本古墳群の位置する丘陵の西側で北流する三谷川と合流する。本古墳群の位置する丘陵は標高972mの天上山より派生し北走する舌状丘陵群の一つであり、東側は同様の丘陵が連なり西側は三谷川の開析作用によって形成された谷によって区切られている。古墳群は標高約320m、北側水田面との比高差約40mを測る丘陵上に在り、中筒賀の集落をほぼ一望できる良好な位置にある。丘陵の先端から約100mほど登った部分にやや平坦な面があり、この部分に第1～5号古墳が、第5号古墳の背後には比高差9mで第6号古墳が築造されている。第1号及び第6号古墳は円墳であり、第2～5号古墳



第11-1図 横路小谷古墳群周辺地形図 (1:2,000)



第11-2図 横路小谷古墳群地形図及び遺構配置図（1:400）
 (アミ目:後世の土塗)

は方墳である。このうち第6号古墳は調査対象地域外にあるため、第1～5号古墳までの調査を行った。

(2) 調査の概要

第1号古墳

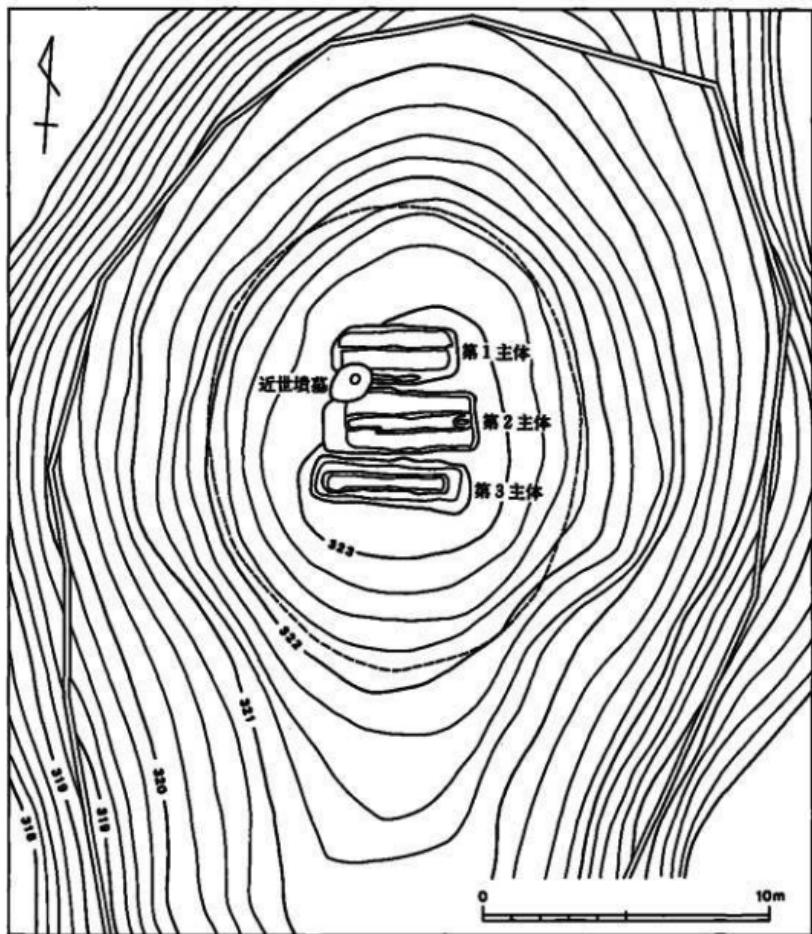
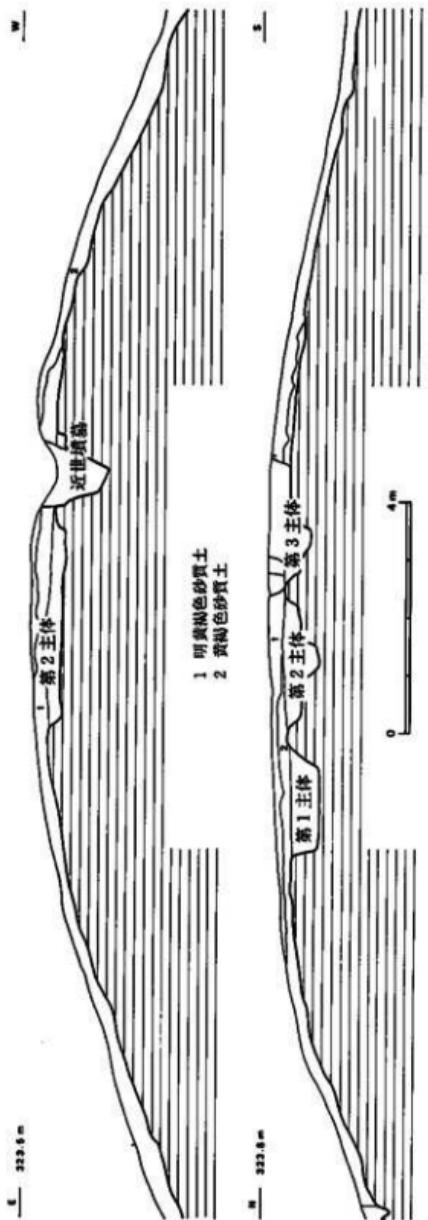


図11-3 横路小谷第1号古墳の丘実測図 (1:200)



a 墳丘 (第1-3・4図)

第1号古墳は本古墳群中もっとも北側に位置する円墳であり、第2号古墳とは中心距離で約25m離れている。調査前において墳頂部は $7 \times 8\text{ m}$ の範囲のほぼ方形状の平坦面をなし、東側及び西側は急斜面で南側・北側は自然の尾根の連なりによって緩やかに下っていた。調査にあたっては東西、南北方向にそれぞれ試掘溝を設定し、表土下約20~30cmで地山層に達することが確かめられた。よってこの古墳は自然地形をわずかに整形し、墳頂部に少し盛土をしただけのもので、規模は東西約19m、南北約18mと考えられる。本古墳に伴う周溝等の外部施設は認められなかった。

b 内部主体

主体部は、墳頂部に地山層より掘込んだ状態でほぼ東西に主軸をとる3基の大形主体であり、3基の主体部だけで墳頂部の平坦地のほぼ全面を占める。北側より第1~3主体部と呼称した。各主体部は相互に近接して営まれているにもかかわらず切合うこともなく、また各々の構造は第1主体部が

組合式木棺で、他の2基は割竹形木棺であった。なお第1・第2主体部の西側には両主体部を切って近世の墳墓である土塙が掘込まれていた。

第1主体部（第11—5図）

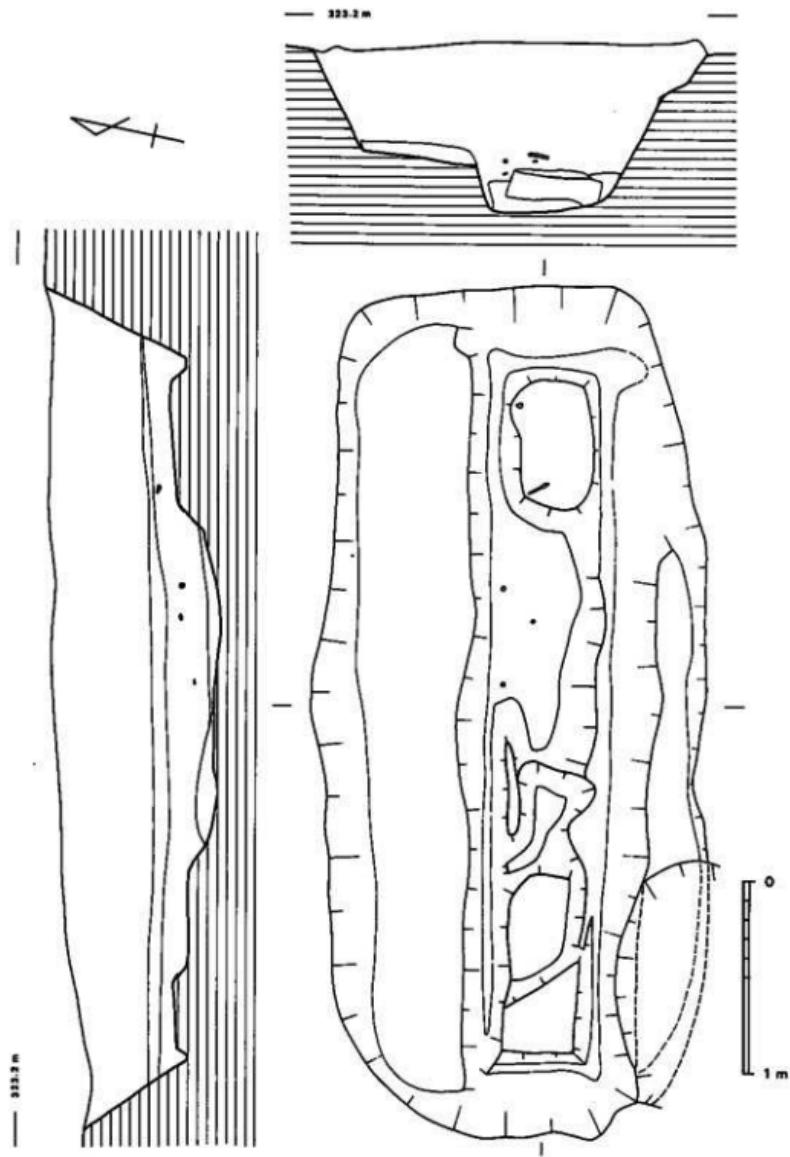
もっとも北側で検出した主体部で主体部中軸線はN78°30'Eを指向する。検出面での規模は幅1.5~2m、長さ約4.4mを測り、中央部がやや膨張する隅丸の長方形プランを呈し南西コーナーを近世の土塙によって切られている。墓塙は北側が2段掘りされているほかは南側壁・両小口壁とも底面より約55°~65°の角度で斜めに立ち上っている。棺底面は検出面の中軸線よりやや南側に偏つており、規模は長さ約3.7m幅約60cmを測る。底面は両小口側が一段高くなつており検出面からの深さは50~65cmを測りレベルはほぼ同一である。また中央部は小口部付近より東側で1段、西側で2段低くなつており検出面からの深さは約80cmを測り、小口部とのレベル差は約20cmある。この間には暗褐色土が充填し、上面には小範囲ではあるが円礫の広がる面を確認した。一方小口部及び側壁部底面には棺材である板木を据えるために幅約15cm、深さ約10cmの浅い溝が廻つておらず、その状況から小口板で側板を挟み「Ⅱ」状を呈していたものと考えられる。以上のことから本主体部構築には、まず墓塙を荒掘し小口側、側板を据えた後棺底面凹み部分を小口部底面レベルまで暗褐色土で充填・整地し、その上面に円礫を敷き遺体を埋葬したものと考えられる。

出土遺物には棺床面より若干浮いた状態で東小口側より鉄製刀子1点があるほか、棺床面整地土中より土器の小片が数点出土した。

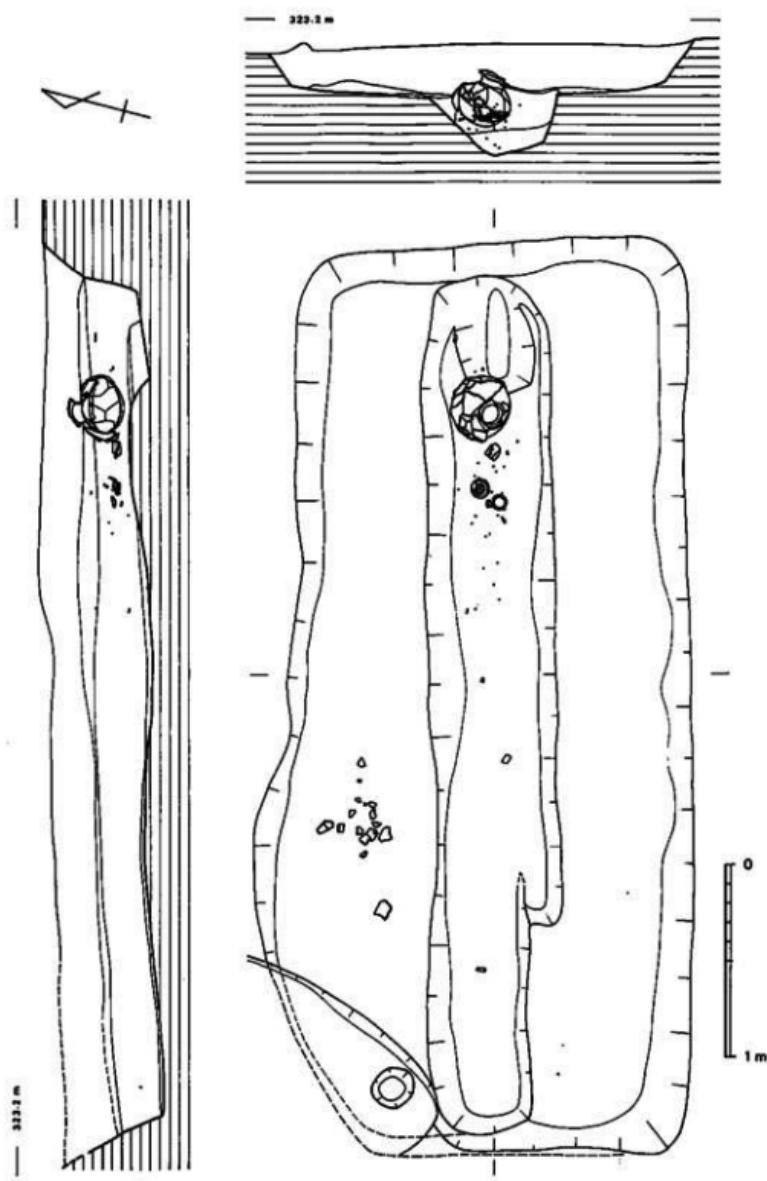
第2主体部（第11—6図）

本主体部は墳頂部ほぼ中央に位置し第1主体部とは約50cm離れており、第3主体部とは南西側で切合い関係をもつ。本主体部はその位置及び副葬品の種類・数量において他の2基の主体部より優越しており、本古墳の中心主体と考えられる。

主体部は地山層より掘込まれており主体部中軸線はN75°30'Eをとる。主体部は2段に掘込まれ1段目の規模は幅約2~2.3m、長さ約4.7m、深さ約25cmを測り断面逆台形を呈し、底面はやや西側に傾斜し下っている。この中央部に2段目が掘込まれておりその規模は長さ約4.4m、深さ約30cmを測り、幅は東側小口部で約60cm、西側では小口部より約1.1m東側によつた付近から約10cm幅を減じている。断面はU字形を呈し、底面は中央部がやや凹み、東側小口部から90cm西側によつた付近が最も高



第11-5図 横路小谷第1号古墳第1主体部実測図 (1:30)

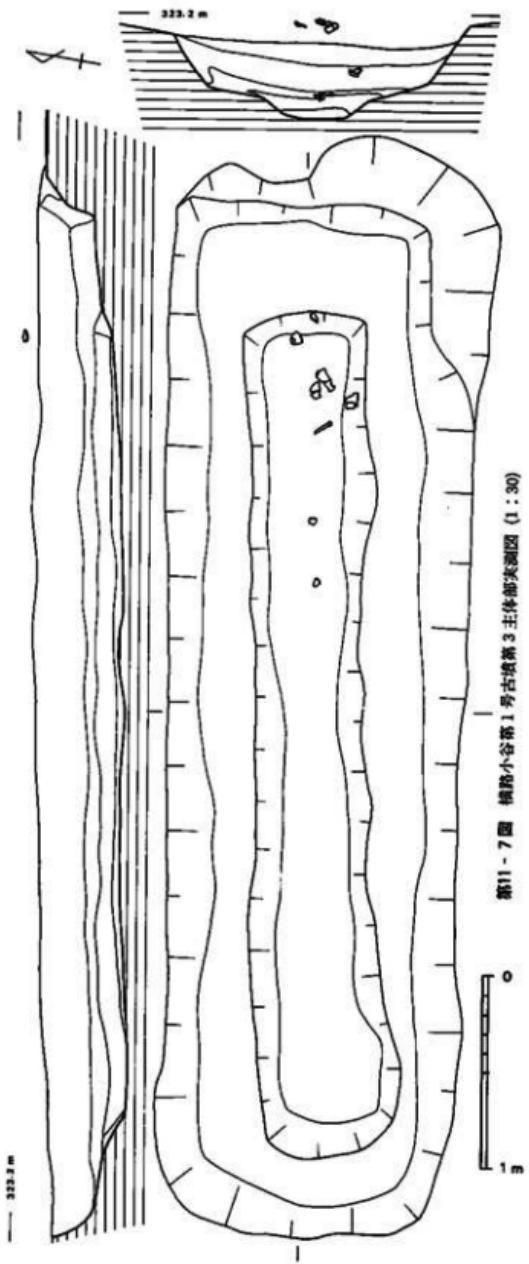


第11-6圖 橫路小谷第1号墳第2主体部実測図 (1:30)

くなる。この付近を中心として遺物が多数出土しており東側が頭位と考えられる。棺内から出土した遺物は銅鏡1, 石鉗1, 勾玉1, 管玉12, 小玉49, 鉄製歎先1, 刀子2, 鉄釧1, そして二重口縁の口端部のみを欠いた壺形土器があり、これらの遺物はほとんどが底面より浮いた状態で出土した。銅鏡は東側小口より約1m西によった付近で、鏡背部を上にし、やや南側に傾斜し底面より約8cm浮いて出土した。銅鏡の直下から、勾玉、管玉、小玉等が集中して出土した。またこの下には長さ9.2cm、厚さ0.3cmの木片が残存していた。銅鏡より南西側に約10cmほど離れて石鉗が出土した。石鉗は環体底部を上にし、やや南側に傾斜、底面より約10cm浮いた状態であった。玉類は銅鏡直下を中心に出土したが、小玉類は銅鏡より約65cm西側によった付近においても出土した。レベル的にみると銅鏡のレベルとほぼ同一か、またはそれ以下が大多数であるが、中には2段目掘方面に近いものもあった。鉄製歎先は銅鏡より約15cm南東に寄った付近で刃部を外方に向け底面より約4cm浮いた状態で出土した。この歎先は中央部より二つ折りにされた状態であり、裏面には布製品の付着を認めた。刀子は東側小口に近接して1点と、足位と考えられる西側小口より約75cm東側によった付近で出土したが、ともに底面より10~20cm浮いた状態であった。鉄釧は銅鏡と石鉗の中間のほぼ同レベルの位置より出土した。壺は東側小口より約65cm西側に寄った付近、鉄製歎先の東側に近接し底面より約5cm浮いた状態で出土した。この壺は二重口縁の2段目の立上り部分を欠くほかはほぼ完形で、上方よりの土圧によって割れたものと思われ、口縁部が胴部内側に落込んだ状態で出土した。また棺外ではあるが、遺構検出面とほぼ同レベルより細かく割られた状態で土器片が出土した。

第3主体部（第11—7図）

割竹形木棺と考えられ、第2主体部と北側の一部が切合っている。墓塗は2段に掘込まれており、墓塗中軸線はN82°45'Eを指向する。1段目の規模は長さ約5.7m、幅約1.5mを測り、側辺側はほぼ平行する。また1段目の底部までの深さは約25~35cmを測り、やや西側に傾斜して下っている。この1段目の底面の東側で約45cm、西側で約25cm、側辺側で約30cmそれぞれ内側よりに2段目の墓塗を掘込んでおり、その規模は長さ約4.4m、幅約55~75cmを測り、深さは検出面より約40~45cmを測る。断面は浅いU字形を呈し、底面はやや西側に傾斜して下っているがほぼ水平である。出土遺物は鉄製刀子1をはじめ高环などの土師器が東側から出土した。刀子は東側小口よ



り約50cm西に寄った付近で切先を内側に刃部を東側に向けて、底面より約12cmほど浮きほぼ水平な状態で出土した。土器類のほとんどは検出面とほぼ同レベルで出土し、一部は棺内より出土した。

c 出土遺物

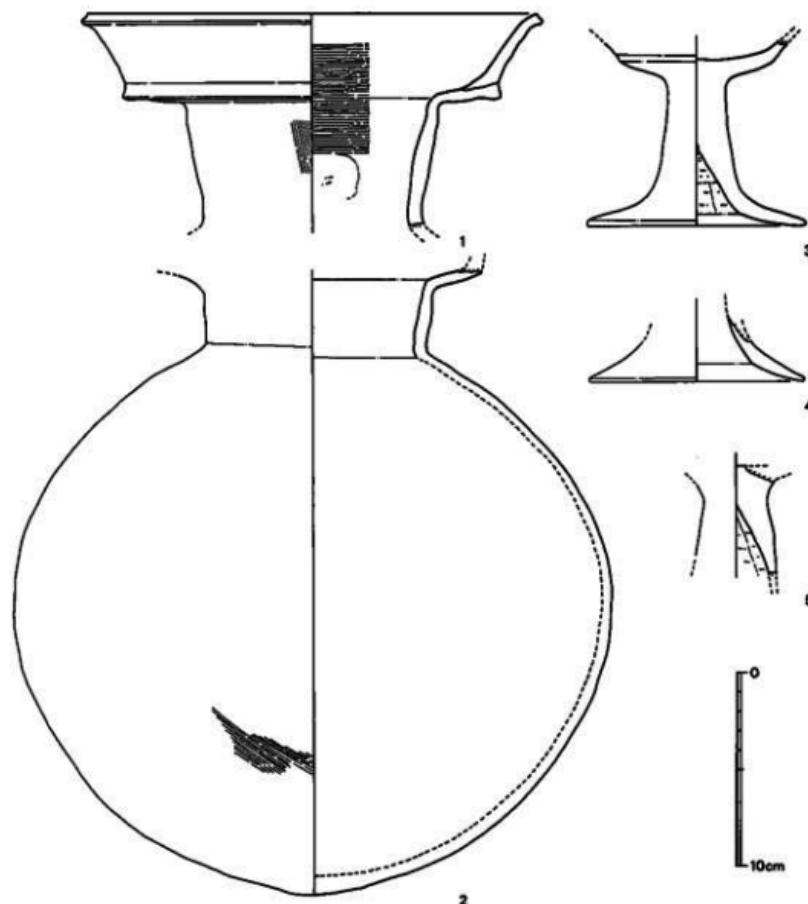
第1号古墳から出土した遺物は、第2～5号古墳出土のものより数量的にも種類においても多く本古墳群の中核的位置にあり、その中でも第2主体部は他を凌駕しており、本地域に於ける首長層の埋葬主体と考えられる。

土器（第11—8図）

壺（1）は第1号古墳々丘斜面より出土したもので、いわゆる二重口縁をもつ壺である。頸部は中位ほどでやや肥厚しながらほぼ直線的に外方に開き、強く屈曲してほぼ水平に外方にのびる。口縁部立ち上り部分はさらに外上方に直線的にのび、口端部はやや屈曲し端面は矩形を呈する。口縁内外面とも横ナデし、頸部外面は刷毛調整後横ナデ。内

面は横位のヘラ削りを行う。2は第2主体部の頭位側より検出したもので、二重口縁をもつ壺である。体部はほぼ球形を呈し、胴部最大径は中位にある。底部はやや尖り気味となる。頸部は体部よりほぼ垂直に短く立上り、強く屈曲して口縁部に至る。頸部内面は横ナデであるが、他の部分は調整不明。なお体部の一部にススの付着が認められる。

高坏（3～5）は第3主体部より出土したもので、3・4とも脚柱部より脚端



第11-8図 横路小谷第1号古墳出土土器実測図 (1:3)

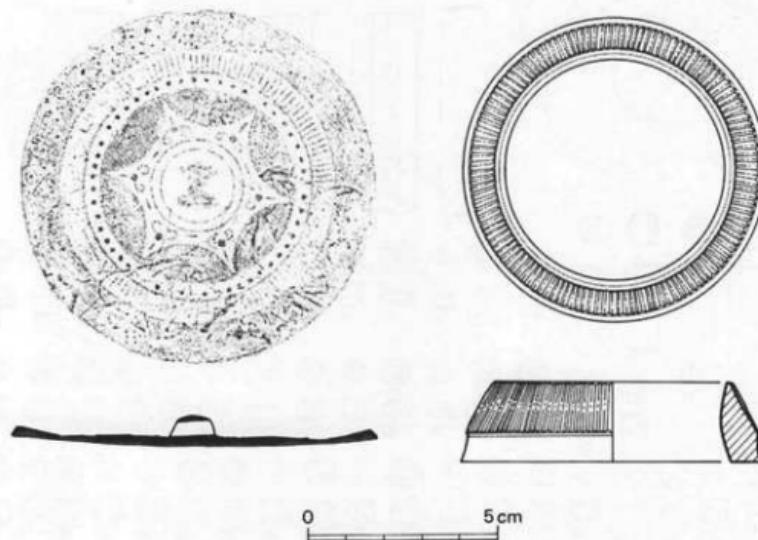
部にかけ強く屈曲し直線的に開く。3は坏底部よりやや屈曲して体部につながる。調整は脚柱部ヘラ削りである。

銅鏡（第11—9図）

全体的に鋸がみられるが、鋸の落ちている部分は白銅色を呈し、良質の銅鏡といえる。鏡面径は9.5cm、縁端部の厚さ0.3cmを測り、鏡面中央の鉢は半球形を呈する有圈鉢座で、鉢孔幅1.6cm、高さ0.8cmを測る。内区の主文は陽出した六弁の花文であり、花文間には小單位文を配している。この花文外方に珠文帯を廻し直交櫛歯文帯に移行している。周縁はやや幅広の平縁となっている。全体的に鋸上りの良好な中形の仿製鏡である。なお鏡背部の一部には鉄鋸と繊維物の付着が認められる。

石鉗（第11—9図）

軟質の緑色凝灰岩製で環体上部径6cm、底部径8.1cm、高さ2cmを測る。環体傾斜面は長さ1.5cmを測り、この傾斜面に沈線によって生じた細い凸帶を放射状に廻らせてい



第11—9図 横路小谷第1号古墳第2主体部出土銅鏡・石鉗実測図 (2:3)

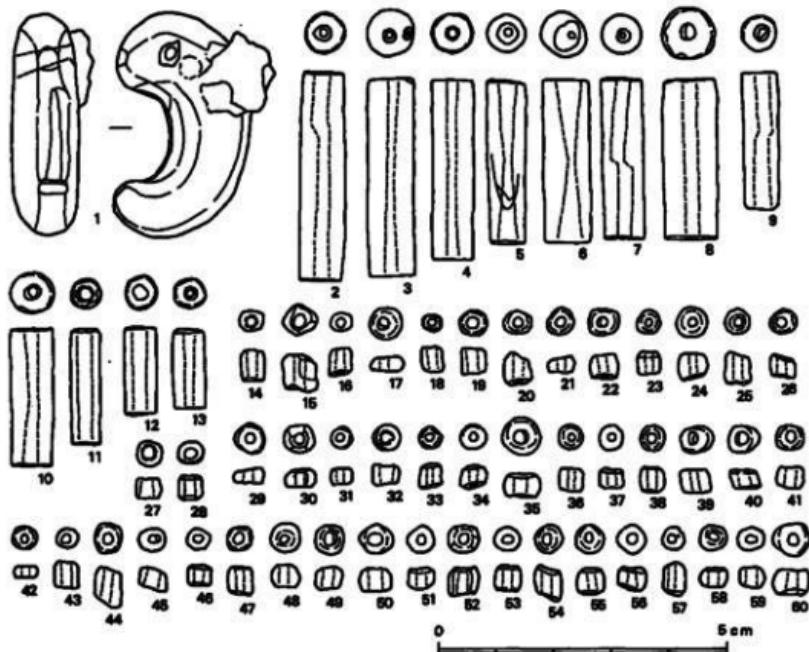
る。環体傾斜面と下段とは浅い1条の沈線を入れて区別しており、環体下段は高さ0.7cmを測り、やや内湾して底面に至る。環体内側は上端より底面にかけ緩やかに内湾している。

玉類（第11—10図）

勾玉（1）は瑪瑙製で半透明の地に薄茶の縞模様をもち、全体的に研磨されている。長さ3.85cm、幅1.15cmを測る。穿孔は一方から行っている。なお頭部に鉄鋸の付着が認められる。

管玉（2～13）は碧玉製のもの（4～6・8）と、緑色凝灰岩製のもの（2・3・7・9～13）がある。比較的大型のものが多く、2は長さ3.6cmを測る。穿孔は、大型品では両方から行っているが、小型品では片側からのみである。

小玉は総数49点を数え、全て淡青色を呈するガラス製である。大きさには多少のば



第11-10図 横路小谷第1号古墳第2主体部出土玉類実測図（1:1）

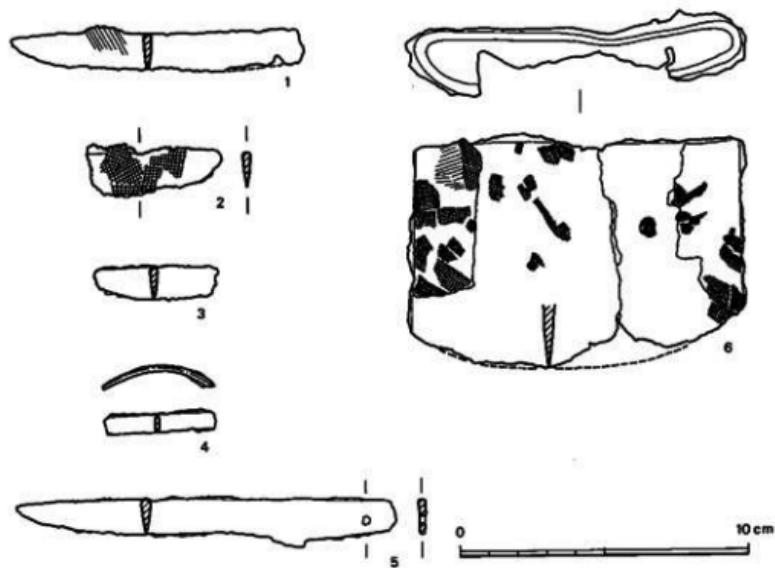
らつきが認められるが、直径4mmほどのものが多数を占め、大きなものでも直径6.5mm程度である。

鉄製品（第11—11図）

1は第1主体部より出土した刀子で、茎部を欠損している。現存長10.3cm、身幅1.3cm、鋒幅3.5mmを測る。なお刀身の一部に木片の付着が認められる。2・3は第2主体部より出土した刀子で、ともに切先及び茎部を欠損している。2は現存長4.6cm、身幅1.2cm、鋒幅3mmを測り、3は現存長4.3cm、身幅1.1cm、鋒幅2.5mmを測る。なお2には布繊維の付着が明瞭に認められる。

鉄釧と考えられる4は第2主体部より出土したもので、現在長4cm、幅6mm、厚さ2mmを測り、周縁部が緩やかにカーブする。

鎌先（6）は第2主体部より出土したもので、矩形の鉄板の両端を折りかえしたものである。横幅11.3cm、縦幅7.8cmを測る。袋部及び裏面には布繊維の付着が明瞭に認められる。



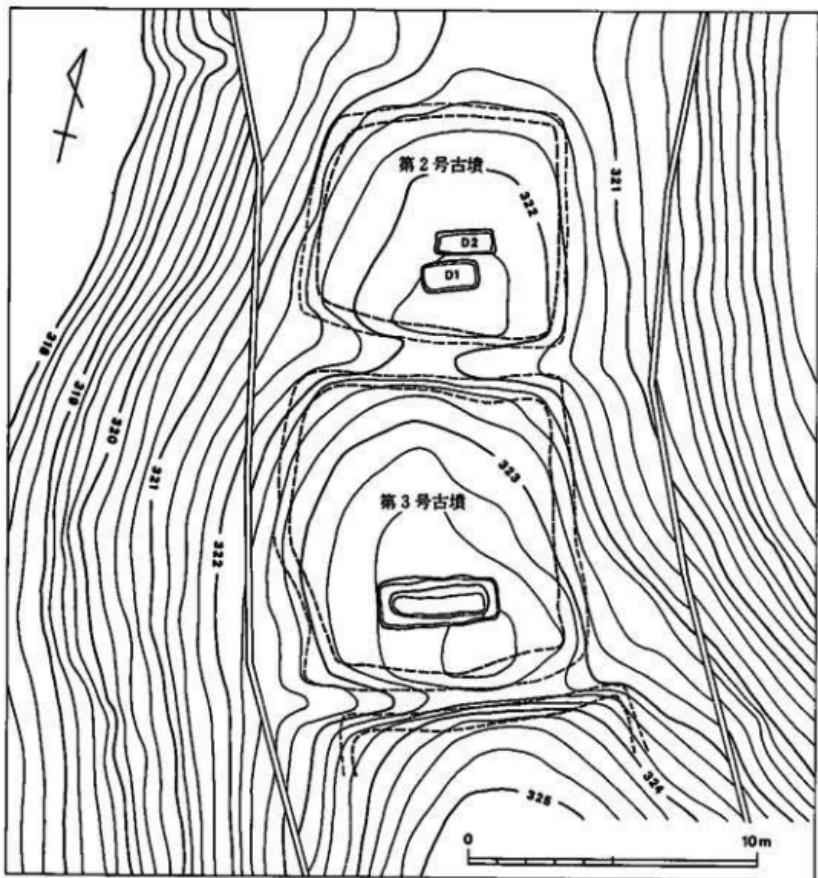
第11-11図 横路小谷第1号古墳出土鉄器実測図 (1:2)

刀子（5）は第3主体部より出土したもので、全長13.3cm、身幅1.2cmを測る。刃部には浅い闇を設け、鋒部は直線的に茎部につながる。茎基部には直径3mmの目釘穴を穿っている。

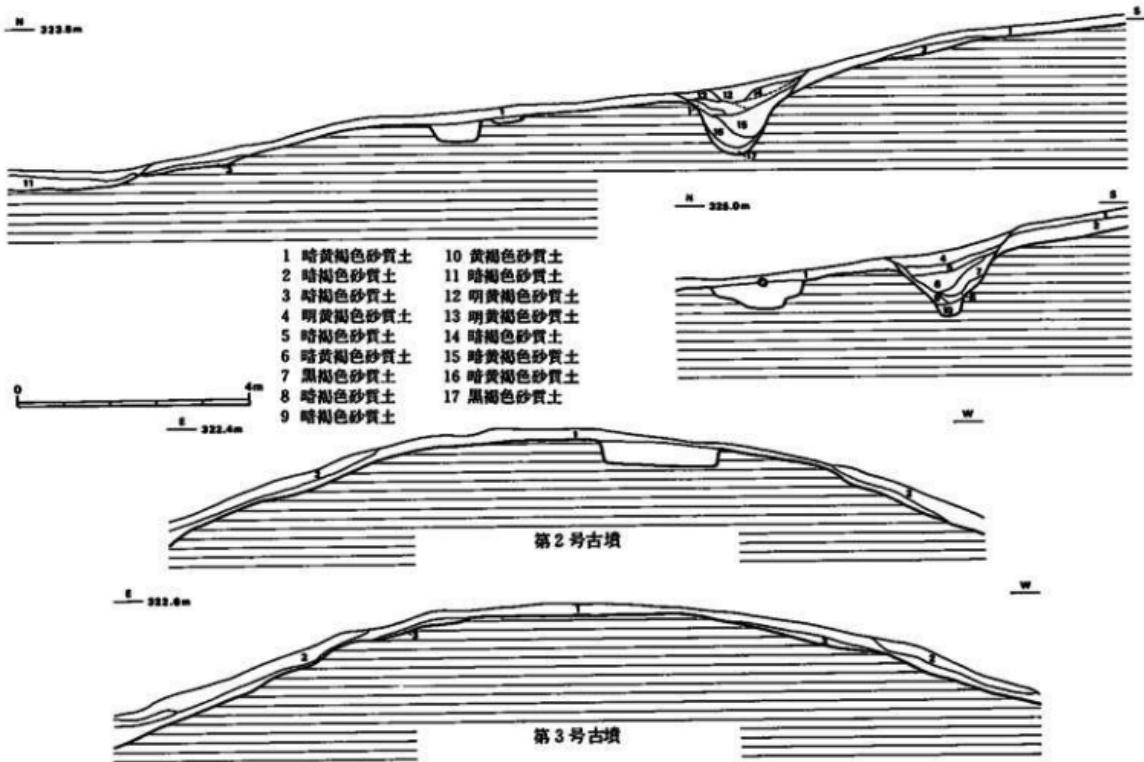
第2号古墳

a. 墳丘（第11—12図）

第2号古墳は第1号古墳の南側の鞍部となった付近をはさんで中心距離約25mをもつ



第11-12図 横路小谷第2・3号古墳々丘実測図 (1:200)



第11~13圖 橋路小谷第2・3號古墳之丘土層剖面圖 (1:100)

て築造された古墳である。旧状においては他の第3～5号古墳同様墳頂部が平坦なだけのもので、第3～5号古墳にかけ階段状に平坦面がつづく状況を呈していた。調査にあたっては東西南北4方向に土層観察用の畦畔を残しさるにこの畦畔の横にサブトレンチを墳丘斜面に入れて墳端部の追求を行った。その結果第2号古墳は南側に背面溝を有し、東・南・北側3方向の自然地形をわずかに整形して造った1辺約8m、背面溝底面よりの高さ約2mのほぼ正方形に近い方墳である。本古墳についても自然地形のわずかな整形だけにとどまっているため明瞭な盛土は認められなかった。背面溝は幅約3m、深さ約2mを測り断面U字形を呈し、溝中には第3号古墳よりの流失土のほかに最下層に黒色土の堆積が認められた。しかし第3号古墳との切合い関係は認められなかった。

主体部は墳頂平坦部の中央よりやや南側に偏つて素掘りの土塗を2基確認し、北側に位置する第1主体部より管玉2、ガラス製小玉10が出土した。

b. 内部主体（第11—14図）

第1主体部

墳頂平坦部中央よりやや南側に寄つて検出した素掘りの土塗で主体部中軸線はN 75° Eを指向する。土塗は地山面より直接掘込まれておりその規模は長さ2m、幅1m、深さ45cmを測り断面逆台形を呈する。塗底面はほぼ水平で小口部は底面よりほぼ垂直に近い状態で立ち上る。出土した玉類は土塗の北東コーナーを中心に塗底面より約5～25cm浮いた状態であった。

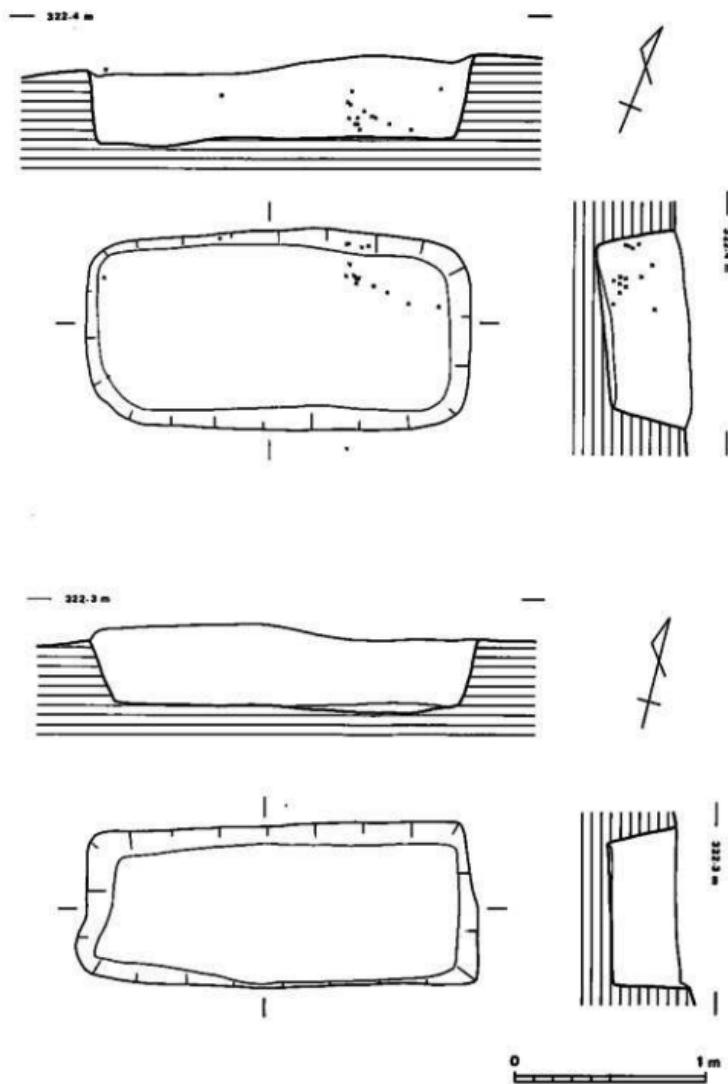
第2主体部

第1主体部の南側約20cmほど離れて検出した主体部で主体部中軸線はN 76° Eを指向する。規模は長さ2.05m、幅85cm、深さ40cmを測り断面逆台形を呈する。塗底部はほぼ水平で両小口部及び側辺部は塗底部よりほぼ垂直に立っている。棺内からは遺物はまったく出土しなかった。

c. 出土遺物

土器 土師器（第11—15図）

高壇の壺部と考えられるもので墳丘斜面より出土したものである。体部より口縁部にかけ緩やかに内湾して続きボル状を呈する。口端部は横ナデし体部内面は横位のヘラ磨きを行っている。

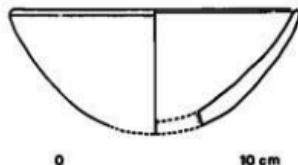


第11 - 14圖 橫路小谷第2号古墳第1(上)・第2(下)主体部実測図 (1:30)
(×:玉類)

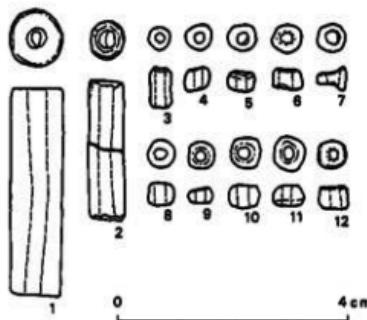
玉類（第11—16図）

管玉（1・2）は緑色凝灰岩製で、1は直径1cm、長さ3.8cmを測り穿孔は両方より行っている。2は直径6mm、長さ2.4cmを測るもので中央で2つに割れている。穿孔は両方より行っている。

小玉（3—12）は総数10点を数え、すべてガラス製である。大きさもほぼ同一で直径5mmほどのものがほとんどである。



第11-15図 横路小谷第2号古墳出土土器実測図（1:3）

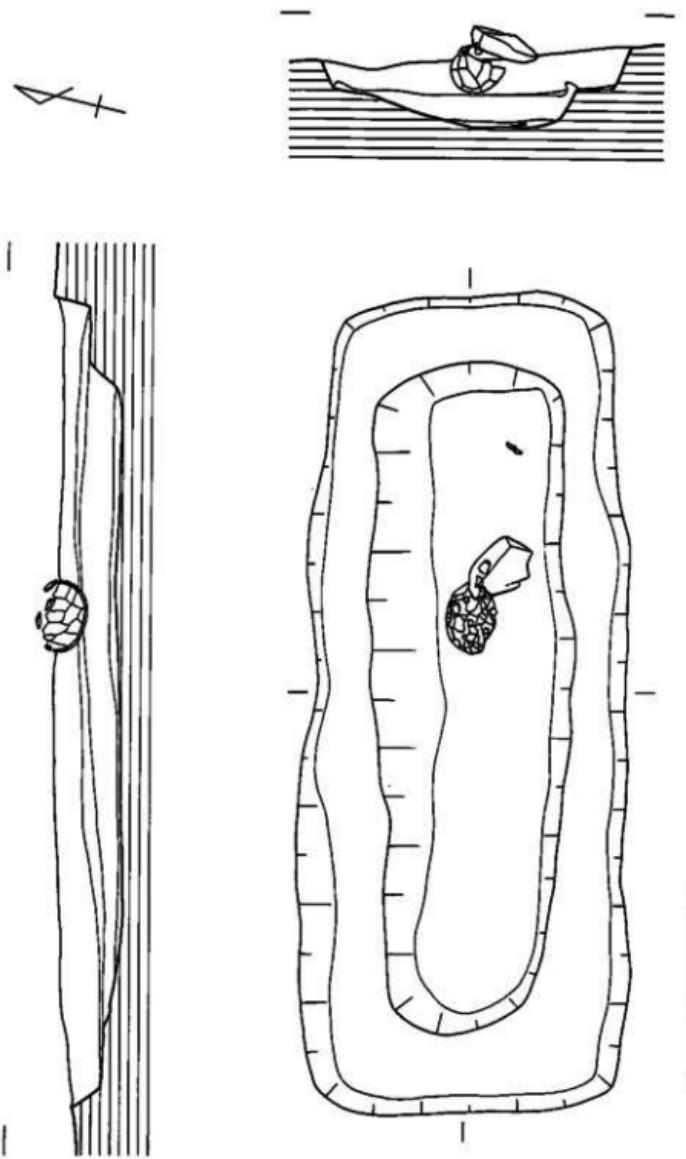


第11-16図 横路小谷第2号古墳第1主体部出土玉類実測図（1:1）

第3号古墳

a. 墳丘（第11—12・13図）

第2号古墳の背面溝に北側の墳丘面を接して營まれたもので、第2号古墳とは中心距離約16m、墳頂部比高差約1.4mを測る。旧状においては第2号古墳同様平坦な墳頂部を確認できただけである。尾根線はこの付近でやや東側に屈曲しており調査にあたっては東西南北4方向及び第4号古墳との関連を観察するため尾根線に沿って土層観察用畦畔を残して掘下げを行った。本古墳は一辺約10mの方墳であり、第2号古墳同様南側に幅約3m、墳丘肩よりの深さ約1mを測る断面V字形の背面溝をもつ。古墳構築に際しては自然地形をわずかに整形しただけで明瞭な盛土はなかったものと考えられる。墳頂部はやや北側に向け傾斜して下っており、主体部はこの墳頂部の中央よりやや南に偏って1基確認した。また背面溝中には第4号古墳方向より流入した土が充満し、底面付近には暗褐色土の堆積が認められた。なお、第3号古墳南側の墳丘断ち割りの結果、第3号古墳主体部南側掘方より75cm南側によった付近で第4号古墳の本来の墳丘肩と思われる地山が下る部分を検出しており、第3号古墳が第4号



第11-17圖 橫路小谷第3号古墳主体部剖面図 (1:30)

古墳より後につくられたことが明らかとなった。

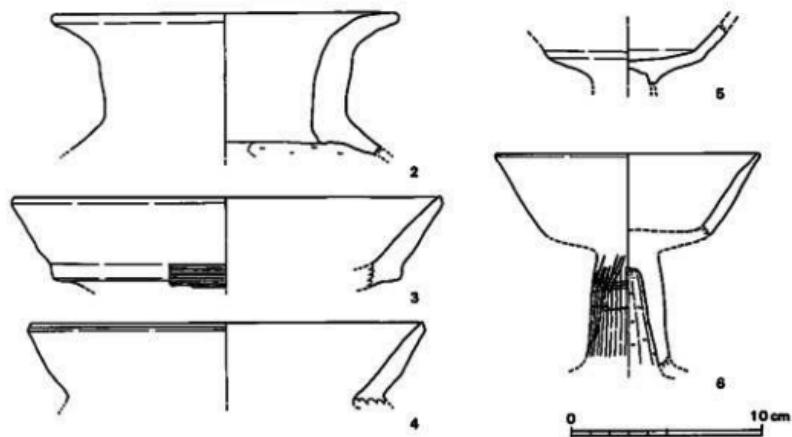
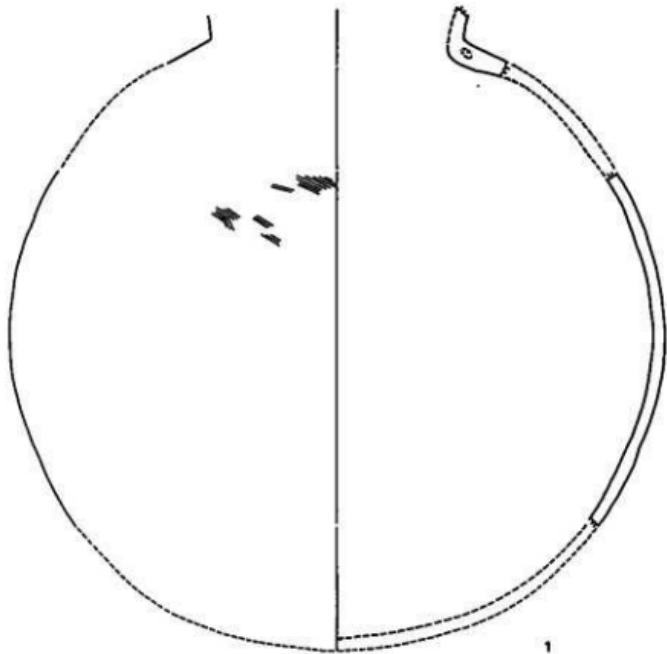
b . 内部主体（第11—17図）

主体部は墳頂部よりやや南側に偏つて検出し、主体部中軸線はN77°Eを指向する。土塇は2段に掘込んでおり検出面における規模は長さ約4.7m、幅は東側で約1.45m、西側で約1.7mを測り、約13~21cmの深さで平坦な面をつくり出している。この平坦面のほぼ中央、両小口部より約30cm、側壁側で20~30cm離れて主体を掘込んでおり、その規模は長さ約3.4m、幅は東側小口で約1m、西側小口で75cm、検出面よりの深さは30~35cmを測る。底面断面は浅いU字形を呈しほば水平となっておりこの部分に割竹形木棺を埋置したものと考えられる。主体部検出面の東側掘方より約1.4m西に寄った付近で35×20cm大の板石が倒れかけた状態で検出し、また、その石に近接して口縁部を欠損した壺が底面より約20cm浮いた状態で出土した。その他、主体東側小口より西側に約30cm寄った付近で底面に密着した状態で鉄製刀子1点が出土した。

c . 出土遺物

土器 土師器（第11—18図）

壺（1~3）1は主体部内に落込んだ状態で出土したもので口縁部を欠損する。体部はほぼ球形を呈し頸部最大径は体部中位にある。底部は丸底となるものと考えられる。頸部は体部より強く屈曲しほば垂直に立ち上るものと思われる。調整は体部外面上半は斜位の刷毛調整、下半は不明。内面は縦位または斜位のヘラ削りを行っている。2は単純口縁の壺の頸部より口縁部にかけてであり、頸部は体部よりほぼ垂直に立ち上りつつ外反する。口縁部は頸部より緩やかに外反して短くのびて終る。器肉は総じて厚手でとくに頸部中位がもっとも厚くなる。外面調整は横ナデ、内面は口縁部にかけ横ナデし、体部にかけてはヘラ削りである。3は二重口縁をもつ壺の口縁立ち上り部で中位ほどで外肥しながらほぼ直線的に外方に開く。内外面とも横ナデし、口縁部下半の外面は一部横位の刷毛調整。4は口縁部の一部で頸部より「く」の字形に屈曲してやや内湾気味に短くのびて終る。口端部には浅い1条の沈線を入れる。内外面とも横ナデ。5壺底面はほぼ平坦で底部と体部との境界には明瞭な段をつくる。壺内外面とも横ナデ。6壺底部を欠損する。壺体部はほぼ直線的に外方に開き、口縁部はやや尖る。脚柱は壺部との接合部分がもっともすぼまり、中位にかけては筒状を呈する。壺体部は内外

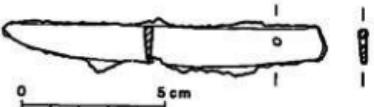


第11-18圖 橫路小谷第3号古墳出土土器実測図 (1:3)

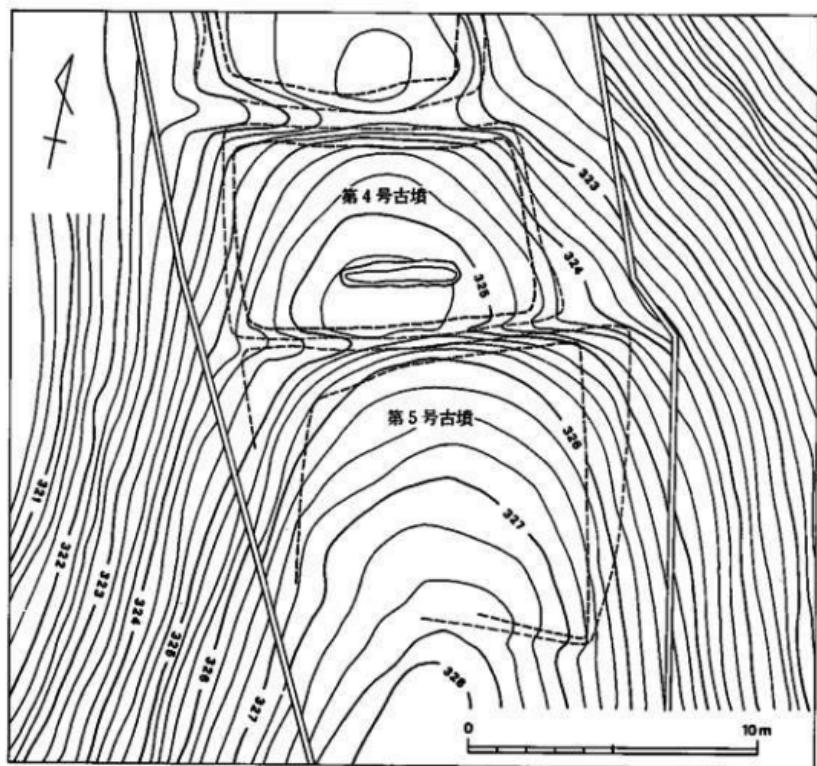
面とも横ナデ。脚柱部外面は縦位の刷毛調整後、横位または縦位の細かいヘラ磨き。
内面は横位のヘラ削り。

鉄製品（第11—19図）

刀子 全長11.3cm、身幅1.4cm、鋒
の厚さ3mmを測る。身部より茎部にかけての鋒は直線的にのび、刃部と茎部との境はない。茎部は断面長方形で目釘穴が一ヶ所ある。



第11-19図 横路小谷第3号古墳出土鉄器実測図 (1:2)



第11-20図 横路小谷第4・5号古墳々丘実測図 (1:200)

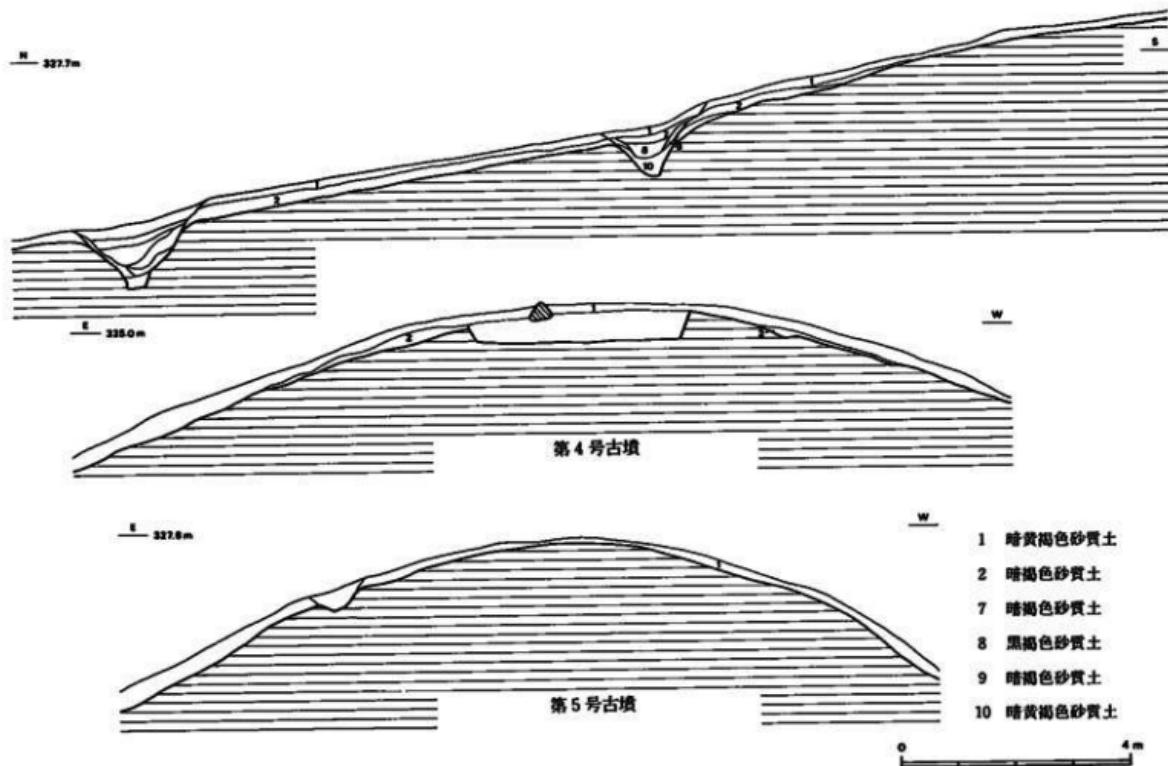


图11-21 国 铁路小谷第4·5号古墳の丘土層断面図 (1:100)

第4号古墳

a. 墳丘（第11—20・21図）

第3号古墳とは中心距離約10m 南東方向に離れて存在し墳頂平坦部のレベル差は約1.7m を測る。調査前に於ては第2・3号古墳ほど明瞭な平坦面は認められず約4×5m のわずかな範囲の緩傾斜面を認めるだけであった。調査にあたっては4方向に土層観察用畦畔を残し掘下げを行った。その結果北辺20m, 南辺22m, 東辺11m, 西辺15m を測る長方形プランを呈する方墳で、南側に幅約1m, 南辺墳丘肩よりの深さ約70cm を測る背面溝が掘られていることが明らかとなった。墳丘北辺部は他の3辺と異なり強く弓状にカーブしている。これは第3号古墳々丘断ち割りで明らかになったように第3号古墳築造に際して第4号古墳々丘北側を第3号古墳背面溝でカットし、第3号古墳々丘南側を整形した結果と考えられる。このことから第4号古墳は本来東西辺に於ても約20m の長さをもち、正方形に近いプランを呈していたものと考えられる。土層観察によると墳頂部では表土下に約10cm内外の厚さの盛土が認められ、墳丘斜面に於てもこの流出土が認められた。また背面溝中には第5号古墳からの地山流出土等の堆積が認められた。墳頂部は水平面に対し約8°の傾斜をもって北側に下っている。墳頂部の主体部直上には断面三角形の石2個が置かれており、墓標石としての性格をもつものと考えられた。またこの石の周辺から破碎された状態で高壙が1点出土した。主体部は墳頂部中央よりやや南側に偏って、南側墳丘肩より約2m付近で南北辺に平行して1基を確認した。

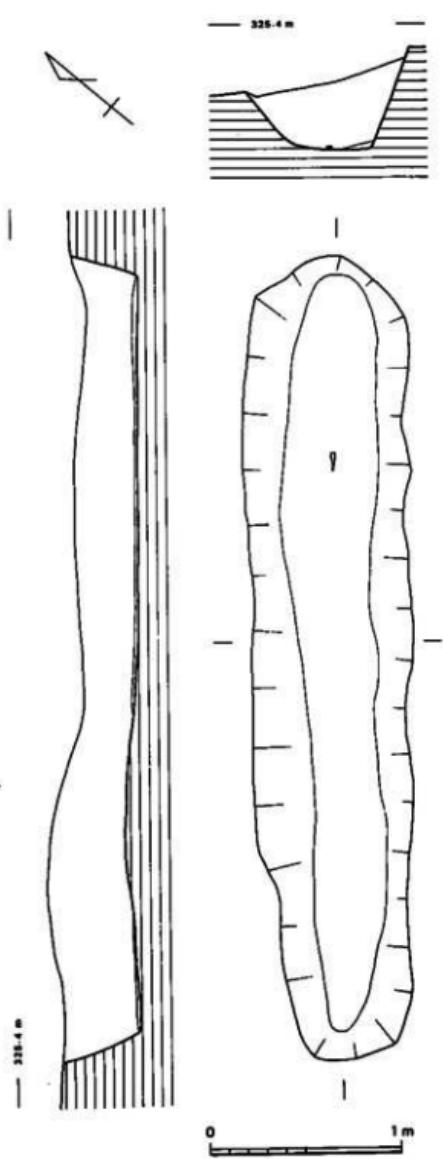
b. 内部主体（第11—22図）

主体部はほぼ地山面に近い面で検出した。主体部中心軸はN50°Eを指向する。土塁は素掘りで規模は長さ4.15m, 幅85cm, 深さ30~45cmを測り、両小口側は丸く側壁側はほぼ平行するプランである。底面はほぼ水平の平坦面をなし、両小口は約70°の角度をもって立ち上り、断面は逆台形を呈する。出土遺物は東側小口より約1m 西側によった底面中央で刃部先端を西側小口に向け底面に密着した状態で出土した鉄製刀子1点だけである。

c. 出土遺物

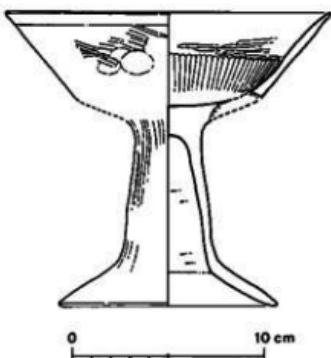
土器 土師器（第11—23図）

高壙 壕底部の一部を欠損する。壙体部はほぼ直線的に外上方に開き口端部はやや



第11-22図 横路小谷第4号古墳主体部実測図 (1:30)

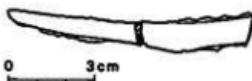
尖り氣味に終る。脚柱部は筒状を呈し脚部にかけて強く屈曲し外方に直線的に開く。坏口縁部内外面とも横ナデ、体部外面斜位のヘラ磨きを行い、一部指頭圧痕を残す。体部内面は中位まで横位のヘラ磨き、下半は縦位のヘラ磨きである。脚柱部外面は縦位のヘラ磨きを行い、内面は横位のヘラ削りである。脚部は外面調整不明、内面横ナデである。



第11-23図 横路小谷第4号古墳出土土器実測図 (1:3)

鉄製品 (11—24図)

刀子 茎部は欠損しており残存長8.6cm, 身幅7.5mm, 鋒幅2mmを測る。身部はわずかに屈曲する。



第11-24図 横路小谷第4号古墳
出土鉄器実測図 (1:2)

第5号古墳

a. 墓丘 (第11—20・21図)

第5号古墳は第4号古墳と中心距離約10m 南東方向に離れており、墳頂部レベル差約3mを測る。旧状において第5号古墳は第2～4号古墳とは異なり墳頂部と考えられる平坦面を持たず、緩傾斜面をなし、背後から第6号古墳にかけその傾斜度を強めている。調査の結果、本古墳の東・西・北辺の状況は明らかにできたが、南辺については検出しえなかった。東辺約12m、西辺約8m、北辺約12mを測り、平面プランは北東隅が突出する不整形プランを呈する。また北辺は第4号古墳北辺同様強く弓状にカーブしている。墳頂部は水平面に対し10°近い傾斜で北側に下っており、表土を排土するとすぐに地山面に達する状況にあった。また東西辺の墳丘斜面もかなりの傾斜をもっており地山直上にわずかに盛土流出土と考えられる暗褐色土の堆積が認められた。主体は検出できなかった。また出土遺物もなかった。

(3)まとめ

横路小谷古墳群の概要は以上のとおりである。ここでは横路小谷古墳群の特徴を整理してまとめとしたい。

墳丘についてみると本古墳群は、幾段かの傾斜変換面をもち、この平坦面先端部に比較的規模の大きな円墳を築造している。第1号古墳はこの先端部の自然地形のわずかな高まりを利用してしたものでほとんど盛土ではなく墳端部を明らかとすることは困難である。第2～5号古墳にかけては、第1号古墳の南側にのびた傾斜のやや緩やかな丘面に築造しており、旧状においては各墳頂部の平坦面が階段状に連なる状況を呈していた。調査の結果、第2～4号古墳にかけては丘陵尾根に直行する溝によって区画し、尾根と平行する側をわずかに地山整形して方墳を築造している。また第1号古墳同様、第2～5号古墳にかけては、墳頂部盛土はごくわずかであったと考えられる。前述のように、本古墳群は自然地形をわずかに整形し、溝を掘削することによって墳形を整え盛土もわずかに存在したものである。このような古墳の在り方は近年県下にお

いて類例が増加しており、本古墳群西側に隣接する板迫山古墳群^①、福山市駅家町石
鎧權現古墳群^②、同市加茂町吹越古墳群^③などがあげられる。どの古墳群についても古墳
群の立地する丘陵の良好な位置に比較的大きな古墳があり、丘陵鞍部または緩斜面に、
溝によって区画された方墳がある状況を呈している。また時期的にみても、およそ
5世紀初頭～前半期にかけてであり、古墳時代前期における特徴のひとつとしてあげ
られるものと思われる。

次に内部主体についてみてみたい。第1号古墳は組合式木棺1基、割竹形木棺2基
の計3基からなる。第1主体部は組合式木棺で内法3.1×0.6mを測り、板木を「Ⅱ」字
形に組合せたものと考えられる。第2主体部は割竹形木棺で主体の掘方は幅約65cm、
深さ25cmを測り推定直径約50cm、長さ約3.3mの木棺を直葬したと考えられる。第3
主体部は第2主体部同様割竹形木棺と考えられるが、木棺の規模については不明であ
る。第2号古墳は2基の素掘りの土塙で木棺直葬と考えられる。第3号古墳は割竹形
木棺と考えられるが木棺規模は不明である。また第4号古墳については素掘りの土塙
であるが底面の状態から割竹形木棺を直葬した可能性を考えられる。第5号古墳につ
いては主体部を検出することができなかった。これは第5号古墳付近より丘陵傾斜の
度合いが強まっているため、主体部が流出したものと考えられる。

以上のように本古墳群における棺構造をみると割竹形木棺3+1、組合式木棺1、
素掘りの土塙2で割竹形木棺が主流を占める。しかし本古墳群の割竹形木棺は粘土床
又は粘土櫛というような粘土をもって被覆するものではなく、単に棺床面をU字状に
浅く掘りくぼめ直葬するものである。県内における割竹形木棺埋葬例としては琴柱形
石製品を副葬していた三次市西酒屋町大久保第5号古墳^④、福山市駅家町才谷第4号古
墳など12古墳14例あり、そのほとんどが粘土櫛を有し木棺の規模については長さ約2
～3m、棺径40～45cmと推定されている。また福山市加茂町石鎧山第1号古墳第2主
体部は礫床を有する竪穴式石室で割竹形木棺を埋納する県内でも稀な例として知られ
ている。これら県内の類例に比して本古墳群の割竹形木棺は前述のように粘土櫛などの
施設は持たないもののその長さは3m以上と長大なものが多く、先進地域の前期古
墳の木棺のあり方と共通する点がある。

ところで第1号古墳については3基のうち2基が割竹形木棺、1基が組合式木棺
とその棺構造が異っている。このうち切合い関係をもつのは第2主体部と第3主体部

でありその前後関係は第2主体部→第3主体部と考えられる。第2主体部と第1主体部との前後関係は明らかではないが、占地の在り方から考えると第2主体部がまず造られ第1・第3主体部と造られたと考えるのが妥当である。しかし検出時の観察からすると各主体部の築造にかかる時間的差はそれほどなかったと考えられ、短期間のうちに各主体部が營まれたと考えられる。しかし棺構造の差異が何に起因して生じたものかについては明らかでない。

次に出土遺物について第1号古墳第2主体部出土の遺物を中心に述べてみたい。

第2主体部からは銅鏡・石剣・玉類・鉄製品・土師器など多量の遺物が出土した。^⑦県内における石剣の出土例は東広島市高屋町仙人塚第1号古墳があるのみで本主体部出土のものが県内2例目である。仙人塚第1号古墳は箱式石棺を内部主体とした直径約22mの円墳で、石剣とともに珠文鏡・勾玉・管玉などの玉類が出土している。このような副葬品の組合せは本主体部のものと基本的には同一のものである。銅鏡は仿製の内行花文鏡で花文と花文との間の小単位文帯は原型のなごりをとどめるものであり、鏡式としては古いものと解される。鉄製品のうち鍔先については同形式のものは県内においても類例が少なく、三次市西酒屋町善法寺第9号古墳^⑧、三原市沼田東町宮ノ谷第1号古墳出土のものなどが知られており、いずれも前期古墳に属する。本古墳出土ものは故意に折曲げられたものと考えられ、布の付着が認められ布によって包まれていたものと考えられる。また鉄製品のうち小片ではあるが鉄剣と考えられるものが出土した。県内における類例としては広島市高陽町恵下第1号古墳出土のものが知られている程度で類例は少ない。壺は口縁部を欠損するのみでほぼ完形に近い。後述するようにこの壺は棺内に副葬されたものと思われ、このため口縁部を故意に破碎したものと考えられる。土器の特徴などから布留Ⅱ式並行期と考えられる。

次に第1号古墳第2主体部の副葬品の出土状態について考察してみたい。銅鏡及び玉類については前述のように銅鏡を中心にして棺内に散らばっており、また銅鏡直下に木片が残存していた状況から銅鏡及び玉類が一括して木箱に収納されていた可能性が考えられる。また銅鏡については鏡背部に纖維物の付着が認められ布に包まれていたものと考えられる。一方石剣は銅鏡とはわずかな距離をおいて出土しており、また銅鏡・石剣とも鉄錆の付着を認め、銅鏡と石剣との間に鉄剣と考えられる鉄製品が存在する状況などから、これらの遺物が一括して木箱に収納されていた可能性も考

えられる。同様な例は大阪府弁天山B 2号古墳より漆塗壺の中に方格檜文鏡、内行花文鏡とともに石剣が収納されていた例があげられる。これらの遺物についてはそのレベル的位置・土層の状態からさほど原位置を移動したとは考えられず、本来棺内にあったものと考えられる。次に壺であるが、これは前述のように口縁部を故意に破碎したものと考えられる。これはひとつには儀礼的意味をもつと考えられるが、棺内に収納するために口縁部を破碎する必要があったとも考えられる。なぜなら本主体の棺内径については不明確であるが、残存高32.5cmを測るこの壺は本来器高約40cm近かったと推定され、ほぼ棺内径に近似し棺内に納まらなかったと考えられるからである。また棺内に埋納されたと考えるのは、この壺が他の銅鏡・石剣など棺内にあったと考えられる遺物のレベルとほぼ一致し、また同一層序より出土したことからである。このような土器の棺内副葬例は全国的にみても極めて稀であり、京都府尼塚古墳などごくわずかしか知られていない。

以上のように第1号古墳第2主体部の遺物の組合せ・出土状況は県内においても類例が少なく先進地域との共通性を強く感じさせるものが多い。他の古墳より出土した遺物の中で第3号古墳出土の壺は第1号古墳出土のものよりやや後出的であり、出土の状況から棺外にあったと考えられる。

最後に本古墳群の築造順位・年代・被葬者について考えてみたい。築造順位についてはその占地の在り方、また出土土器からまず第1号古墳が筒賀の集落を一望できる本古墳群中最良の丘陵先端部に築造されたと考えられる。第2号古墳から第5号古墳にかけては第4・5号古墳の北側墳丘の状態、又第3号古墳及び第4号古墳の切合いかから第5号古墳→第4号古墳→第3号古墳の順で築造されたと考えられ、第2・3号古墳については切合いがないため明確ではなく、それほど時間的差のない期間に統いて築造されたと考えられる。またこれらの築造年代については第1・3・4号古墳出土の土器やその他の遺物から考え5世紀初頭から前半代にかけ順次築造されたと考えられる。最後に被葬者についてであるが、第1号古墳第2主体部の被葬者はその副葬内容から考えてみて当該地域における首長層であったと考えられ、またこれに近接して葬られた第1主体部・第3主体部の被葬者はこれの近親者であったと考えられる。これは副葬内容の点、本古墳群中の他のものやまた本古墳群よりやや後出するか、あるいは並行するぐらいの時期に築造されたと考えられる板迫山古墳群の在り方などから考えると、

第1号古墳第2主体部の在り方はこれらをはるかに凌駕するものであり当該地域において想像すらできない内容である。当該地域は現在においても狭長な可耕地しかなく当時においても農業生産性は低位にあったと考えられ、また河川においては太田川本流と至近距離にあるとは云っても決して交通の要衝であったとは考えにくい。このような自然環境にあって第1号古墳第2主体部の被葬者の在り方は特異であり、先進地域とのつながりを強く感じさせる副葬品の在り方は太田川下流の広島市周辺の古墳に認められる程度で当該地を含め周辺地域においては明らかにされていない。このよう中で第1号古墳第2主体部の被葬者を析出した社会的背景については現在のところ明らかではないが、当該地を含め周辺の今後の調査の進展をまって再度検討したい。

（銀治益生）

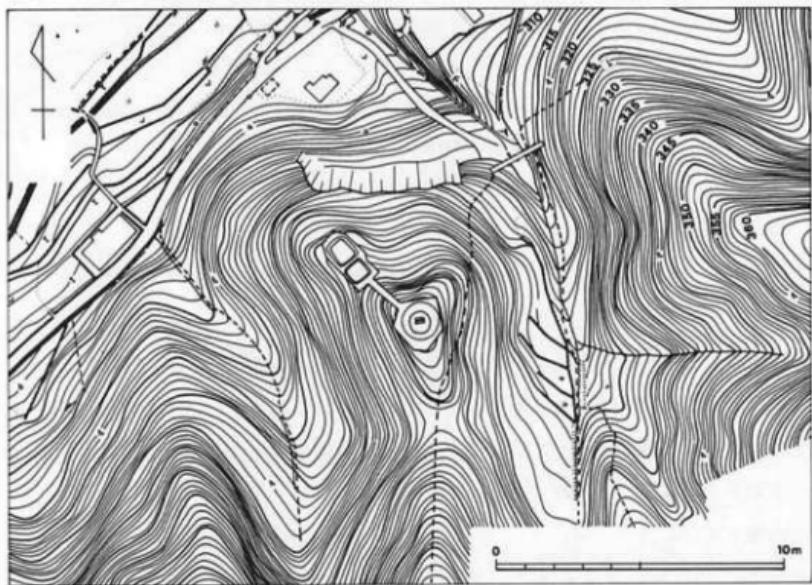
（注）

- ① 本書掲載
- ② (財)広島県埋蔵文化財調査センター『石鏡櫛現遺跡群発掘調査報告』1981年
- ③ 広島県教育委員会 (財)広島県埋蔵文化財調査センター『石鏡山古墳群』1981年
- ④ 広島県教育委員会『中國縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(2)
1979年
- ⑤ 広島県教育委員会『県営駅家住宅団地造成地内埋蔵文化財発掘調査報告』1976年
- ⑥ 前掲書③
- ⑦ 松崎寿和・潮見浩「先史時代の広島地方」『新修広島市史』第1巻 1961年
- ⑧ 広島県双三郡・三次市史料総覧編修委員会『広島県双三郡・三次市史料総覧』
第5篇 1974年
- ⑨ 福井万千「考古編」『三原市史』第1巻、通史編 1977年
- ⑩ 広島県教育委員会『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』
1977年
- ⑪ 竪田直他「弁天山古墳群の調査」『大阪府文化財調査報告』第17輯 大阪府教育委員会 1967年
- ⑫ 堀圭三郎他「尼塚古墳群発掘調査報告」「埋蔵文化財発掘調査概報1969」
京都府教育委員会 1969年

12 板迫山古墳群

(1) 位置と現状 (第12-1図)

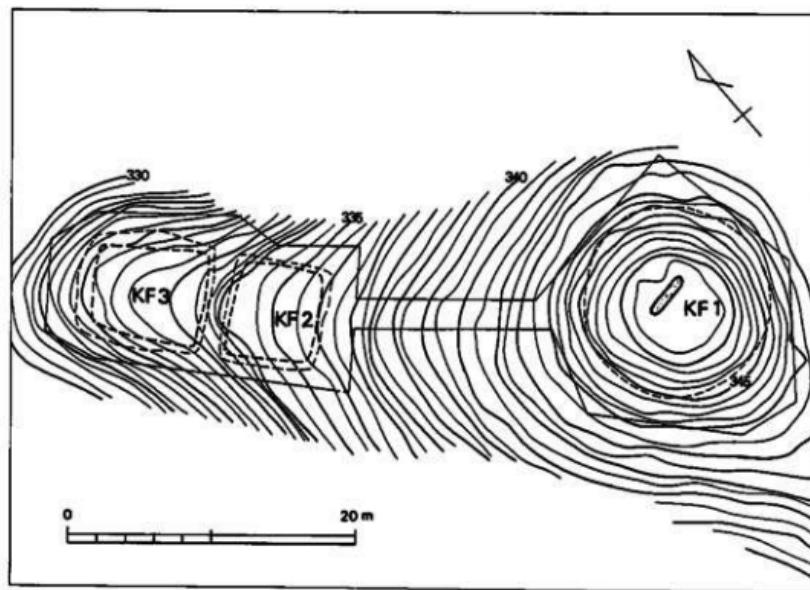
本古墳群は山県郡筒賀村大字上筒賀に所在し、南西から北東へ流れる筒賀川及びそれに合流する三谷川とにより開けた細長い盆地の南西側の丘陵尾根先端部に位置している。古墳群は南から北へ伸びた尾根が先端部で鞍部をなして高まり、その高まりを利用して第1号古墳が築造され、それから急傾斜をなして下り、傾斜のゆるやかになる面を利用して第2・3号古墳が築造されている。円墳1基、方墳2基の計3基から成る古墳群である。第1号古墳の標高は346m、第2・3号古墳のそれは331~336mであり、水田面からの比高は第1号古墳は63m、第2・3号古墳は48~53mである。古墳群の眼下にはわずかな平地があって筒賀川が流れ、むしろ対岸に平地が広がっている。



第12-1図 板迫山古墳群周辺地形図 (1:2,000)

(2) 調査の概要 (第12-2図)

調査前は第1号古墳と第3号古墳の2基と推定されたが、両古墳間にトレンチを設けて調査した結果、第2号古墳を確認した。



第12-2図 板迫山古墳群地形図及び遺構配置図 (1:400)

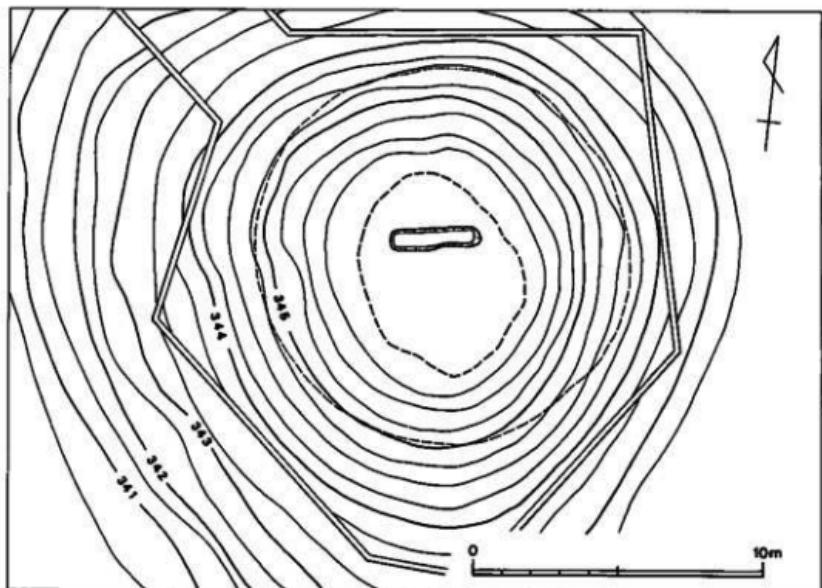
第1号古墳

a 墓丘 (第12-3・4図)

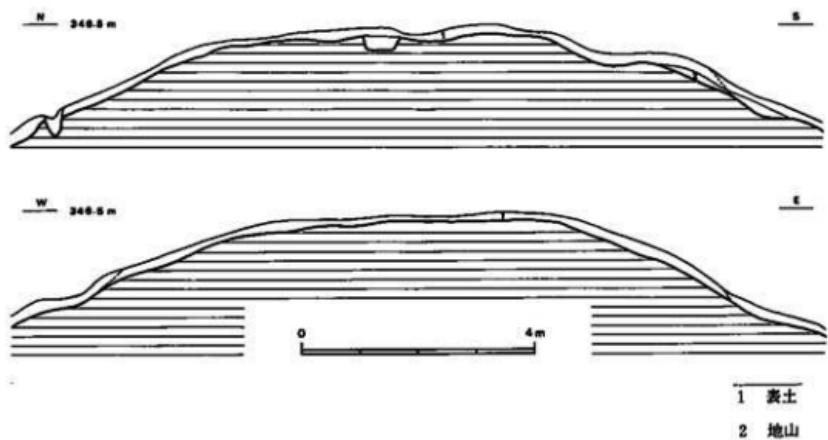
本古墳群中最高所に築造されており、丘陵先端部の自然の高まりを利用したものと考えられる。古墳はほとんど地山の整形により、若干の盛土を行ったものと推定され、尾根幅いっぱいを利用して築造されたものである。そのため墳裾は明瞭でないが、径が約13m、高さが約1.4mを測り、円形を呈している。背面は自然の鞍部により墓域を画すのみで、溝は掘られていない。主体部は墳頂平坦部の北寄りで主軸を東西にとる土塁を1基検出したのみである。

b 内部主体 (第12-5図)

主体部は長方形を呈する細長い素掘りの土塁であり、塁底はわずかなカーブを呈し、東の小口部はゆるやかに立ち上り壁が明瞭でない。割竹形木棺を納めていたもの

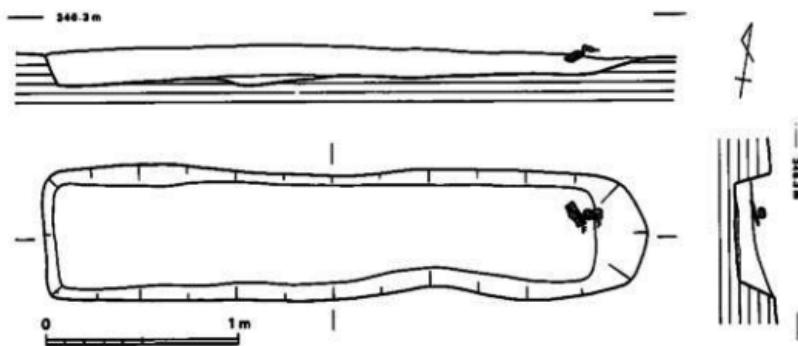


第12-3図 板迫山第1号古墳々丘実測図 (1:200)



第12-4図 板迫山第1号古墳々丘土層断面図 (1:100)

と考えられる。土塁の規模は長さ3.13m、幅が西側で67cm、東側で63cm、深さ10～16cmを測る。遺物は埋土中より勾玉1、管玉2、小玉8及び土塁東端の塁底より若干浮いた状態で鉄斧2が出土した。



第12-5図 板迫山第1号古墳主体部実測図（1:30）
(F: 鉄斧)

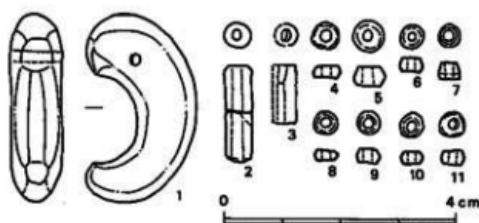
c 出土遺物

玉類（第12—6図）

勾玉（1）C字状に近い形を呈し、片側からの穿孔である。ほとんど面をもたずにおいていねいに研磨されている。

管玉（2・3）小型のもので長短2種ある。両側穿孔である。軟質な材質のため表面は風化している。

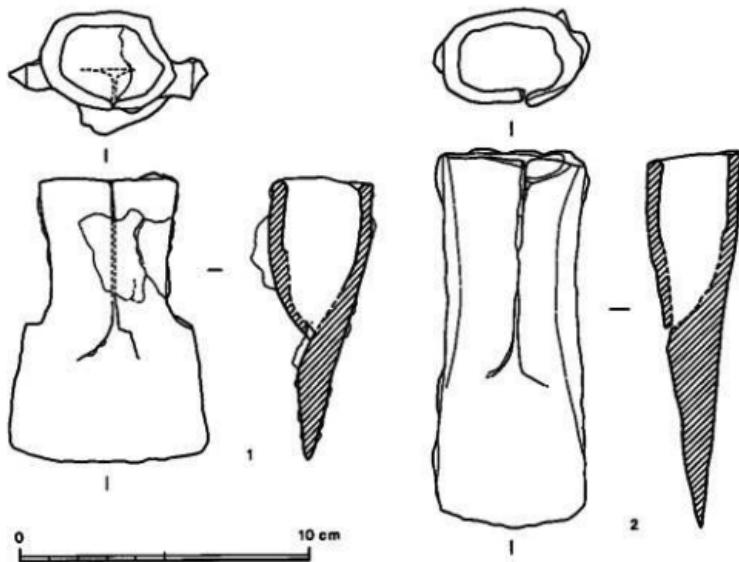
小玉（4～11）形は不定形であるが、中央に稜を有し臼玉状を呈するものである。



第12-6図 板迫山第1号古墳出土玉類実測図（1:1）

鉄器（第12—7図）

鉄斧 有肩式のもの（1）と無肩式のもの（2）である。共に袋穂部は両端を折り曲げて作られ、片刃である。1は全長9.3cm、刃部幅6.8cm、頭部長径4.5cm、同短径3.3cm、袋穂部長5.5cmである。2は全長12.5cm、刃部幅5.0cm、頭部長径4.8cm、同短径3.2cm、袋穂部長6.7cmである。



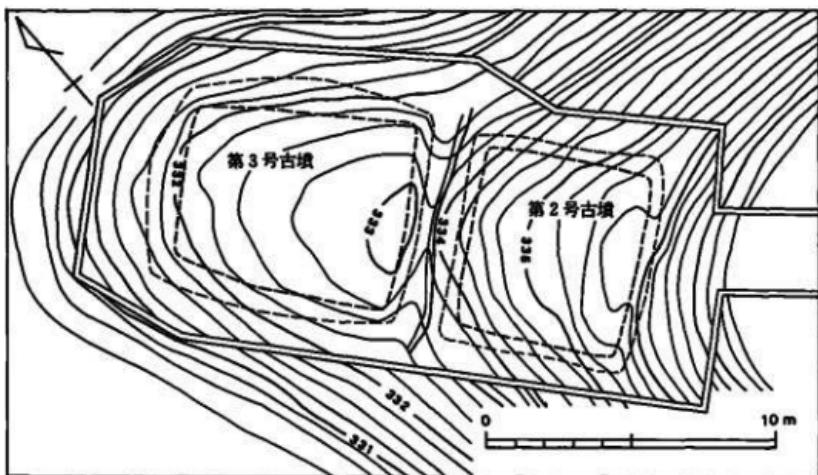
第12-7図 板迫山第1号古墳出土鉄斧実測図（1:2）

第2号古墳

a 墳丘（第12—8・9図）

第1号古墳の北西方向の1段低い丘陵尾根先端部の平坦面を利用して第3号古墳と連続して築造されている。第1号古墳々頂と本古墳々頂との比高差は9.5mである。急傾斜をなしているため当初古墳の存在は予想できなかったが、斜面を削平し、背面には尾根に直交する溝を掘り、前面の第3号古墳との間に断面U字状の尾根に直交する深い溝を掘り墳丘を形造っている。しかし、斜面のため墳頂平坦面は傾斜している。主として地山を削平し、若干の盛土を行って墳丘としたものと考えられる。

墳形は方形を呈し、長さは 7.7×7.1 m、高さは第3号古墳との間の溝底より220cmである。主体部は検出できなかった。



第12-8図 桶迫山第2・3号古墳々丘実測図 (1:200)

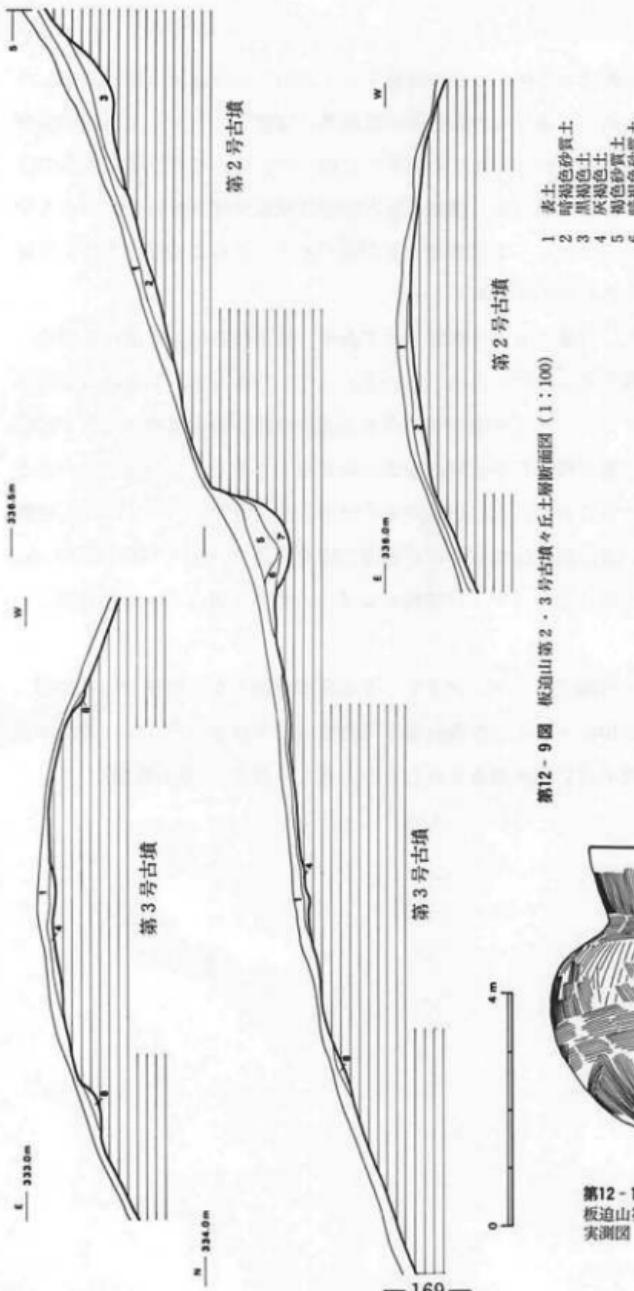
第3号古墳

a 墓丘 (第12-8・9図)

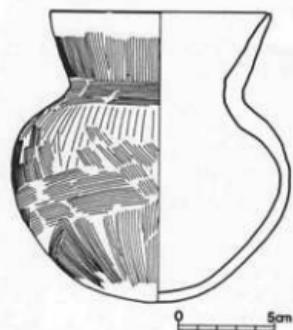
本古墳群中で最も丘陵尾根先端部に築造されており、第2号古墳と連続している。第2号古墳に比べて平坦面上に築造されており、そのため墳頂平坦面も水平に近いレベルを示している。背面の第2号古墳との間には幅約2mの尾根に直交する溝を掘り前面及び両斜面は地山を削平して墳丘を造っている。主として地山削平によるものであろうが若干の盛土は行ったものと考えられる。墳形はやや先狭な長方形を呈し、長さは 8×9.5 m、高さは第2号古墳との間の溝底より28cm、前面墳裾より25cmである。主体部は検出できなかった。

c 出土遺物

土器 土師器 (第12-10図) 丸底を呈する小型の壺である。胴部はやや大形の球形をなし口縁部はく字状に外反するが短い。外面は粗い刷毛状工具による調整である。器壁は厚い。第2号古墳と第3号古墳の間の溝内より出土したものである。



第12-9圖 板迫山第2・3號古墳之土層斷面圖 (1:100)



第12-10圖
板迫山第3號古墳背面溝出土土器
實測圖 (1:3)

(3) まとめ

本古墳群は筒賀の盆地の中心部、つまり筒賀川と三谷川とが合流する付近に面した丘陵尾根ではなく、太田川へ通じる方向と逆の盆地奥に位置し、しかも本丘陵尾根自体三方を山に囲まれ眺望は良好といえない場所に立地している。この立地の在り方は横路小谷古墳群と大きく異っている。横路小谷古墳群は盆地全体を見渡せ、しかも交通の要所に位置している。むしろ本古墳群はその逆である。これは地形的条件よりは時期的な差、対象とするものの差であろうか。

本古墳群は円墳1基、方墳2基から構成されており、地山整形により墳丘を形造っている。また円墳が最も良い場所を占地している。こうした在り方、築造法は横路小谷古墳群と非常に似ている。ただ方墳の間に存する溝は横路小谷古墳群のそれが幅狭く深いのに対して本古墳の場合U字状断面を呈しゆるやかである。これは前者の方が弥生時代の墳墓の溝に似ており古式の形態が見られる。出土遺物については両古墳群ともその量差はあれ円墳は副葬品を有するが方墳には見られないという類似点がある。この両古墳群の構成の在り方について今後検討していく必要があるが一つの特徴といえるであろう。

本古墳群の築造順・時期であるが、決定すべき十分な遺物もなく明確ではないが、占地からすると第1号古墳→第3号古墳→第2号古墳の順ではなかろうか。時期は古墳時代中頃、5世紀代中頃に順次築造されたものと考えられる。(桑原陰博)

図 版



a 向井古墳近景（南より）



b 向井古墳全景（東より）



a 向井古墳々丘葺石の状態（東より）



b 向井古墳石室全景（東より）



a 向井古墳石室全景（東より）



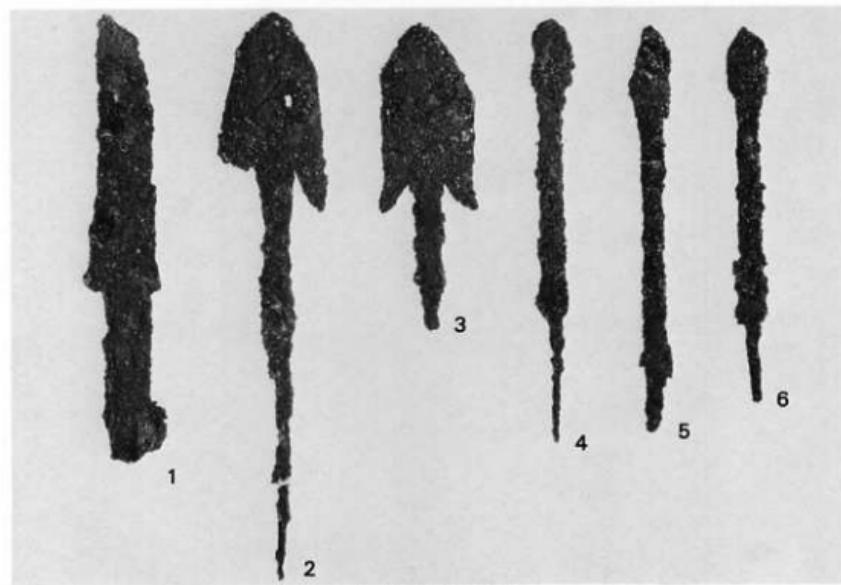
b 向井古墳石室石組の状態（南より）



a 向井古墳石室内鉄器出土状態（西より）



b 向井古墳調査後の整備状況（南より）



向井古墳出土遺物



a 宮谷古墳近景（西より）



b 宮谷古墳々丘土層断面（西より）



a 宮谷古墳全景（西より）



b 宮谷古墳石室全景（南より）



a 宮谷古墳遺物出土状態（東より）



1



2



b 宮谷古墳出土遺物



a 塩瀬神社裏古墳近景（南より）



b 塩瀬神社裏古墳全景（南より）



a 塩瀬神社裏古墳々丘土層断面（西より）



b 塩瀬神社裏古墳石室全景（東より）



a 塩瀬神社裏古墳石室全景（南より）



b 同 上（西より）



a 塩瀬神社裏古墳石室棺座（南より）



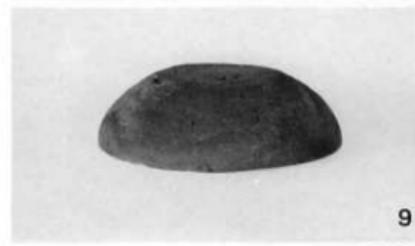
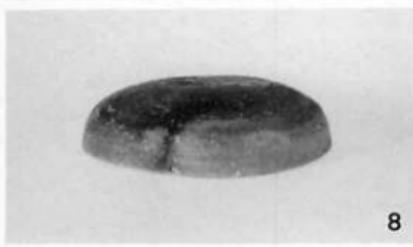
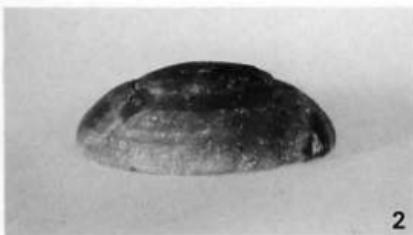
b 塩瀬神社裏古墳石室封鎖石の状態（南より）



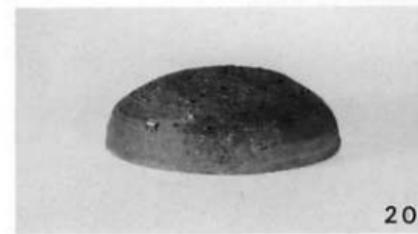
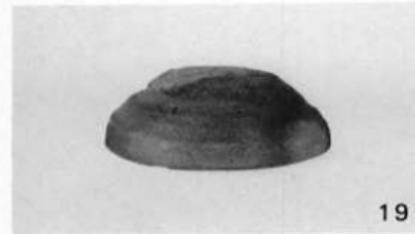
a 塩瀬神社裏古墳石室内遺物出土状態（南より）



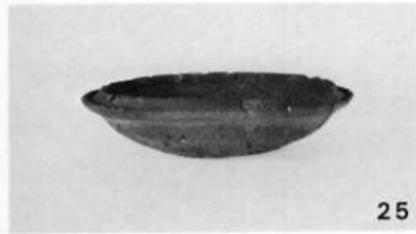
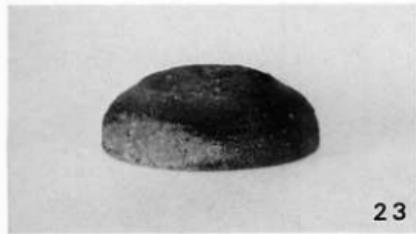
b 塩瀬神社裏古墳周溝内大甕出土状態（東より）



塩瀬神社裏古墳出土遺物 (1)



塩瀬神社裏古墳出土遺物 (2)



塩瀬神社裏古墳出土遺物 (3)



32



33



34



35



36



37



38



39

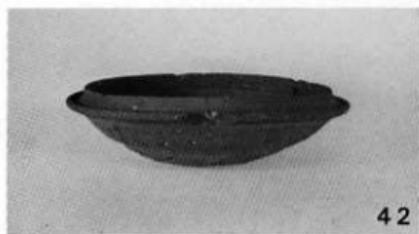


40

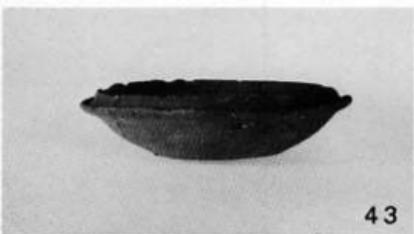


41

塩瀬神社裏古墳出土遺物 (4)



42



43



44



45



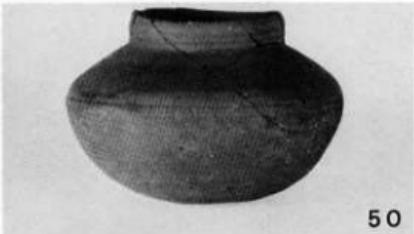
47



48



49



50

塩瀬神社裏古墳出土遺物 (5)



51



53



52



55



54



57



56



58

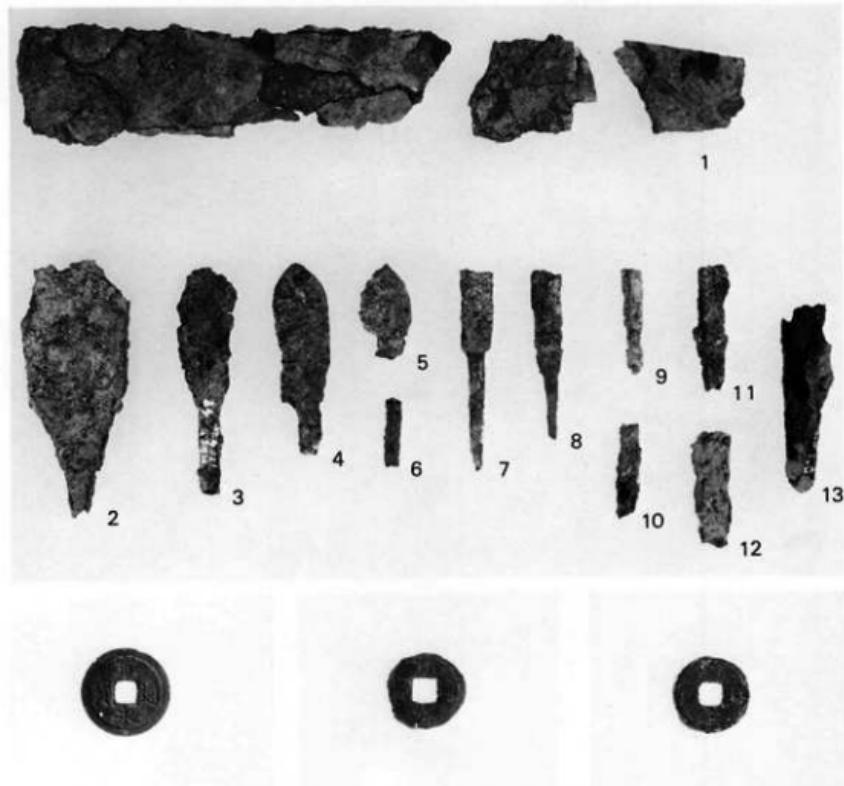


59



60

塩瀬神社裏古墳出土遺物 (7)



塩瀬神社裏古墳出土遺物 (8)



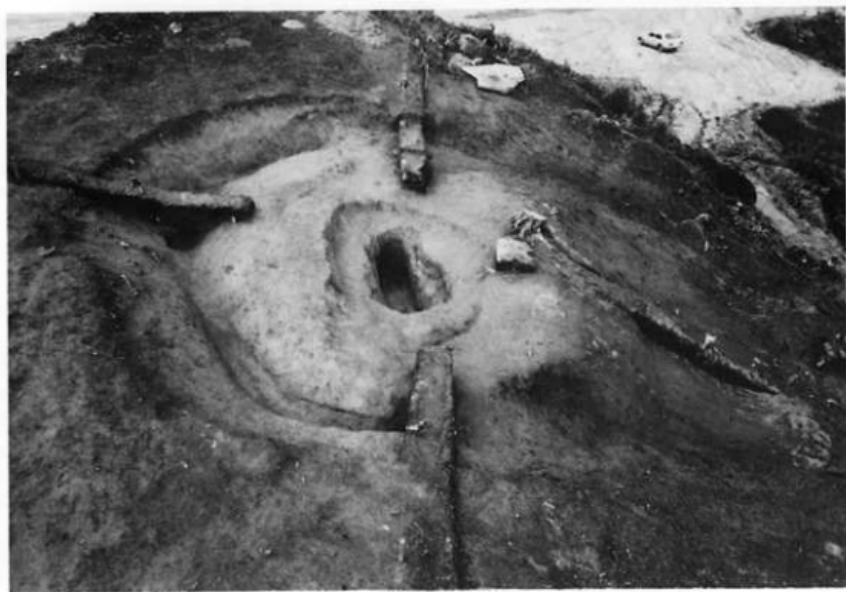
a 金子第1号古墳近景（南より）



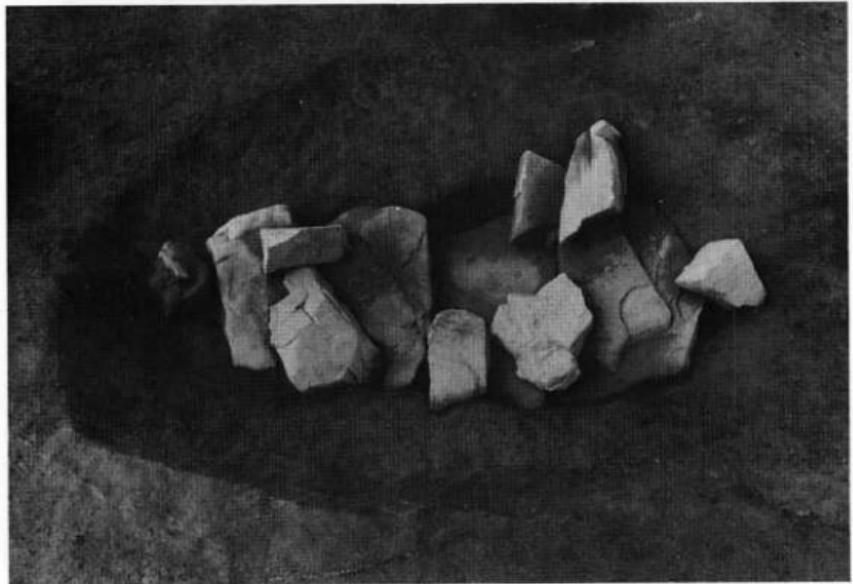
b 金子第1号古墳々丘土層断面（東より）



a 金子第1号古墳全景（東より）



b 同 上



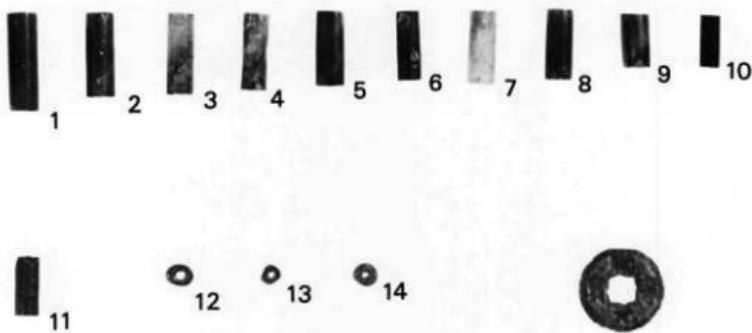
a 金子第1号古墳石蓋土塁全景（北より）



b 同 上（西より）



a 金子第1号古墳石蓋土塙内玉類出土状態（西より）



b 金子第1号古墳出土遺物



a 金子第 2 号古墳全景 (西より)



b 金子第 2 号古墳々丘土層断面 (西より)



a 金子第 2 号古墳石室全景 (北より)



b 同 上 (西より)



a 金子第 2 号古墳石室掘方 (南より)



b 金子第 2 号古墳石室内遺物出土状態 (南より)



4



3



5



6

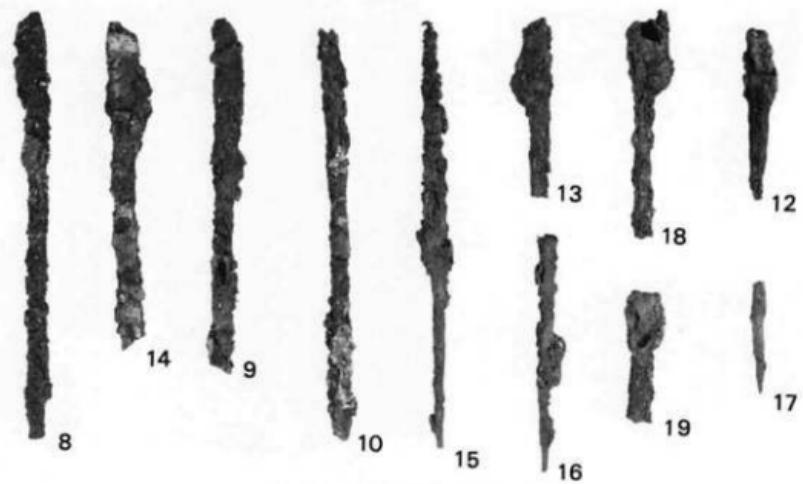


7



10 b

金子第 2 号古墳出土遺物 (1)



金子第2号古墳出土遺物 (2)



20



21



23



24



1



22



25

金子第2号古墳出土遺物 (3)



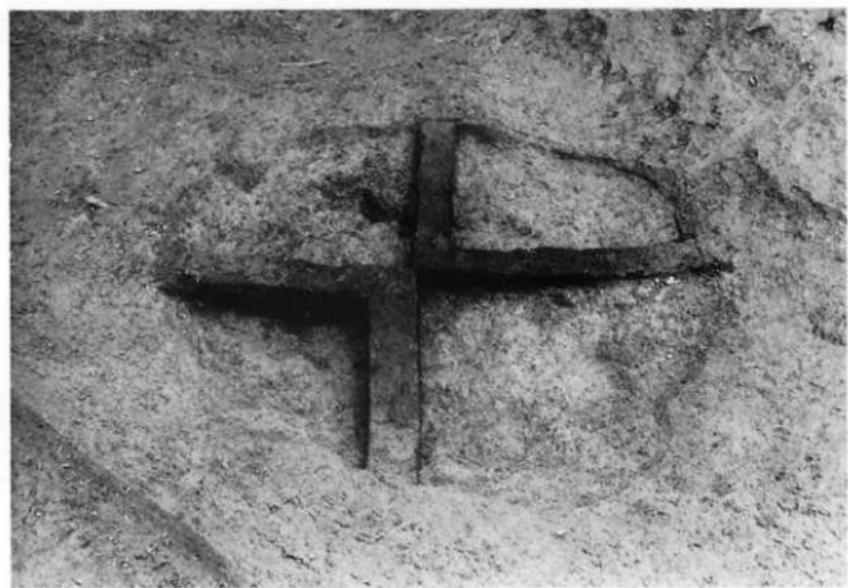
a 金子第3号古墳全景（西より）



b 金子第3号古墳々丘土層断面（西より）



a 金子第3号古墳第1号土坑（南より）



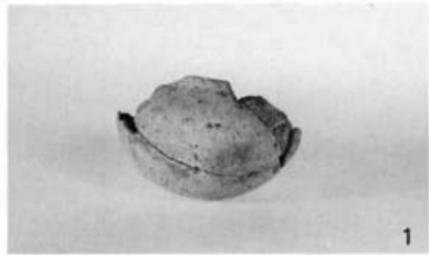
b 金子第3号古墳第2号土坑（東より）



a 金子第3号古墳周溝内遺物出土状態（西より）



2



1

b 金子第3号古墳出土遺物



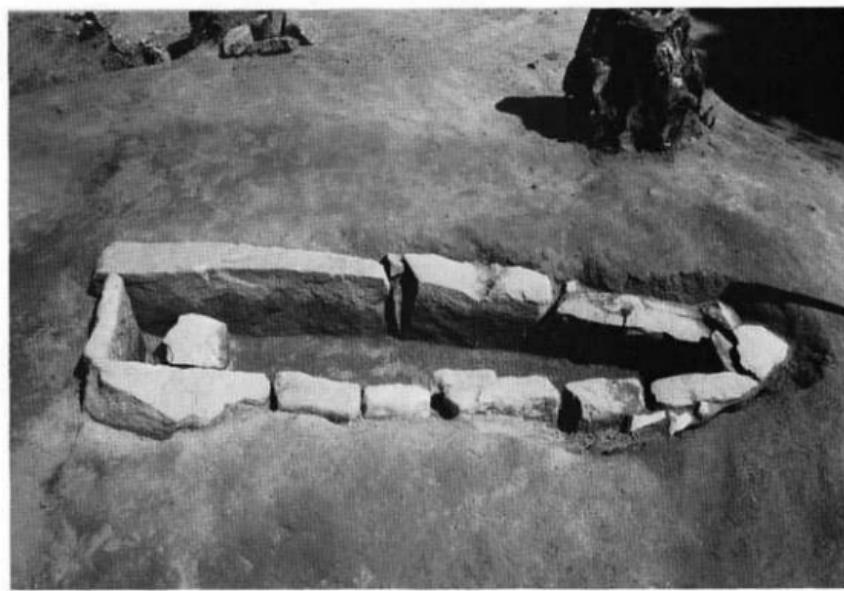
a 金子第4号古墳全景（西より）



b 同 上



a 金子第4号古墳石棺（西より）



b 同 上



a 金子古墳群調査区箱式石棺（南東より）



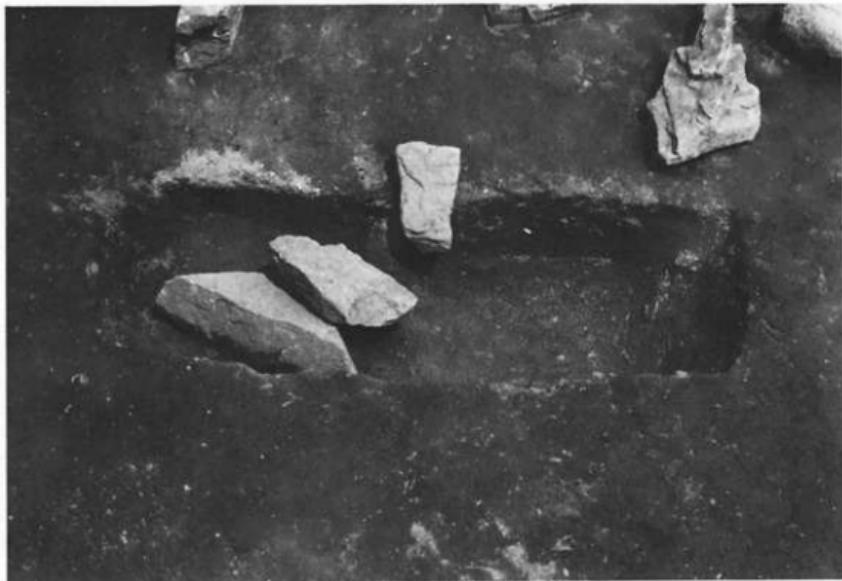
b 金子古墳群調査区石蓋土塀（西より）



a 塚迫遺跡群遠景（北より）



b 塚迫遺跡弥生時代墳墓群全景（南より）



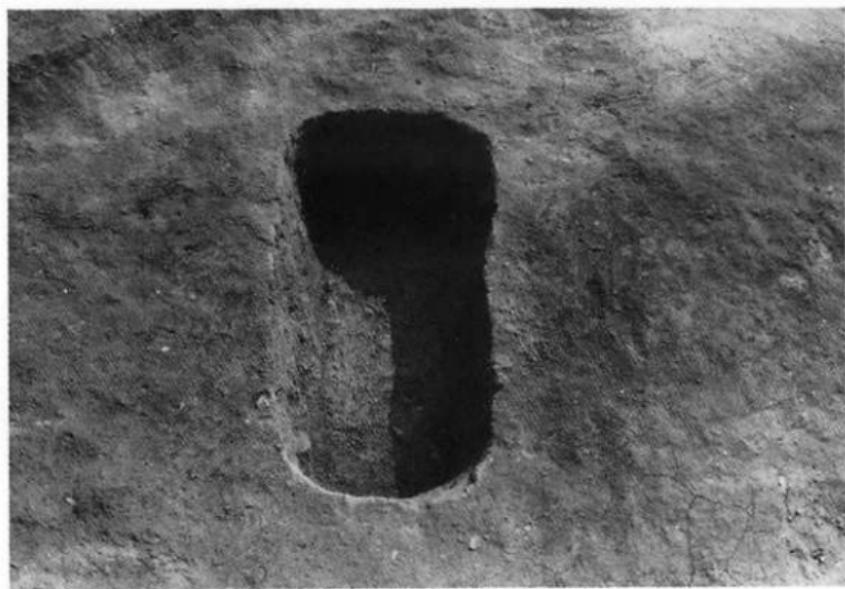
a 塚迫遺跡第1号土塁（西より）



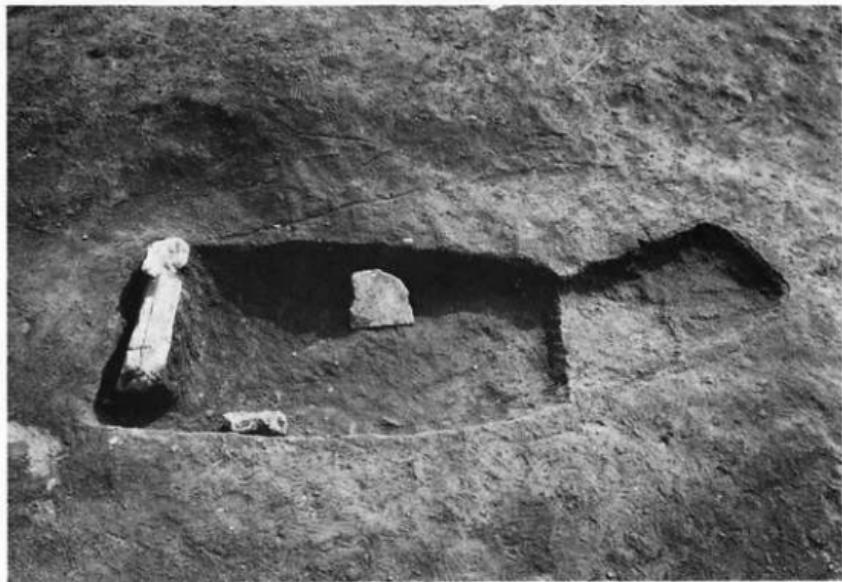
b 同 上



a 塚迫遺跡第2号土塁（西より）



b 塚迫遺跡第3号土塁（東より）



a 塚迫遺跡第4・5号土塙（西より）



b 塚迫遺跡第6号土塙（南より）



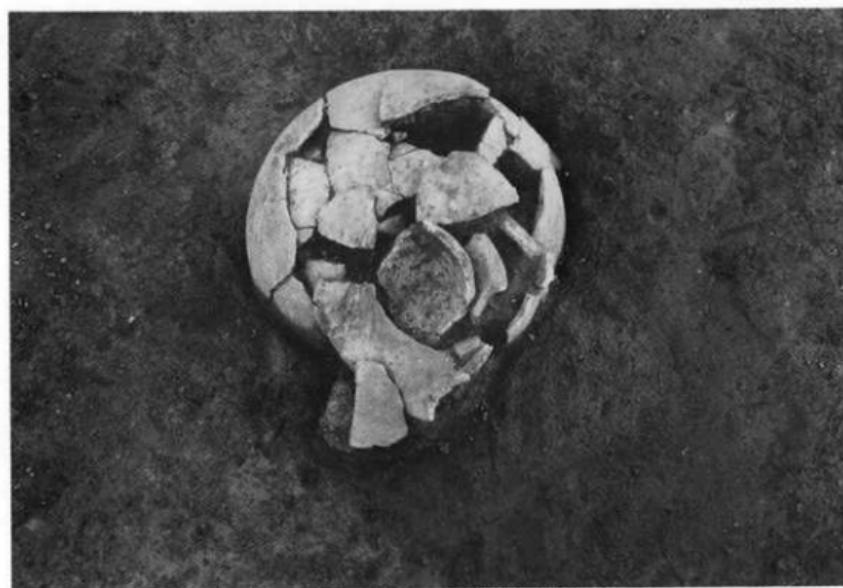
a 塚迫遺跡第7号土塗（南より）



b 塚迫遺跡第8号土塗（東より）



a 塚追遺跡第1号土器棺（西より）



b 塚追遺跡第2号土器棺（東より）



a 塚迫遺跡第3号土器棺（南より）



b 塚迫遺跡第4号土器棺（東より）



a 塚迫遺跡第5号土器館（西より）



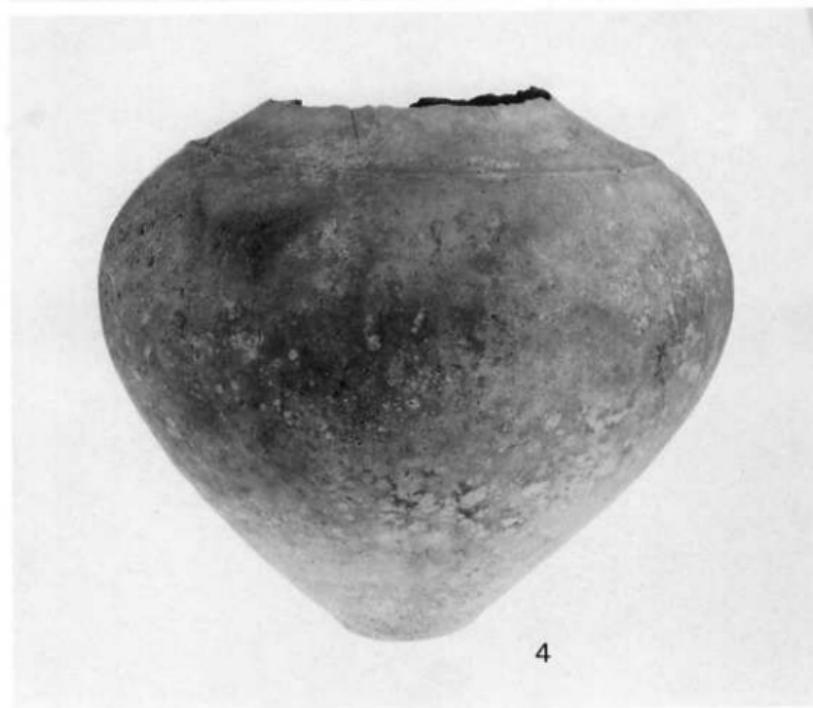
b 塚迫遺跡第6号土器館（西より）



塚迫遺跡出土遺物 (1)



3



4

塚迫遺跡出土遺物 (2)



6



5



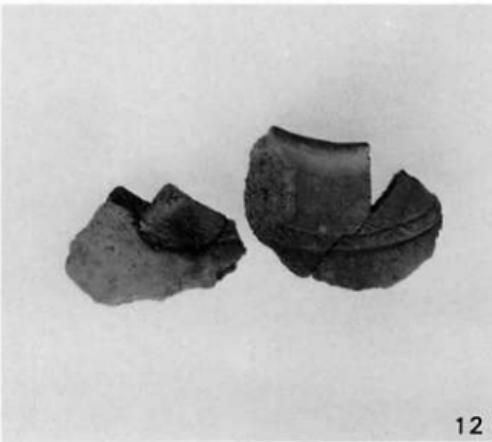
7



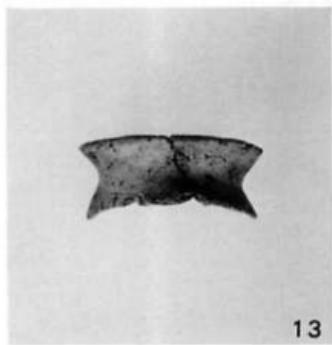
8



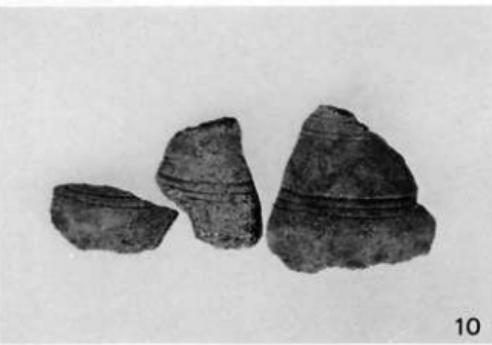
9



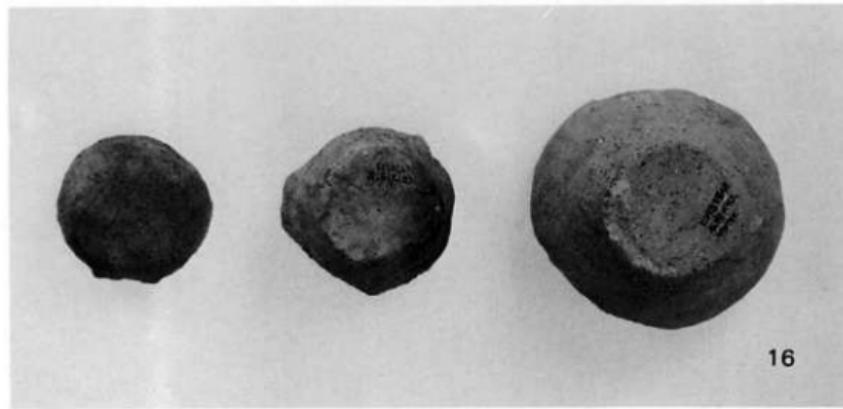
12



13



10



16

塚迫遺跡出土遺物 (5)



a 塚迫第1号古墳近景（西より）



b 塚迫第1号古墳々丘土層断面（西より）



a 塚迫第1号古墳全景（東より）



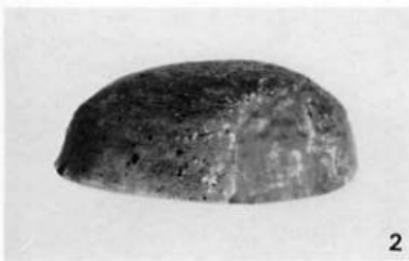
b 塚迫第1号古墳第1号石室（東より）



a 塚迫第1号古墳第2号石室（東より）



b 塚迫第1号古墳第1・2号石室掘方（南より）



塚迫第1号古墳出土遺物



a 塚追第2・3号古墳全景（南より）



b 塚追第2号古墳全景（南より）



a 塚迫第2号古墳石室（南より）



b 同 上（東より）



a 塚迫第2号古墳石室掘方（南より）



b 塚迫第2号古墳出土遺物



a 塚迫第3号古墳全景（南より）



b 塚迫第3号古墳々丘土層断面（南より）



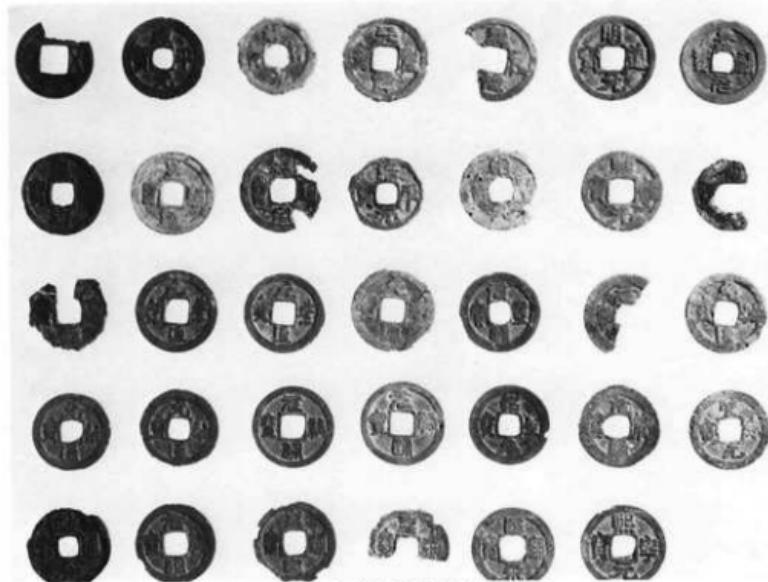
a 塚迫積石塚全景（南より）



b 同 上



a 塚迫積石塚（東より）



b 塚迫積石塚出土古銭



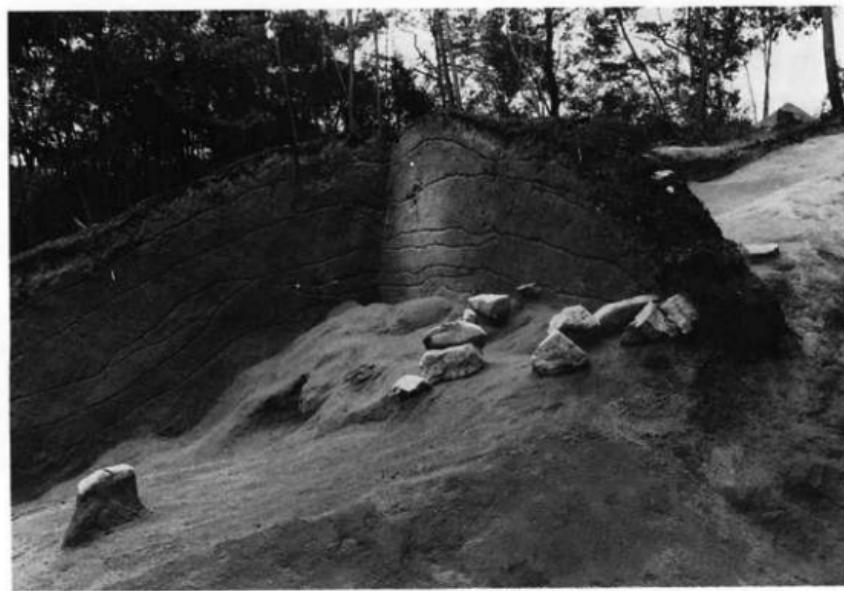
a 塚追古墓（北より）



b 同 上（西より）



a 別所第2号古墳近景（東より）



b 別所第2号古墳々丘土層断面（西より）



a 金ノ口城跡調査区近景（北より）



b 金ノ口城跡3T土層断面（東より）



a 金ノ口城跡第1堀切近景（東より）



b 金ノ口城跡第2堀切・第1堅堀（北より）



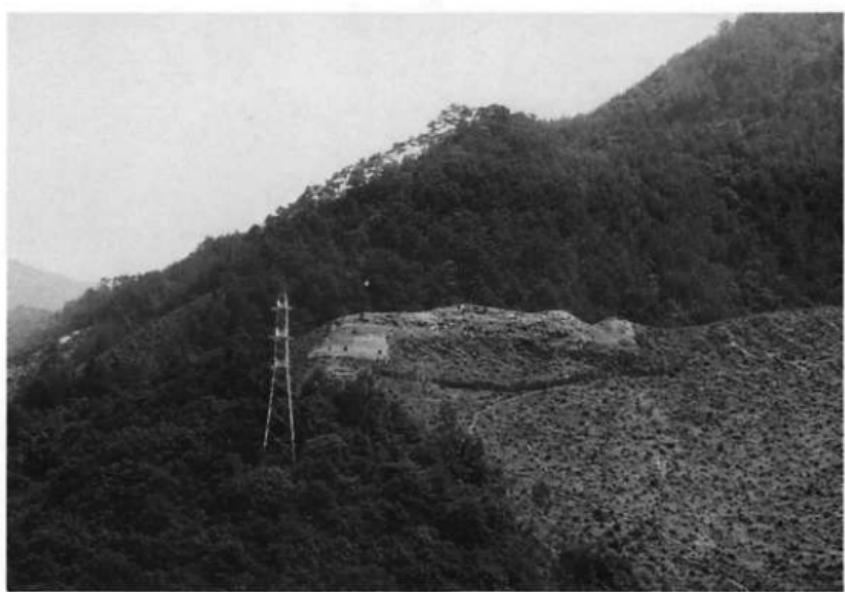
a 金ノ口城跡第1 竪堀近景（南より）



b 同 上



a 市場城跡遠景（北より）



b 同 上（西より）



a 市場城跡第1～3郭（南より）



b 同 上



a 市場城跡第1・2郭（北より）



b 市場城跡第3郭（南より）



a 市場城跡第4～6郭（東より）



b 同 上



a 市場城跡第1堀切（東より）



b 同 上



a 順正寺裏古墳群遠景（南東より）



b 順正寺裏古墳群近景（南より）



a 順正寺裏第2号古墳調査前（東より）



b 同上調査後（北東より）



11



12



10



14



a 釜鉄谷遺跡遠景（北より）



b 釜鉄谷遺跡近景（南より）



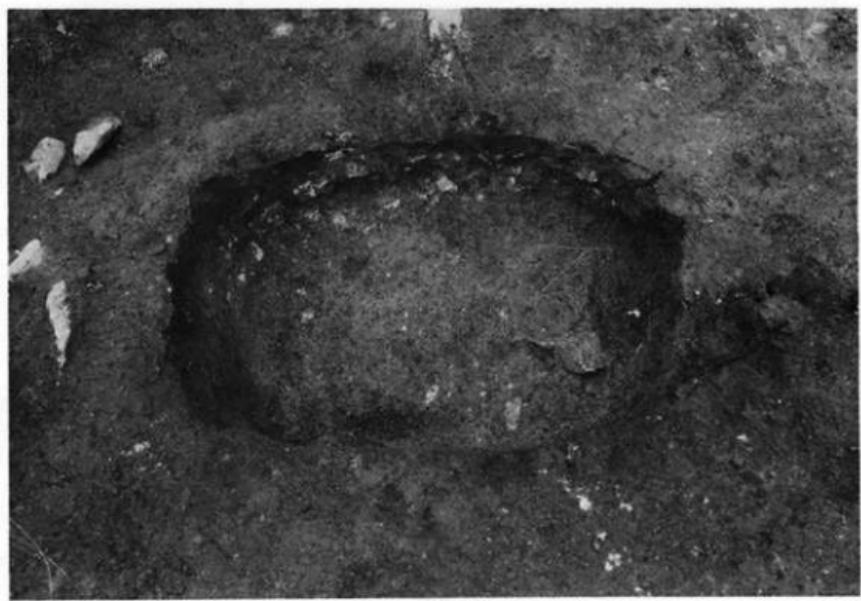
a 釜鉸谷遺跡石棺検出状態（南東より）



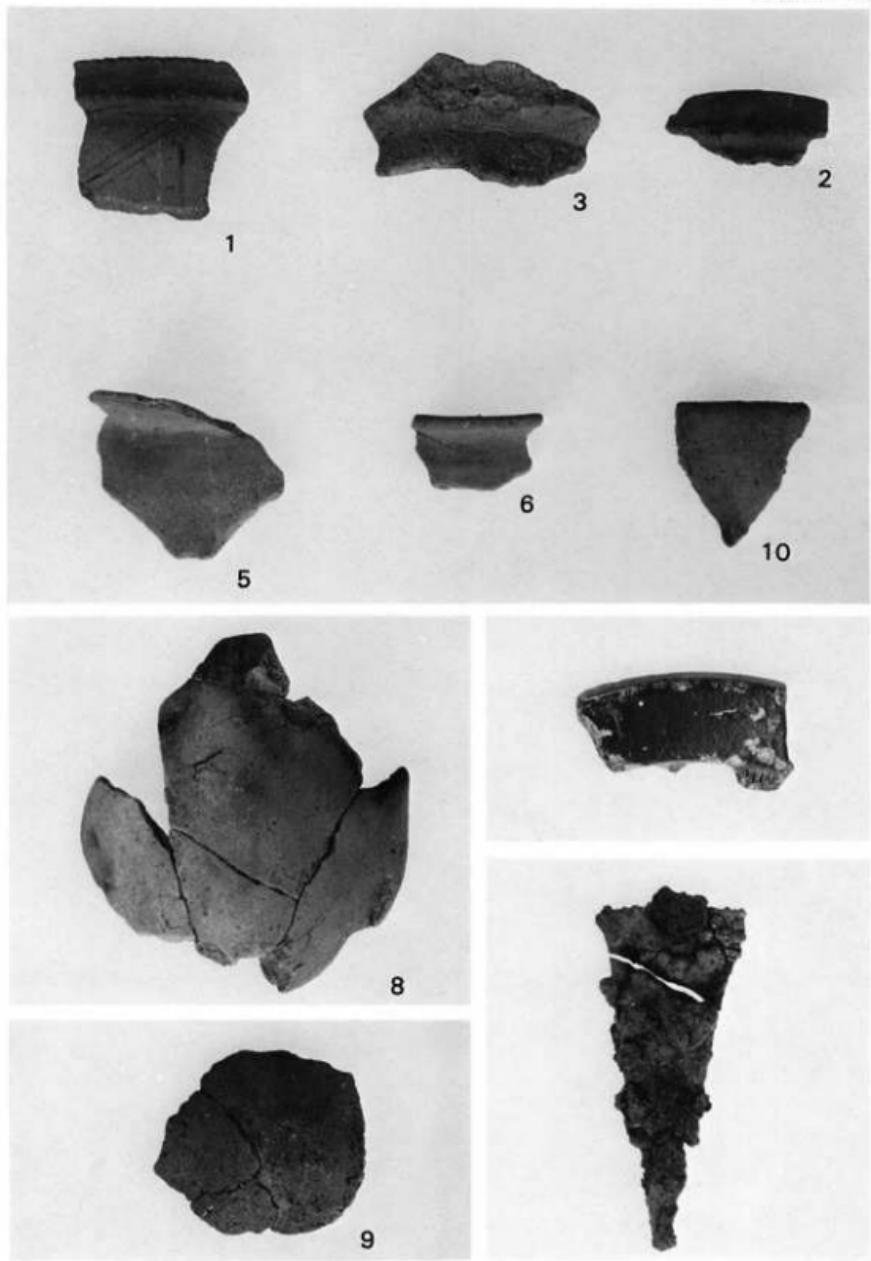
b 釜鉸谷遺跡石棺蓋石除去後（南東より）



a 釜鎔谷遺跡調査後（南より）



b 釜鎔谷遺跡土坑検出状態（北より）



釜鑄谷遺跡出土遺物



a 横路小谷第 1 号古墳調査前（南より）



b 横路小谷第 1 号古墳調査後（南より）



a 横路小谷第1号古墳主体部完掘状態（東より）



b 横路小谷第1号古墳第2主体部遺物出土状態（南より）



a 横路小谷第2～6号古墳調査前全景（北より）



b 横路小谷第2～6号古墳調査後全景（北より）



a 横路小谷第2・3号古墳（北より）



b 横路小谷第3～5号古墳（北より）



a 横路小谷第 2 号古墳（北東より）



b 横路小谷第 2 号古墳主体部（西より）



a 横路小谷第 2 号古墳背面溝（西より）



b 横路小谷第 3 号古墳（北東より）



a 横路小谷第3号古墳主体部完掘状態（東より）



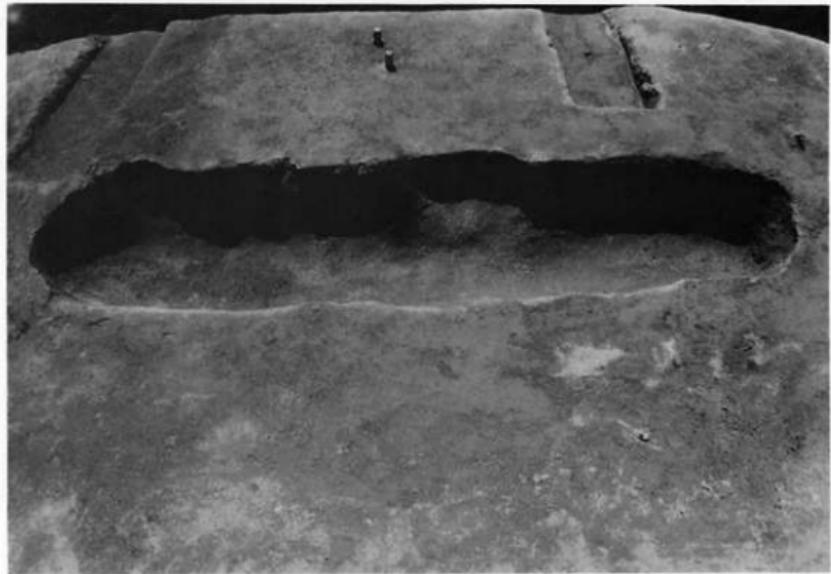
b 横路小谷第3号古墳背面溝（西より）



a 横路小谷第4号古墳（北東より）



b 横路小谷第4号古墳背面溝（西より）



a 横路小谷第4号古墳主体部（北より）



b 横路小谷第5号古墳（北東より）



2



1

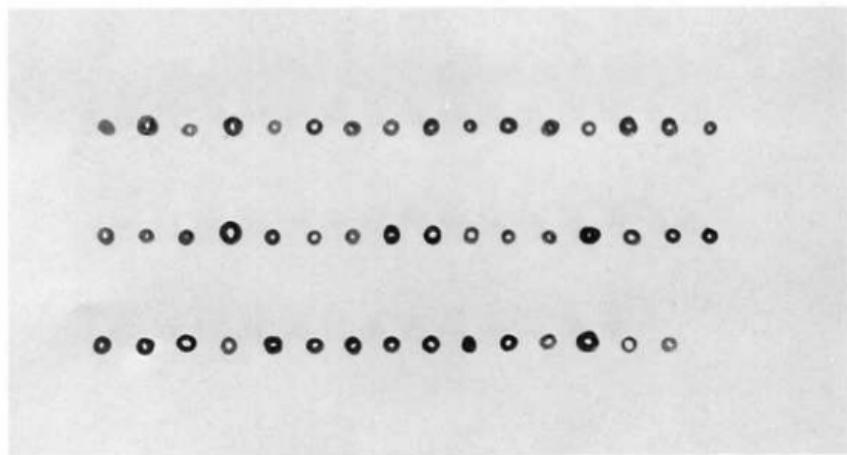
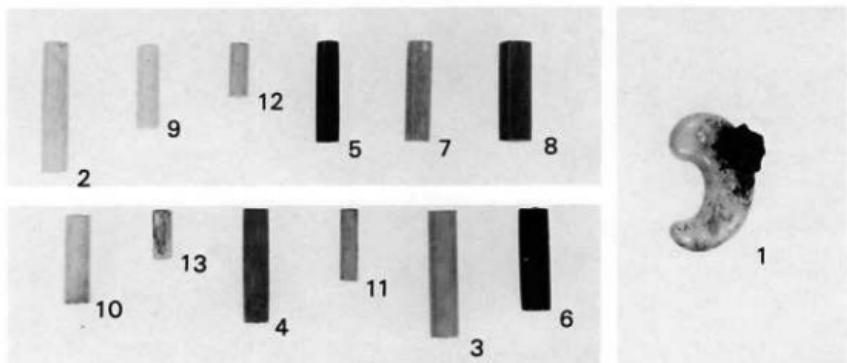
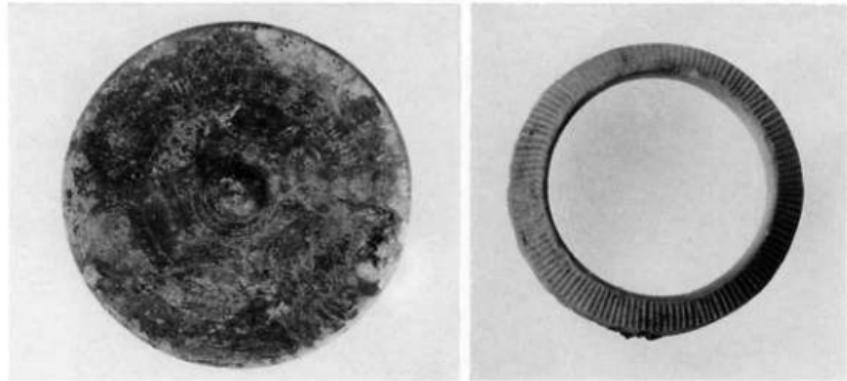


3

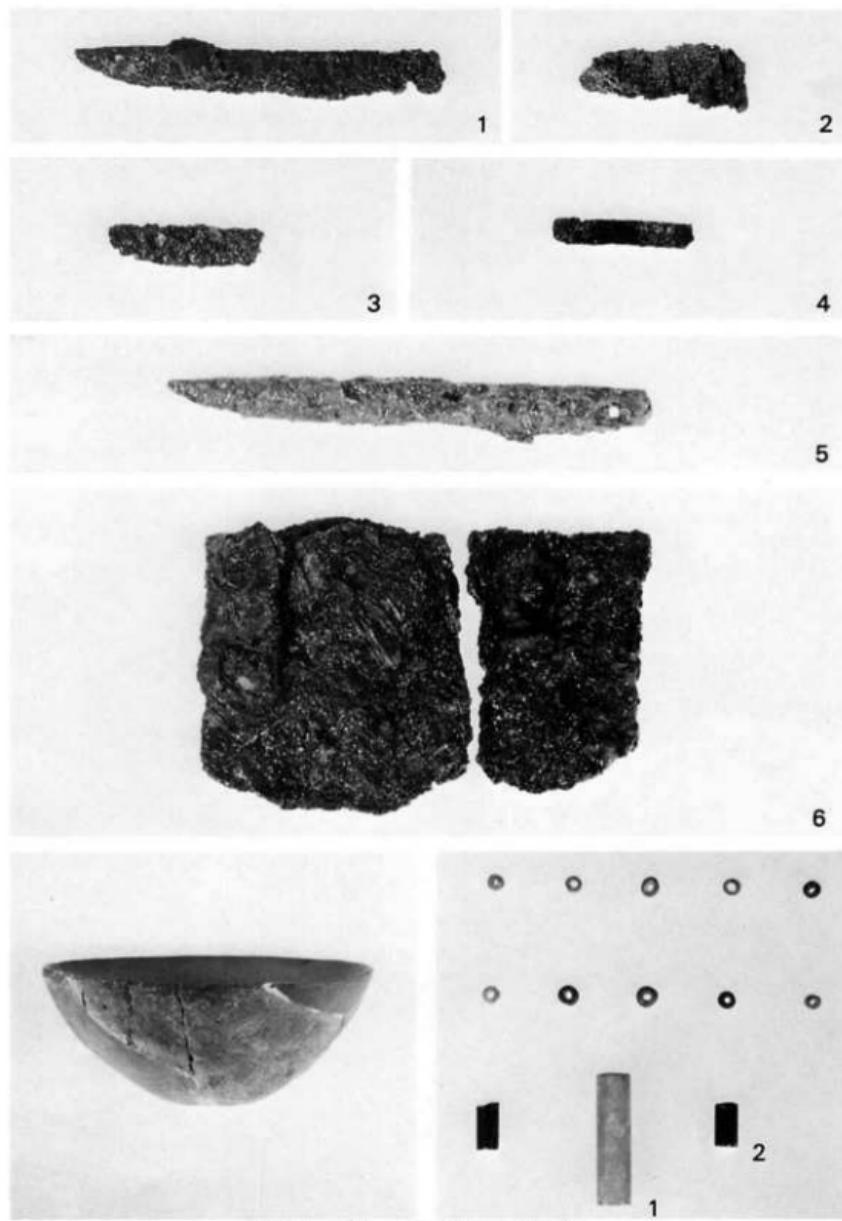


4

橫路小谷第 1 号古墳出土遺物 (1)



横路小谷第 1 号古墳出土遺物 (2)



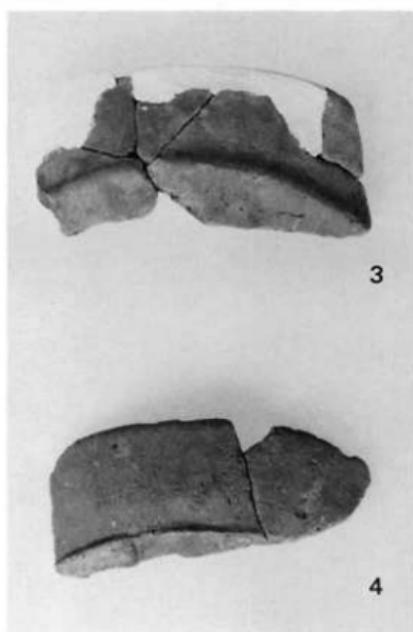
横路小谷第1・2号古墳出土遺物
(上4段—第1号古墳 下1段—第2号古墳)



1



6



3



2

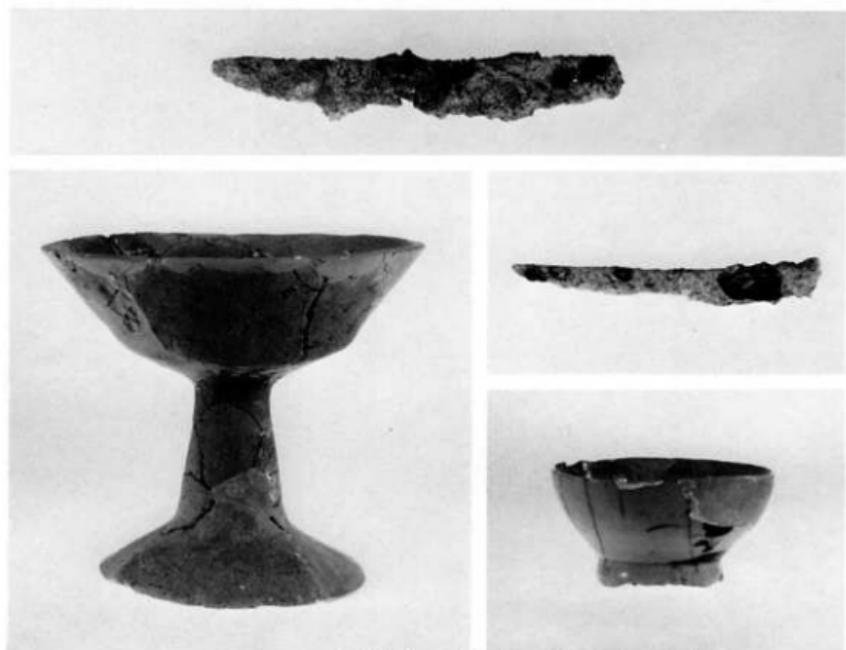


4



5

横路小谷第3号古墳出土遺物



横路小谷第3・4号古墳出土遺物（上1段のみ第3号古墳）



a 板迫山古墳群調査前全景（西より）



b 板迫山古墳群調査後全景（西より）



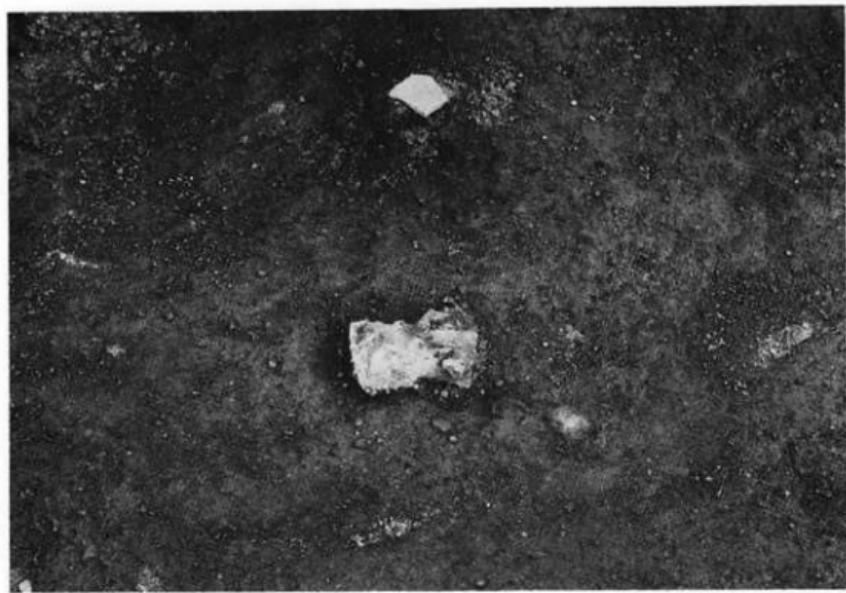
a 板迫山第1号古墳調査前（南より）



b 板迫山第1号古墳調査後（南より）



a 板迫山第1号古墳主体部（南より）



b 板迫山第1号古墳鉄斧出土状態



a 板迫山第2・3号古墳調査前（南より）



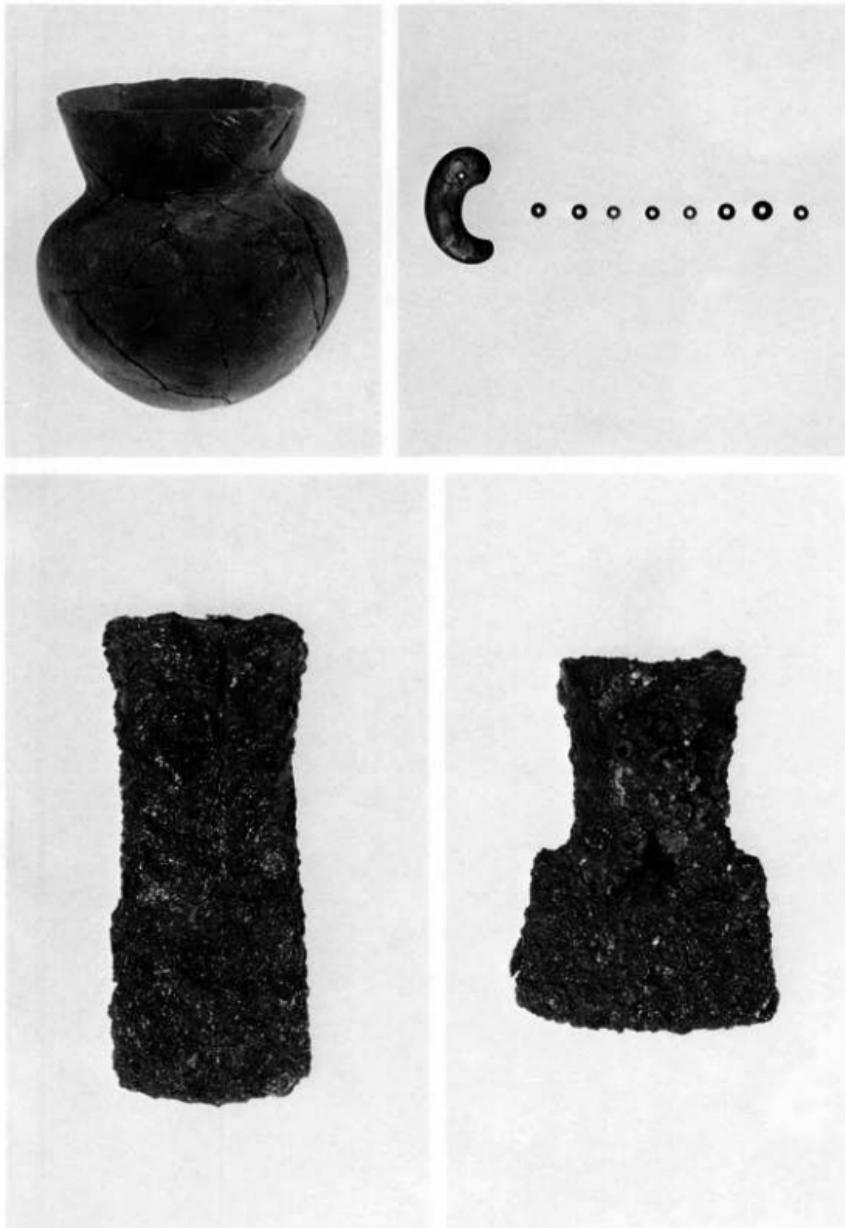
b 板迫山第2・3号古墳調査後（南より）



a 板迫山第2号古墳背面溝（西より）



b 板迫山第3号古墳背面溝（東より）



板迫山古墳群出土遺物

1982年（昭和57年）3月

中国縦貫自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告（3）

編集・発行 広島県教育委員会
(財)広島県埋蔵文化財調査センター
印 刷 文化印刷株式会社